參考書目

ヂプペル、『露西亞の虚無主義』(Dippel: Der russische Nihilismus)

ゴロー井ン、『露西亞の虚無主義』(Golowin: Der russische Nihilismus)

クプツァンコー、『露西亞の虚無主義』(Kupczanko: Der russische Nihilismus)

シエル、『虚無黨』(Scherr: Die Nihilisten)

アルナウドー、『虚無主義及虚無黨』(Arnaudo: Le Nihilisme et les Nihilistes)

カルロ井ッチ、『虚無主義の發展』(Karlowitsch: Die Entwicklung des Nihilismus)

ブウルドー、『獨逸の社會主義及露西亞の虚無主義』(Bourdeau: Le Socialisme allemand et le Nihilisme russe)

コンラッド、『國家的諸科學字彙』(Conrad: Handwörterbuch der Staatswissenschaften)

ラヴレー、『現代社會主義』(Laveleye: Le Socialisme contemporain)

ツーン、『露國革命的運動の歴史』(Thun: Geschichte der revolutionären Bewegung-

en in Russland)

ステプニャック『露西亜の暗雲』(Stepniak: Russian Stormcloud)

ステプニャック『地下の露西亜』(The Underground Russia)

プレハノフ『無政府主義及社會主義』(Plechanoff: Anarchism and Socialism)

チホミロフ『政治上及社會上に於ける露西亜』(Tichomirov: Russia, Political and social)

ヲルコンスキー『露國歷史及文學要略』(Wolkonsky: Bilder aus der Geschichte und Literatur Russlands)

ワリスセヴスキー『露國文學史』(Waliszewski: A History of Russian Literature)

ツェンカー『無政府主義』(Zenker: Der Anarchismus)

バクーニン『文集』(Bakounine: Oeuvres)

チェルネシェヴスキー『如何にせん』(Tschernyschewsky: What is to be done?)

ツルゲネフ『親子』(Turgenief: Fathers and Children)

ルロア、ボーリュー『ツァール帝國及露人』(Leroy-Beaulieu: Das Reich der Zaren und die Russen)

ワレース『露西亜』(Wallace: Russia)

クラポトキン『麵麭の略取』(Krapotkine: La Conquête du Pain)

クラポトキン『懷往時談』(Memoirs of a Revolutionist)

井ラル『近世社會主義、其近狀』(Villard: Le Socialisme moderne, son dernier État)

ステグマン『社會主義字彙』(Stegmann: Handbuch des Sozialismus)

ガリン『無政府黨』(Garin: Die Anarchisten)

エム、ビー『國際黨の歷史』(M.B: Zur Geschichte der Internationale)

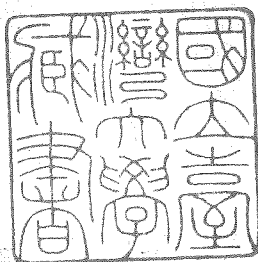
グェナン『露西亜其歷史地理文學』(Guénin: La Russie, Histoire, Géographie, Littérature)

ニイチェ『全集』中の諸部、(Nietzsche: Werke)

近世 無政府主義目次

第四章　虚無黨の諸機關

近世 無政府主義

煙山專太郎編著

前編　露國虛無主義

第一章　虛無主義の淵源

ニヒリストなる文字の起源。虛無主義の起源に付ての諸説。ヘルツエンの見。虛無主義とは何ぞや。其國内に於ける素因。不平ならざる者は山と森とのみ。露國の社會的階級。貴族の特權。市民。農民の二種類。農奴。一般人民の不平。土地再分配の説。官吏の腐敗、司法行政機關の壞頽。教育の状態を瞥見す。女子教育。普通教育。高等教育。ニコライ一世大に大學を箝制す。外國思潮の影響。獨逸の唯物論。フォイエルバッハ。ビュヒネル。ショーペンハウエルの厭世哲學。乾酪の一片はプーシュキンよりも尊し。イ

ワン、ツルゲチフ。小說『親子』。バザロフの性格。彼の激論。プーシュキンを斥けてビュヒチルを推す。社會の無機的觀察。個人の道德的疾患は皆社會の罪。此小說の影響。アクサコフの奇論。

虛無主義なる文字は虛無を意味する羅典のニヒルより來りし語にして、既に早く聖アウグスチヌスの『天國』に、彼が何等の信仰をも有せざる人に名くるにニヒリストなる語を以てしたりと云ひ、下て十九世紀の初三十年代に至りては、佛國のロアイエー、コラールがクーザンの懷疑哲學に適用するに虛無主義の名稱を以てしたりと云ひ、又一八二九年に於ては露國の文人ナデイヂンがクラシシズムの破壞者たるプーシュキン等を稱するに此名を以てしたりと云へば、此文字それ自身はもと之なきに非ざりしなるも、之を吾人研究の題目に於けるが如き意義に於て初めて用ゐたりしは實に有名なる文豪イワン、ツルゲネフなり。彼は一八六〇年八月ワイト嶋に旅行したりし時、此地に聖彼得堡大學の卒業生たる青年醫學士アンドレエフと云へるに邂逅し、此人の極めて否定的の主義を懷抱しつゝあるを見、之を據として翌年有名なる小說『親子』を著せり。それよりして虛無主義者なる文字

は暗陰なる意義に於て盛に用ゐられ來りたる者なるが、然るに此主義の起源に付て種々なる奇說を唱ふる人あり。例へば彼得堡大學の敎授コンスタンチン、ペトロフの如きは云て曰、虛無主義は否定の精神なりこは一八六〇年頃、靑年及社會の間に蔓延し來りしものにしてすべて吾人の採用しつゝある原理を打破し、健全なる傳習を滅却し、高尙なる人情の性向を廢せんとを目的とする者なりと。又或人は之を以て一八五七年に歸せり。然れども之等は何れも此思想の傾向の歷史的に發達し來りたる者にして、既に已に先進の文學に於て之を認め得べきを知らざる者の言なり。虛無黨の祖師を以て目せらるゝアレキサンドル、ヘルツエン、一八六九年の刊行にかゝる雜誌『北極星』に於て『バザロフを論ず』(バザロフはツルゲチフの『親子』中にある主人公にして即虛無主義者の模型なり)と題して云て曰、一八四〇年代に於て有名なる批評家ビェリンスキーが彼の友の自覺に關してなせし說明に付て不滿足の意を表する應答をなしたりし時彼は虛無主義者なりき。バクーニンが伯林の敎授連に、彼等の臆病なるを諷し、一八四八年に於ける巴里の革命黨に彼等の採れる方針の保守主義に過ぎざる旨を論明したりし時に於ては彼は一の完全なる虛無主義者なりき。ペトラシエヴスキー及

虛無主義とは何ぞや

其徒があらゆる神界及び人界の法律を打破し、社會の根本基礎を破壞せんと欲したるが爲め懲役の刑を受けたりし時、彼等は皆虛無主義者なりきと。　アルナウドーは云ふ、虛無主義なる文字はこれ自身に於て系統的に建てられたる虛無を意味す。　これ即否定の唱導者が世に向て大呼したりし一學說なり。　最も完全なる否定、即是虛無主義なりと。　或は又云ふ家族、財產、國家及法律を廢止せんことを說教し、且つ實行せんとを企つる者之を稱して虛無主義者と云ふと（ニコライ、カルロヰッチ『虛無主義の發展』）。　吾人は讀者が上に述べたる諸家の說に付きて吾人の所謂虛無主義者なるものはアウグスチヌス流の意味に於ける異端の徒にあらず、ロアイエー、コラール流に於ける懷疑論者にあらず、將又ナデイジンの所謂ロマンチシズムの主張者にも非ざる所以を了解せられたりと信ず。　之を要するに虛無主義は一の哲學的文學的運動にして、吾人の自由を渴望するに出でたる者に外ならず。　即吾人に固有して、肉身並に精神に於てあらゆる羈縛を脫し、活達自在の境に飄脫せんとする人性自然の慾望に出でたる者なり。　故に其根本思想は實に絕對的の個人主義なり。　其國家社會を否認し、家族、宗敎を無視せんとするは蓋し個人の極端なる自由を妄想するに出でたるのみ。　されば虛無主義はステプニャックの云ひたる如く、寧ろ之を個人の肉的及心的生活を抑制する束縛に反抗する一の猛烈にして極端なる反動なりと說明するを以て其當を得たりとなさん。

其國內に於ける素因

虛無主義は一の暗黑なる否認主義なり、破壞主義なり。　露國に特有なる一種の革命論なり。　蓋し此の如き猛烈なる勢力の獨り露國に於て其勇を逞うするに至りし所以の者は、此國の政治上社會上の狀態の必や之を誘致するありしに由らずんばあらず。　吾人は其國內に於ける素因を求めて二つを得たり。　一に曰、經濟的事情、これ即下民一般をして彼等の悲境に滿足せざらしめたる所以の者にして、二に曰、總べて行政司法機關の腐敗、これ即ち多少敎育ある社會をして政府の所爲を憤慨せしめ、之に反抗するの念を高めしめたる者なり。

不平ならざる者は山と森とのみ

凡そ露國に於ては或人の言いけん如くに一人として不平ならざる者なし。　只これ其不平の言を發せざるものは山と森とのみ。　山には素より聲を發すべき者のあるなく、森は全く刈り去られて禿すればなり。　思ふに露國の此の如き境遇に陷りたるは全く其專制國なるが爲めにして、彼をして外交上に於て歐州の中原に雄視せしめ、版圖を八方に「擴

露國の社會的階級

張するを得せしめたる者、蓋し此政体を用ゐるが故に出づと雖、其殆んど癒すべからざる精神上の痾疾に陷るに至りたる所以の者も亦實に之によれり。吾人は之より少しく此等諸種の事情に付て觀察を試みん。

貴族の特權

元來露國に於て全國民の間に其身分職業に從ひて階級の別を立てたるは實に彼得大帝よりなり。其別とは貴族、僧侶、市民及農民の四つ即是なり。今此等の者の性質を概察せんに、此國にては貴族と云へるは一種特別の名稱にて、もと皆主要なる人民を呼稱せる者に過ぎず。故に其數又從て多く、其中には種々雜多なる種類の人を含む。之に一代と世襲との二類あり。彼等は皆三つの特權を有せり。即兵役の義務、人頭税及肉刑を免せらるゝこと是なり。此外彼等は又住民ある土地を所有するの權を有せり。(但しアレキサンドル二世の時に至り、農奴の解放と共に土地所有の權は萬民に許され、一八七六年を以ては全國皆兵の法令發布せられ、次に肉刑も廢せられ、更に三世の代に及では人頭税も亦廢せられたれば、今日にありては貴族は最早何等の特權をも有することなきなり)。僧侶も亦貴族の如く諸種の特遇を受けて露西亞の社會上に非常なる勢力あり。

市民

市民は又大底之を二つに分つことを得べし。一は都市の最下層をなせる純粹なる勞働者又は小商人にして、一は多少の資本を有し、一定の免許税を上納する所の上級商人なり。前者は不動産五千若くは六千ルーブル以上を有すること能はざるの制限を附せられ、一般に頗る貧困なり。後者は其資本額及免許税の多寡に準じて三つの種類に分たれ、其中第一及第二に屬する者は兵役義務、人頭税及肉刑盡く之を免せられ、只其貴族と異る所は住民を有する土地を所有すること能はざるの一事にありき。

農民の二種類

農民には帝領農民と私有農民との二つあり。前者は一定の人頭税及地方税の外に一種の地代を政府に納むるのみにて身體全く自由なり。後者には又年貢の納め方に自己の勞役を以てするものと、金錢を以てするものとあり。共に地主の爲に其義務を强ゐらるゝこととなるが、其中金錢を以て租税を支拂ふ輩は必しも地主の地内に在住せざるべからずとは限られず。其勞役を以て地主に屬する農民にありては小兒と老人とは勞働すること能はず、即地主に對する義務を完ふすること能はざるが故に、從て又土地を請求するの權利なく、由て其分配は夫婦の數により、タイグロと稱する制規を用ゐたり。例へば一の農民が勞役に堪へざる父成長せる男

子及多くの幼兒を有するときは彼は之によりて一のタイグロをなし、唯一の勞役義務を負擔し、即其土地の分け前も一に過ぎざれども、若し其子にして妻を娶り、尙は父の家に共住するときに際すれば、此一家族は二つのタイグロをなして二重の勞役義務を負ふ代りに、從て土地は分け前の二つを受くるとを得るなり。蓋し露國の舊習によれば既婚の子は父の存生中依然として其家に留り、別に一戶を搆へざるが例なればなり。

露國に於て農奴の成立せるは頗る古き時代よりの事なり。そは主として戰時の捕虜、債務を完ふし得ざるもの、又は之が爲に自ら其身体を賣りたる者等より成り、君主及び臣下に與へし土地を耕作するを以て其職務とせり。彼等は當時は身体極めて自由なる者にて決して已が使ふる主人にも將た其土地にも附屬せしに非ず每年一回其居を轉じ得るの權を有したり。されどこは露國の如き廣大にして民人の稀少なる農業國にありては百般の進步の爲不便尠からざりけるより、十六世紀の末に至りて時のツアールは彼等が交通の自由を剝ぎ、全く之を其土地に永屬せしむるとゝせり。是に於てか純乎たる農奴こゝに初めて形成せられて、彼等

は恰も猫犬の如くに己が主人の名を記したる襟を頸に嵌めつゝ行使せられたりき。斯の如く土地所有の特權は獨り貴族の手中にのみ壟斷せられて一般人民は之を得ると能はざりければ、民間に於ける經濟事情の之が爲に發達を阻害せられしと尠からず、彼等は皆不平を發し、唱へて云ふ、全土地は公有なり、土地所有者は彼等が或一定の職務を有する間に於てのみ之が占有權を有すべきのみと。實に後世人民の一大苦情たりし貴族所有地なる者の露國に起りたりしは、今より僅に二百年以前の事なり。當時露國にありては所謂白土の名を以て稱せられたる諸侯及敎會寺院の領地の外に個人の財產なく、其他の地は之と區別して黑土と呼ばれたりしが、彼得大帝は萬事西歐の文物を摸倣したりしより、又彼の貴族制を輸入し、己の有司官吏に與ふるに土地を以てせり。是に於てか農民之に服せずして反乱したりしも鎭壓せられ、貴族は終に其領土を世襲所有するとを得、其代りに子孫代々文武官員となり、ツアールの爲め國事に盡瘁するの義務を負擔せられしが一七六二年、彼得三世の時に至りては服役義務すら廢せられしに、一般人民は尙は依然として土地を所有するの權利なく、殊に農奴に至ては全く貴族の下に隷屬して其

意のまに〳〵生殺與奪せらるゝの有樣なりければ、人民の之に平ならざること甚しく、以爲、皇帝の獨り貴族をのみ其服役義務より免じて未だ我等に恩典を與へざるは、畢竟貴族の之を妨ぐるによりて然るなりと。此土地上の關係は大に革命黨の乘ずる所となりたり。一八六一年二月十九日、歷山二世の果決の下に農奴解放の大事業遂行せられ、農奴は啻に一身の自由を得たるのみならず、全く地主を離れて己等共有の土地により一の獨立自治の團体を組織するを得たりけるが、貴族の之に不滿なるは素より、曖昧なる多數の愚民も其彼等が預期せしが如き結果を得ざりしを鳴らして土地の再分配を望み、而も無代價にて之を得んことを欲せり。曰、貴族は既に永き間何等の報酬をも政府に拂ふことなくして土地に對する權利を握り、之を行使し來りたり。何故に我等は本來我等の所有たる者に向て代價を拂ふべきことやあると。これ實に彼の所謂分黑黨が黑土再分配を旗幟として起りたりし所以なり。虛無黨の煽動者ヤコブ、ステファノキッチの如きは農民の此不平を利用して彼等の間に反亂を起さしめんことを陰謀したりき（第三革命運動の歷史其二遊說煽動の時期末段參照）。されば一八七九年六月、時の内相令を發して曰、頃日世上往々ツアールが貴族の利益を割き

て農民の爲め土地を再分せんとする旨を流言する者あり。されども之は全く根據なき事にして、國敵虛無黨の自ら爲にする所ありて流布する所たるに過ぎずと。又一八八三年に於ても歷山三世の戴冠式を擧ぐるや、全國の郡村長を集めて親しく其流言の事實無根なるを辯せられたりき。

此農民の不平は官吏社會一般の跋扈專橫し、之が腐敗を極めたるが爲に益高まりたり。之れ實に露國の如き專制國には免れ難き數なるが、總べて官吏は各自の職務に對する充分なる教育の素養を欠きて絕へず動搖し、之に加ふるに繁文褥禮多く且つ其屬僚の迂濶なるが爲に命令下に徹し難く、長官は屬吏の進退に關しては無上の權力を握りて何等の失策を認めざる時に於ても、己の好惡に任せて之を褒貶するを得、又進級せしむる時には、敢て各人の智能技術に於て之を定むることをばせで、專ら門地にのみより、之が爲めに權門勢家と相結べる輩は適任の余地なき時に於ても登用せらるゝの有樣なりければ、彼等の執務時間は一日如何に多くとも三四時間をば上らざるに、冗員非常に多くして徒に國庫の財寶を徒食者に浪費せしむるに止まり、賂賄破廉耻滔々として上下其風となしき。既にして歷山二世の

世に至り、諸種の新政續々として行はれたりしかども、農民は素より之に慊らずして官吏を怨望し、而して官吏及貴族は又皇帝の政治に慊らずと稱し、上下を擧げて囂々たる利己の蟬噪をのみこれ事とし、皆無爲懶惰の魔風の中に捲き込まれき。此時に當り多少國事を念とする青年の時事を慷慨して之が革新を叫ふに至れるは寧ろ自然の勢なりと云ふべし。

吾人は玆に專制政治に固有なる露國の道德的疾患に關し二三の實例を引證するを得べし。一八八〇年より八一年に至るの間ハルコフの停車場の盜難に遭へること屢〻なりしが、嚴しき探偵の後、こは警官と共謀せる賊の一隊がなせし所業なることを知られき。蓋し警官等は賊より所得の一割五分を上納せしめ、己の懷を肥しつゝ之を默許したりしなりと云ふ(チホミロフによる、かゝる例チホミロフに甚多し)。一八八一年十月、御料局長ワルユエフ及其後繼者リエヴエンの二人土地賣却の際不正の所爲ありとの嫌疑を被りてもと總督なるクレシヤノヴスキーと共に裁判に附せられ、續て十二月元老院第九局に於て審問中なりし大疑獄又決せられたり。こは前ミンスク知事にして樞密顧問官たるトカレフ、前ミンスク州官有地局長ロシユカレフ中將及大佐カツプヘル等に關する敗德事件にして、これ彼等がミンスク州の人民と政府との間に立ちて詐僞取財を行ひたりしによりき(以上ザプペルによる)。此種類の例諸書に散見す。

女子教育

教育の狀態を瞥見す

吾人をして次ぎに露國教育の狀態如何を觀察せしめよ。

第一に女子教育の有樣に付て之を見んに、十九世紀の初半期に至るまでは露國上流社會の婦人の位地は現時に於ける農家の女子よりも一層惡かりし程にして、彼等は恰も韃靼の婦女子の如く全く孤獨に生活して男子の奴隷となり、夫は其牛馬を驅逐する鞭もて妻を行使し、女子に向ては實に何等の社會もなかりき(但しそれより先彼得大帝は令を發して女子も亦男子と同じく集會に列することを許すべき旨を公布したりき)。ニコライ一世の頃にありては、女子は只一、佛蘭西語、二、ウアイオリン、三、家政經濟、此三者を習得すれば己に足れりとせられしが、時勢の推移し來るにつれて彼等は又漸くにして進で自然科學及解剖學を研究し、殊に歷山二世の如きは大に教育の振興に心を用ゐて新に六十の女子中學、及百二十五の女子小學校を建て、一八七九年に於ては莫斯科なるフィッシャー夫人の古典女學校にては其修業八ヶ年の課程を卒へたる女子に授くるに第一流の女教師の資格を以てし、且男子中學に於ても四年級以下の學科を受け持つことを得せしめたり。此女子教育の興起はオデスサにてもキエフにても皆共に見る所にてありき。

首都に於ては文部省は一八七九年、殊に新設されたる此地の女子大學に二千五百ルーブルの輔助金を與へ、此外民間有志の義捐金六千ルーブルあり。敎授ベケトフ、ベスツシエフ、リューミン及フオン、ポトキン夫人等の熱心なる奔走によりて子ワ市なる夫人の邸に校舍を賃し、物理數學科及歷史博言科の二分科女子大學を設立して、前者にては先づ代數學、幾何學、物理學、機械學、動植物學、化學及羅典語等を敎授し後者にては露西亞史、歐州史、一般文學史、心理學、露語文典、羅典語等を敎授せり。此大學新設の年即一八七八年九月に於ては兩分科にて八一四人の入學生ありき。莫、斯科にも女子大學設置の計畫ありしがそは成功せず、キエフ及びオデスサのは好成蹟を顯して此同年、前者は三四五人の女生を得、後者は二八六人を得たり。但しオデスサの二八六人の半數は猶太婦人にして、他の半數は波蘭人を主として少數の希臘人、アルメニヤ人及伊太利人等を含みたり。

露國は其文盲者の多きを以て有名なる所、全人口の就んど九割が全く讀書きの能力なしと云へるにて畧、之を推知し得らるべく、普通敎育の設備の不完全なる驚くべき程にて敎化の一代に蔚乎たりし歷山二世の盛時にありてすら其不整理なる

と甚しく、一八七二年に於ては三一三八個の小學校は敎師の冗員を以て滿たされしに其他の三五二校には一人の敎師すらなくして授業すると能はざるが如きの不始末を呈し、之に加うるに其敎員それ自らの學力さへ怪しまるゝ次第にてありき。翻て高等敎育の有樣如何と見るに、ニコライ一世及歷山二世の初年にありては學生は一般に軍服を着用するの制にて、之が爲に彼等は上流社會の良俗を倣ひ其風紀上尠からざる利益ありけるが、此制の廢せらるゝに及びて學生の習俗は町人風となり、漸次卑野に傾くに至りたり。されば水師提督プーチャチンのコワレウスキーの後を襲ふて文相となるや、彼は英國大學の嚴粛なる制度を採用して此弊を矯正せんとを試みたりしが、彼得堡の大學生は先づ之に反對し、一八六一年九月二十五日、示威運動を行ひて市街を横行し、以て總長の宅に進み、莫斯科大學又之に應じて遙に聲援せり。是に於て文相は退きてゴローキン之に代り、學生を懷柔して幸に事なきを得たりき。此の如きの勢あるを以て當時に於ける大學は專ら革命思想の養成所となり、眞面目なる學問を排斥してすべて鐵拳制裁を行ひ、腕力暴行は至る所に用ゐられたりき。然れども之に伴ひて政府の束縛も亦次第に嚴

ニコライ一世大に大學を箝制す

密を加へたり。元來露國には大學の數九個あり、此外九つの高等專門學校ありて即十八個の大學あるとなるが、死刑、追放、禁獄、秘密探偵、言論の束縛、階級制度、唯一宗敎の施行、一般敎化の制限等を以て對人民の政策となしたるニコライ一世は、一八四八年勅令を發して古代希臘羅馬の歷史を繙き、又デモステネス、キケロ等の古典を研究するを嚴禁し、翌四九年にありては全く大學を廢して軍事的敎育を主とする專門學校を各地に設くるの議さへありし程なりしが、こは元より實行せらるゝに至らざりしも、各大學が總長を撰ぶの權は褫がれ、歐洲各國の國法に關する講座は廢せられ、哲學の研究は希臘舊敎の僧侶にのみ限られ、敎授は一切學生と關係すべからず、學生はすべて學問上、社交上の集會を催すべからず、規則正しく敎場に出席せざるべからず、出席すべき講演は一定して妄に他を傍聽すべからず、專門以外の事物に關係し、專門以外の圖書を繙くべからずと嚴達され、敎授の著述せる書籍は頗る嚴重に檢閱せられたり。されば當時の大學敎授にして政治上及社會上の運動に顯れたりし者極めて少く、僅にスタッシウレキッチ、コストマロフ、カヴェリン、スパツソキッチ、フチャポフ、ドラゴマノフ、エンゲルガルド、ヘルグノフ、ピピン及びツイベル等の數子あるに過ぎず。而も此等の中、ドラゴマノフは西歐に出奔し、フチャポフは西比利亞にて命を了り、エンゲルガルドとヘルグノフとは一生の半を獄窓の中に經過したり。斯の如く古典の攻究は禁せられ、學問は純乎たる實在的の方面に傾き、高尙なる精神上の敎育は全く排斥せられけるより、大學の學生が滔々として唯物論に偏僻し、又之によりて却て其革命思想を激烈ならしむるに至りたるは、蓋し止むを得ざるの事と謂ふべきなり。而も況や西歐各國に於ける唯物的思潮の旺に露國の靑年間に浸染し來りたるあるに於てをや。

露國に於ては何事も摸倣的にして殆んど創作的の者を見ず。殊に佛國の敎化は初め非常なる勢力を露國に及ぼし、露人はすべて文明的に見へんが爲には出來るだけ露西亞風に見へざらんとを力めたり。ヘルツエンの子が父の事を記するの言に曰、余の父は死に至るまで露語よりも寧ろ佛語を能く話し、且書き綴れり。彼は露文の書は聖書すらも讀まざりきと。佛國に次ぎて露人の好む所たりしは獨逸なりき。或人自ら白狀して云ふ、吾人は佛國及獨逸より輸入し來れるあらゆる物を信仰したりき。吾人はヲルテール信徒なりき。ルスソー、ヘルヴエシウス及

獨逸の唯物論 フォイエルバッハ

ロックの崇拜者なりき。シェリングを信じたりき。ヘーゲルを信じたりき。つまり近世獨逸哲學の弟子なりき。吾人はコンスタンド、ルベック(一七六七—一八三〇)、ロアイエー、コラール(一七六三—一八四五)アダム、スミス(一七二三—一七九〇)及びプルードン(一八〇九—一八六五)等を尊敬したりきと。ラヴレーは之により外國思潮を左の如く三段に分ちて之が露國の思想界に及ぼせる影響を論じたり。

一、ルスソー、モルリ、マブリー、ブリスソー、ヘルヴエシウス。

二、オーウエン、サン、シモン、フーリエー、ルイ、ブラン、プルードン等の社會主義。

三、ヘーゲル、フォイエルバッハ、ショーペンハウエル。

之を要するに英國よりはバックルの英國文明史、ダーヰンの種族起源論、スペンサーの諸論文及ミルの功利主義等入り、佛國よりは其社會主義及コントの實理哲學入りたるが、就中大勢力を以て露國の學生を風靡したる者は獨逸の唯物論にしてあれぞ實に革命論をして極端に奔らしめたる者あり。例へばフォイエルバッハの如きは、神は人間妄想の所作のみ、心の映像のみ、神が人を造りたるにはあらで人が神を自家の心像に作りしなり、人々は神と稱して實は己自身を崇奉しつゝあるなり、神は作り事のみ、而も有毒なる作り事のみ、基督敎の神はすべて愛なりと云ふ、されど基督敎徒はこの故に愛及慈悲を否認する者として無神論者を嫉視するなり、然らば則ち神は彼等に向ては却て苦の種に非ずや、吾人は須くかゝる無益なる妄想を放擲すべし、即人類の愛は人類以外に至るべきものにあらずして、人間は人間に向ては既に最上の存在なりと云ひ(一八四九年)、初めヘーゲルの哲學より出でゝ後遂に唯物論に入り、續て獨逸唯物論の代表者としてフォーグト、モレショト及ビユヒネルの徒あり、盛に其學說を唱道して一代の思想界を動かせり。就中露國の青年、殊に醫學書生の間に崇奉せられたりしは一八五五年を以て公にせられたるビユヒネルの『力及物質』なり。彼は素より神の存在を否認し、物質及力以外に世界に於て何等の物の存するなきを唱へ、靈魂の不滅を論破して曰、思想精神及靈魂は皆サブスタンスには非ずして、力又は性質を有する多くの物質の集合せる活動の結果に過ぎずと。斯の如き極端なる學說は寧ろ深遠なる思考力に乏しき血氣の青年をして苛激なる言動を敢てせしめて、國家前途の爲め頗る憂ふべき者ありけるより、露西亞政府は嚴令を發してビユヒネル學を禁じたりしかども、自由を渴望せ

ビユヒネル

ショーペンハウエルの厭世哲學

る學生騎虎の勢は最早抑止し得べくもあらず、彼の書は露譯せられて密かに學生間に播布せられ、唯物的思潮は正に一代に汎濫したり。之に伴ふてショーペンハウエルの厭世哲學あり。彼の著『表象及意志としての世界』は露譯して流用せられ、其『パレルガ、ウント、パラリポメナ』も亦佛文に譯せられて三版を重ね、此大哲學者の感化は一般に非常なる者にて、殊に其影響は婦人社會に著しく、彼等は之を讀で以爲、今や婦人社會は總じて奴隷的の地位に陷り、何等の自由、何等の幸福の與へらるゝあるなし。世上のあらゆる事物は婦人に向ては寧ろ苦痛なり。故に我等の幸福は唯一切を放棄するによるの外求むべきの道なしと。是に於てか多少敎育ある者は相率ゐて男女の同權を唱へ、髪を短くし、衣服を素朴にし、終には進で自由の愛を躬行するが如きの極に達したり。況んやプルードン及びスチルネル等の無政府主義の猛然として濁浪天を卷て浸來せるに於てをや(後編第一章參照)。以上述ぶるが如き唯物論、無政府論及個人主義の思潮は、露國の嚴肅なる撿閲の關門を犯して滔々として其學生社會に漲り來り、已に五〇年代の末年に及では冥々裡に一の純然たる虛無的思想を釀成するに至りたり。著名の文人ネクラソフ

乾酪の一片はプシュキンよりも尊し

(一八二一―一八七六)謂て曰、乾酪の一片は余にとりては寧ろプシュキンの全集よりも尊しと。或は又云ふ者あり、靴工はラファエルよりも尊し。そは彼が必要なる者を造るが故なり。ラファエルの筆にする所、如何ほどの實益か之あると。此唯物論、巧利主義の權化として出でたるはツルゲネフ作中の人物バザロフなり。而してこは正に六〇年代に於ける露國虛無主義の靑年を活寫したる者なり。吾人は左に此名作を概觀せざる能はず。

イヴン、ツルゲネフ

ツルゲネフ(一八一八―一八八三)は激烈なる革命を夢想するが如き極端の徒に非ず。彼は極めて想像の力に富み、且つ溫和善良なる性質を有せし君子人なり。故に其描く所の人物、時にバクーニンの如き戰鬪者を見ざるに非ずと雖、さは却て彼をして失敗せしめたり。バザロフはバクーニン流の戰士にはあらで一の單純なる主我的靑年なり。ツルゲネフは此主人公に於て明に巳が嘗て伯林大學に學びて受けたりしブルーノー、バウエル及マクス、スチルネルの無神論的及個人主義的影響を表示せり。

小說『親子』

小說『親子』は其趣向極て單純なり。只其中に於て虛無主義者たるバザロフの性格

を活寫したるに止る。バザロフは怜悧の人なりき。されど彼は思想及言語に於てのみ怜悧なりき。彼は美術、婦人及家族生活を賤しみ、尊敬とは抑ゝ何物なるかを知らざりき。彼は愛ある者を解せず、又友誼に冷かなりき。已自身の父母に向てすら愛敬の情なく、すべて其一生は矛盾に充ち滿ちたりき。彼の父は村醫にて其子の敎育の爲には毫も吝まざるの士、母は古風の婦人にして慈愛深く、且つ迷信に富みたりき。バザロフ、一八五九年彼得堡大學を卒業し、其親友アルカデ、ニコラエヰッチの鄕村に遊ぶ。一篇は筆を此條に起せり。所謂ニヒリストなる名の起原はアルカデとバザロフとが前者の父ニコライと共にニコライの弟パヴエル、ペトロヰツチ、キルサノフを訪問するの章に現る。左にニコライ兄弟とアルカデとの間に起れる問答を載せん。

パヴエル　バザロフ君何人ぞ。

アルカデ　笑て、バザロフは何人となく、叔父よ、彼の人と爲りを知るを欲せらるゝか。

パヴエル　然り願はくは語れ。

アルカデ　彼は虛無主義者なり。

此時パヴエルは小刀にて牛酪の一片を切り取りつゝ動かず、ニコライは問へり。

何とな。

アルカデ　彼は虛無主義者なり。

ニコライ　ニヒリストとな。そは羅典のニヒルより出で來りし語ならん。さらば何物をも認容せぬ人を指せるにてあるべし。

パヴエルは麪麭に牛酪をつけつゝ其間に立ち入りて、

何物をも尊敬せぬ人と云ふが正しからん。

アルカデ　一切を批評の見地より觀察する人を指すの語なり。

パヴエル　そは余が云へると同じ義に非ずや。

アルカデ　否、異れり。ニヒリストとは何等の權力の下にも屈服せず、如何に尊崇せらるゝ原理にても批評を經ざる上には之を認めざる人を云ふなり。

パヴエル　よし、さらば問はん、そは果して善事なるか。

アルカデ　叔父よ、そは人々によりて異るべし。或は善しとするもあるべく、又

却て之が爲に苦むもあるべければなり。

パヴェル　實にもよ、然らばこれ最早我等の關する所に非ず。我等は舊習人なり。我等は汝が信仰と云ふなる其原理なくしては一歩も一呼吸も出來得べからざるの輩なり。然るに汝はすべて之れを一變せんとす。神は汝に與ふるに健康と將軍の位階とを以したり。されば我等はどうあつても神を拜し、之を畏敬せざるべからざるには非ずや。

アルカデ明瞭に云て曰、虛無主義者よ。

パヴェル　さなり。世には曾てヘーゲル學徒なる者ありき。而して今や虛無主義者あり。我等は汝等が虛空の中に如何にして生存し得るかを見んと欲す。

以上の引用はニヒリストなる語源を示す者なり。既に此談話に於て見ゆるが如く、パヴェルは守舊の癖人なるを以てバザロフの何事も破壞せんとする思想の傾向とは兩立すると能はず、彼等は言々相衝突して互に反目し、終には些細のいさかひより決鬪を試み、パヴェルは之が爲に傷を負はせらるゝまでに至りたりき。バザ

ロフあれよりアルカデを伴ひて己が鄉村に到りけるが、一日隣村の一農夫の窒扶斯にかゝりて死したるを解剖せんとして、不注意にも指に傷つけ、病毒を受けて宅に歸り、治療を加へたりしも、毒己に全身にわたりて如何ともすべきなく、彼は遂に之が爲に夭折せり。彼の一生は實に此の如く主我の念と冷々たる情とを以て貫かれたり。其云ふ所の言は一々虛無黨の精神を表せり。曰、善良なる化學士は最良の詩人よりも二十倍も有用なり。曰、宇宙は殿堂にはあらで仕事塲なり。而して人間は其中の職人なり。曰、貴族政治、自由主義、進步、原理、請ふ之を一考せよ。此等は皆外國輸入の物にして無用の語に非ずや。露人に向ては全く何等の必要だもなし。曰、余は望む、諸君若し飢ゑなば口中に向て先づ一片の麵麭を投せよ。論理抑何の用かある。曰、吾人はすべて最も吾人の利益となる者の爲めに働く。今日に於て吾人の利益となる者、否定に如くはなし。故に吾人は否定すと。嘗て其友アルカデを難じて曰、汝も結婚に重きを置くか、余はかゝるとの汝にあるべしとは期待せざりきと。一日、ニコライのプーシユキンを讀むを聞きてアルカデに云て曰、余は汝の父のプーシユキンを讀むを聞けり。行て彼に告げよとは、最早地上

プシュキンを斥けてビュヒネルを推す

社會の無機的觀察

に用なき者たることを。汝の知る如く、彼は小兒に非ず。須くかゝる廢物をなげ棄てざるべからず。今日にありてロマンチックたらんとすとは何事ぞ。彼に讀むべき價値ある者を與へよ。而して之が爲めにはビュヒネルの『力及物質』を推選せよと。バザロフ又或席に赴き、彼がプルードンの考を採用する者なるやを問はれしとき、傲然として答へて曰く、余は何人の思想をも摸倣する者に非ず。余には余自身の見識ありと。田舍に遊て一農夫に遇ひける時告げて曰來れ、同胞よ、來て生活に關する足下の見解を余に語れよ。聞かずや、世人云ふ、露國の全國力及其將來は一に諸君の手中に在て存することを。又歷史上に於ける一新紀元が足下等によりて開かるべきことを。足下等は實に我等に與ふるに眞正の國法を以てする者たりと。又曰、すべて人間は其精神狀態及肉体狀態に於て互に類似する者なり。吾人は皆同じ腦髓、脾臟、心臟、肺臟等を有す。所謂道德性と云ふ者も亦全く同じ。假令其間多少の差違ありとも、こはもとより重きを置くに足らず。故に一個の人間を摸範とし、之によりて以てすべて他のものを判斷するを得。人はそれ恰も森に於ける樹木の如きか、如何なる植物學者と雖、誰か樺の木を其一つ一つに付きて研究するの愚をなす者あらんやと。由て問ふ者あり、人間果して樹木の如くんば、賢者と愚者と、善人と惡人との間、何等の差違の認むべきなきかと。答へて曰、否、差あり。恰も病者と健者との違ひの如し。肺病患者の肺はたとへ搆造に於て我等健者のとあるなしと雖、而も病あるが故に我等のとは大に同じからず。我等は兎に角に肉の病の何處より來るやを知る。道德上の病に至ては敎育の惡しきに根源す。兒童時代より此方、各人の頭腦があらゆる社會の欠点によりて詰め込めらるゝに起るなり。故に社會にして一度改革せらるゝ、世には精神上の病全く其跡を斷つに至らん。諸君の余の言を信ずるも信せざるも余は毫も之に介心せず。唯余の見る所即此の如きのみと。問ふ者曰、然らば足下は社會にして一度改革せらるれば、愚人も、惡人も、全く滅盡するに至ると云ふか。答へて曰、然り、社會の機關體制にして其當を得なんには各個人の賢なるも愚なるも將た善なるも、惡なるも、そは絕對的に同じふことなりと。

個人の道德的疾患は皆社會の罪

要するに此小說は新舊兩時代理想の衝突を寫實せし者なり。舊人と新人との相和せざる所以を明にしたる者なり。其一度世に公にせらるゝや、之が靑年社會に

及ぼせる感化力は實に非常なる者にして毀譽褒貶忽にして交々起り、彼を非難する者は或は彼を目するに青年に媚びて彼等を煽動せんとする者なりとし、或は又彼が久しく外國に遊歷して故郷を觀察するの明を失ひ、爲に其創作の力茲に全く盡きたりとなし、著名の記者カトコフの如きは書を裁して之をツルゲネフに送り、以て彼がバザロフを崇揚したるを攻擊したり。ツルゲネフ自ら當時の狀況を記するの言に曰、余は敢て此小說の感化を誇大にせざるべし。されど余は僅に左の事を云ふを得べし。實に當時にありては到る處としてニヒリストなる語の語られざる所なく、余の彼得堡に入り來りしや、恰も虛無主義者の火を首都に放ちつゝありし時なりしが、此時余の第一に迎へられたる叫びは、『見よ、足下のニヒリストの爲しつゝある事を』と云ふの數語にてありき。余は余が親しかりし朋友より忿りの詞を受け、又從來余に反對し、余の敵たりし人々よりは却て同情の辭を受けたり。こは余をして心を亂さしめたり。余が心を苦めたり。されど余の良心は決して余の行爲を尤めざりき。なれ余は自ら正直に余の人物を現し、又偏頗の見を棄て同情を以て彼を描きたりしを信じたればなりと。而して彼はかゝる間に於て

尙は自若たりき。これより後彼の筆致に倣ひて虛無主義者を傳する者續々として起り、此陰鬱なる否定主義は今や正に露西亞の八方に蔓延したり。

吾人は茲に此章を終るに臨て聊か紛糾せる上述の事實を再陳すべし。露國の虛無主義は一種の無政府主義、革命主義なり。只其スラーヴ族に特有なる一種の文化に之か源を發するが故に、其性質自ら異色を帶びて峻烈を極むる者あり。蓋し露國に土地の分配を熱望せる農民一般の不平あり。官吏の腐敗と政府の虐政とは少壯有爲の學生をして憤慨に堪へざらしめ、其國內に於ける反政府の勢は既に全く破烈の機に熟せり。然るに西歐に於ける科學哲學の風潮は、其實驗論、無神論、唯物論、功利論等を齎し來りて激烈なる社會主義、無政府主義と共に學理の根柢を不平黨に與へ、彼等の反動的思想ょ聲援して之を極端に奔らしめたり。是ょ於てか一切を否認せんとする恐るべき虛無黨はツァールの大帝國に橫行し、上下をして實に戰慄せしめぬべき慘狀に陷らしむるには至りぬ。思ふに虛無黨は十九世紀文明の一變象なり。抑々此の如き現象の發生するに至りたる、果して何處に向てか其責を歸せしむべき。露國國粹黨の預言者アクサコフは之に答へて云ふ、虛

無黨の起因に向ては歐州其責に任せざるを得ず。殊に吾人は獨逸の責任を問はんとを欲する者あり。あゝ、これ果して唯物論を供給したる獨逸の罪なるか。大凡物の起る、決して其起るの日に於て起るに非ず。虚無黨の現出せる歐州の哲學多く之を誘致したると素より疑を容れざるの事實ありと雖、これ豈に學問の罪なりとすべけんや。將た後の民意黨が主張せる如く、ツアール一身の責任ありと極言すべけんや。若し強て責のある所を求めんか、そは實にスラーヴ族其物に於てあらんのみ。全露西亞人民其物に於てあらんのみ。

第二章　虚無主義の皷吹者

其一　アレキサンドル、ヘルツェン

ヘルツエンの父母。スタンキエヰッチの門に遊ぶ。放逐せらる。再び放逐せらる。彼の文名漸くにして揚る。西歐に遊ぶ。彼の激論。居を倫敦に定む。週刊新聞『コロコル』。彼が諷刺の筆。農奴解放とヘルツエン。彼の學識。惡政の指彈者。彼が晩年に於ける思想の變調。一切過去の文物を打破せん。勞働論。『誰が罪』の撮要。

其二　ニコライ、チェルネシェヴスキー

小說『如何にせん』の內容。新人。自由の愛。チエルチシエヴスキーの記者生活。彼の革命運動。就縛及刑の宣告。遂に痴となる。

其三　ミハイル、バクーニン

バクーニンの家。スタンキエヰッチの塾に入る。西歐に赴く。彼佛國を追はる。スラーヴ統一主義を採る。日耳曼統一主義に移る。彼の刑。脱走す。倫敦に於ける運動。極端なる無政府黨となる。彼の勢力西歐各國に蔓る。彼の無神論。彼の革命黨義務論。プルードン及マルクスを許す。彼の進化論。彼の一生は斷片的なり。

虚無主義の鼓吹者を以て目すべきもの其數何ぞ一二に限らん。然れども就中其有力者として殊に吾人の精究を價すべき者三人を得たり。曰、アレキサンドル、ヘルツエン、曰ニコライ、チェルネシエヴスキー、曰、ミハイル、バクーニン是なり。而して一管の筆により、或は小說に、或は論文に、其苛激なる革命論を鼓吹したるは即前二人にして、バクーニンに至ては專ら三寸の舌鋒を振ひて以て遊說煽動したり。以下章を逐ひ彼等の運動及其主張に付きて聊か觀察する所あらんとす。

ヘルツエンの父母

其一　アレキサンドル、ヘルツエン。

アレキサンドル、イヴノキッチ、ヘルツエンは一八一二年、恰も奈破翁の遠征軍が莫斯科大火の中にありし時に於て此地に生れぬ。父はイヴン、アレキセーキッチ、ヤコーレフと云へる富人にて一八一二年、奈破翁の親翰を持して露帝を彼得堡に訪ひし人なり。彼、妾あり、シユワビヤの產にてヘンリエッタ、ハーグと云ひ、一八一一年彼之をスツットガルトより携へ來る。ヘルツエンは其出なり。其ヘルツエンの別名あるは彼が正腹に非ざるが故なり。ヘルツエンの云ふ所によれば彼の父は極めて冷血の人にして人類を賤み、之と親むと云ふことを厭ひ、すべて人に善てふ事のあるを信ぜざりし程の無情漢なりしと云ふ。

スタンキエヰツチの門に遊ぶ

一八二五年、アレキサンドル一世死してデカブリステンの暴動起り、ニコライ一世の專制政治が恰も其緒を開きつゝありし時に於ては、彼年未た弱冠なりしが、既にして莫斯科大學に入りて自然科學及數學を研究し、尙は此地に於ける有名なるスタンキエヰッチの門に遊びてヘーゲル及フォイエルバッハ等の哲學を研究し、彼の著名なる革命詩人にして且つ彼の倫敦に於ける共働者たるオガリオフ等と塾中の俊才を以て推されぬ。一八三四年、彼年廿三、時の革命的社會黨と伍して窃に計畫する所ありしが、文相アレキサンドル、スシユコフの爲に彼が殊にヘーゲル左黨の極端なる非神學的學說に心醉することを探知せられて其學友と共に捕へられ、翌三五年を以て歐露極北のキアトカに放逐せられぬ。ヘルツエンの實談によればキアトカの旅宿の主人は厚く待遇せしかば、彼は已が本國を旅行するに當ては露人の同情に富める、囊中一金の貯なきも尙は饑餓を覺へざるを得べしと思へりとぞ。

放逐せらる

彼此地にあると暫くにして或は都に近きウラジミルに遷され、一八三九年、特別の待遇を以て其地の官吏となり、親しく官吏社會の腐敗を實見しぬ。後請ふて莫斯

再び敬遠せらる

科に歸り、一層ヘーゲルを究めて已が激論に哲理的基礎を與へ、門を閉ぢて文學に耽り、又知名の士と交を結ぶ。有名なる批評家ビエリンスキー、後の莫斯科新聞の主筆カトコフ、後の露國々粹黨の首領アクサコフ、萬有神敎的詩人オガレフ皆然り。是等の人々は又盡くヘーゲル。シエリングの熱心なる學徒なりき。既にしてヘルツエンはオガレフと共に社會問題及政治問題研究の目的を以て公然一の團体を組織し、已其首領となりたりしかば、一八四一年、時の內相の爲に又再び都より敬遠せられ、ノブゴロッド政廳の一公吏とせられて赴きぬ。然るに一日、彼政廳の事務室に座せしに、會々一農奴の妻來りて有司に嘆願するに、其子を虐待するなからんことを以てするものあるを耳にし、痛く感ずる所あり、直に病と稱して去て又歸らず。終に職を辭しぬ。これ實に一八四二年の事にてありき。

彼の文名漸くにして揚る

彼はこれより專ら文筆の業に耽り、知名の文人ゴゴル。ビエリンスキー。グラノヴスキー。ツルゲネフ及オドイアヴスキー等と共に自然派と稱する文學上の一派を組織し、大に時の國粹黨に反抗しぬ。此時彼の勢力の下に現はれたる雜誌二つあり。『祖國年鑑』及『現代人』是なり。彼イスカンダーの名を以て著す所の書尠からず。『科學に於けるディレッタンチズム』の如き『自然研究斷片』の如き皆然り。就中後者に於て彼は科學と哲學との衝突は漸次相近づき次第に調和するに至るべきことを論じて明に獨逸唯物論の影響を受けたることを示せり。既にして彼の父死しければ彼は莫大なる遺產を繼襲することを得ぬ。一八四五年及六年の間に於て彼は二つの小說を公にせり。一は即『誰が罪』にして一は『クルコフ博士』なり。彼の文名之に由て大に揚る。

西歐に遊ぶ

彼既に十八世紀の佛國政治學及獨逸最近の哲學によりて非常なる影響を被り、爲に熱心なる社會主義者となり、新時代新文明を妄想するに至りければ、恰も當時西歐に於て社會的運動の盛なりしを見て己が理想の新國家、新社會、此處に之を實現するを得べしとて密に外國に遊ぶの志あり。一八四七年一月、漸く其志と遂ぐるを得て南歐に旅し、冬十二月、羅馬に到り、續て政治哲學的小冊子『暴風前』を著して革命の久しからずして起るべきを預言したりしが、翌四八年果して此年あり。彼即親しく其運動に臨まんとて愴惶巴里に至りたりしが、そは全く社會上の革命には非らで、政治上從來の王政を顚覆して之に代ゆるに共和政を以てせしに過ぎざり

ければ、彼大に失望して『暴風後』を著し、己が不平を披瀝して曰、すべての世界は地に沒せよ、混沌と寂滅とが起れよと。 要するに彼が主張する所は勞働者は決して第三者の利益の爲めに勞働するを要せず、又勞働すると能はざる者ありてふ共產的原理にてありき。 此年十月、彼又『一にして分つべからざるの共和政』なる冊子を發刊して一派の人士が理想せる共和政治を嘲笑して曰、彼等が考ふるが如き共和政は全く一の抽象的にして實現し得べからざるの觀念なり。 純理の產物なり。 國家實際の秩序を靈化せしめたる者なり。 夢のみ。 舊世界の詩的幻影のみと。 一八四九年六月、遂に去てジェネヴァに到り、年の末又巴里に赴き、詭計を以てサロモン、ロスチャイルドより一万フランの金を得たり。 後ヒスチャイルドは此債を露國に請求し、露政府又止むを得ずして之を支拂ひたりしと云ふ。 之より先ヘルッエンの妻及母、露國より來りて彼の許にあり。 友人ヘルウエグ夫妻又之と同棲しぬ。 五一年、彼其友ゴローキン等と共にニッツアにあり。 有名なる唯物論者カール、フオーグトと交り、又『露國に於ける革命思想の發展』を出版す。 然るに此頃に至りて彼一身の不幸に遭遇すると二度、即之を先にしては彼の母、ヘルッエンの子たる啞兒を伴ひてマルセイユよりニッツアに至る航海の途上、難船の爲に共に溺死し、之を後よしては彼が妻難產の爲にニッツアに於て歿し、彼は此等の悲酸なる出來事の爲に今や全く天涯よる邊なきの孤客とはなりたり。

居を倫敦に定む

一八五三年彼波蘭人の一印刷所に屬する印刷師ツェルニエスキーなる者の輔助により、倫敦に自由露西亞活版所と云へるを設け、諸種の自由主義、社會主義の書、即ルイ、ブラン、マヂニ等の著を露語に譯出し、又一八五五年來、每年二回刊行の『北極星』を、一八五七年來、週刊新聞『鐘(コロコル)』を發刊せり。 此頃彼の作にして出でたる者一八五三年に於て『彼洗禮財產』あり。 五六年に於て『禁獄及逃亡』あり。 後者は彼自家の經歷談を記せし者なり。 彼既に居を倫敦に定め、オガレフ、ケルシェフ等の亡命客と共に露國革命黨の一團体を組織し、文筆を以て盛に運動し、一八四九年、人の歸國を彼に勸むる者ありしに彼之を謝絕し、五五年を以て『さらば、露國に於ける友よ』と題する手書を草して斷じて再び鄕里を見ざるべきを告げ、且彼の舊歐州を嫌忌する、之を打破するに至らずむば已まざるべき旨を述べたり。

週刊新聞コロコル

彼が勢力の大なりしは一に此活版所を有するにより、而して就中週刊新聞コロコルを有するによれり。 彼は躬

自ら官吏たりし事あり、其内情に通ずると頗る精しく、世人の得てあづかり知ると能はざるが如き秘密の事件をさへ剔發するを得ければ、露の腐敗官吏は最も己が姓名曲事を彼の紙上に發かるゝを戰慄したり。會〻政府、探偵を倫敦に放つありとも、其上陸するに先立ちて彼の姓名又コロコルの上に披露冷評せらるゝに止りければ何の効だも之なかりき。されば或人がヘルッエンを評して、一度彼の毒筆にかゝる、旣に死刑の宣告を受けたると同じと云ひたりき。其諷刺の力の尋常ならざりしを想見すべし。吾人は左に彼の手になれる一片の小文章を轉載す。拙譯素より此大記者の筆を示すに足らざるべしと雖、亦之によりて聊か彼が筆致の一端と窺知するとを得ん。文はグエナンの『露西亞』に見ゆ。彼の著『航海の回想』の一部分なりと云ふ。獨逸を揶揄するの言峻刻を極むと云ふべし。

何故に獨逸は王患（ユクロフエラ）や、涕や、ロマンチシヂムや、プラトン的愛や、將た都人士娛樂の目的物とはなりつゝありや。何故に獨逸は精氣界中天高き所、蔚房蒸發氣の中にのみ住みつゝありや。

これ蓋し彼の纖維質が枯槁し、且つ穴にて滿ちたればなり。

從來之に付て其原因を討究せし者多々之あるなるに、予の一人として正鵠を得たる者なきは、之れ蓋し之が原因のあまりに手近く横はりて彼等の注意を牽かざりしに由れり。或は宗敎改革を以てし、或は三十年戰爭を以てし、又或はナポレオン戰爭を以て淵源此處にありと獨斷するも、而も此等は總て第二流の原因に非ざるはなし。眞の原因、其第一の起源はこれ實に獨逸の蔚房に外ならず。何故に讀者は此言を聞て笑うや。果して然らば讀者も亦一の唯心論者なるか。煑るとも燒くとも出來ぬ抽象的無形的の原因を求めつゝあるものなるか。あゝ、諸君はあまりに諸君の貧しきつゞれを厭ふに過ぐるなり。あまりに自由を求むるに過ぐるなり。我等をして先づ一の問題を提出せしめよ。一獨逸人の胃の腑は彼が如何に骨折りたりとも、其馬食せる、桂枝とウイレともて鹽梅され、サフランもて糝けられたる禁肉的の、穀粉製の、而も稍酸味を帶びたる生麵麭より如何程の滋養をば得べきぞ。

讀者若し鯨飲せるビールの夥しき量に對して胃の腑が麪粉や、馬鈴薯の多くを消化して躰力支持の爲めに、如何に大なる勤をなさゞるべからざるかを知るな

らば、諸君は必やすべての獨逸人の胃は彼等の十二指腸の上に『消化の爲に』としるされたる賞牌を得るの權利あるを認むるなるべし。彼等は確に其權利を獲るに足るべき充分の功勞あり。されどかゝる滋養物にては佛人の有する如き活潑なる纖維を得んと望み得らるべきか。彼等に與ふるにかゝる重荷に耐へ得らるべきだけの物を以てせよ。果して然らんには彼等は幸にして眞直に立ち上り、其左右に傾倒する、惡紙の如くなるを免るゝなるべし。

されど料理の事に付て徒に戯言するを止むべし。約言すればわれには一切政治上の管見を容るゝの要なくして、最も必要なるは獨り有機化學のみ。下民に關するあらゆる問題は其根本に於ては料理に外ならず。社會問題は畢竟消化問題なり。

余は此立脚点に立て自ら信ずる所をかく叫ぶことを得。諸君、須く秋の泥の如き濃き醤油を呪へ。ピルヒプファイフェルの戯曲の如き無味なるソースを呪へ。美なる獸肉と鯡、乾葡萄にて包みし腿肉、橙と混せし腸詰の小さき皿を咀へよ。サフランにて調理したる鷄肉を咀へよ。ダムプヌーデルやシャルロッテや、豕の腸詰を咀へよ。幾樣にも變態せる馬鈴薯を咀へよ。廚房の廢殘物たる桂枝、ウイレ及ラウレルの葉を咀へよ。

農奴解放とヘルツエン

一八五七年十二月二日、露帝勅を發して農奴解放案を天下に求められしや、ヘルツエンは『鐘（コロコル）』の同志を率ゐて極力皇帝の政策に聲援を與へ、以て貴族及地主の反對を鎭壓するに努めぬ。而して此新聞は露帝國の禁書なるにも換はらず、其嚴重なる撿閲の法網を脱して無數に倫敦より露の域内に進入し、至る所密に購讀せられ、甚しきに至ては解放準備委員會長ロストウストフ將軍の机上にすら横へらるゝに至りたり。一八六一年二月十九日、愈、該解放令の發布せらるゝや、倫敦西隅なるヘルツエンの宅にては彼等自家の祝賀會を催し、其入口には『露國農民の自由』及『自由露國活版所』としるされたる二流の大旗を交叉して盛に此祝典を慶したり。されど農奴解放の實行せられてよりは、コロコルは恰も已が事業に一段落を告げたるが如く頓に其發行高を減じ、殊に一八六五年、ジェネヴアに遷されてよりは益衰頽したり。一八七〇年一月、ヘルツエン巴里に於て死す。時に年五十九。彼は父の大なる遺産を承けたるのみならず、毎年五、六万フランの收入を有したりしかば其朋輩

たるバクーニンの貧なりしに比して極めて裕福なる生活を送ることを得、曾てプルードンに與ふるに三万五千フランを以てしたりし事あり。

ヘルツェンは偉なる文才を有せし人にして、露、佛、英、獨四個國の語に通じ、又且之を以て誤りなく文を綴るの力を有せり。彼の著述としては一八七五年より七九年に至るまでの間にジェネヴァにて發行されし十冊の露文の書の外に諸外國にて認められし無數の小冊子あり。其中一八五八年に於て出されし『佛及英』と題せし書は、佛露同盟を論じ、露國の同盟國としては英國の最も適當なることを論せるものにして、六五年の『カミツイア、ロツサ』は彼が倫敦に於てガリバルヂーと會見せし顛末を記せし者なり。彼は尙ほ歷史よりも趣味を有し、曾てカタリナ二世や、ダツハコフ公主の事に付きて論述せしことあり。彼は哲學に於てはヘーゲル左黨の學說を採り、社會主義にてはサン、シモンを尊崇し、文學に於てはウォルテールを讀みて其辛き毒筆を學べり。彼、學頗る該博に、上は哲學の幽玄なるより、下諸科學の末に至るまで多少其涉らざる所なし。さればアルナウドーは評して、社會の生理學及客觀的科學として考へられたる歷史の研究に付てはヘルツェンは確にバツクル及ドレーバルの先驅の一人たるを失はざる者なりと云ひたり。

ヘルツエンは嚴格なる意味に於ては之を虛無主義の創唱者なりとは云ふを得ず。されど彼の生活は極めて密に虛無黨發展の歷史と相錯綜せられつゝあるが故に或る評者が彼以前虛無黨なしと云へるは强ち之れを以て輕卒なる論斷なりとは云ふを得ざるなり。彼や哲學思想に富み、これに加ふるに深遠なる學識を以つてし、一管の筆によりて世に立つの士にして、此点に於ては學說、論理の如何に介心せず、一に辯舌によりて奔走するバクーニン一輩と大に其趣を異にする者あり。彼は天性陰謀の敵、光明正大を好むの士にして秘密結社の手段により遊說煽動するが如きは其敢てし得ざる所、故に專ら政府の惡政、官吏の腐敗を指摘廣告するを以て足れりとせり。彼は實に露國宿弊の剔發者なりき。然れども彼の子が父の死後アルナウドーに與へて其著書を評したる書翰中に述べて『余の父英國にあると十有五年、彼は終に全く革命なる者が決してしかく匆卒の間に出來得べきものに非ずして、着々改繕するの手段によるの外なきことを發見したり。これ實に彼が思想の經過に於て注意すべき所なり』と云ひける如くに、彼は漸くにして已が從來

彼が晩年に於ける思想の變調

の言論の徒に過激に流れて其効果を致すの尠かりしを悔嘆して曰、こゝに少數者の會ゝ衆に卒先して我目的を達せんとを勉めつゝあるあり。されど吾人は彼等の中々に明白ある道理、實行し得べき手段、即將來の經濟的國家に到る完全無欲の眞理を發見し得べからざるを信ずる者あり。故に若し現在の國家の下に非常ある艱苦を嘗めつゝある者あらば、彼等に向ての第一の善後策は先づ都市の勞働者を憐み、其團体の力に依賴して已が境遇より脫せんとを計るより外あし。智識や、理解や、クー、デターによるも、將たクー、ド、デートによるも到底得らるべきものに非ず。今や我國の事物たる、總て遲緩にして固着の力に乏しく、以て吾人を支ふるに足らず。之を以て多數の人々は其順當にして穩健ある見解を捨て、一朝にして激論極說に趨歸せんとす。あゝ、ふれ果して賢明ある道となすを得べきかと。彼が晩年に於ける革命意見の變更は其『舊友に與ふるの書』と題してバクーニンに遺せし書翰によりて略之を見るべし（アルナウドー一七一頁より一七七頁。までの間に見ゆれども今之を略す）彼は宗敎を嫌ひ、殊に希臘正敎を忌み、全然無神論を唱道し、又世の靈魂不滅說を主張するものを嗤笑せり。曰、何が故に死後尙ほ存在する者あらんやと。一言にして之を云はんか、彼は新世界を望み、敎會、國家、家族、道德、善惡に關する舊來の思想を撲滅せんとを欲する者なり。

一切過去の文物を打破せん

即世の所謂唯心論や攝理等を排斥して曰、論理は總て此等の者の存在するを許さずと。又曰、今や時來れり、須く共和政、立法、代議政体等を學理の法廷に召集し、之を吟味すべし。須く市民に就き、及そが他の國家市民に對するゝ關係につきてのあらゆる吾人の理想を此處に吟味すべし。凡ろ斯の如きの場合に際しては死の宣告を受くべき者寡からざるべく、又情を殺して忍ばざるべからざるの境遇に迫ると必や多からん。それ己の惡む所の者を棄つるは易く、己の愛する所の者を捧ぐるの難きは人情の常あり。只此悲に堪へ、此苦みを敢てしてふそ初めて之れを大丈夫眞成の事業とは云ふべきなれ。前人の功を收むるはふれ決して吾人の使命に非ず。過去を譴責し、窘逐し、判斷し、其假面を剝ぎて之を將來の爲に犧牲に供する、ふれぞ吾人の天職ありと。

ヘルツエン又虛無黨の事業を一七九三年に於ける佛國の恐怖主義に比較して曰、往時にありては人民を裁判する者は恐怖其物ありき。然れども吾人の事業はこれよりも一層容易ある者あり。制度を批判し、信仰を破棄し、すべての舊習舊慣を

斥けて慈悲も容赦もなくあらゆる舊事物を打破するは即吾人の使命なりと。勞働問題に關しては云ふ。弱肉强食の時代をして去らしめよ。貴族政治を打ち倒せよ。抑も斯の如き宿弊の今日に至るまで存續したりし所以の者は、詮ずる所從來職工が彼等自家の力倆に付て自覺するなかりしと、又一方に於ては農民の未だ自身の境遇を發展すると能はざりしが故による。彼等にして一旦蹶起して運動し、其安逸と、奢侈と、文明敎化とを打ち捨てなば、彼等豈に徒に粉骨碎身して少數榮華の憫むべき犧牲たるに了るべけんや。時代の趨勢により人を使役して己自ら立たんとするが如きの風は今や全く止めり。これ實に世人が正道なりと認めざるに至りたるが爲ならざらんやと。一八四八年十二月、彼又一篇の論文を草して人生問題の社會主義によらされば之を解釋するの道なきとを述べて曰、人生のものたる死や悲慘にして生や又避くべからず。其永延の演劇は滾々たる歷史の流れをなして吾人生命の絕ゆるとなき動機とはなるなりと。彼が根本思想には實に永延の否定なる一大原理の潛みつゝあるとを見るべし。彼は蓋し一の厭世的虛無主義者なるか（編者不肖未だヘルツエンの著書に接せず、故に彼の學說に付て並に其小說。『誰が罪』に付て引用する所盡くアルナウドーの抄譯にすぎず讀者幸に諒之）

彼が小說に於て殊に文學史上に一紀元を畫せるものとして見るべきは即其『誰が罪』にあり。由て左に其大要を抄出す。

退職將軍ネグロフと云へる人あり、年若き夫人と共に自己の領土に住みて余生を送れり。彼に一女子あり、名をルーベンカと云ふ。こは田舍の一婦人に關係して產ませたるものなりしが、彼の妻は之を己が邸內に引き入るゝを拒みければ、ルーベンカは幼年の間、父の傍にあると能はずして具さに浮世の辛酸を甞めたり。既にして長じて家に入るに及び、又義母に事へて艱苦一方ならず。而して此間に彼女の父は家庭敎師ドミトリ、クルチフェルスキーなる一青年を聘し、彼女は之に就きて頗る學事に出精したり。ドミトリは貧しき醫師の子にして極めて內氣に、溫柔に、且勤勉なる人なりしが、ルーベンカの高尙優雅にして學才あるを見て窃に思を焦し、終に父將軍に彼女を娶らんとを提言して其許可を得、彼女亦敢て異議を申し出でざりしかば、二人は即結婚の式を擧げ然る後移りて莫斯科に至り、ドミトリは此處にて敎授となれり。されどルーベンカは決して心よりドミトリを戀ひしには非ざりき。彼女は彼の赤心の爲にほだされたるにてありき。就んど侮蔑の間

に生長し來りし彼女は夫の厚き熱愛に初めて世の情けてふ者を解し得たるにてありき。然れども彼女の夫に對するや全く之を尊敬するに非ず、又其所謂情愛を以てするにあらずして只交情と感謝とあるのみに過ぎざりしなり。幾くもなくして彼女は大に己が心を動かすべき者に接しぬ。そはベルトフとて屢々海上生活を送りたりし富める一青年にてありき。ルーベンカは其家庭にありては全く一の女王にして温柔にして無氣力なるドミトリの如きは只彼女の命これに從ふに過ぎざりしが、彼女は今やすべて己の情を捧げて此愛の目的物の支配する所となるには至りぬ。彼女は己が心中に潜みつゝ燃へし愛情の吐口をベルトフに於て發見したるにてありしなり。されどベルトフは己の家族の忠告に從ひて可成ルーベンカより遠ざからんとを勉めつゝありければ、愍むべし、彼女は遂に戀の爲にこがれ死し、而して又彼女に己が心身を捧げたりしドミトリは、一生の幸福茲に全く其道を斷たれて自暴自棄し、酒を被りて自らやるに至れり。あゝこれ誰が罪ぞ。不運の婚姻を先見せざりしネグロフの罪か。偕老同穴の一大義務をば打ち棄てゝ、あだし男に不義の思を焦せしルーベンカの自ら求むる所なるか、將た己を

小説『如何にせん』其内容

戀へる友の妻を慰安せしむべき何等善後の方法をも施さゞりしベルトフの罪にてあるか。これ實にヘルツエンによりて課せられし問題なり。而して之が解決を試みたりしは實にチエルネシエブスキー其人なり。

其二　ニコライ、チエルネシェヴスキー

『誰が罪』の解答として見らるべき小説『如何にせん』はチエルネシエヴスキーが一八六三年彼得堡に於て獄窓の中に草せる所、當時恰も聖書の如く青年男女に珍重せられ、露國の社會に及ぼすに非常なる影響を以てしたる者なり。今其趣向の大略を其英譯文によりて抄摘するに實に左の如し。

ウィエラ、パヴロヴナは此小説の主人公なり。彼の父は聖彼得堡に於てストレシユニコフなる者の有に屬せる數階の一大家屋を管理支配せる人にして、又某省の小吏なりき。名をロッアルスキーと云ひ、母はマリヤ、アレキセエヴナとて中々の働き者なりき。二子あり、長は即ウィエラにして、末はフエオドルなる男子なり。ロッアルスキー、支配人たると十有四年にして三千ルーブルを貯蓄し、之を資本とし、妻と共に金貸渡世を營みて一万ルーブルの財産を作れり。ウィエラは斯る間に種々

の經驗を積みて成人し、彼女の弟フエオドルも初め中學に入學せん爲、之が準備をなさゞるべからざるに至りしかば、父は彼の爲に薄給なる家庭教師を求め、知友の薦むるに任せて醫學生ロプコフと云へるを聘したり。ロプコフ之れに依つて屢此家に出入し、親しく其家人と交ることを得、殊にウィエラの美にして才あるを愛し、二人者の交情頗る親密なるを致したり。元來ウィエラの母マリヤ、アレキセヴナは利已一偏の婦人にして、其家庭に臨むや壓制を極め、總て己の意の如くならしめんことを欲しければ、ウィエラは之を厭ひて母と衝突すること頻時、フオイエルバツハの無神論や、シモン派の社會主義者、コンシデラン等を愛讀し、常に婦人の生活の悶むべく、果敢なきを嘆息して之を窖にある者に比し、速に心身の繫縛を脫して自由活達の境に至らんことを熱望し、終に父母の許可を經ずして專にロプコフと結婚したり。然るにウ・イエラの父母は彼女を以て富豪士官ミハエル、ストレシュニコフと云へるに嫁せしめんことを目論見つゝありければ、愛孃の逃亡せるを見て大に其不所存を憤り、百方恢復の謀を旋すと雖も、如何ともすること能はざりき。是に於てか二人は遂に一家を搆へ、ロプコフは塾を開て學生を敎授し、又某商會に出勤し、ウィエラは裁縫店を設け、共に力を協せて家計を治め、極めて安寧平和なる樂しき三年の生活を過ぎたり。然るに此より先、ロプコフ未だ大學にありて下宿生活を營みつゝありける時、彼の同宿にして而も同窓なる親友キルサノフなる者あり。友の其家に出入せるより、己又ウィエラを知り、既に早く彼女に向て心ありけるが、音信を通せざること兩三年にして再び來りてロプコフと舊交を溫め、ウィエラと交り、ウィエラは又密に夫の親友に向て愛を注ぐに至りたり、されど二人の秘密はロプコフの感知する所となりき。彼は實に言ふべからざるの煩悶に沈みき。種々なる妄想は彼を襲ひたりき。されど彼は終に彼等の自由の愛を妨ぐるが如きことなかるべきを決心しつ、一日飄然逐電して彼得堡の客舍に至り、夜半窃に遁れ出でゝ拳銃もて自殺し、橋上よりネワ河に投じたるが如く裝て失踪し、ラツハメトフと稱するデオゲネス流の一變人をウィエラに送りて自由なる結婚をなすの憚る所なかるべきを示しければ、彼女は寡婦として終にキルサノフと結び、今やロプコフの時よりも一層幸福なるを得て、曾て企て及ばざりし活動をなし得るの境遇に達したり。先夫はウィエラの一身上に何等の束縛をも置かず、彼女も夫を羈制せず、必要の場

合に際する毎に之が助を受くるとを得、夫も亦常に彼女の爲に已の利害を棄つるの覺悟ありけれども、一般に彼の手は稍〻其妻の身邊を去ること遠くして、深く之に干涉するとなく、彼女の事は彼女の事にして、彼の事は彼の事たるが如きの觀ありき。然れども今やキルサノフとの關係は更に之に一歩を進めたり。何となれば彼は直に妻の利害を已が一身に感ずるのみならず、尙ほ求めずして獨り進で彼女の事に當りければなり。之よりキルサノフは醫師として病院に通勤し、ウィエラは又社會主義の理想を已が裁縫店に適用して成功し、頗る繁昌しけるが、常に新時代新生活を夢みつゝありけるウィエラは旣に忘想に耽ること今に及で正に四度、又以爲、文明生活に到るべき我々婦人の途は法律の爲に就んとすべて閉されつゝあり。公然たる活動は盡く杜絕せられぬ。是に於てか我等はあらゆる生活の中に於て只一つ家庭生活の範圍を以て滿足せざるべからず。此より以外官吏となるを得ざるは元より、何等の職業の我等に向て授けられたるなく、何等の獨立の許されたるあるなし。思ふに婦人にして之と稍異れる方面に於て躍出するに非ざりせば生活の獨立られ望み得べからざらんか。蓋し新行路を拓くと云ふが如き、ふ

れ纎々たる女性の容易にし得べからざる所たるべし。然れ共我等の活動を制限しつゝある者は法律に非ずして寧ろ習慣にあり。故に我等にして若し此舊弊に抵抗し、之と鬪を挑むの覺悟ある以上、其等の途の一つに於て一道の血路を開き得べきは信じて之を疑はず。果して然らば道を拓くの業決してしかく難事なりとすべきに非ざるなり。我夫は醫師なり、妾請ふこれより醫術の硏鑽に從はん。世に女醫なきは多數女性の一大不幸たるべし。妾をして此有益なる而も未だ曾て染手せられざる方面に向て進ましめよ、妾は斷じて之を試みんと。彼女は終に之を試みたり。かくて作者は最終なる第五編に於て『新人及大團圓』と題してキルサノフが已醫師たるが爲め一の患者を知り、而して此患者はカテリナ、ワシリエブナと云へる妙齡の女子にて、恰も當時其地に滯在しつゝありたるもと露人チャールスボーモントなる北米の新來人を戀ひ慕ひ、之が爲に病に陷れるものなりしに、彼女は遂に其志を遂ぐるを得て其人と結婚し、キルサノフ夫妻と共に新人として並び相親しみ、兩家が樂しき生活を送る旨を記して全篇を結べり。而して此ボーモントと云へるは實に自殺を裝ひたるロプコフの永く北米にありて又歸り來りし

者にてありき。チエルネシエウ゛スキー即曰すべて吾人の過去の生活は一の結論に歸着す。即人類は虛弱なる者及奸惡なる者の二種に分たるヽと云ふ事即是なり。虛弱ならざれば則奸惡、奸惡ならざれば則必や虛弱なり。此觀察の方法は過去の人類に對して絕對的に其當を得たる者なり。然れども今日の時勢にありては最早正鵠を得たる者となすを得す。何となれば新人の已に出で來りたるなればなりと。即彼は凡ゆる舊文明、舊事物、舊習慣を打ち破り、一躍して唯一理想の新人に到らんことを其目的とはせるなり。彼は此小說に於て見ゆるが如く、大に自由の愛を主張し、以爲結婚は宗敎上及法制上の一偏見なり。吾人は婦人が姦通をなし、又破廉恥の行をなしたればとて妄に彼等を罰し、又は之を殘害するの權利なし。畢竟する所、これ等は生理上及病理上の現象に外ならざるが故よ、生理上の方面に於て治療の方法を加ふるの外なきものなりと。之れより先き英國にロバート、オーウエンあり。大に結婚を抗擊し、惡の三幅對として宗敎、財產及結婚の三者を擧げ、此三惡を廢するはこれ即社會改良家の本務なりと唱へ、又之と同時に佛國にフーリエーあり。彼は男女の同權なるを主張し、婦人の權利を開展すれば社會亦從て開展するはこれ歷史の明に吾人に證する所、故に婦人の位地先づ之を高めざるべからずと云ひ、而して結婚は人間を小ならしめ、之を利己的ならしむる者なりとて痛く之に非難を加へ、其廢止を唱論したり。チエルネシエッスキーの此說は蓋し彼等に胚胎し來りたる者なり。而して彼の書の殊に露國婦人社會の趨勢を變動するに有力なりし所以のものも亦一に此激論によれりとす。彼はあはれ自由なく、停滯せる現代の消滅して、淸新なる活世界の再生し來るべきを云ひ、反覆讀者に勸むるに孜々として其道に奮進すべきを以てして曰、讀者よ、讀者にして若し已が發展に怠ること非ざりせば、此等の人々(小說中の人物)の如くなること何の難きことかこれあらん。彼等よりも低き位地にある人よ、須く進で其身を高むべし。そは決して艱き事業に非ざるぞかし。自由なる光ある世界に至れよ。其地、生活や樂しくして道や安坦たり。先づ之を試みよ。修養なるぞよ。修養なるぞよ。人生の純潔なる樂に付て語り、又人をして善に且幸福ならしむる所以の者を敎示する先哲の書を觀察し、考慮し又熟讀せよ。此等の書を翫味せよ。彼等は盡く吾人に與ふるに喜悅の情を以てする者なればなり。人生を觀察するは興味ある事なり。須く

之を觀察せよ。之を考慮するは樂し、故に之を考慮せよ。此以外何等の要せらるべきものあるなし。旣に充分なり。故に只幸福ならんことを希ふべし。そは充分なればなり。只此希望の要せらるべきあるのみ。之が爲に喜悅を以て諸君の發展に心を注ぐべし。其中自ら幸福あり。充分なる自由なる發展を遂げたるの人、彼等には如何に言ふべからざる快感の伴はるゝよ。人の見て損失とし悲哀とする所のものも彼等之に接すれば滿足あり。喜悅あり。彼等の情は幸福に充ちみちたり。彼等の衷には喜悅無限なり。讀者よ、請ふ之を試み、之に到らんことを力めよ。そは賢き道なるぞかしと。終に臨てウィエラが下民の境遇を歌ひたる一歌を揭ぐべし。

我等は貧し。されど我等は勞働者なり。我等は無敎育なり。されど愚にはあらず。光を望む者なり。我等をして敎育を受けしめよ。知識は我等に自由を齎さん。我等をして勞働せしめよ。工業は我等に富を齎さん。こは起らん。我等にして生存せばそを見ることを得ん。

我等は粗野なり。されど之が爲に多くの損失を被れるなり。我等は偏見に富まん。されど我等は之が爲に苦めるなり。我等は確に之を感ず。我等をして幸福を求めしめよ。仁慈を被らしめよ。さらば我等は善良なることを得ん。こは起り來らん。我等にして生存せばそを見ることを得ん。

知識なき工業は効果なし。我等の幸福は他の者の幸福に待つなり。我等にして敎育せられんか、富得べく、幸福得べく、四海同胞亦之を得べし。こは起り來らん。我等にして生存せばそを見ることを得ん。

我等をして學び且勉めしめよ。我等をして歌ひ且戀せしめよ。我等は地上に天國を作るを得ん。我等をして生涯幸にてあらしめよ。こは起らん。忽にして出で來らん。さらば我等はすべてこを見ることを得ん。

チエルネシェヴスキーは露國のロベスピールを以て目せらるゝ者、名をニコライ、ガヴリロキッチと謂ひ、一八二九年を以てサラトフに生れぬ。父は偉なる性格を具へし人にして寺院の僧侶なりき。ニコライ幼にしてサラトフの神學校に入り熱心に古學を學び、殊に聖書の攻究に力を致し、後寛裕なる父の許しを得て聖彼得堡に遊學し、其大學に入りて博言科を修め、又社會學を研究し、政治上及社會上の思

想を養成しぬ。一八五〇年、業を卒ふるに及び、カデッツの學校にて文學の講師となりしが年の末、母の求めによりて故郷に歸り、其中學の敎鞭を握れり。此頃彼又一女子と相愛せしが、一八五三年、母の歿するに及び、父の許可を得て其女子と結婚し、終に首都に移りて操觚の業に從へり。此時に當りて英書の飜譯盛なりければ彼は僅少の時日に英語を習得して一小說を譯出し、又政府の聘する所となり、或條件附を以て御用紙たる『軍事評論』の記者となりしが元より永く其地位に留ると能はずして去り、文人ネクラソフの創刊にかゝる雜誌『現代人』の記者となり、批評的歷史的、經濟的の諸論文を載せ、プーシュキンの作に付て、レッシングの時代及彼の著書に付て、露西亞文學に於けるゴーゴルの時代に付て、カヴェーニャックに付て、迷信及論理に付て、七月革命の佛蘭西王國に付て、資本及勞力に付て、又羅馬衰滅の原因に付て大に其銳き筆鋒を振ひ又シュロッサーの『萬國史』を飜譯せり。就中彼の最も其文名を發揚せしむるに力ありしは實にミルの『經濟原論』に關する彼の註譯ありとす。そは一八六〇年の『現代人』雜誌に載せられて大喝采を博し、後佛語に譯せられ、一八七四年『科學によりて批判されたる經濟學』の題名の下に一書としてブ

リスセルに發刊せられたり。

一八五五年彼初て『美術と實在との關係』なる一書を著し、其後幾もなくして『哲學に於ける人類學的原理』と出版し、大に唯物主義と主張しぬ。蓋し彼は當時露國青年男女一般の然りしが如くにビュヒネル。モレショットの唯物論、ショーペンハウエルの厭世敎及ヘルツェンの革命文學等の爲め大なる感化を受けゝればなり。是に於てか彼は進で革命運動に加はり、同志の青年と共に『青年露西亞』(マッチニの『青年伊太利』の如くに)なる一團体を組織し、竊に運動する所ありぬ。彼は其社會主義的見地に於て殊に斬新なる意見あるにあらず。只オーウエン及シモン。フーリエー等佛國社會黨の學說を祖述するに過ぎず、一に下層人民の保護を唱道するのみなりしかども、其天賦の雄才を有せると、辛き諷刺に長けたるとにより大に多數血氣青年の崇敬する所となりしが、恰も政府の革命黨に對する探偵頗る嚴なりければ、彼は、一、ヘルツェン及バクーニン等露國亡命客の革命運動に關連したると、二、彼自ら農民に對する檄文を草したりしと、三、彼等の暴亂を煽動したりしとを以て一八六二年六月を以て首都に捕縛せられ、元老院に於て十四年の鑛山懲役、市民權

褫奪及び西比利亞終身追放に處分せられぬ。但し後皇帝殊に十四年の懲役期を減し、七年に短縮し玉ひたり。彼西比利亞に送らるゝの前首都の監獄にあり。其熱情と、血誠と、博識と洽聞とを以てして小說『如何にせん』を草し、モーアの『ユトピヤ』カムパネラの『ツイキタスソリス』及カベーの『イカリー航海記』等に摸して彼が理想の新人を描出せんとを試みたり。此稿一八六三年三月より五月に至る『現代人』雜誌に載せられ、彼か名をして露國文學史上に不朽ならしめたり。

一八六四年五月二十日、彼、頭手架かけられ、正に刑の宣告を受けんとして首都の公塲に立てり。此時、雨降ると雖、來り觀る者頗る多く、宣告文の讀み終らるゝに及びて公衆より花環を彼の脚下に投ずる者夥しかりき。時に彼年正に卅五、終に送られて西比利亞に赴き、ネルチンスクの鑛山に懲役せられぬ。一八六六年四月四日、カラコゾフの帝を謀殺せんとするありしや、愚昧なる官吏は小說『如何ません』の脱稿したるは恰も六三年四月四日にして、之と日を同じうするを以て其間に疑を挾み、共犯者として彼を公判に附すべき議を唱ふる者ありたりしかども用ゐられざりき。彼此處にあると七年にして特赦せられ、東西比利亞なるキルネスクの獄に

遷され、一八八三年八月まで西比利亞に留りしが、此時アストラハンに轉じ、更に懇請して己が鄕里たる東南露西亞のサラトフにありしが、一八八九年を以て此地に歿したり。彼宣告を受るの前、病める妻と會見するの許可を得、他人監視の下に彼女を見るとを得たりしが、時や彼己に永き幽囚と虐遇との爲に痛く其健康を毀ひて又再び故の彼には非りき。此後殊に每年一回の書信を妻に發するとを許されたりしかども、彼の徒が彼の放免を請ひて示威運動を起するに及び、おれすら固く禁せられて又妻と通ずるとを得ざるに至りたりき。彼は今や書を讀むとをも、文字を草することをも禁せられ、是に於てか無聊やる方なく、己が血を滴出して文字を獄中の板壁に列ぬるには至りぬ。あゝ、此の如き心身の苦痛を以て酷薄なる獄卒笞鞭の下に叱咤行使せらる、其終に病弱し、失神し、狂氣するに至る可きは何人と雖、免る可らざる所たるべし。彼は遂に之が爲に精神に異狀を呈し、白痴とはなりにき。然れども彼の學に勵精なるとは毫も其以前と異るとなく、其エルヒニコレムスクにありしや、彼は一の書庫及數多の書籍新聞を有し、机に向て常に何物かを認めつゝあり、又畠に出でゝ自ら耕作し、其收獲によりて自活し、極めて自由なる生

活を送り、曾てウエーベルの『萬國史』の翻譯を試みたりしとありしと云ふ。

チエルネシエヴスキーは寧ろシモンやフーリエー流の意味に於ける民權黨社會黨にして、又大にオーウエン及びフーリエーの持說たる結婚廢止の主義を唱道したり。彼殊に己を持すると高く、『智識及生活の文庫』と題せる大著述を企て、其妻に送りし書中に云て曰『アリストートル以後今日に至るまで、未だ嘗て余が今企てつゝあるが如き大事業をなせる者なし。余はアリストートルの如く、之によりて永く人類の善良なる敎師先生たらんことを欲す』と。此の如き事業、よしや成功せざりしとするも、抑〻エネルギーの非凡なる者に非ずむば到底企て及ぶべき所にあらざるを見るべきなり。

以上の二人者はもとより第一流の文人を以て擬すべき者に非すと雖、其小說其論文は露西亞文學史上に於て優に不朽の價値を有する者なり。バクーニンに至ては全く之と其性質を異にせり。彼は操觚の士にあらず。其筆にする所の小論文多々之なきに非ずと雖、其任ずる所もと茲に非ず。故を以て又甚だ見るに足るべきなし。彼は蓋し辯舌の士なり。遊說者なり。戰鬪者なり。

其三　ミハイル、バクーニン

バクーニンの家

バクーニンの名は彼得大帝が波斯より裂きしバクーの地名より起り、露の名門なり。彼ミハイル、アレキサンドロキッチと云ひ、一八一四年を以てツウェル縣なるトルショックに生れぬ。莫斯科及びキャフタなる茶商の子なり。彼兄弟多く、其中皇后の侍醫となれるものあり、又文人となれるものあり。姉妹の一人は詩人に嫁せりと云ふ。彼少時彼得堡の砲兵學校に入り、一八三二年、年十九の時、業を卒へて砲兵少尉となり、波蘭に駐在しぬ。

スタンキエヰツチの門に入る

此より先波蘭已に數回の分割を經て露の領地に屬し、其虐政を被ると甚し。バクーニン親しく其狀を目擊して慨然として嘆息し、遂に在職二年にして辭し、他日大に爲すあるを欲してモスコーに歸り、スタンキエヰッチの門に入て大にヘーゲルの哲學を研め、已に既に衆中に其頭角を顯し、彼の師又彼が思索の力に富めるを認めたり。彼は此處にてヘーゲルの論理を充分に理解し、一八三九年、師の塾解散するに及び、

西歐に赴く

四一年、尙は獨逸哲學の蘊奧を究めんとて伯林に遊びしが、地のヘーゲル學派振はざりければ翌年去てドレスデンに至り、ヘーゲル在黨の饒將アルノルド、ル

彼佛國を逐はる

ーゲと交り、又獨逸語を學びて、後ルーゲの發行にかゝる『ドイッチエ、ヤールビュッヘル』雜誌に執筆し、二十九のとき同誌二四七號より二五一號にわたる分にユーレス、エリッアルドなる匿名を以て『獨逸に於ける反動』と題する長論文を掲げ、早くも已れが革命意見を吐露しぬ。　翌年又巴里に遊ぶ。　此時に當り佛國は歐州大陸中社會的運動最も盛にして一八二〇年代に於てはサン、シモンの學說大に世に擴布せられ、之と時を同じうしてフーリエーあり、ルイ、ブランあり、カベーの『イカリー航海記』は一八三九年を以て出で、有名なるプルードンの『財產とは何ぞや』は翌四〇年を以て出版され、一代の風潮は全く社會主義の靡かす所となりけるが、彼は巴里にて過激の言論をなすを以て知られたる『改革』新聞の主筆リベーロル、ジョルジ、サン及びプルードン等と交り、一八四三年、瑞西チウリヒにあり、獨逸語を以て共產主義の雜誌を發刊し、爲に露政府の召喚する所となりたれども聽かずして西歐の社會的運動に加はれり。

一八四七年十一月二十九日(陽曆)巴里に於て波蘭革命の紀念祭を行ふや、バクーニンは其祝賀會に臨みて波蘭人に同情を寄する演說を試み、爲に時の佛相ギゾーの爲めに佛國を放逐せられ、ギゾーは代議院に於て之を說明してこれ彼が露帝を以て盜賊及人殺しと號したるが故なりと公言せり。　同時に露政府又一万ループルの賞金をかけて彼を求めぬ。　是に於てバクーニンは當時巴里に滯在しつゝありけるニコライ、ツルゲネフの助によりブリュッセルに走り、將軍スクリネッキーの輔助を以て翌春二月革命の後又巴里に歸り、ザクセン出身の音樂師の宅に寓して勞働者の示威運動に努力したりしが、幾もなく佛の名士フロョンの勸めに從ひ、通行劵と旅費とを得て伯林に至り、六月プラーグに開かれしスラーヴ統一主義(露國國粹黨)の大會に出席し、此主義に基きて一の宣言書を公にし、シレシヤが當然墺太利より分離して露國の領有すべきものたるとを述べ、一揆と共にキンディッシュグラッツの兵と戰ひ、翌四九年暴動のドレスデンに起るや、又之に赴き忽にして前年唱道せるスラーヴ統一主義を棄てゝ日耳曼統一主義に轉じ、自ら所謂準備政府委員なる者となりて五月六日(陽曆)より九日に至るまで普露西及ザクセンの兵に反抗し、市民を煽動してあらゆる政府所屬の建築物を燒き拂ふべきの命を發したるが、十月終にヘムニッツに捕へられ、キユーニヒスタインに禁錮せられ、軍法會議によ

スラーヴ統一主義を採る

日耳曼統一主義に移る

彼の刑

りて死刑の宣告を受け、墺太利の手に引き渡さるゝに及びてオルミユッツにて新に絞罪を宣せられ非常の虐待を蒙りしが、既にして露政府の求むる所となり、刑を寬められてシユリユスセルブルグの獄に繫がるゝこと八年、ニコラス一世命じて彼をして自叙傳を草せしめ玉ひ、これより彼は殊に特別の恩遇を被り、食事は常に典獄と同じ食卓にてなすことゝせられ、外字新聞の閱讀を許され、其上彼の室にはつれ〴〵の慰みにとてピヤノさへ備へつけられたりしと云ふ。

脫走す

一八五五年、アレキサンドル二世の踐祚するに及び、バクーニンは其身の束縛を解きツウエル州に閑居せしめられんことを請ひしに、帝はかゝる危險なる大革命黨員は永く之を國內に止む可らずとして翌年西比利亞に放逐し、彼は由て政府の監視の下にオムスク縣廳の廳吏となりぬ。有名なる時の東部西比利亞總督ムラヴイエフは彼と血緣ある者なり。公言して曰、吾人は須く彼をして全く自由ならしめざる可らず、然らざれば助けて彼を逃亡せしめざるべからずと。されば彼は總督の權威を負ひて一身極めて自由なることを得て、嘗て遠征軍の黑龍江を下らんとするや、彼は視察を名として之に加はり、一行のニコライエヴスクに着するに及び、脫して日本に至り、更にサンフランシスコに上陸し、一八六一年末を以て遂に倫敦に着しぬ。

倫敦に於ける運動

これより彼は此地にありてヘルツエンと事業を共にし、翌年二月『コロコル』(鐘)新聞の附錄として『露西亞、波蘭及全スラーヴ族の同胞に告ぐ』と題する一冊子を發刊し、大にスラーヴ統一主義を主張し、全スラーヴ族の自由の爲に戰ひ、ピオトル大帝の國を破壞せんことを述べて曰、我露國たるもの須く卒先憲法を制定して以て歷史上に一新原理を加へ、新文明を作り、新宗敎、新權利、新生活を導くべし。而して之が爲には全く西歐在來の文物を否認し、吾人スラーヴ族の同胞をして獨逸、土耳古等異人種の羈絆より脫せしめ、ツアールを君主として一の尨然たる大帝國を建設せざるべからずと。此年又倫敦に於て其著す所の『ロマノフかプガチエフか將たペステルか』を出版して云ふ、假に第二のペステルにして今日に現れ出でたりと想像せよ。吾人はロマノフ、プガチエフ及びペステルの何れに向て追隨せんと欲するか。吾人をしてあからさまに白狀せしめよ。若しロマノフにして彼得堡の皇帝たらずして人民のツアールとなることを敢てし得べしとせば吾人は元より進でロマノフの麾下に屬する者なりと。

極端なる無政府黨となる

翌六三年波蘭に於て反亂あるや、彼は之に助力せんとて波蘭の同志と共に小舟に乘じてリツアニヤに赴かんとて果さず。由て瑞典のマルモに上陸し、瑞典人を煽動して露西亞と戰端を開かしめ、由て以てバルチック諸州を蜂起せしめんと計りたりしかども之れ又成功せざりければ、彼は遂に丁抹を過ぎて再び巴里に至り、六五年轉じて伊太利に至れり。バクーニンの從來に於ける行動は元より過激の名を價せざるに非ざりしと雖、彼は此頃よりして一變して尙ほ極端なる無政府主義者となれり。

彼の勢力西歐各國に蔓る

彼はそれより專ら瑞西を本部として國際黨中に運動し、殊にマルクスの勢力に抗して其無政府論を鼓吹せり。事寧ろ無政府黨の歷史に關連して言ふを適當なりと信ずるが故に、吾人は之を後編に讓りて此處には盡く之を省く。

之よりバクーニンの說瑞西を根據地として西班牙、伊太利等專らラテン種族の地に蔓延し、其機關紙の刊行せられたるもの殆と其數を知らざりき。蓋し伊太利にては大工業なるもののなく、從て之に從事する勞働者の數も亦多からずして、農民の如きも寧ろ彼等の境遇に滿足しつゝあるの傾ありければ、此國にありては假令一種の勞働問題ありとしても、そは皆政治上に關係する者なりき。さればバクーニンは容易に己が無政府的集產的の思想を全國に播布するとを得ぬ。伊太利の勞働界に三つの團体あり。バクーニン派、マツチニ派及ガリバルヂー派是なり。彼等は多少其主義目的を異にし、マツチニの派はバクーニンの派の如くに多くを望まざりき。彼等は人權の神聖なるとを認め、代議政体及貿易、言論等の自由を享受すれば既に足れりとなす者なりき。彼等は神を有せざる社會を考ふると能はざりしなり。ガリバルヂーの派は之に反して其無神主義、唯物主義、及宇宙主義等に於て全く見をバクーニン派と同じうしたりしも、財產問題に關しては彼等は極端なる共產主義を唱へて後者に反對したりき。一八七二年三月十日、マツチニ、ピサに於て病歿するに及びて其殘黨はガリバルヂーの派と和解し、十一月廿一日を以て一の宣言書を發表し、前述の主張の外に尙ほ財產私有及あらゆる特權に反對し、勞働を以て財產唯一の起源と認定すべき旨を公言せり。されどバクーニン派は此中頗る其說を異にする所ありければ此月羅馬に於て開かれし伊太利民權主義勞働者大會が議決せし條々を否認したり。

今や彼の勢力は西、佛、伊の三國に於て非常なる者なりき。一八七三年、ジュネヴアに於て彼の主義の新聞『進め』創刊せられ、此年又彼の著『國家主義及無政府』露語にて出版せられぬ。一八七六年七月一日、彼肥滿病にかゝりて心臓の痲痺を來し終にベルンの客舎に於て瞑目しぬ。晩年夫人露國より來て彼と共棲せり。彼の西比利亞にありしや、又二万ルーブルを有する一波蘭婦人と結婚したりしと云ふ。彼著書小册子頗る多し。然れども其中見るに足るべきは一八六二年佛語にてライプチヒに刊行せられたる『露西亞及波蘭の同胞に告ぐ』と云へる一篇と、一八七四年ジュネヴア出版の獨逸文著書『國際黨の史的發展』の二つに過ぎずと云ふ。

バクーニンの著はす所はすべて左の如し。（一）『獨乙に於ける反動』、一八四二年、ライプチッヒ、（二）『シエリングと天啓』、一八四二年、ライプチッヒ（三）一八四四年雜誌『進め』よ載せし諸論文（四）『露西亞の實狀』、一八四七年、マンハイム（五）『ロマノフかプガチエフか將たペステル』か（露西亞文）一八六二年、ロンドン（六）『今日の危機に付て一佛人に與ふるの書』、一八七〇年、ジュネーヴ（七）『クヌート日耳曼帝國』一八七一年、同所（八）『マジニの政治的神學』、同（九）『國家と無政府』（露文）一八七三年、チウリヒ（十）『國際同胞同盟』、一八七四年、ブラウンシユワイヒ（十一）第九の佛譯、一八七四年、チウリヒ（十二）『巴里の團体』、一八七八年、ジエ子ヴア、（十三）『神及國家』、一八八二年、同所、（十四）『聯合主義、社會主義、及非神學主義』、一八九五年、巴里、（十五）一八九五年、スッツトガルト出版ドラゴマノフ編述の『バクーニンの社會的書翰』此外なほ數多ありと云ふ（アドレルの『無政府主義』よよる）。

バクーニンの無神論

一言にしてバクーニンの革命意見を概括せんか、一に集産主義（財本國有主義）なり。二に無神論なり。三に無政府論なり。其集産主義に關しては吾人之を後編に於て見んと欲す。其無神論に付ては彼其『非神學主義』中に述べて曰、神の存在を云ふ、其中既に道理及び人類正義の消滅を包含せり。ろは人間自由の否定なり。これ必や理論上よりのみならず、實際上よりも彼等をして奴隷に陥らしむる者なり。曰、實際に於て分析され而して經驗によりて確められたりし者の外、即最も嚴密なる批評によりて確定せられたりし者の外には、吾人は何物と雖も全く之を承認すると能はず。曰、自然なるあらゆる者は論理的なり。論理的なるあらゆる者は實現せらる。否必や此現實世界の中に實現せられざる可らず。適當に之を云へば自然の發展中に即人間社會自然の歴史中に必や實現せられざるべからざるなり。曰、人類は森羅萬衆と共に唯一の存在を形成す。即純粹なる物質的原因によれる物質的産物たるに過ぎざるに、何故に反對せる二世界の存在、即靈的及物的、神的及

自然的なる二元論の成立し得べき理あらんやと。彼が神の存在を否認し、實驗主義唯物主義を懷抱する所以の者見るべし。蓋しバクーニンの此激烈なる唯物論の如き、獨逸當代の思潮に影響せられたる尠からざりしなり。

バクーニンの無政府論に付ては上來陳べ來れる所によりて略〻之を想見するを得べし。而して彼は之を實行する所以に付て革命黨の義務ある者を掲げ、其己に對する義務、同志に對する義務、社會に對する義務、人民に對する義務を論じて曰、革命黨員は己に誓言をなしたるの人なり。彼等は一個人の利害や、事故や、感情や、財産をば只此革命なる唯一の利害、唯一の考慮唯一の情念の爲に一切之を放擲せざるべからず。破壞は彼等が唯一の目的なり、唯一の學問なり。故に彼等は之によりて先づ機械學、物理學、化學及時としては醫學を研究し、又同一の目的の下に人其性質、位置、及社會機關のあらゆる組織事情を仔細に觀察せざるべからず。實際世間の道德は彼等の大に非難し、嫌忌すべき所の者なり。彼等に向てはあらゆる革命に助力する者は道德的にして、之れを妨ぐる者は罪惡なり、不道德なり。彼等と社會との間には不斷にして殆んど和すべからざる決死の戰鬪あり。彼等たる者須く死を決して艱苦辛酸を忍び、手づからすべて革命を妨ぐるの輩を殺し、之を除くの覺悟なかるべからず。若し夫れ父母、妻子、朋友の愛情に纏綿して己の義務を懈るが如きことあらんか、彼等や決して之を眞正なる革命男兒と云ふを得ざるなり。彼等は又此目的を持して僞の生活を社會衆庶の間に營まざるべからず。即上流社會となく、商人社會となく、僧侶、官吏、軍人、文人、探偵となく、能く其間に入りて之を探り、又進んで宮室内に潛入し、盛に運動せざるべからず。新黨員の加盟の如きは全員の一致を經、なほ其言語動作をたしかめたる後に非らざれば輕々しく之を許す可らず。又各員は己が配下に第二流、第三流の同志を隷屬し、彼等を目するに運動に於ける有力なる資本の一部分を以てして之を行使する、頗る愼重の態度を以てすべし。最も珍重すべきは我黨の綱領を隨喜渇仰する所の女員になり。彼等の力を添ふることなくむば我等は遂に何事をもなすこと能はざるべしと。即此の如くにして革命黨の骨肉相別るゝの苦痛を忍び、一に破壞の目的をのみ追求すべきことを述べて曰、人民をして全く自由に且つ幸福ならしむるは實に吾人の義務なり。而して之に到らんが爲には出來るだけ彼等の不幸を大にし、速に彼等をして暴動

を起さしむる樣力を竭すを以て捷徑とす。故に我黨は先づ國家制度の敵と相結ぶに至らんことを努めざる可らずと。又曰、革命の活動より外に何等の活動をも許すこと勿れ。例へば毒、劍、陰謀等是なり。吾人は此活動の取るべき形式は頗る種類多きことを公言す。即ジェスイット流の見地を擴張して更に其極端に之を實行せんとし、又學生を煽動して曰、今や露國の人民はアレキシス帝の時代に於けると同樣なる境遇にあり。今日の青年たる者、哥薩克の隊長ステンカ、ラジンをして彼の當時に奮起せしめたるに傚ひ、須く團結蜂起して現政府に反抗し、眞の自由を得んことを期せざるべからず。而して之が爲には先づ大學を去りて民間に入らざるべからずと。而し之を要するにバクーニンの求むる所は一に完全なる自由及び平等にあり。而して彼は一切を否認し、一切を破壞することによりて之に到達せんことを努めたり。之れ即混沌たる無形物を搆成せんことを期するもの、自由や平等の獲らるべきに非ざるは元より智者を俟て後知らざるなり。彼はプルードンを評して、其立脚地を實在の確乎たる基礎の上に求めんとして而も依然たる理想論者、形而上論者に止り

彼のプルードン及マルクスを評するの言

所謂經濟上の事實に達するを目的としつゝ、法の抽象的方面より出發したる者なりと云ひ、又マルクスに付ては、彼が古往人類社會の歷史に據り、經濟事情が實に政治上及法制上の事情に先立つ者なる所以を明證したることを述べて、此眞理の發見及證明はマルクスの最も大なる功勞の一たるを失はざる者なりと激賞せるに、夫子自身は只單純なる破壞の戰士として何等積極的に考案せる所のものなく、寂滅主義者たり、將たプルードンに一歩を進めたる理想家たるに止れるは抑も奇しむべきの至りと云ふべし。彼學問深からず。故を以て往々にして笑ふべきの言あり。例へばミルを稱して唯心論者なりとせるが如き會ゝ彼の無識を表明せり。

進化論

又ダーヰンの説を信じ、以爲、人間は動物より起れる者なり。只進化發展する、漸時其動物性（アニマリテート）を脱却して人道（フマニテート）に近づくに至れるのみ。動物性は其出發点にして人道は寧ろ歸着點なり。原人の猿と異る所、二つあり。一は思考の能力なり。一は他の人に背反するの能力なり。故にすべて人性には三つの要素あり。一、動物性、二、思考、三、背反之なり。第一者によりて社會及個人の經濟起り、第二者によりて科學起り、第三者によりて自由なる者初めて起ると。而して之より以上、又多く説明を

加ふるあるなし。之を要するに彼の一生は實に彼自身の白狀せるが如く、斷片的なり。或はスラーヴ統一主義を採り、或は日耳曼統一主義となり、國際黨となり、遂に有名なる同盟を組織するに至る、其一生を通觀するに彼の行動は彼の著作の片々、體系をなさゞると等しく、混然たる政府反擊の連續に過ぎず。彼は蓋し一の恐るべき革命家にてありき。

第三章　革命運動の歷史

其一　革命文學の時期

露國に文學あるは殆んと十九世紀となりてよりの事なり。歷山一世此世紀の初

ニコライ一世時代

めに出で、ジャコビン黨人たる佛蘭西のラアルプを招聘して之に師事し、頗る寛大ある政を布き、嘗て追放人プシュキン(一七九九―一八三七)を召し還しける時、問ふて曰、去る十二月十四日の變(一八二五年に於けるデカブリステンの暴動を指して云ふ)に際し、卿若し首都にあらば果して如何なる態度を採るか、願くは包まず之を語れと。詩人聲に應じて答へて曰、然り、陛下よ、臣はたしかに彼等の陰謀に加はるべかりしと。此の如き卒直は寧ろ帝の喜ぶ所なりければ、彼が治世の初二十年間は奈破翁に對する脱縛戰爭の一方に於て之あると共に、思想界も稍ゝ、自由あることを得て、プシュキンの如きも極めて理想に滿ちたる詩をものして、當時既に未來の希望に富めるを謠ひたりき。殊に一八一五年佛國に赴きし遠征軍の士官等は西歐自由の習俗を見て之が影響を蒙りしこと尠からず。此年以來アルサマッスと稱する文學會の創立せらるゝあり。英文學としてはバイロンやスコット、獨逸文學としてはハイネ、クライストやキュルネル既に入り來り、外國文學の感化漸くにして盛なりき。ニコライ一世に至ては即位匆々デカブリステンの大壓抑を行ひ、最も政治的文學を束縛して所謂『鐵ツアール』の聲名萬民を畏服せしめつゝありしが、彼は殊

ロマンチシズム

にプシュキンやゴーゴルの如き文豪を保護して之に對する撿閲を寛ならしめ、有名なる『レヴィゾル』の如きは一時撿閲官の否認する所となりたるにも拘らず、帝は命じて之を刊行せしめ玉へり。然れども彼の敢爲なる專制政治は遂に大なる反動を喚起し來り、グリボエェドフは『理解は不幸の基』てふ小說を書きて露國文化の基礎に大打擊を加へ、決鬪して斃れたる年少詩人レルモントフは國民一般を支配する失望を歌ひ、路傍に倒れ死したるゴーゴルは數多の諷刺小說を草して社會の病患を披瀝し、世は正にロマンチシズムの文學の風靡する所とはなりぬ。

シェリングの哲學

革命文學の時期は之を三つに分つことを得へし。ロマンチシズムの文學は先づ露國の思想界に大影響を及ぼし、續てシェリング及ヘーゲルの唯心哲學の入るあり。五十年代に至りて西歐各國殊に獨逸の唯物論滔々として露國の全社會に瀰漫したり。此等の外國思潮の先づ浸染する所は實に莫斯科なりき。其地大學の學生及教授はシェリングの哲學の神秘的想像的にして奇想溢るゝが如くなるに心奪れて彼の自然哲學積極哲學を究め、相率て種々なる妄想に耽り、文人ピートル、チャダイコフ及びニコライ、ナデイエジン等皆シェリングを崇信して之が感化を受けたり。

ヘーゲルの哲學及スタンキエキッチの學塾

既にしてヘーゲルの幽玄なる哲學あり。前者の欠を補ふに其論理的基礎を以てしければ、三十年代に及び忽にして一世の趨歸する所とはなりぬ。此時に當りて莫斯科にスタンキエキッチと稱する一富豪少年あり。彼身體病弱、元より非常の材幹を有せる人に非ずと雖、頗る妄想に富み、殊に獨逸の哲學に通曉し、且つ氣品の高雅なる、優に多數青年を牽引するに足りければ、彼は自宅に有志を會して共に形而上の事を談じ、己の記臆する所によりて會衆を導き、親切と眞摯とを以て大に其周圍を感化したり。彼不幸夭折すと雖、其播布する所の種子は學生の間に蕃殖し、彼等は盡くヘーゲルの深邃靈妙なる卓論に心醉し、其大學の講堂にあるの時、又杖を曳てソコルニキの公園を散歩しつゝあるの時、殆んと抱腹すべきまでに、すべての事物に向つて觀念論的說明を加へんとを試み、森羅萬象の後ろに潛める物其物を探し出さんとて互に相論爭したり。スタンキエキッチの門多士濟々たり。其中國粹黨の士あり。又西歐黨の士あり。皆露國思想界の先導者として其牛耳を握りたるものなり。例へば史家としてグラノヴスキーあり、講壇に倚りて自由主義を皷吹し、批評家としては露國のマーラーと稱せらるゝビエリンスキーありて文學從來の弊竇を抗擊し、國粹黨の巨魁として有名なるイワン及びコンスタンチン、アクサコフ兄弟、並にカトコフあり。虛無主義の皷吹者としてバクーニン。ヘルツエン及びオガレフあり。而してスタンキエキッチ及びビエリンスキーはヘーゲル右黨を、ヘルツエン及びオガレフはヘーゲル左黨を代表したり。されどニコライ帝はすべて哲學を初めとして此種の抽象的の思想に向て反情を抱きつゝありければ、大學敎授の講義に至るまでも一々之に干涉を及ぼし、グラノヴスキーの如き、爲に佛國革命及び宗敎改革を講ずるを禁ぜられたりしと云ふ。

ゴーゴルの『死人』

ツルゲ子フの『獵人日誌』

此時に當りて露國下層社會即、農民と地主との關係を描出して其悲酸なる實況を發き、大に政府の注意を喚起せし小說二つあり。一はゴーゴル(一八〇九―一八五二)の『死人』にして一はツルゲネフ(一八一八―一八八三)の『獵人日誌』なり。前者は一八四五年を以て世に現れしものにして、貪婪なるチヽコフなる奴隸買ひを其主人公として農民の言ふべからざる窮境を活寫し、一人の農奴を二コペークの廉價もて買ひ求むるが如きの記事あり。其滑稽の筆路中に於て人生最も酸鼻すべきとを寫し出せり。後者は『死人』に後るゝと二年にして出づ。二十余の日誌より成り

西歐の社會主義入り來る

ペトラシエヴスキー事件

主として中央露西亞に於ける農民の氣質風習を寫し、其境遇の痛むべく悲むべきを記せり。或人の之を以て『アンクル、トムス、ケビン』に比したる、蓋し故なきにあらず。之と時を同じうしてヘルッエンの社會小說『誰が罪』出で、詩人ネクラソフ(一八二二—一八七七)は又其巧妙なる叙情詩をものして大に奴隷廢止論を皷吹したり。文學的運動の一方に於て此の如く盛なると共に、一方に於てはサン、シモンやフーリエー。オーウエン等の社會主義に起りたる革命思想は、啻に學生のみに止まらずして官吏及軍人界にまでも蔓延し、此中密に相會して研究せるもの尠からざりけるが、ニコライ帝は嚴重なる探偵を行ひて、一八四九年四月、ミハイル、ペトラシエヴスキー等三十三人の青年を首都に捕へ、殊に九月末より十一月十六日に至る四十六日間、侍從武官ナボコフ將軍を裁判長とし、ガレッィン公を副裁判長とせる軍法會議に於て之が公判を開かしめぬ。蓋し此等の被告は每金曜夜ペトラシェヴスキーの宅に一の文學會を開き、外國より禁書を輸入回覽し、殊にプルードンを批評研究しつゝありしものなるが、判士は彼等を以て無政府主義を抱き、皇帝の政府を破壞せんとを企てつゝあるものなりと宣言して、主導者ペトラシェヴスキーを初め八人の官吏、二人の宮內官吏、四人の近衞士官、二人の文人、二人の學生、一人の語學敎師、及一人の平民を銃殺の刑に處すべきを決し、此等の二十一人は一八五〇年一月の初め、セメノウに引致せられ、白衣を被り、十字架に接吻し、一切の準備已に整ひて正に刑の執行に遇はんとしつゝありしが、俄にして皇帝の命により特に減刑の寬典にあづかり、十人は鑛山懲役に、二人は尋常の懲役に、八人は兵役に、二人は禁錮に處せられたり。後の有名なる文人ドストユェウスキー、工兵中尉にして此密會に加はる。彼又當時ペトラシェヴスキーと共に西比利亞に懲役を命ぜられたる一人なり。

ニコライの壓制政略

此の如きの刑は此種の罪に對する者としては元より重きに失する者なり。ニコライ帝は之より益〻壓制主義を實行し、通券を五〇〇ルーブルに高めて容易に旅行するを得ざらしめ、外國の大學に入るとを抑制し、帝國大學に入るべき學生の數を三百名に限り、哲學の敎授を嚴禁し、新聞雜誌の撿閱を嚴にし、自由と云へる文字を用ゆるとすら禁止せられたり。されば曾て戲に『虐政家』と命名せる愛犬を失へる人ありけるに、此人新聞に其探索を廣告せんとするに、革命的なる犬の名を掲示

すると能はざりければ、止むを得ずしてフィドーなる假の名を用ゐたる程なりしと云ふ。

ニコライ帝は其治世の晩年に及びてスラーヴ統一主義の政略を實行し、版圖を地中海の方面に擴張せんとして却て英佛兩國の妨ぐる所となり、由て端なくもクリミャの大戰を釀し、其局を結ぶに至らざるに彼は陣中に病歿して其位を子歴山二世に遜りたり。歴山二世は父と全く其性格を異にするの士なり。彼は全く先代の經路を棄てゝ新に自由主義の政を布かんとを方針とし、國內の宿弊を一掃せんとを期し、其新政の手初めとして先づ大學々生員數の制限を釋き(但し從來五〇ルーブルなりし聽講料を高めて一五八ルーブルとなせり)、外國通券を得るの途を容易にし、撿閲制度を寬ならしめ、一八五六年巴里條約成を告ぐるの後數日、侍臣に向て奴隷制度の早晩廢せられざる可らざる所以を漏し、遂に『農民事情調査委員』なるものを指命して之を攻究せしめぬ。永く鐵ツァール專制の下に苦みつゝありける露國民は俄に其身の自由なるを覺ねて欣喜雀躍せり。彼等は新帝の改革の就んと耳目を新にするを見て未來の一大幸福を心期したり。自由主義を標榜せる

一新聞紙は記して曰、吾人の心は喜悅の情を以て充されたり。そは人民の精神希望と一致しぬべき一大改革の前途に期待せらるべければなりと。又他の一新聞紙は云て曰、往古政府と我人民との間になりし感情の調和と合一とは、今や又再び茲に建設せられんとす。階級的の弊習を排したる全國一家の觀念は、露國全社會を通じて之を渾然たる一丸となすべく、歐州をして屢〻革命の血を流さしめ、而も未だ其素志を遂げしむるに至らざる大改革は、靄々たる平和の中、殊に何等の勞を費すとなくして今や正に我國に於て實現せられんとすと。

歴山二世の此新政は正に三十年の永き間、專制の暗夜に呻吟しつゝありたる露人に示すに煌々たる希望の光明を以てする者なりき。是に於てか彼等はあらゆる方面に於て自由を追ひつゝ激進したり。一八五六年の頃ひより學生の稍氣力あ者多くは獨乙の大學に遊び、それより新に二條の思潮を輸入し來れり。即一はショーペンハウエルの厭世教にして一はビュヒネル、フォイエルバッハ等の唯物論、無神論、コントの實驗哲學及ダーキン。スペンサーの進化論なり。是に於てか歴山二世の即位と共に從來獨逸超絕哲學の影響を受けつゝありたる思想界は一轉し

雜誌『現代人』及其記者
六〇年代に於ける虛無主義の皷吹者

て隆々たる唯物主義の下に風靡せらるゝには至りぬ。同時に出版事業盛になりて從て新聞雜誌の自由主義者の機關として發行せらるゝ者多く、此等は皆無神論を唱へ、一般に陰鬱なる厭世的の風調を帶びたり。其革命文學第三期に於ける運動の卒先者として出でたる者は雜誌『現代人』なり。こは實に有名なる詩人ネクラソフの創刊する所、彼執へらるゝに及び、チエルヌイシエヴスキー及薄命詩人ドブロルユボフ(一八三六—一八六一)並に其主筆記者として椽大の筆を振ひ、前者は小說『如何にせん』を草し、後者は嚴格なる論理的批評家として『嘯聲』を著し、其銳利なる諷刺を逞うして以て一代を聳動したり。同時に自然派の小說家ピスセムスキー(一八二〇—一八八二)あり。ツルゲネフの『親子』に傚ひて小說『荒海』を作り、以爲、後世史家、若し此書を讀まば、今日の時代の此中に活寫せられつゝあるを發見せんと。彼は露の社會を混沌たる濁海に比し其水面は不淨の塵埃汚穢物もて被はれ、雜多なる思想は全く混乱し、利己主義獨り其中に在て秀卓せりとて虛無主義者たる一靑年バクラノフを描き出しぬ。バクラノフは耐久の精神に欠乏し、總て眞面目なる事業に從事する能ざる者、故に其事に衝るや一度困難に遭遇すれば忽にして去

自修俱樂部

て他に轉じ、曾て何事の成功したるあるなく、只一意無爲にして愉快なる生活を送らんとを以て其目的とはなせし者なり。彼の外、消極的虛無主義者の好摸型たるべき者は實にドミトリ、イワノキッチ、ピスサレフ(一八四〇—一八六八)なり。彼は人生の暗黑面のみを觀じ、一切を批評して何事も定むるなからんとを望み、ザイツエフ等と共に『露語』と題する苛激なる新聞を發行し、大に虛無主義を皷吹して六十年代の靑年に一大感化を及ぼしたり。彼は寧ろ個人主義的自由黨なりき。當時に於ける社會黨は專ら農民の利害を代表し、主として三つの思想によりて動かされたり。一に曰、身躰の自由を與ふること、二に曰、土地を彼等に分配すること、三に曰、共有財産を保持すると之なり。彼等は歷山皇帝の自由主義的政治の下に俄に公然たる運動を試むるに至り、一八六〇年代の初めに當りて『自修俱樂部』なるもの彼得堡及莫斯科に於て設置せられ、主として地の大學生殊に醫科大學及びペトロフの農學校生を以て成り、漸時蔓延して宗教學校及中學校に及び、終にはサラトフ、ペンザ及びカザン等にも其勢力を擴張するに至りたり。彼等の最初の目的は純乎たる學術上のものにして只金を集めて貧學生に給し、又書籍を購求するを

農奴解放學生の騷擾

革命主義者動く

其主なる事業となしけるが、六一年二月十九日、有名なる農奴解放の大地主貴族が叢々たる不賛成の裡に實行せられたりしに及び、事萬民の預期せしが如くならざりけるより、百姓一揆や學生の暴動は頻々として起り、由て此夏に於て文相は令を發して學生の會合及び圖書館を閉ざし、月謝を高めて大學に入り來る者を制限するに至りたれども、各地大學の不穩は益々其反抗の度を高め、學生の縛に就く者多く、ミハイル、ミハイロフ之が煽動者として六年間西比利亞の懲役を命ぜられたり。されど自由主義者の運動はなほ之に止まらずして、士官より成立せる一の秘密團体は社會主義的と云ふよりも寧ろ立憲的の目的を持し、參謀本部の建築物中に一の秘密出版所を設け、大膽にも雜誌『大露西亞』を出版し、一八六一年八月より十一月に至るまでに三號を發刊し、其第三號に於て彼等が希望を陳べて曰、從來農民の用ゐ來りし土地は別に代價を拂ふことなくして之を彼等に分配すべし。財務、司法、警察諸官署に於ける宿弊を一掃すべし。立憲の議會を召集すべし。波蘭人を獨立せしむべしと。此冬莫斯科、スモレンスク、ツウエル等の貴族相集り、農奴の解放によりて膨脹したる政府の權力を制限せんとて憲法制定の必要を決議し、之を請願したり。此の如く六十年代の初めよりして此かた、革命文學の進運につれて一般に社會黨及び立憲黨の運動漸く活潑になり來り、一八六二年の四月に於ては中央革命委員なるもの檄文を全國の青年に發して、ヘルツエンのコロコル新聞の如き、ツアールに向て希望をおくが如き者は最早我黨の輿論となすに足らず。吾人は須く血を以てロマノフ家の黨與に迫る所なかるべからずと極論したり。翌月莫斯科に大火あり。諸の官廳類燒の禍に罹れるもの尠からざりければ、彼等は機乘ずべしとして盛に此檄文を播布しぬ。是に於て政府は斷然革命黨の機關たる碁會所、讀書會を禁じ、日曜學校を閉ぢ、雜誌『現代人』を初めとし其他政府反對を標榜する二三新聞の發行を停止し、大に出版の自由を抑制し、チエルネシエヴスキー等數多の同志を捕縛しぬ。

革命黨に對する反動

ミハイル、カトコフ

此時に當り莫斯科大學の敎授にして新聞『露西亞の使者』及『莫斯科新聞』の有力なる記者たるミハイル、カトコフ(一八二〇—一八八七)なる者あり。彼はもと自由主義者にして頻に進歩、自治制、地方分權及非虐政等の語を唱道し來りし者なるが、中頃にして彼の同志ヘルツエンを以て、オガレフ、バクーニン等と共に激論を以て世の

自由主義者を眩惑せしむる者ありとなし、一轉して反動主義を唱へ、大に其國粹論を鼓吹し、時の大勢に對抗したり。革命黨の一時其勢力を失ひたりしは蓋し彼が偉なる筆力與て多きに居れり。是に於てか此猛烈なる國粹的反動と政府の威嚇との爲に一時屏息したりし秘密結社は、黨の分立を以て大に其勢力を減殺する所以のものなりとして共に合同し、一八六三年三月三日『國民に必要なる者は何ぞ』と云へる一篇の飛檄を發して、土地と自由とを希望する者あるとを示し、機關として『自由』を發刊せり。彼得堡に於ける運動此の如くなるに、カザンにても之と同時に主に學生及士官を以て成れる支部の一團体設置せられしが、事洩れて捕へらるゝ者多く、就中其五人は死刑に、四人は十五年の懲役に處分せられたり。此年波蘭に大反亂あり。バクーニン義勇兵を募り之を助けんとして遂げず。ヘルッエン又其同志に强ゐられ、其草する所を『コロコル』に載せて反徒に同情を表し、首都の大學生は遙に示威運動を行ひ、其革命黨も亦波蘭に駐在せる士官官吏の同志と氣脈を通じて之を援けしかども、終に鎮壓せられぬ。蓋し斯の如く速に此反亂を平定するとを得たりし所以の者は元より政府が果敢なる打撃に原因する者なるべしと雖、亦實に其亂因を英佛諸國の煽動に歸して、大に國民の愛國心を喚起したるカトコフの筆に負ふ所大なりと云はざるべからざるなり。

其二　遊説煽動の時期

(一)　一八六三—一八七一

波蘭の反乱よりネッチャエフの陰謀に至る

波蘭の暴壓と反動主義の勢焔とは革命黨の氣勢をして頓に挫折せしめたり。故を以て此時代にありては比較的平靜にして甚だ見るべきの變事なし。然れども六十年代の初年に於ける秘密結社の殘黨にして徃々にして陰に相團結しつゝあるものなきには非ざりき。例せば一八六五年を以て莫斯科に成れる一團はクルショック又はアド倶樂部と稱してイシュチンを中心とし、ユエルマロフ、ユラッソフ、ニコラユエフ、ストランデン等盡く學生を以て成り、就中フデコフ(一八四二年を以て生れ一八七六年西比利亞に死しぬ)と稱する病的熱狂者の如き力を竭して黨勢を擴張し、其黨をして彼得堡に於ける革命黨と通せしめ、尙は進んで西歐の『國際黨(インターナチョナーレ)』と結合せしめんとまで計畫し、ユエルマロフは己の資産を擲ちて遊説の機關たる

國民學校及勞働者組合等を建設せんとしたり。彼等以爲、吾人の生命はツァールを以て之を見る、殆んと何等の價値なき者の如し。ツァールの生命吾人に於て又何かあらんや。吾人は須く彼を倒し、新政を興起せざる可らずと。由て右團体の一人皇帝を弑するの目的を以て翌一八六六年春自ら首都に赴きしが事成らざりき。彼名をドミトリ、ウラヂミル、カラコゾフと謂ひて貴族なり。一八六五年クルショックの一員となり、由て莫斯科大學より放校せられぬ。蓋し彼が過激なる革命論に鼓吹せられて密に學生を煽動するに其學校生活を廢して彼等の運動に加はらんことを以てしたればなり。六六年、團中より皇帝弑害の委員として撰定せられて彼得堡に赴きぬ。四月四日午後、帝『夏園』を逍遙し、馬車に乘じて出で來るや、彼は之を窺ひて俄に懷にせる拳銃を取り出し、狙を定めて正に馬車中の皇帝を射殺せんとしたりしが、此時遲く彼時早し、傍へにありたる拜觀者の一農夫は躍り出でしカラコゾフの腕を扼し、之を捕へ遂に彼をして其意を遂ぐること能はざらしめたり。帝大に此難を逃れたることを喜び、勅して殊に此農夫を貴族に列し、土地を賜ひ、又大に身邊を警備し、俄に最高裁判所を設け、波蘭人の虐壓者を以て有名なるムラ

ヴィエフをキルナより招ぎて之が長となし、カラコゾフをして此法衙に審問を受けしめ、九月三日スモレンスクに於て彼を絞罪に處したり。此外之に關連して拘引せられたるもの三十四人あり。各罪の輕重によりて罰せられ、其中死刑の宣告を受けたるイシュチンは帝の恩命によりて刑を輕減せられ、懲役の處分を受けたり。

吾人はこゝに序ながら露國に於ける裁判制度に付て少しく述ぶる所あらんとす。元來露國の司法制度は極めて不完全なる者にして、司法官は行政官の拘束を受くるが如きこと稀ならず。爲に弊害の及ぶ所少からざりしが、歷山二世は之に鑑みる所ありて一八六四年、大に改善を加へ、之れによりて司法權は成文的には獨立し、如何なる罪人と雖、法廷の審問を受くることなくして濫に罪の宣告を受くべからざることゝなりたり。之は蓋し歷山皇帝の六十年代に於ける改革中最も重要なる者の一たりしならん。然るに實際に於ては此改革も露國の專制と相容れざる者の如く殆んと有名無實に了りたり。何となればカラコゾフは此新法令が規定する所に依りて正式の裁判を受けたるには非ずして非常委員と稱する臨時撰定の法官

により之が吟味を受け、其判士長として非革命黨として知られたるムラヴィエフの判決を得たりければなり。總て此後に於て起りたりし國事犯事件は皆此處に裁判せらるゝこととなりて新法令の發布によりて規定せられたる裁判所は其職權の重要なる部分を褫奪せられ、假令該裁判所に於て無罪放免せられたる被告にても非常委員の命令の下には隨意に拘留禁錮せられ、又は流刑に處せらるゝが如きの有樣となり、辯護士にありてすら若し忌憚なく被告の罪を辯護するときは、何等法律の條文に觸接するが如きことなくしても、行政的に追放を命ぜらるゝこともありき。例へば一八七一年、ネッチャエフ事件の辯護士たるウルスソフ公の放逐せられたるが如し。而して是は初めは專制政府の單一なる習慣たるに止りしと雖、一八七一年五月に至りては全く一の法令となり、誰れ憚るともなく盛に適用せらるゝに至りたり。

カラコゾフの皇帝謀殺は露西亞政府をして非常なる警戒を加へしむるの動機とはなれり。此年五月二十三日、政府は勅令を發して、皇帝の寛仁なる政治が兇暴なる革命黨の爲に却て惡意を以て迎へられ、人權、財産及び宗敎等がすべて腕力を以て脅さるゝに至りたるを悲み、これより大に一度緩うせられたる言論を箝制し、政府の要所に充つるに盡く熱心なる非革命主義者を以てし、シュワロフ伯を擧げて國事警察部たる第三局の長官となし、自由主義の文相ゴローニンを斥けてトルストイ伯を拔き出で、以て大學々生の集會言論を束縛せしめ、後又シュワロフ伯を以て寛に流れたりとして之を罷め、代ゆるにポタポフを以てし、革命黨を嚴刑、峻罰せしめたり。

ネッチャエフの事業

此時に當りて西歐にマルクス及バクーニンあり。其社會主義や無政府主義を唱導して一世を風動し、又露國革命黨の逃れて彼地にある者、諸種の出版物によりて彼等の革命論を皷吹し、其勢頗る猖獗なり。露國の青年學生由て大に之が影響を被り、一八六七年に於てはチエルケソフ公を中心とせるチエルケソフ倶樂部あり。續て六九年に至りては有力なるネッチャエフ倶樂部なるものの成立しぬ。就中革命史上に於て記せざるべからざるをネッチャコフの事業なりとす。

セルギー、ネッチャエフはもと賤しき者の子なり。一八四六年を以て彼得堡に生る。十六才の時初めて讀書を學び、又莫斯科大學に入り、少壯己に階級を惡み、下民

を慾むの熱情に富みぬ。後彼得堡に至りて宗教學校の教師となりしが、一八六九年三月、其地大學の學生大に示威運動を行ふの事あるや、以爲革命運動を起すの時至れりと。此年直に西歐に赴き、バクーニン及びオガレフをジエネヴアに訪ひ、事を擧ぐるの時既に本國に於て熟せる旨を告げ、二人の紹介に依て二万五千フランの運動費を病めるヘルツエンより引き出しぬ。バクーニン即彼に委ぬるに國際無政府黨露國支部長の任を以てす。これより先一八六八年バクーニンの組織にかゝれる社會民主黨國際同盟會の八十四會員は一の檄文を發して無神論を唱へ、總べて神の禮拜を禁じ、信仰に代ゆるに學問を以てし、神の裁判に代ゆるに人間の正義を以てし、結婚を廢し、あらゆる政治上、宗教上及び司法上の制度を破壞せんことを主張して又曰、吾人はすべて科學にも、美術にも、哲學にも、法律にも何等の聖權をも認めざる者なり。吾人は人智の根抵に絕對的の懷疑論をおき、すべて精神生活と物質生活を支配する事情の間に何等の區別をも設けざる者なりと。ネツチヤエフは全くバクーニンの此極端なる無政府主義に感化せられ、六九年九月其莫斯科に歸り來るや、此主義により同志ウスペンスキーと共に學生殊に農學校の青年

『實行の主張』

を集め、散逸せる革命黨の小團体を結合し、其偉大なる組織的材能によりて之を鑒制し、己れ之が領首として少壯既に數多の先輩を麾下に致し、四十二歲の文人プレシヨフの如き又彼の幕下に屬しき。是に於てか『國民の判定』と稱する此一團体は莫斯科を中心として其勢力ヤロスラウ゜イワノヲの各村に及び、黨員皆秘密に結合して運動費を集め、活版所を設け、檄文を刋行し、通劵を僞造し、密に禁制の書籍を讀み、從來の平和的革命手段を廢して斷じて陰謀殺人の鐵血主義を採用せんことを誓ひ、一八七〇年二月十九日を期して正に大に事を擧げんとしたり。ネツチヤエフ又『實行の主張』なる一篇の宣言書を草し、彼自ら其中に述べて曰『實行なき言論には何等の價値だもなし。然れども假令實行の名を被るものと雖、其結社組織にして徒に秘密を守るの一事に止り、毫も行爲の發表せられたるものなきが如くならば此の如きは吾人を以て之を見れば就んど一塲の兒戲に過ぎず。抱腹に堪へざるなり。吾人の所謂實行とは即外界に出づる現れを指して云ふなり。即積極的に人間か事物か將た人間の自由を妨ぐるあらゆる事相關係を打破すべき行爲を指して云ふなり。我黨の士たるもの須く身命を擲ち、敢爲決死、民間に侵入し、人々に

示すに彼等自家の勢力の慢るべからざるものあることを以てし、之を覺醒し、結合し之をして大に其福祉の爲めに運動せしむべきなり』と。此處にネッチャェフの徒に學生イワノフなる者あり。擧動甚曖昧にして恰も警吏と通ぜんとするの色ありしかば、ネッチャェフは深く事の發覺を惧れ、ウスペンキープレショフ、クスネッオフ及びニコラユェフ等と謀り、一八六九年十一月二十一日、莫斯科農學校に於て遂にイワノフを殺し、己れは逃れて瑞西に至りたりしが、瑞西政府は殺人犯を以て彼を捕へて之を露西亜政府に引き渡し、彼の同志にして嫌疑の爲に拘引されたる者就んと三百に及びたりしが、其中罪ありとして公判に附せられたるは八十七人、一八七一年七月一日、各罪の宣告あり。ネッチャエフは二十年の懲役に處分せられ、彼得波羅城に禁錮せられたり。

(二)　一八七一——一八七七

七十年代初年の大遊説より露土戰爭に至る

ネッチャェフの過激なる虚無主義は其實行に現はれざる中早くも露西亜政府の打ち破る所となりたれども、革命黨の歷史は彼を中心とし、正に一轉して比較的平和

革命的諸團体の勃興

コワレック團

マリコフ團

の時代より大遊説の期に入りたり。此時代革命思想の遊説者、皷吹者として顯れたる者頗る多し。平和判官ヲイナラルスキーはヲルガ地方を遊説し、もとキエフ大學の學生にしてチェルニゴフの平和判官長たるセルギー、コワレックは又外國の社會黨と相通じて其革命的書籍を密輸入し、自ら壓制されたる人民の友、政府の敵、善及眞の輸入者、播布者と稱し、九縣を歷遊し、新に十三の團体を組織せり。されば一八七三年に於ては彼得堡にありし秘密結社のみにてもコワレック團の外にレルモントフ團、砲兵團及びオーレンブルガー等あり。此等は多少其目的及手段に付て異見を有すと雖、皆悉く社會主義、民權主義に胚胎せるものにして、互に飛檄を發して啓蒙運動の切要なることを述べ、革命の準備をなすべしと云ひ、又土地の分配、兵備及常備兵の廢滅、租税及通行制度の廢止、學校の設備、財政の整理等と唱へたり。此外著名なる者をマリコフ團とす。ゐはマリコフを中心とし、猶太人クレチユコ、アイトフ等之を助けて首都に組織せられ、博愛献身の大義により、あらゆる下層卑賤の人民を愛撫せんとすと云ひ、迷信的狂熱に驅られて運動せるものにして一種理想的社會の建設を以て之が唯一の目的となせり。一八七三年、彼等の同志

相率ゐて北亞米利加に赴き、こゝに共產的の殖民地を建造せんことを企てたりしが、又オーウエン前年の轍を覆みて幾くあらずして非常なる困難に陷り、全く失敗し、一両年にして空しく故國に歸り來れり。

自修倶樂部

自修倶樂部は六十年代より既に成立せる學生團なり。エヌ、エヌ團と云ひ、又ロウリステーとも稱す。こは極めて溫和なる主義を採れるものにして主に大學の學生より成り、學業出精の傍、農民及工民殊に都市の工民を敎化せんことを目的とす。故に大學を退學して遊說煽動すと云ふが如きことなし。然れども其行動の極めて平靜なるに拘はらず、團員が皆充分の素養を有する者なるが故に、効果の及ぶ所亦尠少ならざりき。

ドルグシン倶樂部

ドルグシン倶樂部は其名の如くドルグシンを巨魁とする者にして一八七一年を以て莫斯科に成れり。此派は激烈なる無政府主義を採る者にして實に南露西亞に於て其根底を有したり。されども其同志甚だ多からず。且理論上、腕力を主張し、革命を唱へ、之を遊說するに過ぎずして未だ之を實行するには至らざりき。一八七四年、其徒大に捕へられて勢力を失ひぬ。此外秘密政黨としてツルシャウに

『グミナ黨』あり。波蘭に『大露西亞倶樂部』あり。

チャイコウッエ團及其事業

最も廣く蔓延して最其勢力を得たりしは實に七十年代の初年に成りしチャイコウッエ團なり。學生ニコライ、チャイコウスキーを中心として成る。此人一の精神家なり。七十三年、メリコフの北米に赴くや之れと行を共にし、後倫敦に渡行し、こゝに居を定めて遂に本國の虛無黨に聲援せり。亡命客中錚々の人物なり。此團は實に純乎たる虛無黨にして自らの主張を標榜して曰、一、あらゆる國家の撲滅、二、文明の破壞、三、自由團体の輔助によりて全く聯結されし全世界自由民の組織と。彼等は秘密活版所を設けて無數の小冊子、布告文を印刷し、又マルクスの『資本論』フロレウスキーの『勞働社會』ビュヒネルの『勢力及物質』プファイフェルの『勞働團』等を密輸入して廉價に之を販賣し、又は大に民間に入りて遊說せり。而して之が爲には彼等は盡く其身を勞働者に變じ、或は小雜貨商となるあり、或は一男一女夫婦と詐りて小き商店を營むあり。織工となり、木挽となり、其他工民として諸種の工塲に入るあり。或者は萬一に具へんとて馬匹を商ひ、或者は町村の書記となり、小學敎師となり、あらゆる手段方法を盡して親しく下民と交り、無智無學の彼等に告ぐる

遊説の境域

に各自の境遇の最も悲酸なるとを以てして彼等の政府を憎惡するの情を激せしめ、之を煽動したり。此團名を知られたる者甚多し。即男員にはアクセルロード、ナタンソン、グラポトキン公、シエリヤボフ、グレメンスあり。女員にはソフィア、ペロウスカヤ、ソフィア、リユーシェルン、フォン、ヘルツフェルド及コルニロワ等あり。彼等は彼得堡及び莫斯科を其本部として出發し、先づニシニー、ノヴゴロド、ペンザ、サマラ、サラトフ等に至り、進てキエフ、パルコフ、オデスサ、タガンロッグ等をも其勢力範圍となせり。一八七三年十一月、首都に於ける政府の大窘逐によりて其有力者大概縛に遇ひ、ナタンソンは五年の追放を命ぜられ、ペロウスカヤ、クラポトキン等皆放逐されたりと雖、其勢力は尚ほ駸々として益廣がり、翌年に至りては歐羅巴露西亞の三十七縣中革命黨倶樂部の設けなき所之なきまでに至りぬ。今左に各地に於ける運動の大略を述べん。

一 彼得堡。勞働者を遊説するの機關としてスタッホヴスキー及休職砲兵大尉クラウチンスキー等は學校を、ボゴモロフは小木匠及靴工の工場を建てたり。此外士官シシュコは織工となりて市中の一工場に入り、クラポトキン公及ドミトリ、クレメンス等又密に工民を遊説しぬ。

二 莫斯科。フロレンコー、ヲイナラルスキー等の學生は小木匠の工場を、貴族ドベンスキー等は靴工場を、メシュキンは印刷工場を建てたり。

三 ノヴゴロド。一將軍の女、ソフィア、リユーシエルン、フオン、ヘルツフエルド自ら小學校を建て、農民を訓育しぬ。

四 ツウエル。此地には鍛工場建てらる。士官クラウチンスキー及ロガチエフ又木挽として勞働者の間に入れり。

五 ヤロスラウ。豪農イワンチン、ピスサレフの建設にかゝれる小木匠工場大勢力を振ふ。

六 タムボフ。小民アレッフなる者此地遊説者の代表者として兵器製造所を建つ。

七 ペンザ。休職大尉ロガチエフ及學生ヲイナラルスキー主として運動し、殊にヲイナラルスキーは此地の大地主たるエンドアロフなるものゝ宅を本部とし、其輔助によりて革命的の倶樂部を建て、中學生を集む。小民ユ

エルショフ又小木匠工場を新設す。

八　サマラ。デーテレフ、ポノマレフ等の私宅及フォミンスキーの旅宿を集會所として運動す。

九　サラトフ。マイエル、ソフィンスキー等工場を建て、女員ツェトコワの宅を武器及革命的書籍の貯藏所とす。

十　カザン。本部を學生オウチンニコフの宅におき、支部を各所に設く。

十一　ウーフア。

十二　オレンブルグ。
ゴルーシエフ倶樂部員なるもの運動す。

十三　ニシニー、ノヴゴロッド。數多の倶樂部あり、殊にパウロヲ村を以て最も盛なりとす。

十四　ヲロネッシユ。ツエベンコなる者此地に牛耳を採る。

十五　クルスク。女富豪スッボチナ首領たり。

十六　ハルコフ。有名なる遊説員コワレックこゝに三つの倶樂部を設け、獸醫學校の學生及女員アンドレユエフ等大に運動す。

十七　エカテリノスラウ。オデッサの革命黨此處に桶工場を建つ。又パウロウスキー圖書館なる者タガンロッグに設けられて革命黨の書籍蒐集せられぬ。

十八　ポルタワ。女富豪コレスニコワの勢力の下にキエフ、ハルコフの革命黨大に遊説しぬ。

十九　オデスサ。此地の主なる革命黨員をマカレキッチヲルホウスキー及シエブノフ等とす。シエブノフ鍛工場を建つ。シエリャボフ又非常に注意深き運動をなし、自ら濕りたる惡地に忍び住みて勞働者と交り、彼等を集めて會を設け、文庫を備へ、革命的の書に付て敎導し、好成績を得たり。

二十　キエフ。キエフ團なるもの先づ起り、シエブノフ數多の倶樂部を建つ。
アクセルロード又遊説し來る。

廿一　チエルニゴフ。シエブノフの努力により倶樂部、學校及工場等設置せらる。

廿二　コウノ。女富豪フィリプポワ最初の革命黨倶樂部を建つ。これに首領たる者はキエフ倶樂部の一員カタリナ、ブレシュコウスカヤなる女學生なり。

廿三　カメンユェツ、ポドルスク。女學生アレキサンドラ、オホレメンコー及男員トプチャユェウスキー等學校を建つ。

以上二十三縣の外ヘルソン。オレル。スモレンスク。カルガ。ツラ。アルハンゲルスク。コストロマ。ヴラヂミル。キアトカ。ペルム。モヒレフ。トムスク。チフリス及ドン、コサック皆虛無黨の同志を得ざるはなし。

之より先一八七三年、露國政府は令を發して其人民のチウリヒ大學に遊ぶを禁じたりしかば、此等の少壯學生は不得已して本國に歸る者多く、多くは莫斯科にありて日曜毎に勞働者を集め、彼等の革命論を鼓吹しつゝありしが、此年八月、此等の秘密運動は亦政府探偵の下に抑制せられ、翌七四年五月に至りてはサラトフに於て第三局長官シュワロフ伯の迫害始り、七月、所謂ドルグシン事件あり。革命黨員又は其嫌疑者にして拘引狀を發せられたる者七百七十八人に及び其中二百六十五人

は有罪の宣告を受けたり。一八七五年に於ては革命運動に奔走するもの大凡二千人あり。其中此年內に於て捕縛されたる者男員六一二人、女員一五八人、翌春に至るの間其西比利亞に追放せられたる者亦頗る多く、之によりて革命黨の勢一時挫かれたるが如きの觀ありき。こは一には國粹的反動の勃興したるによれり。所謂國粹黨の中にはポゴヂイン。ホミユエロフ。イワン及コンスタンチンアクサコフ兄弟の如き莫斯科の愛國者あり。彼等は多惱河畔、バルカン山脈の南北よりアドリヤチック海に至るまで全スラーヴ族の同胞を一丸とし、即セルビヤ。ブルガリヤ等の自由を得せしめ、歷世のツアールが潛心企畫したりし政略によりて鷲章旗を君士坦丁堡城に飜さんことを唯一の目的とし、遂に皇帝を動かして露土戰爭を起さしむるには至りたり。此反動の猛勢は大に反政府黨をして彼等が失敗の原因に付て鑑みる所あらしめ、彼等は之を訓練の欠乏と組織の不完全なるとに歸し、從來の運動の輕躁なりしを尤め、これより全く其方針を一變し緩漫なる遊說の效果に乏しきを棄て、更に直に人民を煽動し之を蜂起せしむるの手段を取るに至りたり。

土地自由黨興る

茲にゲオルグ、プレハノフなる者あり。彼大に己が徒黨の衰頽したるを慨嘆し、即チャイコウッェの殘員と共に一八七六年を以て一の大團体を組織し、人民を刺擊し、武器を採て政府に反抗せしめんことを之が目的としぬ。世之を稱してナロドニキ、ブンタリと謂ふ。謀叛者の謂なり。後彼等は其機關新聞たる『土地及自由』の名によりて土地自由黨と稱せられぬ。マルク、ナタンソン之が首領たり。此人運動費欠乏の困難を忍びて各地を遊說したりしが、一八七七年其捕へらるゝに及びてアレキサンドル、ミハイロフ之に代りぬ。

アレキサンドル、ミハイロフ

彼は一八五五年を以てクルスク縣のプチウルに生る。父は測量師なり。彼少時鄕里の中學にあり、七五年秋、彼得堡に赴きて其工業學校に入り、己に革命思想を抱きて自修倶樂部に加盟したりしが三月余にして鄕里に放逐せられければ、翌年キエフに至りて其地の同志と交り、革命團体のあまりに散漫にして個々分立し、毫も其組織の整然たる者なきを認めて之を改むるの志あり。此年夏、又首都に至り、ナロドニキに入る。是に於て該黨は大に宣言書を發して其綱領を明にし、下民の欠亡に乘じて之を誇大にし、戰鬪隊を組織して政府と戰を挑み、過激手段を實行せんことを期したり。

北露西亞の活動

此の如く猛烈なる虛無主義は已に全露西亞の版圖に蔓延したりと雖、南露西亞と北露西亞とは之が實行の寬嚴に付て少しく其有樣を異にしたり。即彼得堡莫斯科を中心とせる北露西亞にありては、煽動は寧ろ最終の目的たるが如く見做すべかりしも、バクーニンの革命論に熱中せる南露西亞は非常なる極端說に走り、直に暗殺の手段によらんとしたりき。北露に於ては既に此頃よりして學生の暴動頻々として起れり。一八七六年三月三十日、學生チエルネシエフなるものゝ葬儀を行ふや、首都の學生は示威運動を行ひ、棺を荷ひて裁判所の前に至り、こゝに祈禱をなしたり。續て十二月六日、同府カザン寺院の前に於て第二の示威運動行はれ、ナロドニキ黨の將プレハノフ演說し、土地及自由と認めたる赤旗を飜し、隊伍を組みて騷擾したりしが警官に妨げられて失敗し、此事件に連累して二六八人の被告引致せられ、其中一六五人即一三一人の男子及三四人の女子は罪ありとせられ、五人は五年より十年までの懲役に處せられ、十人は西比利亞に追放せられたり。翌七七年二月二十四日、學生ポドレウスキーの葬式の際も亦小運動起り、數多の人々敎會に闖入し、棺を奪ひ去りて裁判所の前に持ち運び、警官の制止するをも聽かずし

五〇人事件

一九三人事件

て罵れり。之は蓋し前年三月に於けるものと共に裁判所の處置に對する不平の發したるにてありき。

一八七七年二月より三月にかけて莫斯科に所謂『五〇人事件』あり。其公判を開廷するや、革命黨員たる被告は辯舌にも出版にも殆んと之を發表するに由なかりし滿腔の不平を判官の面前に演說し、皆等しく下民の窮狀を訴へ、革命の已むべからざる、社會主義の擴布せざるべからざるを主張したり。即被告スダノキッチは冷然として政府の秕政を指摘し、女學生バルディナ及農夫ピオトル、アレキセユエフ又共に大に官吏の腐敗を罵り、爲に裁判長は憲兵をして彼等を法廷外に拉し去らしむるに至りたりき。續て此年十月、首都に於て有名なる『一九三人事件』あり。十一月十五日、之が審問を開くや、多くの被告交々起て裁判に對する不服の旨を陳べけるが、就中メシユキンは盛に抗議を唱へ、新聞記者を代表する者の一人だも陪席せずして、一に少數官吏のみによりて行はるゝかゝる裁判には斷じて服する能はずと主張し、判官が幾度か彼の辯論を制止し、之を妨げたるにも換はらず、彼は尚ほ進んで罵詈嘲弄の語を以て結論して曰、穢らはしき場所よ。こは公廷にあらずして寧ろ怪しげなる喜劇場なり。世には貧に苦みて婬を賣るの女子はあり。されど此場所にては堂々たる國家の官吏が旬々たる位階又は俸給の爲に貴重なる我等の生命を售らんとしつゝあるには非ずや。正義の爲め人道の爲に身命を擲ちて奔走しつゝある憂國の志士を賣買せんとしつゝあるには非ずやと。是に於て廷内の被告盡く拍手して之を喝采せしかば彼は忽にして腕力を以て又場外に追ひ出されたり。翌七八年一月二十三日、判決あり。總て此事件に關係せる者は證人を除きて總數三八〇〇人に及び、而して被告の數七七〇人中、首都にて公判を開かれしは一九三人即八二人は貴族、三三人は僧侶、二三人は都民、八人は軍人、一九人は職工、一七人は農民なりけるが、其中九四人は放免となり、三六人は西比利亞に追はれ、メシユキン罪最も重くして十年の懲役に處せられたり。此永き拘留期内に於て獄中に死せしもの少からず。大多數は些々たる嫌疑の爲に空しく縲紲の辱めを被れり。例へばキバルチッチの如きは會々革命的の一小冊子を農夫に與へたりしと發覺して引致せられ、獄中にあること三年の後、漸くにして正式の裁判により二ケ月間の拘留を宣告せられたりき。司法制度の紊乱したりしと略々見るへきな

り。

南露西亞に於ける煽動

南露に於ける活動は其激烈なる到底北露の及ぶ處に非ず。彼等は直に掠奪、欺瞞、殺人等の方法を用ゐ、又決死隊を組織して運動したり。キエフの土地自由黨にはデバゴリオ、モクリエヰッチ゜ンロレンコー゜ドロビアスギン等ありて其地の農夫を煽動し、勢力をドニープル゜ヲルガ河地方゜ウラル゜カウガサス山地方に廣め、又遙に彼得堡の本部と相通じぬ。サラトフ又南露に於ける虚無黨の要所となり、茲にはミハイロフ及オルガ、ナタンソンの徒ありて工場を建て、ミハイロフの如きは自ら聖書を學びて宗敎家を裝ひ、大に勞働者の間に運動したりしが、一八七七年の末、政府の大窘迫に遭ひ、加ふるに運動費欠乏しければ、彼は翌春を以て首都に赴けり。オデスサにては出陣の血祭りとして七六年九月、間諜タウレエフを殺害し、翌年六月、又此地に南露勞働者同盟の事件あり。拘引せられたる者六十八人、其中十五人公判に付せられぬ。總て革命黨の運動の其勢力を加ふるに從ひて政府の之に對するも亦漸くにして酷烈を極め、七六年四月の末よりして同年八月に至る僅々四ケ月の間に於て首都キエフ及オデスサの三地にて絞罪に處せられたる者十三人に及び

其中徃々にして罪跡の見るべからざるものすらありき。就中ドミトリ、リゾグブの如き最も慘の慘なるもの、彼は只其巨大の資産を擲て盡く之を革命黨の運動費に供したりし一事を以て刑に處せられたりき。

ステファノヰッチのチギリンに於ける活劇

こゝにヤコブ、ステファノヰッチなる者あり。彼は小露西亞の一小牧師の子なるが、一八七三年、キエフ大學に入り、革命思想を抱きたるを以て放校に處せられ、由て大に地方人士を集めて腕力的の强大なる團体を組織し、以て政府に反抗せんとするの意あり。これより先、一八七五年、キエフ縣なるチギリンの農民等は當時革命黨の手段として流言されたる土地の配分を信じ、地主と爭ひたりしが爲めキエフに召喚せられて取り調べを受けぬ。蓋し彼等の中にも家族の少き者は以前の私有制となさんことを欲し、又家族の數多き者は大露西亞風の共有地制、即村の人數に應じて土地を配分するの制となさんことを希望したりしが、其後者に贊成するものは終に運動員七名を撰び、請願の爲に之を派遣したりしに、此等の人々は警官の爲に途次キエフに拘留せられければ、農民は之を以てあれ官吏が皇帝の意志たる土地配分の事を妨ぐるによりて然るなりと憶想し、一八七五年、遂に一揆を起して納税を

拒み、私有制を主張する反對者を迫害し、其財産を沒收して恣に之を賣却するに至り、爲に死傷せる者さへありけるが、翌七六年一月、警吏の爲め大に捕縛せられて鎭定し、獄に投せられたるもの百人に及びぬ。然れども彼等はなほも之を以て皇帝の意に非ずとなし、官吏を憎惡するの念益高まれり。當時曚昧なる愚民の時事に迂なりしを見るべし。敏慧なるステファノキッチは之を聞きて奇貨措くべしとなし、其友ライバ、ドイッチ及ボハノヴスキーと謀り、自らヘルソンの農夫なりと詐りてキエフに抑留せられしチギリンの人士二三と交りを結び、其漸くにして彼等の信用を得ぬるに及びて、己代表者となりて直に皇帝に旨を嘆願せんとて彼等の承諾を經けるまゝ、七六年二月發足し、十一月歸り來りて齎せる二封の勅書を示しぬ。元よりステファノキッチの僞造する所なり。其中の美はしく印刷されたる勅書は農民に對する命令にして、土地を配分せんとするはもと朕の意なりと雖、有司百官之を妨ぐるが故に、朕の新政之を行ふに由なし。汝等農民須く秘密團体を組織し、武器を以て汝等宿年の勁敵たる貴族、官吏、僧侶及大地主等を打擊せんとを準備すべしとあり。之に附するに組織せらるべき秘密團体の組み立て規約を以てし、各人毎月五コペークの會費を出し、各二十五人づゝ群をなしてそれ〴〵一人の長老を其中より撰び、二十人の長老は更に一の首長を推して其下に屬し、首長は出納掛り及び帝室委員(即ステファノキッチ)と共に團体の運動を統率すべき旨を記しぬ。キエフに於けるチギリンの農民等之を聞きて深くステファノキッチを信じ、其七七年二月を以て免されて鄕村に歸るや、密に此事を村民に告げて三百人の同志を得、夜密會して勅命の趣きを彼等に說明せり。既にしてステファノキッチ到るに及びて團員は忽にして膨脹して六百人となり、四月の末には退職の一下士官を首長に戴ける廿八人の長老及帝室委員の集會其成立を告げたり。但し此廿八人の長老中讀み且書き得るものは纔に其二三に過ぎず。此時恰も春季に際して農民皆金錢の欠亡に苦しみければ、ステファノキッチは携へ來れる運動費を散布して巧に彼等を收攬し、盡く武器を用意せしめ、年の中頃に至りては最早三十村一千人の同志を得るには至りぬ。然れども危險は亦從て增加し來り、五月の頃ひには既に其流言あり。爲に農夫の捕へられたるもの二三に及びしが、彼等が堅く秘密を守り死を以て白狀せざりしにも拘はらず、事遂に全く洩れ、八月に至て捕へらるゝもの九百人、

九月四日ステファノキッチ縛に就き、七九年六月六日、キエフの高等裁判所に於て罪を宣告され、被告五十名の中五人は六月十日に於て西比利亞に追放され、二人は禁錮、三十八人は免訴されたり。凡そ農民を煽動して其計畫の頗る巧妙なりしは前後只此一事あるのみ。これ實にステファノキッチが非常なる統率的の技能を有したりしによると雖、而も之すら遂に空しく失敗に歸したり。

農民の煽動と共に革命黨は又工民の不平を利用して之を慫慂し、彼等をして各地に同盟罷工を行はしめたり。さればセルペホフに於て、ダイコワ村にて、首都、莫斯科にて、オデスサにて、キエフにて此種の運動は頻々として起れり。又クーバン、ウラル及びドンの哥薩克は亂を起したり。

之を要するに一八六三年より七七年に至る遊説煽動の期間に於て露國内に起りたりし國事犯事件の數は六三年に於ては六、六四年に於ては四、六五年には三、六六年に五、六七年に一にして、六八、六九、七〇の三年は平靜にして此種の公判なく、七一年に至て二、七二年一、七三年無、七四年一、七五年二、七六年五にして七七年に至ては俄に增して十一となれり。革命運動は露土戰爭を一回轉して正に恐るべき恐怖時代に入らんとしつゝあり。

其三　暗殺恐怖の時期

一八七八―一八八三

ウィエラ、ザッスリッチの謀殺より歷山三世の戴冠式に至る

（一）

露國の革命的運動は今や正に歩を進めて其極點に達したり。初め革命的文學により專ら筆によりて鼓吹せられたりし革命主義は益擴張して遊説となり、更に武裝的陰謀となり、終には一轉して血腥き恐怖主義の横行する世の中とはなりぬ。

思ふ、一七九二年九月に於ける佛國革命の熱狂者は叫で云ひたりき。吾黨は須く國王と貴族とをして戰慄せしめざるべからずと。今や露國のテロリストは亦此顰みに倣ひて云へり。吾人はツアールとツアール帝國のあらゆる機關とをして戰慄せしめざるべからずと。蓋し勢の此處に至れる、多く露土戰爭の不結果なりしに起因す。國民の一般を支配せる失望と當局者に對する彼等の不平とが會々虛

ウイエラ、ザッスリッチの謀殺

無黨をして大に乘せしむる所以となりたればなり。運動は社會的と云はんよりも寧ろ全く政治的となれり。既に一八七六年の頃ひよりして謀殺は間諜に對する復讐手段として往々にして用ゐられ、此年九月六日、先きの革命黨員たりし間諜ゴリノイッチはオデスサにてライバ、ドイッチの爲に重傷を負はせられ、同月タウレユエフはオデスサにて、翌年フィソゲノフ及びシャラシュキンは首都にて皆復讐の爲めに殺害せられたりき。

一八七八年一月二十四日、即百九十三人事件の宣告ありし翌日、ウイエラ、ザッスリッチなる一少女、首都にて知事トレーポフ將軍の腹部を射擊し、之をして重傷を負はしめぬ。これより先虛無黨員ボゴリュボフなる者、チェルネシュヴスキーの解放を求めてカザン寺院の前に示威運動を試み、爲めに政府の捕縛する所となり、其公權を褫奪せられ、西比利亞懲役の宣告を受けたり。然るに彼未だ其刑を執行せられずして首都の獄中に繫がれつゝありし間に彼がトレーポフ將軍の前に脫帽敬禮せざりしとて一八七七年七月、將軍は彼を引き出さしめ、捧もて之を打ちすゑしめたり。ボゴリュボフ苦痛に堪へずして悲鳴を揚ぐるや、獄中の國事犯囚は皆之を耳にして大に憤懣し、窓及鐵柵を打ち破りて騷擾したり。由て獄吏は又此等喧騷せる囚徒をも引き出して一々之を笞ち、鮮血淋漓たるに至て更に之を暗室の中に投じたり。是に於て此等の人々は大にトレーポフを惡み、彼にして若し出で來らば、必ずや之を殺して仇を報ゐずむば止まじと誓ひたりき。蓋し笞を用ゐて拷問するの一事は、一八六三年四月十七日に於て既にツァールの廢する所となり、國法の禁ずる所となりたればなり。ザッスリッチ首都に至りて之を耳にし、義憤の情抑へ難く、將軍の邸を訪ふて面會を求め、彼が彼女の手渡せし訴願狀を披き閱しつゝありける隙を窺ひて之を射たるにてありき。ザッスリッチの此砲聲は實に恐怖主義に向つての一大相圖にてありき。

吾人は之より冗漫を忍びて頻煩なる殺人事件を時日の前後に從ひてこゝに列擧すべし。此年一月三十日、虛無黨員コワルスキー及キタシェヴスキー等のオデスサに於て憲兵の爲に捕へらるゝや、彼等は之と角鬪して盡く其證據書類を燒き盡し、ザッスリッチは又辯護士アレキサンドロフの力により、加ふるに局に當れる撿事其人すら輿論の動かす所となりて彼を辯護したるが爲に、四月一日、遂に無罪放免と

コトルエレヴスキーノ横死

大學總長マトウェツオフ殺さる

ハイキング男の死

なり、之によりて陰謀者は大喝采を以て彼を迎へ、其勝利を祝して示威運動を起し、之が爲め適當なる刑罰を以て謀殺者を處分すべき旨を奏上したりし時の司法大臣パーレン伯は責を引て職を辭し、ナボコフ之に代るに至れり。此頃探偵にして害に遭ひたる者ドン河上のロストフに於てニコノフ(二月一日)、オデスサにてフエケスソフあり。二月二十五日、檢事補コトルユェレヴスキー。キエフにてワレリアン、オスシンスキーの爲めに殺さる。これ彼が居常革命事業を罵り、妄に無辜の人民を告發し國事犯罪人を嚴罰し、殊に嘗て二人の少女を拘引するや、憲兵をして命じて其衣を剝がしめ、之を脅迫しつゝ强て彼等をして自狀せしめたるなど暴横を極めたるに因る。此事件に關して一學生嫌疑を蒙りて引致せられしが彼の同窓生は寃罪なりとして大に之を爭ひ、爲に其百五十人は放校せられ、三十人は北方遠阪の地に追放せられたり。四月二日、ザッスリッチ放免の翌日、キエフ大學總長マトウェツオフ大學官舍の階上にて暴徒の爲に襲撃せられ、石を以て加へられたる頭上の致命傷の爲に斃れ、犯人盡く逃れ去りぬ。續て五月二十五日同地にて憲兵大佐ハイキング男虛無黨の劍に斬殺せられ、七月二十四日、オデスサにて曩に捉へられたりしコワレスキーの死刑の宣告を受くるや、虛無黨員は示威運動を起して大に憲兵と戰鬪し、之が爲に該運動の主謀者たるポルタウスキー及ボグレベッキーの二人兵士の彈丸に死しぬ。

烈士ワレリアン、オッシンスキー

讀者は以上列記したる殺人錄によりて此等の鐵血手段がオデッサやキエフや盡く南露西亞の方面に於て獨り其勢力を逞うせられたるを發見せられしならん。實に恐怖時代の初年にありては南露は活動の中心たりしなり。而して其之あるは一に虛無黨の鬼將軍ワレリアン、オッシンスキーが主導の下に於てありとす。彼は一八五〇年を以てドン河上のロストフに生れたる者、父は將軍にして大地主なり。彼早く工業學校に入り、其業を卒うるに及びてトストフ市廳の秘書役となり、それより首都に至り、一度罪を以て捕へられしが、其獄を出づるに及びて一八七七年、ナロドニキに入り、ステファノヰッチ等を獄中より救出するの任を委ねられて此冬キエフに至り、翌年夏終に其目的を遂ぐるを得、彼等をして外國に奔らしめたり。彼は好顏の一偉丈夫たり。行動俊速、各地に飛走して遊說し、其活淡なる所頗る青年の愛慕をひけり。七九年春、キエフに於て警吏の襲ふ所となりて捕へられ、五月

第三局長官メーゼンツェフの被害

六日、死刑を宣告せられぬ。死に先つ少時、彼友人に與ふるの遺書を獄中に草して、今後採るべき手段方針に付て彼の同志に示す所あり、十四日アントノフ及びブラントナーの二人と共に刑場に引致せられ、正に絞せられんとして壇上にあり、僧侶の十字架を彼に與へんとするを拒みて曰、我は神を認めずと。従容として斃る。彼常に謂て曰、殺人は政府に抗するの最良手段なりと。彼は蓋し暗殺主義の率先者なりき。

八月四日、第三局長官メーゼンツェフ將軍白晝彼得堡の街上に斬殺せられぬ。彼は毎朝、其友中佐マカロフと散策するを習とし、此朝又伴ひ出でけるが、午前九時頃年齢二十余と見ゆる二人の青年の爲に俄然襲撃せられ、將軍は其中の一人の爲に鋭き劔もて心臓の下部を貫かれ、マカロフも亦其他の者の爲めに拳銃を放たれしが幸にして中らざりき。謀殺者アドリアン、ミハイロフ等は直に其場に備へれきし馬車に乘じて逃れ去れり。是に於て虚無黨は『死に報ゆるの死』と題する一冊子を公にして謀殺の趣意を明にし、自由を得んとの希望を述べ、政府は又之に對して八月九日、令を發して政治上の殺人犯及びすべての腕力運動は、自今軍法會議の裁

土地自由黨員の就縛

判を受くべきことを告げ、二十日、皇帝はすべての結社が革命運動を助くるものなることを認むと云ひ、由て嚴密なる探偵の末、九月十五日、首都なる土地自由黨の本營に屯在して通券運動費、隱匿、逃亡等一切の事を司掌しつゝありたる有力者アドリアン、ミハイロフ、サブロフ、オボレシン、ゾボロフ、醫師ワイマル外女員マリノウスカヤ、カリンキナ等を捕へ通券及偽印を沒收し、虚無黨の中央部は一時就んど滅亡したるの狀ありしが、こゝにアレキサンドル、ミハイロフあり。彼各地に奔命して運動費を蒐集し、再び通券を造り又活版所を設けて年の十月二十五日より密に自ら新聞を發刊しぬ。彼はなほ大に勞働者に遊説し、之に與ふるに金錢や通券を以てして己の保護の下に北露西亞勞働者同盟なる大團体を組織せしめ、其第一總會は十二月二十三日を以て擧行せられて之が綱領を公にし、社會上及政治上に於ける希望を序述しぬ。

示威運動及同盟罷工

波蘭地方に於ても此年八、九、十、三ヶ月の間、國事犯屢ゝ起り、學生青年を以て成れる社會黨及び虚無黨の縛に就きて罰せらるゝ者續々として絶へざりき。之れと同時に大學々生の示威運動及び勞働者の同盟罷工も踵を接して起れり。即冬十二

ハルコフ知事の遭難

月首都の醫科大學生騷擾し、學生一四二人捕へられしが、此時憲兵及哥薩克兵、學生と衝突して死傷者を生じ、キエフ大學も之と同じく學生の示威運動の爲に休學し、ハルコフ大學も亦不穩の擧動ありたる爲め同學は翌年二月十三日まで休學せざるを得ざるに至りたりき。此外ハルコフの獸醫學校にては其一教授を放逐し、なほ高等專門學校にして動きたる者少からざりき。同盟罷工中最も大なりしは首都の棉工場に起りし者なりき。又ウオレンブルグ、莫斯科、ニシニー、ノヴゴロッドの各地に於ては屢々放火ありき。

一八七九年二月九日、夜ハルコフ知事アレキセー、クラポトキン劇場よりの歸途、猶太人ゴルデンベルグの銃殺する所となる。彼が虛無黨の被告を虐遇したるに由ると云ふ。續て月の末、オデスサにて憲兵大佐クノープ自宅にて殺害に遭ひ、死屍の前には虛無黨實行委員の命令によりて虐政者を誅戮すと記したる小紙片橫へられたりき。同地にて又ツアレスキーと云へる十七才の一少年殺されたり。これ彼が虛無黨の秘密結社に加ふるを肯せざりしが故に出でしなりき。三月九日莫斯科マモントフ、ホテルの一室に一青年の死躰あり。其何人なるを知らず。後『土地及自由』新聞其所以を紙上に記載して曰、波蘭の猶太人ラインスタイン第三局に密告するに吾人の秘密活版所の居所を以てしたり。此罪により吾人は去る三月九日を以て莫斯科、マモントフ、ホテルに於て彼に天誅を加へたりと。三月十三日、メーゼンツエフの後繼者たる第三局長官ドレンテルン將軍、馬車に乘じて『夏園』を徐行しつゝありし、會々十八才の一少年騎士ミルスキーなる者の狙擊する所とありしが、丸は窓を破りしのみにて微傷だも負はざりき。これ彼が去冬首都にて就んと二千人に及ぶ多數の人々を禁錮し、虛無黨員ボボホフがアルハンゲルの追放地より脫走せんとを企てたればとて之を絞殺し、又囚人を酷遇して斷食の反抗を招くなど專虐極まりなかりしが故なりき。されど陰謀者は此夜市中の各所に布宣文を張り出し、彼及首都の府知事ソウロフは虛無黨の復讎によりて早晩死を免れずとし、而して此等罰を受くべき人名は百八十名に及ぶ旨を公にしたり。十五日、カツカ孃と自稱する十九才の一美婦人、實行委員の命によりてバイラセヴスキーなる者を銃殺す。三月下旬、キエフの知事ガルコフ伯市街を通行しつゝあるの際、或る書肆の窓より彼を狙擊せしものあり、中らず。謀殺者は直に馬車に乘じ

て逃れんとせしが一農夫の爲に捕へられぬ。居るヿ五日、アルハンゲルの警察署長ピエトロヴスキー自宅にて刺殺せられ、而して彼を貫きし劍の柄に結び付けられたる紙片に曰、汝は波蘭人なり。然るに汝の此地に追はれたる波蘭の同胞を惡遇するヿ寧ろ露人の獄吏よりも甚し。犬にも劣れる醜漢、廉く天誅を被れよ。汝の如きは人間として生活するの價値なき者なればなり。實行委員印と。而して彼の加害者は全く不明なりき。

既に記したるが如く當時首都にはアレキサンドル、ミハイロフあり。彼が偉大なる才能に依て孜々として土地自由黨の恢復組織に努力し、略ゝ之を大成するヿを得ければ、彼は最早從來の官吏殺害を以て手ぬるしとなし、同志ズンデリッチ。ゴルデンベルグ及クエトコヴスキー等と謀りて密に皇帝の弑害を企圖し、茲にソロウユエフと稱する決死の一青年ありて自ら之が實行の任に當りぬ。彼の父はミハイロウナ大公夫人の領地に雇使せられたるの人なり。彼は幼より俊才なるの故を以て大公の出費にて教育を受け、一八六五年、首都の第三中學を卒業し、進で同所の法科大學に入りぬ(彼其中學にあるの時既に宗教に就て疑を挾めりと云ふ)。されど家貧にして學窓にあるヿ能はざりければ、彼は糊口の途を求めんとて二年のとき止むなく大學を去り、即ち地理及歷史の教員檢定試驗に及第して之が資格を得、六八年、莫斯科近在トロペックの學校に教授となり、故鄕の父母に送金して彼等に孝養に盡しつゝありしが、既にして時の革命的風潮の動かす所となりて職を辭し、自ら革命主義の遊說員となり、七五年、身を鍛工に變じてオカ河上の大工業村パウロヲに入り、カタリナ、チエリスセフなる一婦人と虛無黨流の結婚を行ひ、政府の探偵の目を忍びて更にニシニー、ノヴゴロッド。サマラ、タムボフ、ヲロネッシユ等を遊行したる後、七八年十二月、終に首都に到り、土地自由黨に投じ、ミハイロフ等と共に大膽にも皇帝を弑せんヿを議りぬ。此時衆皆默然として此大任に當らんと欲するものなし。是に於て彼獨り進で之を實行せんヿを提言し、四月二日終に帝を狙擊しぬ。此日朝十時、皇帝は冬御殿に接し、丁度近衛屯營の前にて散步しつゝありしが、ソロウユエフ之を窺ひ、稍帝と離れたる所にありて拳銃を以て之に向ひて發射するヿ二回、皆中らず。第三回の發射は憲兵大尉ロッホが劍を以て猛烈なる打擊を兇行者の脊上に加へけるより狙を損し、第四の彈丸は宮城近衛一兵士の頰

彼が謀殺の趣旨

を傷けたるのみ、第五の丸も發せられたれども尚は群り來れる人々の妨ぐる所となりて彼は遂に捕縛せられたり。その府の公廷に引き据へらるゝや、彼はソコロフとて大藏省の屬吏たる旨を詐り言ひたるまゝ又何事も云はず。幾くもなくして激しき嘔吐をなすと半時あまりに及びぬ。是れ彼が兼て毒藥を混入して用意し求きし丸藥を服用せしによるとは知られき。其醫療を加へられて恢復するに及びて彼判官の訊問に應じて具に白狀し、政治上及社會上に於ける秩序の紊亂、資本と勞働との關係の不正及階級打破を論じ、多數勞働者を虐使して己の懷を肥しつゝある少數資本家は到底好意を以て彼等の資本及土地を打ち捨つるには至らざるべし。故に吾人は須く腕力を以て之を迫らざるべからざるの要ありと叫び、最後に於て述べて曰、吾人露西亞の社會黨は已に我政府に向て戰を宣したり。吾人は政府の敵なり。吾人は皇帝の敵なりと。而して彼は誰人の敎唆にも依らず、全く一人一個の意志によりて此擧に及びたる旨を反復公言せり。五月二十八日、彼は曩にカラコゾフの刑を行ひたるスモレンスクの刑場に牽かれ、悠然として絞臺に昇れり。時に年三十三。

南北に於ける虛無黨の窘逐

是に於て政府は又大に虛無黨を抑壓するの方針を採り、歐露の六總督に無限の權力を與へ、グルコー及トートレーベン兩將軍各首都及オデスサの南北にありて嚴密なる探偵制度を敷き、各戶には番人として政府の間諜を配置し、通行制を嚴にし、武器及劇藥類の販賣を取締り、學生の行動を精査し、之が爲め人々の微過を以て罪せらるゝ者擧げて數ふべからず。殊にオデスサに於けるトートレーベンの如きは非常なる窘逐を行ひ、嘗て或人の國事犯囚の境遇を愍み、之に五ルーブルを義捐せしことありしに、彼は之を捕へなほ其可憐なる五才の女子及四才の男子をも共に縛し、盡く之を東部西比利亞の荒野に追放したりしが如きことあり。されど熱狂せる土地自由黨の活動は到底之を以て壓服せらるべくも非ざりき。

リペックの會議

彼等は此年正に東南露西亞のヲロチシュに其大會を開かんとして其內暗殺を主張する一派の猛士は、六月十七日より二十一日に至るまでヲロチシュの近傍タムボフ縣のリペックに預備會を催し、黨の目的、之を遂ぐるの手段方法及組織等に付て議しぬ。シェリャボフ進で述べて曰、露國の社會革命派は政治上の目的よりも寧ろ社會上經濟上の目的を有す。蓋し政治上の目的は自由主義者の求むる所なればなり。然

れども我國の自由黨たるや、もとあまりに微力にして到底自由なる民主政を敷き之を支持するに堪へず。彼等は纔に社會上經濟上の革命の準備をなすものたるに過ぎざるが故に、吾人革命黨に向ては專制政治を倒し、一般思想の自由に向て道を拓かんとを要す。之を以て吾人は先づ政治上の自由の爲に戰ふを第一着歩とせざるべからず。即憲法を制定し、議會を召集し、民意によるの政治を布かんとを以て目的となさゞるべからずと。衆皆之に賛す。次に如何に政府を處すべきか如何に殘酷なる官吏に對すべきかに付てはシエリヤボフは云ふ。我黨は已に虐政を排斥し、束縛を脫するとの大膽なる戰闘によるの外なきを認めたり。然らば先づオデッサに於けるトートレーベン。キェフに於けるチェルトコフ等の暴虐なる所行を見よ。官吏の跋扈するも畢竟する所其責皇帝にあり。故に吾人は須く皇帝られ自身を罰せざるべからず、誅戮せざるべからずと。政府に對する、只一ゐ皇帝弑害を以てして之を脅すべしとは始めて此時に於て原理として立せられぬ。黨の組織に付てはアレキサンドル、ミハイロフの説を容れて集中主義とし、專ら訓練と秘密とを重せり。此時列する者ミハイロフ。フォメンコ。ティホミロフ。コロトケキッチ。シェリヤボフ。シレユェフ。クエトコヴスキー。モロゾフ。コシュルニコフ。ゴルデンベルグ等の男員、及ソフィア、ペロウスカヤ。ヴィエラ、フィリプポワ、フィグネル。ニコラエウスカヤ。セルゲユェワ。イワノワの女員なり。彼等はミハイロフ。フォメンコ及チホミロフの指導の下に自ら實行委員として一切の運動を掌り、其綱領規約を定め、チホミロフ及モロゾフを以て機關新聞の編輯人に任せり。

ヲロ子シュの大會

續てヲロネシュに於て露國革命黨の協議會開かれしが、之に列せし多數の人々は寧ろ平和的遊説者及煽動者にして、一派の恐怖主義、集中主義、政治的暗殺主義に反對する者ありしかば、シェリヤボフの如きは斷じて分裂するの得策なるを主張したりしかども、ミハイロフ等の之を制するありて會は何等の決議をもなすとなくして解散に了りぬ。されども此等過激、溫和二派の永く一致すべくも非ざりけるより、

土地自由黨終に分裂す民意黨及分黑黨

此年八月十五日、土地自由黨二派の代表者は首都に會して終に平和の間に相別るゝととはなりぬ。但し彼等は自今革命的の印刷物を以て互に相助勢すべく、又共に運動費を給し、探偵を殺し、囚人を救出すべきとを約しぬ。此二派の一は既に記せるが如く政治的兇行主義を採りて民意黨(ナロドノヤ。ヲルヤ)と號し、首都のサペルネー街に於て秘

密活版所を設け、機關『民意』と發行し、其事務員として男員クェトコヴスキー。ブッフ。ツッカーマン。マルチノヴスキー及女員エングニーフィーグネル。イワノワグリアスノワなり。 モロゾフ之を總裁す。 一は社會革命的煽動主義による者にして分黒黨(チエルネ、ペレドユエル)と稱し、雜誌『分黒』(貴族の領土たる白土に對する農民の黒土を分配せんとを求むるの主義)を出版す。

皇帝の血を渇望したる民意黨は今やその出版所より彼等の主義綱領を發行しぬ。五項及數多の小項より成る。 其第一項は劈頭第一に云て曰、吾人の信ずる所を以てせば吾人は元來社會主義者にして人民の良友なり。 吾人は信ず、人類は社會主義的原理によりてのみ自由、平等及博愛を享受し、之が存在を遂げ得べき者にして一般の物質的幸福、完全なる一般人格の發達及進步なるものは一に之によりてのみ得らるべき者たるとを。 吾人は又信ず、只民意のみが社會上のあらゆる形式を制約し得べき者にして、人民の發展なる者は獨立不羈に行はれ、且つ實際事物に適用せらるべき各の理想が先づ國民の理解及其意志の吟味を經て後初めて健全なりと稱せらるべき者たるとを。 民福及民意、之れ實に吾人の神聖にして且互に不離の關係を有する一大原理なりと。 而して第二項に於ては露國民の不幸を述べ、第三項に民權を高むべきと、第四項に人民の請求するを、第五項及第六項には其請求を實現せしむべき方法を載せたり。 今其請求として擧げられたる者を列記せんに、

一、常設代議院を設けてあらゆる國家問題を處理し、命令せしむべし。
二、地方自治制を擴張し、あらゆる公吏を選擧任命すべし。
三、各市町村を經濟上及行政上に於ける單位として獨立せしむべし。
四、土地を國有とすべし。
五、すべての手段を竭して工場を勞働者の手に引渡さしむべし。
六、吾人の信仰、言論、出版、集會、政社及選擧運動を全く自由にすべし。
七、選擧權を擴張してすべて階級と富との如何を問はず、成年に達したる者に之を許すべし。
八、地方民兵隊を以て常備軍に代ゆべし。

而して之を實現するの方法として左の六項を指示せり。

一、民間に入りて集會を催し、辯舌を以て遊説煽動する事。
二、破壞主義及恐怖主義を以て政府に反抗する事。
三、秘密結社を組織整理し、勢力を集中して機關を機敏にする事。
四、行政官署軍人及民間に勢力を張る事。
五、一般革命を準備し、之れが實行に着手する事。
六、立憲議會の召集に於て選擧運動をなす事。

而して此綱領の末段に於て謂て曰、其革命が一の獨立せる革命の結果として起ると、將た一の陰謀の助けによりて起ると、其方法の如何を問ふことなく、我黨の義務とする所は、只一に立憲議會を召集し、而して革命又は陰謀によりて得られたる準備的政府を之に引き渡すことにあり。撰擧運動に際しては我黨は須く全力を盡してクラキ（高利貸、不正手段によりて富を致したる農夫、及同胞市民の膏血を絞り、已れ其上に立ちて威力振はんとて專ら金力及智力の秀卓せんことを求むるの輩を云ふ）の候補者に反對し、之と戰ひて推すに純乎たる人民の良友を以てすべしと。見るべし、兇行主義者の目的は素より他の立憲黨又は自由黨の唱ふる如くに政治上の自由を享受せんことにありと雖、其之を實現するの手段としては平和的なるを

採らずして直に謀殺を以て帝及帝の有司を脅迫し、以て之が讓歩を强ゐんとする者なることを。然るに民意黨のモロゾフやタルノヴスキーは之を以て滿足せずして尚も歩を進めて啻に兇行主義を其手段となすのみならず、將た又實行委員の云ふが如くに之を露國内に於ける戰法と公認するのみならず、進で一般の原理方則となすべきを主張して曰、志士の身を捨てゝ奔走盡瘁せる者今日に至る果して幾人ぞ、幾年ぞ。而も社會上經濟上に於ける多數人民の境遇は未だ依然として修正改善せられざるなり。青年たる者、最早遲疑するの秋に非ず。須く惡運强き現在の虐政家に加ふるに天罰の謀殺を以てし、之によりて彼等の血路を開くべきなり。須く先づ野心滿々たるナポレオン三世や、ビスマークを打ち仆さゞるべからざるなりと。彼等は實に『吾人は虐政家を打ち仆するの權利を有す。而して何人と雖、之を其同胞市民より奪ふの權利を有せず』と云へるサン、ジュストの語に傚ひて彼等の政治上に於ける謀殺打擊を露國以外にも適用せんと欲せし者にてありしなり。然れども此見は遂に實行委員の容るゝ所とならざりければモロゾフは後去てジュネヴァに赴き、同志タルノヴスキー及びツカッチェフ等と共に運動し

たり。

（二）

民意黨既に整然たる組織を作り、各其部署を定め、各小團体又は其代理者によりて撰定されたる實行委員を全黨の主座におき、部下の黨員は絶對的に委員に服從すべく、生命財産を擲て互に相助くべきことを誓約しぬ。各團体には地方團と特別團との二種あり。前者は人種的又は地理的に區劃されたる者にして實行委員の撰定にかゝるそれ自身の規約を有し、運動費を貯金して有事の時に對する應援に具へ、常時にありては行政官となり、軍人となり、以て其行動を晦蔽す。一八八四年に於ては地方團の數十二ありき。其下又更に數多の小會あり。彼等は各特種の業務を帶ぶる者にして或は學生勞働者の遊説煽動に從事し、或は秘密出版を事とし、又或は爆發物の製造に着手す。之によりて新に成立せし團体尠からず。即一八七九年に於ては首都に於て民意黨實行委員の下に大勞働者團成り、翌年『民意勞働者團綱領』なる者其中央團と實行委員とによりて編成せられぬ。『勞働者新聞』（一八八〇年十二月十五日創刊）は其機關紙なり。此團數多の支團を地方に有す。中央團の首領は實にシェリ

ャボフにして虛無黨の女傑ペロウスカヤと共にグリネキツキー。リスサコフ等を引て之を總括せり。此外又首都に中央學生團なる者組織せられぬ。

一八七九年八月二十六日、實行委員終に皇帝に死刑を宣告し、翌年の初更に覺書を各地方團に送りて曰、民意は法の根本なり、而して我政府は吾人平和的の懇請に應ずることを能はず、されば實に吾人の暴行によりて之れを强ゆるの止むなき所以なりと。これより皇帝の謀殺續々として起る。

鐵道線下の地雷謀殺

從來失敗に失敗を重ねたる皇帝の謀殺は盡く拳銃を以てせられたるによりき。是に於てか民意の偏執者は此實歷に鑑みて更に其手段を變更するの必要なるを認め、終に之よりダイナマイトを製造して之を使用するに至りたり。此目的に於て初めて之を用ひたりしは一八七八年にあり。即此年七月末、下士官ダキデンコー。ロゴウエンコー及チャバロフ等海軍士官と力を協せ、黑海なるニコラユエフ港附近の海中に水雷を裝置して密に皇帝の遊艇を爆發せしめんことを謀りたりしが、事忽ちにして露れ其計畫空しく畫餅に歸したりき。次に一八七九年秋に於ける

オデッサの地雷謀殺

アレキサンドロウスクの地雷謀殺

莫斯科に於ける謀殺

鐵道線下の地雷謀殺あり。右は此夏リヴァディアの離宮に行幸せられたる皇帝の歸路を要して實行せんとせし者にして、其第一の陰謀はオデッサにあり。此處にはフロレンコ。キバルチッチ。コロトユェヰッチ。スラトポルスキー及女員レベデワあり。市街を去る十三哩ばかりなるに設置しつゝありしが、既にして帝の此線路を通過せざるべき旨を聞知するに及びて工事を中止したり。第二はアレキサンドロウスクにあり。即ロソヲ及セバストボール間の線路に仕かけらる。シエリャボフ、首魁としてプレスネヤコフ。オクラヅキ。チホノフ及女員ヤキモワを統卒し、十月中、線路に沿ひたる所に小地片を求めて工事に着手し、二つの坑を穿ち、電線を本營より通じて裝置全く成りたりしが、十一月十八日、愈々皇帝の之を通過するや、電池は能く發電したりしかども雷管に欠点ありたるが爲め遂に爆發せずして止みき。第三の地雷はモスコー。クルスク間にあり。こゝにはアレキセー、ミハイロフ。ゴルデンベルグ。シレェユェフ。バランニコフ及女員ペロウスカヤ等化學士レオ、ハルトマンを頂きて其事に從事しぬ。ハルトマンはアルハングルなる殖民獨逸人の子なり。されども能く祖國の語を解せず。嘗てサラトフに書記として密に民意地方團の一員となり、其化學上の智識を有するが爲め殊に莫斯科に召喚せられ、キバルチッチを助けて爆發物を製造し、又彼の陰謀を主宰せり彼は此陰謀の後巴里より逃れ、一八八〇年二月正に露西亞政府に引き渡されんとして一時危險に瀕せしが、虛無黨亡命客の運動したる結果として露西亞官吏の來着に先ち幸にも放免せられ、之より倫敦に至り、其地の工場に勞働し、更に北米に移住せしが罪人を以て視られて頗る好遇せられざりしかば又再び倫敦に歸りて電氣工業に從事したり。

彼は先づペロウスカヤと相携へてサラトフの手工業者スッホルコフ夫妻なりと詐りて線路に近き所に一家を求め、店を開き、附近の農民等の疑心を招がざらん爲め、故らに其地方一般に古來より信仰せられ來れるラスコルを崇奉し、此宗派に屬する一人なりとて其習俗に倣ひて煙草を喫せず、又鬚髮を剃刈せず。彼は居常ジャケツを着け長靴を穿ちつゝありき。近隣の住民は深夜時々其門の開くを耳にせしこともあり、又人の物語る聲や、車の轢る音を聞きしこともありき。されど彼等は盡く巡査を敵視しつゝありしかば、誰ありて隣家に於ける怪しげなる樣子の始終を之に密告せんとする者なかりき。ミハイロフ等は夜な〳〵車馬を以て爆發物を運搬し、又隧道を穿ちつゝありしなり。彼等は九月其業を始め、坑中の水、膝を沒するの困難を忍ひて終夜泥土の中に勞働し(晝間は密會所の階上に眠りて)、十一月には漸くにして線路の直下に達することを得て適宜の場所にダイナマイトを据へ、電

槽より電氣を導きて既に爆發の用意全く整ひたりき。然るに爆發物を運び來らんが爲に出で行きしゴルデンベルグは其携へたる鞄のあまりに重げに見へけるより憲兵の怪む所となり、十一月十四日、格鬪の末、エリザエトグラードの停車場に捕縛せられ、吟味を遂げられけるが、彼の鞄の中には八十磅のダイナマイトのありしに、隱蔽すべき術もなく、彼は遂に事實を白狀せざるを得ざるに迫り、（ゴルデンベルグはこれより首都の彼得堡羅城に禁錮せられしが一八八〇年七月十七日遂に自ら縊死したり）之によりて警吏は幾くもなくして來りて此家を撿視したりしが、殊に怪むべき所なしとして去れり。既にしてアレキサンドロウスクに於ける陰謀のありし翌日、即十一月十九日を以て皇帝此地に到りぬ。是に於てかペロウスカヤは物見臺の上に立ちて滊車の至れるを相圖し、シエリャボフ電槽に位地を占めて線を結合し、之に由て電火閃き、驚くべき爆發起りけるが、そは帝の龍車を衝かずして彼に從へる列車を粉碎せしに過ぎず、兇行者の計畫は又もや此處に失敗を重ねぬ。

以上三ヶ所に於ける謀殺に付ては虛無黨は殆んど十万フランの鉅額を費したりと云ふ。

謀殺者ハルツリン

彼得堡に於ける冬御殿の爆發

鐵道地雷の三回の謀殺に辛くも死を免れて首都の冬御殿に入りたるアレキサンドル皇帝は未だ二閲月ならざるに又もや一大陰謀に遭逢したり。事は民意黨決死の青年ステファン、ハルツリンなる者によりて企てられぬ。

ハルツリンはキアトカ縣の一農夫の子なり。一八七三年、革命黨の遊說者となりて首都の勞働者界に入り、其遊說の巧なりけるより七八年までに獨力十三種の秘密結社を新設するとを得たり。就中彼の努力に成れる北露西亞勞働者同盟の如きは十五乃至二十の小團体凡二三百の勞働者を有し、頗る勢力ありき。七九年秋、彼冬御殿に於て皇帝弑害を計らんとを思ひつき、之を民意の實行委員に打ち明けてダイナマイトを請求し、自ら之に當らんとて他の助力を謝し、只管皇帝に近づくの機會を求めつゝありけるが、年の十月、帝室の遊艇を造るに付きて木匠及漆工を募集するに遇ひければ、彼は大に喜びて之に應じ、其技術の巧妙なるより忽にして大に用ゐられて冬御殿の大工を命せらるゝには至りぬ。此時に當り皇帝リヴアヂアの離宮にあり、首都の冬御殿は宮內官吏の監視の下にありければ、其內廷の案

乱せること實に名狀すべからず。之に出入する勞働者の如きは皆相爭うて宮中の器具を偷み去り、而も誰ありて嚴しく之を取締る者なかりき。ハルツリンは素より之と好まずと雖、潔癖を示して私するなきは曾々同僚職工の擯斥する所となるに至るべきを思ひ、又已むを得ず之に黨して食器類を盜めり。彼れは初めオルネッツ縣の農夫なりと詐稱し、其言語行動、總べて素朴なる田舍漢の態度を示しければ、又大に人々の信愛する所となり、クリスマスに際して百ルーブルの賞與金を得たるほどなりき。

彼は漸時宮中の間取りや其他の事情を詳にすることを得ぬ。彼は發明せり、彼等が仕事し且つ眠るなる窖は帝の食堂の恰も直下に位することを。又帝室警士の番室は此食堂の傍に位することを。彼は由て事情を實行委員たるクイアトコヴスキーに告げて彼をして密かに爆裂彈を持ち運ばしめつゝありしが、此間に皇帝の還御あり、而して彼は技術の殊に衆に秀でたるの故を以て拔擢せられて帝の居殿及食堂の修繕を委托せられければ、多忙にして就んど寸暇なきにも拘はらず、是非に前三回の失敗を償ふ所あらんと發奮し、爆發物は悉く已が寢臺の下に隱し置きて注意に注意を加へつゝ其仕事に取りかゝりけるが、幾何もなくして彼れの助手たるクキアトコヴスキーは十二月六日、終に政府の捕縛する所となり、一時ダイナマイト供給の道絕ゆるに至り、之に加ふるに食堂の板壁に赤き十字架の記號を附せし者ありて愈〻警士の疑を被り、之に由て多數の憲兵は密に各方に配置せられて警衛極めて嚴重となり、其隊長たる大佐は一夜深更其下僚を率ひて職工の起寢する窖の中に入り來りぬ。あゝ、ハルツリンが枕の下には總べてのダイナマイトが置かれてあるなり。彼は既に命なき者と思ひぬ。されど彼等は幸にして燈下に室內の異變なきを見たるまゝ出で行きぬ。此の如き事あれより每夜に及びければ彼は最早之を意とせざるに至り、由て爆發物の運搬者としてシエリャボフを依賴し、ハルツリンは此危險物を錢箱の中に藏めて常に枕の下に安置せしも、ナイトログリセリンの揮發の爲眩暈を催して堪へ難かりければ、彼は之を己の古シャツ及衣服に包みて食堂直下に位する壁隅に隱しおき、之を發火せしむる爲め壁の中に導火の藥品を込めたる二本の管を入れて外部より見へざらん樣巧に裝置を凝し、冬御殿爆發の計畫こゝに全く成りぬ。

ハルツリンは身體孱弱にして肺を病み、極めて神經質の人なりき。然るも大膽にもかゝる陰謀を企つるに至りしは實に驚くに堪へたり。啻に之のみならず彼は深く警衛せる番兵の信ずる所となり、其兵の如きは一女を以て彼に女はさんと提言し、彼も亦之を諾するにまで至りし程なりき。

明けて一八八〇年の一月に至れば兇行者の箱の中には彼此百二十磅の爆發物を藏めたりき。こは食堂を打ち破らんには充分の量なりと認められたり。彼は今や只發せしむべき機會の至るを待つのみなりき。されどこれには少くとも二つの條件の相合するを要しき。即帝は毎日午頃食事に就き、其時間は一定せずと雖、大略早きも三十分遲きも三十分なり。故にハルツリンは丁度其時刻に於て窖の中にあらざるべからず。されど中々に其折に遇はんことの難くして彼は已に一月中旬より機を窺ひつゝありけるも、更に着手の時を得ず。夜屢ゞ宮廷前の地にシエリヤボフと密會して打ち合せたりしが、常に未だ未だとのみ囁きたりき。二月五日夕、ハルツリンは例の如くシエリヤボフと會し一揖して曰最早善し。言未だ了らざるに百雷の一時に轟きたらん如き恐ろしき音は地を動かして宮殿の中に起り、殿中の火は全く消へ失せて四方は煙霧の爲に閉されぬ。あれハルツリンが点火して遁げ來れるにてありき。二人は皇帝の安否を問ふの暇すらもなくて急ぎ走りて同志の家に入り、ハルツリンは一時何事をもわかたぬまでに倒れ伏せしが稍々ありて蘇りて其友に問ふに皇帝の生死を以てしぬ。人々答ふる所以を知らず。彼即奮起し劍を提げて出でんとす。衆之を制止し漸くにして止む。彼實行委員に向ひ誓て曰、余は彼を斃さゞる間は假令死すとも瞑せずと。ハルツリンの望は翌年三月一日を以て終に遂げられぬ。彼は是に於て其後莫斯科キエフ及オデスサの各地を經由し、一八八二年三月十八日、同志シエルワコフを助けてキエフの檢事ストレルニコフをオデスサに射殺せしが、即日捕へられ、廿二日を以て絞罪に處せられぬ（冬御殿の爆發によりて近衛聯隊に屬するフインランド人十人は即死し、傷を負へる者五十三人に及びたりしと云ふ皇帝は食堂に入るの時少く後れたりしが故幸にして此難を逃れたるなり。）

ローリス、メリコフ伯出づ
彼の新政

冬御殿の爆發は益々政府をして戒嚴を加へしめ、事變の後一週日、將軍メリコフ伯を以つて內務大臣兼全彼得堡常備軍の司令長官となし、之れに授くるに無限の權力を以てして以つて帝國の內乱を鎮定せしめんとしぬ。彼はテレックなる哥薩克の隊長たりし時より令聞あり。露の政治家中に於ては遙に才能あり、智力ある

の人なり。其家素とアルメニヤに起る。頗る智略に長ず。其カルスを陷れたりしは突賊よりも寧ろ黄金の力によると稱せらる。後ハルコフの總督たり。當時首都に、キエフに、オデスサに、他の総督の革命黨に臨むや非常なる壓制を以てしたりしに拘らず、彼の施政は極めて寛大なりければ、各方の被迫害者は皆逃れて此地に隠れ、之によりて彼は尠からざる名望を民間に博したり。一八七八年、オルガ河口のウィエトリアンカに惡疫流行せしときも、防疫部長として功績あり。由て二月五日の變起るに及びて首都に召還せられぬ。彼今や新に內相となりて先づ出版の自由を許し、拘引捕縛を減じ、其既に獄に繋がれつゝある者と雖、一度罪を悔ゆるあれば彼の命によりて直に之を放免せしむるとすらありき。彼は先づ帝に勸めて暗黑主義の文相ドミトリ、トルストイ伯（有名なるトルストイ翁に非ず）を罷免せしめ、次に又國事警察局たる第三局を廢せり（但しこは名義上廢せられたるに過ぎずして事實秘密探偵其物は尙存したり）。是等は皆革命黨をして希望を伯の將來に屬せしめたる者なりき。既にして皇后崩じて皇帝新に其嬖妾カタリナ、ドルゴルコワなる一華族婦人を后位に進むるに及び、メリコフ伯は己が改革案をして皇帝の認容する所たらしめんには新后の助力を要すとして之と結びぬ。之をイウレヴスカヤ皇后と稱す。

然れども民意黨騎虎の勢は最早之を抑制するに道なきなり。熱狂し、偏執したる彼等は到底皇帝の血を見るに至らずむば止まざるなり。既に冬御殿の珍事と日を同うして首都に密通者シャルコフの殺害せられたるあり、續て二十日に於ては內相彼自身すらムロデツキーなる者の爲に狙撃せられ（謀殺者は五月五日を以て絞罪に處せられたり）又三月四日探偵サブラムスキー。キエフにて虛無黨員ポリカルポフの害する所となりたり。二月五日の變後皇帝謀殺の企てられたる者三回、其二回は地雷に於てせられ、一回は爆裂彈を以てせられたり。

鐵橋の謀殺

第一は一八八〇年六月、皇后の葬儀を營むに際し、其行列の通過すべき鋼橋の下に地雷を仕かけて皇帝を害せんとせる者にして、シェリャボフ等主として其任に當りしが、會ゝ暴雨起りてネヴァ河の流俄に膨脹したりしが爲、之を實行すること能はざりき。

マラヤ、サドワヤ街の陰謀

第二は首都マラヤ、サドワヤ街に隧道を穿ちて帝の此街道を通過するに際し、之を爆發せんとせる者にして、プスコフ縣の測量師ユーリー、ボグダノキッチ之を謀る。

彼はメングデン伯が常に雜貨商に貸與するを以て例とせし該街上の一家を借り受け、一八八〇年の季冬に於て同黨員アンナ、ヤキモワなる婦人と共に牛酪商コボセフ夫婦なりと僞り居住し、宅內の窖より密に街路に向て坑を穿てり。然るに其內狀稍警官の怪む所となりて技術官たる工兵監ムロキンスキー將軍に上申せられけれぱ、將軍は八一年二月二十八日に於て來りて一應の檢分をなし、其異狀を認めざる旨を報告したり。之により陰謀者は倖にも早く虎口を脫するを得たるが計畫は全く失敗に歸したりき。

第三は實に三月一日に於ける兇變なり。

三月一日の兇變

一八八一年二月廿八日(陽曆三月十二日)、帝は常より早く八時頃寢室を出で、(怪む勿れ、彼得堡に於ては冬、最も日の短き時には九時頃ならでは夜は明けざればなり)例なれば彼が八才の男子ゲオルグ、二女オルガ及カタリナ等と朝飯を共にし、且共に冬御殿を散歩すべきなれども、此日は家族を率ゐて供養の爲め城內の禮拜堂に赴きたりし爲め之を行はず。皇太子アレキサンドル、其弟ウラヂミル大公各妃を伴ひて式に列す。式後皇帝朝餐を喫し、然る後政殿に赴き、外相ジエールの公用を以て來るに遇ふ。此間に內相メリコフ伯より虛無黨の兇漢シエリャボフなる者昨夜捕縛せられたる旨を書狀を以て奏上せるあり、帝即外相の去るや走せて之を皇后に告ぐ。晝メリコフ來り謁見してシエリャボフが假令我捕はると雖、帝に對する新しき謀殺は必や日ならずして行はれんと言ひ放ちて又撿事の訊問に應せず、卿等かゝる問を發する、畢竟無用の時を費すに過ぎずとて屈するの色なき旨を奏し、殊に席に侍したる皇太子の面前にて、かゝる危險の際に於て行幸せらるゝは宜しからず、須く明日の觀兵式を見合せられたしと諫言し、以て帝を動かさんどを試みたれども、帝は行幸の事既に世に公布せらる、今更之を打消すと能ずとて動ずるの氣色だになし。皇后聞て頗る安からざる所あり。メリコフ伯が所勞の故を以て御陪食の席に列なるを辭したるを午後其私宅に訪問して具に事情を明にせしが、伯は市長フエオドロフ將軍の報告によれば、明日は勇猛なる大尉コッホが六十八の精兵を率ゐて之を護衛しまつるべしとの事なれば、しかく憂ふるに足らざるべしとて切に后を慰めけるより后は初て心を安じて歸り來り、帝と食卓を共にした

り。此時帝、皇后の腕を採りて云て曰、朕は今頗る幸なる心地す、而かも其幸は却て朕の胸を騒がしむと。夕に至りて茶を喫せんとす。后又試に明日の行幸如何を問ふ。帝答へて曰、何等の故を以て之を打ち消す事やあると。

次日即露暦三月一日、日曜に當る。帝早朝例に仍て三人の幼兒と宮中の大廣間を散歩し、祈禱を聞き、諸皇族と朝餐を共にし、然る後メリコフ伯の至るを待つもの丶如し。其正に出で丶觀兵式に赴かんとするや、皇后帝に謂て曰、妾は切に望む、今日は決してネヴスキー、プロスペクトを通り玉ふな。必ずカタリナ溝渠に沿ふて行き玉へと。帝唯々として出づ。時に一時前五分なり。蓋し此街路は一方に溝渠あり、一方には花園を圍める高き壁及數多の大建築物の甍を並べて聳ゆるあるが爲め、之を警備すると極めて易ければなり。あ丶、されどペロウスカヤを初め五人の謀殺者はこ丶に奔走して帝の通行を今や遲しと待ち構へつ丶ありたるなり。

此日、天よく晴れて皚々たる銀世界は人目を眩ゆからしむるばがり、人畜蹄橇、縦横驅馳して四方の眺め何となう清新の色を添へたらんが如し。一行は事なく式場に着して帝は龍顔美はしく數多の將校と笑ひ談じつ丶式を了り、即時還御を仰せ

出されて途に親しき從妹カタリナ大公夫人を訪ひ、晩餐前皇后と『夏園』に散歩せん考にて歸宮を急ぎ、午後二時已に二頭曳の橇に乘じて冬御殿への歸途にあり。六人の近衞哥薩克は馬上、帝の左右を警衞し、第七の哥薩克一兵士は馭者の傍に坐し、玉橇の後ょは警視總監ドヲルイッキー大佐あり、之に續きて大尉コッホが乘れる橇あり。一行はカタリナ溝渠の荷上場を去る殆んと三百歩ばかりの所に至りけるに、忽にして列の四周は雪と砂礫塵埃と朦々たる硝煙ともて閉されて轟然たる恐ろしき爆音を發しぬ。ペロウスカヤはリスサコフをして第一彈を投せしめたるなり。之が爲に玉橇の後部と其窓とは打ち破られけるが、帝は左足に一の打傷を受け玉へるのみにて恙なかりしかども、彼の護衞兵の一人と頭上に籠を載せて其場を通りか丶りし一小兒とが爲に傷を負はされたりと聞きて忿怒の情に堪へず、橇を止て誰何せん欲し、馭者の肯んせざるをも聽かで彼の腕に纏へる手綱を採り強て橇を下り、大佐と共に負傷者に向て兇漢何れにあると問ひ玉へり。既にして大尉コッホは投彈者の何人なるやを知り、直に行てリスサコフを捕へければ、帝は大佐と共に之に向て其歩を進めぬ。此時市人の集り來れる者既に群をなせり。帝

が橇の上に坐せし一哥薩克は之を見て密に危ぶみ、帝を諫むるに群集に近づくなからんことを以てせしに、帝は無用の言なりとて用ゐ玉はず。之を大佐に勸告せしに、大佐は叉手を打振りて聽かず。帝は今やコッホが捕へたる兇行者の前三歩に立ち、大尉に問ふて曰、此者なるか。大尉曰、然り、陛下、彼は一市民にてグリアッノフと稱する人よなど。然る後又ドヲルイッキーに向て曰、爆裂の場所は何處ぞ、之れを見んと。かくのたまひつゝ玉歩を返し玉ひし時、帝は其色青ざめて、悽愴の色彼の面てを蔽ひたり。帝の護衞兵六十餘名ありと云ふ、彼等今や何處にありや。彼等は此時活潑なる姿勢を採り、頭に帽子を頂き、兩腕を組みて街路の上に立ち、溝渠の荷揚げ場なる柵に倚りかゝりつゝありし怪しげなる一青年に氣附かざりしか。帝の歩は次第に此若者に近きて其前を通らんには衣と衣相觸れぬべきばかりとなれり。此時青年は俄に彼の兩腕を上げ、何やらん閃ける者を帝の足下に投ずるよと見へしが、忽にして火山の爆裂じたらん如き轟き脚下に發して、紅なせる雪の飛沫と濃き煙との間に傷ける人の叫聲呻聲交々起りぬ。大佐も投彈者も悉く朱に染みて、右往左往に飛び散りたる衣服武器の間に横はり、ツアールは其上身と漸く溝渠の柵に支へ、其兩脚は粉碎せられて帽子なく、頭髮を亂したる儘地上に平伏し、血潮は滾々として出でゝ止まず、氣息正に奄々たり。皇弟ミハイル大公變を聞て馳せ來り、帝の前に跪きて曰、アレキサンドルよ、余の聲を聞くかと。帝物言はんとして唇を動かし、微かに答へて曰、然り、聞き得べしと。衆即先づ帝を近隣の家に荷ひ之に繃帶を施さんとせしに、帝纔かに云て曰、速に速に歸らん。居殿に運べ。ろこにて死なんと。これツアールが最後の聲なりき。午後三時半、帝終に冬御殿に於て崩じぬ。

歷山二世在位廿六年、其間國の内外に向て施設する所甚だ多し。即領土の新に加はりし者三万平方哩、人口の增加する者三千万人、カウカザスは征略せられ、黑海は巴里條約によりて露國の海となり、ベッサラビヤは併領せられ、ブルガリヤ王國は新設せられ、國庫の收入從來二億六千四百万ルーブルなりし者膨脹して六億二千五百万ルーブルとなり、これによりて敎育費は前帝の時に七倍し、司法の費用も亦五倍し、小學中學を初め諸種の高等專門學校にして建設せられたる者尠からず。

七百キロメートルの延長を有する鐵道は三万二千六百四十三キロメートルとなり、正教會に屬する僧侶世襲の弊習は廢止せられぬ。帝の革新事業は多く一八六一年より六五年に至るの間に於て成れり。而して其最も大なる者四あり。一、農奴の解放、二、三十五縣に對して自治制を採用し、縣會を設けしと、三、裁判制度を改め被告は一定の法廷に於て審問することゝなせしと、四、莫斯科及彼得堡に出版の自由を許せしと是なり。

帝晩年の革新説に付ては諸説紛々たり。或は曰、一八八一年二月、帝憲法を制定發布するの意あり。二月二十五日(陽暦三月九日)既に大体に向て許可を與へたるも未だ之を公布せず、三月一日朝に及び公然吏を派して之が發布を命じ玉ひしに、此日午後不幸にも害に遭ひ玉ひぬと(グロスウエノルの『現代史』による)。又或人の云ふ所によれば議會召集の事は帝が凶變の前夜既に御璽を得たると公文書の或物によりて爭ふべからざるの事實なりと云へり。シエルの『虚無黨』にも三月一日朝、帝は皇后に向ひ、メリコフ伯の來らざるを訝り、翌日正に發布せんとするウカズに付きて、朕は此勅令が人民に與ふるに善良なる印象を以つてせんことを望む。こは實に露國に一新市民を賦與する者なればなり。朕は朕の出來得る限りに於て何物にても之を人民に與へんことを欲すとのたまへる旨見へたり。されど又チホミロフはメリコフ伯の友コヘレフと云へるが伯の事に付て記せし者によれば、伯は國民議會の召集に付ては最早帝の同意を得るの望絶へたりと其友に述懐したる由を記したり。かく事の秘密に附せられたるだけ、之に關する流説紛々たりと雖、兎に角にメリコフ伯が一の憲法案を懷抱してこれが帝末年の大事件たりしは否定すべからざるの事實なり。こゝには今ルロア、ボーリューによりて下の記事を作る。一八八一年の初めメリコフ。アバザ及びワルユエフ等諸大臣の案たる國民議會召集の一大提議は、稍ゝ皇帝の同意を得るに難きが如き者あり。然るにツァールは一日、閣議に臨みて曰、諸卿、卿等の朕に提言する所はこれ即路易第十六世の所謂ノタブル議會なり。卿等能く彼の時に於ける結果を記憶するや、されど卿等にして尙ほ若し國家の爲めに切要なりと固執せらるゝあらば、朕は敢て之を拒む者にあらずと。遂に之を元勳會議に附し、皇太子を初め諸の親王皆之に列して討議したりしが案は可決されたり。由て更に委員を任命して逐條審議せしむることゝなり、此等の人々は

アニチコフ宮殿に參集して皇太子の御前に之を評議し、年の二月に於ては代議院の召集案は帝及皇太子の承認を經て、今や只其發布を待つまでとなりたりしが、此時帝は恰も新后を迎ふるに忙はしくして之れが布告を遲怠し、三月一日日曜、彼が觀兵式に臨まんとて發するに際し、漸く命をメリコフ伯に下し、明日月曜を以て官報紙上に之を揭載すべき旨を傳へ玉ひたり。此日兇變あり。而して新帝の即位を以て政府の政略は突嗟の間に一變するには至りぬ。

因に記す、昨年五月刊行の『ノース、アメリカン、レヴイウ』にクラポトキン公の筆に成れる『露西亞に於ける現在の危機』と題する一篇の論文あり。歷山二世の憲法案に關し頗る參考すべき節なきにあらず、由て茲に之を抄譯す。彼曰實に人若しローリス、メリコフ伯の備忘錄を初め當時に於ける諸種の材料を閱したらんには必ず憲法發布の歷山二世の終りの數月間に於て頗る熟しつゝありしを發見せむ。而して此事の實行せられざりしは一方に於ては皇帝の心に恒心を欠きたるにより、又他の一方に於てはメリコフ彼自身に於て果斷の乏しかりしによる。歷山二世の如きは侍臣の之が決意を强ゐしむるを要するの人なり。然るにメリコフの爲す所こゝに出でず。遂に空しく好機を逸せしむ。彼は實に此目的を遂行するに足るべき確乎たる意志を有せざりき。何れにしても次の事實の實際に於て之ありしは之を否むべからず。一八八一年三月十三日、歷山二世はメリコフと共に一の勅令に調印し、次の木曜日に於てアスサムブレーデ、ノターブルの召集案を國務院に下し、之が審議を經せしむべき旨を命じ玉へり。其所謂議會は各地方議會ゼムストヲが撰ぶ所の代議士より成り、國務に關して辯論協議する爲め彼得堡に召集さるゝ者なり。然るに此日帝不幸にして害に遭ひ玉ひ、而してメリコフは即日此勅令を元老院の印刷課に送致して刊行せしむべきに之を遲延し、新帝歷山三世の命を待ちつゝありしが、帝は數週日の後、己自身專制君主たらんことを決心すてふポビエドノスツエフの筆にかゝれる諭告を公にし、之によりて先帝の信任せる各大臣はメリコフ共々職を辭して退きたり。

歷山三世は當初確かに此憲法を許さんことを思念しつゝあり、自ら手書を皇帝コンスタンチン大公に送りて其旨を明言せし程なりき。然るに反動主義者は其間に大に起りて終に帝の意を妨げ、其態度を一變せしめたり云々。

歷山二世、謀殺の難に遭ひ玉へると前後七回、之に未遂に發露したるものと、何等かの理由によりて實行せられざりし者とを加ふれば其回數實に十一に及ぶ。其七回とは即ち左に揭ぐる者なり。

一　一八六六年四月四日(我慶應二年三月二日)カラコゾフの狙撃。

二　一八六七年七月六日(陽暦十八日、慶應三年六月五日)歴山皇帝巴里に幸して大博覧會に臨み、此日佛帝ナポレオン三世と同車にて露の二皇子を伴ひ市中を遊覧せしに、波蘭人にてベレッォヴズキーなる者、雑沓の中に隠れて歴山帝を狙撃したるが、第一丸は帝の馬に中り、第二丸も亦狙ひを外れて即時縛に就けり。

三　一八七九年四月二日(明治十二年四月十四日)ソロウユエフ五回の狙撃。

四　同年十一月十八日、アレキサンドロウスクの地雷。

五　同月十九日莫斯科に於ける地雷。

六　一八八〇年二月五日(明治十三年二月十七日)冬御殿の爆發。

七　一八八一年三月一日(明治十四年三月十三日)の變。

兇行者はシェリャボフを初めペロウスカヤ。ヘルフマン。キバルチッチ。ミハイロフ。リスサコフ及グリヂキッキーの七人にして巨魁シエリャボフは既に事變の二日前縛に就き、リスサコフは現場に縛せられ、グリネキッキーは已が投じたる爆裂彈

兇行者の公判

の爲に重傷を負ひて斃れ、變の翌日ヘルフマンは首都テレシュナヤ街の爆發物製造所に捕へられ、チモテー、ミハイロフは三月三日、ペロウスカヤは十日、キバルチッチは十七日夫れ〳〵捕縛せられ、リスサコフは兇行の現場に於て其懐中に總量六磅三分の一の大爆薬を有したりき。此等の人々は蓋しシェリャボフが此大目的の爲に民意黨の各團体より募集せし決死の四十七志願者に就き殊に抜摘せる所なり。被告一同の捕縛せらるゝに及び聽で公判は開廷せられ、法廷には諸の貴顯列席し、一切傍聽を允さず、只外國新聞記者十名、露國新聞記者五名の爲に其席を設けたるあるのみ。おゝには先帝の黒装束せる大なる御眞影を掲げ、裁判長は元老院議官にして最高裁判所に長たるフーチス之に當り、其他元老院議官四名、檢事トラレフ及びポストズキー等之に陪席せり。證據人六十四名、鑑定人十一名ありと稱せらる。開廷に臨で僧侶は宣誓を掌り、次で告發狀朗讀せられ、二時間にして了り、夫よりシェリャボフの糺彈及先帝の馭者の審問あり。是に於てシェリャボフは此法廷に對して抗議を申し立つる旨を提言し、我等數人の所行に付て審問せんとする裁判所は直接に人民をして組織せしむべし、否らざれば人民の選出したる

代表者を以て組織せしめざるべからず、且或る場合に於ては陪審官をして犯罪人を糺さしめざるべからずと主張せしが、裁判長は素より之を採用し得可らざる所以を説明し、且曩にゴルデンベルグの白狀によりて得たる彼の口供書を證據として讀ましめたり。斯くて被告は裁判長の訊問に應じて一々吟味を遂げられけるが此時勞働者より身を起せしミハイロフは、政府の勞働者に對するあまりに不親切を極むるが故に余は敢て民意黨に投じて之に反抗したりと公言し、キバルチッチは又余にして若し政府の壓制政治に反對するの要なかりしならば、何を苦んでか破壞的武器たる爆發物の製造を事とせんや、余は寧ろ可憐なる農民の苦役を輕減せしめぬべき器具の發明に潜心すべかりしなりと陳述し、ペロウスカヤは云て曰、我々社會主義者の都市に、地方に、至る所吾人の説を遊説せんとせし所以の者は精神上及物質上に於て人民現在の狀態を革新せんことを望めばなり。然るに政府は吾人を壓し、吾人の運動を妨げたり。これ實に吾人の政府に對して戰を宣するの已むなきに至りたる所以なり。而して吾人の遂にアレキサンドルを弑せんことを決心したるは全く彼が社會黨に對する態度及び其内治の方針に於て變化の希望なきことを認めたるによると。三月二十九日、彼等は悉く絞罪を宣告せられ、唯ヘルフマンのみは懷妊中なるを以て殊に刑の執行を延期せられ、爾餘の六人は四月三日朝を以つてセメノウスキーの刑場に引致せられ、互に接吻したる後、泰然として死に就きたり。當時此場に臨みて見物したりし者の言ふ所によれば、シエリヤボフとキバルチッチとは至て沈着にして毫も動ぜず。ミハイロフは色青ざめたれどもおちつきはらひ、リスサコフは全く力を失ひて且つ憔悴し、ペロウスカヤは驚くべき程に毅然として、美はしき其顏面には少々の色さへ帶びたりしと云へり。

左に彼等の略傳を擧ぐ。

グリ子井ツキー

イグナッツ、フオン、グリネキッキー

三月一日の投彈者グリネキッキーは波蘭人なり。一八五六年を以てミンスク縣に生る。彼の兩親は加持力信者にして小地主なりしも、家族多く家頗る貧なりしかば、イグナッツは非常の艱苦を嘗めつゝ、ベルスキーの諸藝學校に修學し、此時已に一八七二、三年頃の社會主義の流潮に動かされぬ。七五年、優等を以て卒業し、直に首都に赴きて其工業學校に入り、又革命黨に加盟して金錢を集め、通券を僞造し

シェリャボフ

勞働者の間に遊說しぬ。七九年キェフに於て暴動を起さんとして遂げす。此秋又首都に歸り、翌年民意黨に投じ、シェリャボフ及ペロウスカャの下に其勞働團を引率し、終に皇帝弑害の陰謀に加はりて死したり。彼既に已が彈丸の爲に重傷を負ひ死に垂んとして警吏の爲に病院に運び去られしが、此時人の彼の何人なるやを問ふ者あり。彼僅に口を開て曰、知らずと。又一言を發するなくして即日瞑しぬ。彼の黨彼の殉死を以てブルッス、ハルモディウス及アリストゲトン等の所行に比すと云ふ。死するの時年二十六。

アンドレ、シェリャボフ

彼は一八五〇年を以てクリミャに生る。農奴の子なり。主人彼の俊敏なるを見て之に文字を敎へ、且つケルチュの學校に送りたりしが、彼は夙に衆兒の間に頭角を顯し、銀牌を得たり。六八年、オデスサ大學に入り、其敎授に對して不穩の擧ありたる爲め一度放校せられ、又再法科大學に入學せしが、其三年に進みたりし時、又もや示威運動を行ひて退學を命せられ、由てゐれより北露の革命黨と交り、七二年終にチャイコウッエの一派と結び、頻に各所を遊說し、それより一時鄕村に歸臥し、妻を娶り子を産みて平和の生活を送り、妻は產婆として家計を助け、琴瑟和合せり。一八七七年、彼百九十三人事件に連累して首都に拘引せられたりしも七ヶ月にして放免せられ、由て又鄕里に歸りて農事に從へり。

一八七九年、彼斷然一身を革命的運動に委ねて土地自由黨に入りぬ。其リペック及ヲロテッシュの大會に於ける彼の活動に付ては己に吾人の記したる所なり。此年秋の鐵道地雷に付ては彼は主としてアレキサンドロウスクの方面を擔當し、翌年冬御殿の陰謀に關しては危險物の運搬掛となれり。彼殊に勞働者間に於て勢力あり。其組織する所の團体甚だ尠らず。彼常に言ふ、余は元來衆群を籠絡し、之を駕御せんが爲に生れ來れる者なり。勞働者の集會や、都市の街上や、皆悉く余が運動の場所に非ざるはなしと。彼辯舌頗る壯快にして火の如く、銳氣人に超へ、其精神の力就んと測るべからざる者あり。事に當る、常に衆に先じて自ら危險を冒し、能く多數者を統卒せり。彼は實に天性陰謀の領袖なり。其公判に附せらるゝや撿事は彼の豪邁不屈なるに驚嘆し云て曰、シェリャボフは陰謀者中非凡の雄物なり。其風采と云ひ、擧止と云ひ、思想と云ひ、辯舌と云ひ、すべて陰謀家の摸範と

して間然する所あるを見ず、優に小說中の人物を目のあたりにするの心地す。死の瞬間に至るまでも彼は尙ほ其陰謀者流の服裝を改めざりき。吾人は到底彼に於て聰明、英智、敏捷の三者を拒むを得ずと。彼は威風堂々たる一個の好丈夫にして其容貌には犯すべからざるの精氣あり。美髯を貯ふ。彼文學の妙を嗜み、其書に耽りて屢々曉に徹することあり。自然の風景亦其好む所、ネワ湖や大海は彼最も之を喜べり。又婦人の美を愛す。晚年ペロウスカヤ最も彼を愛慕し、彼又彼女の英氣俊敏なるを尊敬して窃に最愛の人となし、二人者の情交極めて親密なりしと云ふ。

ソフィア、ペロウスカヤ

皇帝被害の當時、時の民意黨や隱匿者の間に來往せし虛無黨の一婦人あり。此人一八八三年刊行の『民意』雜誌に一篇の懷往事談を載せ、題して『ソフィア、ペロウスカヤを懷ふ』と云ふ。其要はクプツアンコーにあり。頗る當時の狀態を想見せしむるに足る者あり。由て之を轉載す。

『余(右篇の記者)は某省の一官吏たる余の老友オレニンの宅にて初てペロウスカヤを知れり。此人一夜十一時頃と覺しきに靑ざめ疲れて室內に入り來り、倒るゝが如く椅子に坐しぬ。こはオレニンが自己の同僚中より集めし運動費を受けんが爲なりき。されど義捐金は未だ充分に得られずして彼は之をペロウスカヤに渡すこと能はず、稍々困却の色ありければ、余は明日彼得堡に來るべき某氏に渡さんとて其時有したりし一百ルーブルを出し、二日を期して之を彼女に貸與せんことを申し出でしに、彼はかゝる短時日の間に於て返濟し得んとは覺束なしと云ひて受けず。蓋し彼女は探偵の追尾に遇ひ、馬車を更ゆること數回に及び、爲に其囊底を叩くに至りたりしとなり。既にして彼女は、警吏の襲ふ所とならざらん中、早くも逃れ出でんとて去らんとしける故、余は彼女の困狀を察して盡く齎す所の金額を與へぬ。彼女此時余が自ら携へ來れる雜誌『民意』を燒棄せんとするを取りて己の懷にし、別るゝに臨みて余と再會の時日及場所を約して曰、若し幸にして命あらば又會するの時を得んと。然るに期日に至りて彼女來らず。余は心密に危ぶみつゝありしが、後には彼女の病の爲なりしことを知りて安せり。あれ實に三月一日に先つこと二、三日に於ける出來事にてありき。蓋しシェリャボフは余がオレニンの宅にてペ

ロウスカヤと會せし彼の夜の前夕既に捕へられ、彼女の其日來りしは全く皇帝弑害の企畫に付きて金を要するが爲めなりしとぞ。……………既にして皇帝遭難の後彼女より一日余の來訪を待つ旨の通報ありければ、余は大に喜びて彼女と會し、先づ速に首都を去るとの得策なるを勸めけるに、彼女は否かくの如き重要の時に臨で去るは不可なり。吾等は爲すべき多くの事を有す。我等は多くの人々を見ざるべからずとて聽かず（彼女は蓋し他のすべての同志の預期したりし如く此凶變を相圖として。露國内に暴動內亂の續々として起り來らんことを妄想しつゝありしなり）。由て余を呼び寄せし所以の皇帝弑害の顚末を語るにありとして彼女の愛する一男（シエリヤボフを指す）は矢張被告人の中にありとし、余が知れる一將軍にして警官の上位を占め、又密に力を虛無黨に致しつゝある者を訪ふて、皇帝謀殺者の公判如何を聞知し來らんことを余に請へり。余即之を諾し、獨り將軍一人のみに止まらず、なほ一兩年來の知己たる某憲兵をも訪ふて事情を探るべしと答へ、明日十時頃將軍の許に赴かんことを約せしに、彼女は性急にも早くこれが返答を聞かんことを求め、余が又再び彼女に忠告するに、暫らく邊境を旅行して一時此危險ある地を離れ、三週日の後又共に會するあらんことを以てしたるを笑ひ、そは畢竟杞人の憂慮のみとて頑として應せず、事に托して談話の題目を轉じたり。此日、彼女は多くの貨幣を所持し居り、之れを余に與へんことを申し出でたりしかども、余は別に之れを要することなきを以て辭しぬ。

次日、余、將軍を訪へば將軍果して慇懃余を迎へて精細なる談示あり。されどシエリヤボフの罪は最早死を免るゝこと能はざる者なりとのことなりき。余即此報を齎して此日夕六時、密會所に至りたりしに、ペロウスカヤは九時頃漸くにして來り會し此答を聞きて四肢ふるへ、頭を垂れて默然落膽するものしばし、余は彼女に向ひ速にオデスサに赴きてシエリヤボフの親戚を搜索すべきことを勸めしに、彼女は如何にすべきか、爲すべき術を知らずと云ひ、又暫くにして若ししかなさば我一人は遂に刑に後るゝに至るべしとて悄然として悲めり。余は又彼女に、將軍が余に向てシエリヤボフの勇壯にして氣高き態度を激賞せしことなど語り、彼の語を告げて曰總ての被告は巍然として只死の宣告を待つ者の如く眞に冷靜なりきと。之を聞きし時、彼女は長息して悲哀に堪へざる者の如く、將に泣かんとして、僅に抑へ、リスサコフが臆病にもすべて謀殺者の姓名を白狀したりとの流言を打ち消して曰、余は

ユーリー、ボグダノヰッチ

彼等を知れりリスサコフもミハイロフも決してしかく弱心なる者にあらずと。かくて我等は互に現在及び將來を語らひつゝ夜半に及びけるが、彼女は既にして踏踉として力なげに立ち上り、明日二時と三時の間に於て又此家に會見すべきことを約して去りぬ。余は翌日定時に於て至りぬ。彼女は早く來りしかど余を待つ能はずとて去りしとのことなりき。而して我等は又遂に相見ることを得ざりき。此後二日にしてペロウスカヤは捕はれたるなり』。

以上は女記者の記する所なり。之によりて吾人はペロウスカヤが疾を力めて三月一日の謀殺を指導したりし事を知る。

皇帝遭難の後三日、即三月四日、首都マラヤ、サドワヤ街に一の爆發物貯藏所發見せられぬ。こはユーリー、ボグダノヰッチが女員アンナ、ヤキモワと謀りて地雷を街下に備へんとしたる所なり。

ボグダノヰッチは素と貴族なり。一八五一年を以てプスコフ縣の一村落に生る。少時幾何學を學び、六九年、年十九出でゝ測量師となり、其革命的遊説を好むの故を以て終に職を辭して之を農民間に宣傳せんと決心し、七四年同縣ヲロニン村にありて馬蹄工たる實兄を訪ひ、之が徒弟として住み込み、當時同村に滯留せしソロウユェフ及びアドリアン、ミハイロフ等と相來往しぬ。七五年、莫斯科なる革命黨の大會に臨み、翌年彼得堡に出で革命黨撒文の起草者となり、之よりサマラに轉住し、イワンチン、ピスサレフと共に僞名を以て各方に遊説し、又共に村の書記となれり。一八七八年、彼サジョフに至り、僞稱して勞働者の間に群し、止ると七ヶ月、又書記となり、密に革命論を皷吹し、其ツァレウシュチナにあるや、フィリプポワ、フィグネル姉妹と交れり。七九年春、サラトフより首都に至りしが、恰もソロウユェフの謀殺事件ありて永く其地に留ると能はざりければ、一時去て又歸り來り、リペック會議の綱領を是認して民意黨に加名し、一八八〇年、實行委員の囑托を受けて皇帝弑害を企て、マラヤ、サドワヤ街に墜道を穿ち、之を爆發せしめんとせしが、警官の偵求嚴なりけるより逃れて歐露の各地及西比利亞を漂浪するもの一年、至る所遊說して黨勢を擴張し、數多の倶樂部を新設し、然る後莫斯科に歸り、サドガヤ街なるベチュコフの宅に潜伏したりしが捕はれて刑に處せられぬ 彼は一八八三年三月二十八日より四月五日に至る公判を彼得堡なる元老院に於て受け、彼の外十六名の同志それ〴〵吟味を受けし後、彼は他の五人と共に絞罪を宣告されしが、アレキサンドル三世。の恩命により減刑せられて終身西比利亞鑛山の懲役を命ぜられぬ

（三）

歷山二世變死の事は民意黨の熱狂者が豫想せし如く革命を沸起せしむるまでには至らざりき。然れども國內の言論界は之が爲に影響せられて憲政を主張し、帝國從來の政略を變更せざるべからざるを絕叫するに至りたり。三月十日、大概其首領を失ひたる實行委員の殘員は相集りて事業の繼續を議し、又書を新帝歷山三世に上りぬ。其文永しと雖、大に革命黨の眞意希望を窺ふに足る者あるを以て玆に之を譯載す（ステプニヤック『地下の露西亞』による）

歷山三世皇帝に上るの書

陛下よ、實行委員は陛下が今躬自ら實驗しつゝある心中の苦悶に向て同情を寄す。されど假令ろは同情よりするにせよ、敢て此處に一の宣言を奉ずるを躊躇する能はず。これ尋常一樣の人情よりも一層高尚なる者あるを思へばなり。ろは國家に對する義務あり。吾人は之が爲には嘗に吾人の生命欲望を捧ぐるのみか、なほ又他人をすらも犧牲に供するを厭はざる者なり。吾人は此尊重すべき義務の驅る所となりて敢て陛下に上書す。蓋し戰慄すべき紛擾と血闘とを未然に防止せんが爲には一刻も躊躇すべきに非ざるを知ればなり。

カタリナ溝渠の悲劇たる、決して偶然の出來事に非ず。又今更喫驚すべき所以の者に非ず。蓋し過ぐる十年間に於て起りたりし事を以てすればろは免るべからざるの運命なればなり。苟くも一國の君主を以て居る者、今や最も沈思を致さゞるべからざるの秋。

斯る變事を以て個人又は團体に其罪を課せんとするは抑ゝ民生を知るの明なき人とや云はん。全十年の永き、非常なる虐待を被りたるに拘らず、先帝の政府が人民の精神上並に物質上に於けるあらゆる利益を犧牲に供したるにも拘はらず、即一言にして之を言はんか、之を壓抑する爲めあらゆる手段を採りたるに拘はらず、革命的運動は日を追うて益發展し來りたるには非ずや。我國に於ける最有力なる最も精力ある人物の大多數が、生を睹して我黨の運動に加盟したるには非ずや。あゝ、全三年の間我黨と政府との間には、絕へず決死の戰闘は繼續せられたり。

陛下は先帝の政府が力に乏しかりしてふを口實として其責を免れ得べきもの

にあらざるを允すならん。罪ある人も、無辜の人も一様に絞殺され、牢獄と遠地西比利亞とは罪人を以て充たされたりき。所謂吾人の主導者なる者は多く捕はれ且縊られたりき。

彼等は古殉難者の如き冷靜を以て悠々其死に就けるなり。されどこは運動を牽制すること能はずして却て益々其勢を激せしめたり。陛下よ、革命運動は決して個人に關係せしことに非ずして寧ろ社會有機體の進行なり。然るも之に反對して建つるに絞臺を以てし、由て以て事物現在の秩序を保持せんことを期す、其力の及ぶべからざるや智者を俟て後知らざるなり。見よ、イエスの上に課したる十字架の刑は腐敗せる舊世界の維持に堪へずして却て基督敎をして永延の勝利を得せしめたるに非ずや。

政府は意の欲するがまゝ、或は之れを縊ることを得ん。又由て以て一部の革命團体を壓服撲滅することを得ん。吾人は又彼等が其革命の肝要なる機關を打破することに於て成功し得べきを認めん。されどこは到底事物の有樣を變更するの力をば有せざるなり。何となれば革命黨は一般の不平と政府の處置とによりて事變のあると共に益々膨脹し來るべければなり。

全國民を壓倒するは不可能なり。國民の不平を壓するに嚴峻なる方法によらんとする、尙ほ更に出來得べきことに非ず。そは徒に其不平、精力及武力を增すのみに過ぎざるなり。後進者が先進者の成敗に鑑みて一層已を整制し來るべきはこれ自然の理、革命黨の機關は時の進歩と共に其數と實力とを增し來らんのみ。吾人今日に於ける位地全く之なり。政府はドルグシン團や、チャイコウツエ團や、將た一八七四年に於ける遊說者を壓服して果して何等の利益をか得たる。空しく一層勇敢なる統率者をして彼等に代らしめたるのみに非ずや。

一八七八、九年に於ける政府の壓制は終にテロリストを胚胎したり。コワルスキー。ドブロキン。オッシンスキー。リゾグブを殺したる何等の益かありし。革命團体の少數者を撲滅し、刈除したる何等の益かありし。此不完全なる機關の代りに一層鞏固なる組織が自然淘汰の作用によりて生出し、而して最後に起りたるは實に實行委員其物にして、政府の之と戰ふ今尙ほ其効なきに非ずや。

吾人にして若し公平なる觀察を黯澹たる晩近十年の經歷に下さんか、吾人は政

府の政策の一變せざる限り、革命運動將來の運命如何の容易に先見し得らるべきを思ふ。ろは增し來るべし。兇行主義者の運動は一層鋭くなり來るべし。革命黨の機關は一層完全に、且鞏固なる形式を採るに至るべし。人民の不平を喚起せしむべき新しき原因は續々として出で來り、政府の信用は遂に地を攘て去るべし。革命思想、其可能、其不可避は絕へず民間に確乎たる其根據を得來るに至るべし。

全露國に渡る恐るべき爆裂、血腥き革命及絕へざる混動は遂に全く舊事物を打破するに至らん。

陛下よ、ふは怕るべく亦驚くべき前途に非ずや。然り、實に悲むべく驚くべし。此等を單純なる紙上の空言と誤認する勿れ。吾人は破壞事業に於て又此肉鬪に於てかくまでも多くの智能と精力とを空しく捧ぐるの損失は、之を他の事業の下に利用して有益なる勞働や、智識の開發や、將た一般の幸福の爲に大に爲し得る今日の時に當りて、如何ばかりの患事なるかを熟知する者なり。

然らば何故に此悲むべき肉鬪を敢てするの必要あるか。

陛下よ、こは今日の政府が其語の眞意義に於て決して正しき者と云ふを得ざればなり。抑ゝ政府なる者は肝要なる生存の原理に從ひて人民の志望を表明し、人民の意志を遂行すべき者なり。されど願はくはかく云ふを允せ、我國に於ては政府は全く一の純然たる内廷(カマリラ)なり。實行委員よりも彼等こそ却て『簒奪者の一隊』なる名を價すべき者なれ。

皇帝陛下の政策の如何に拘はらず、政府の處置は人民の志望及其幸福に對しては全く無頓着なり。

帝國政府は既に人民より身体の自由を奪ひ、彼等をして貴族社會の奴隷たらしめ、之が爲に今や投機師や、高利貸の有毒なる一階級を發生せしむるに至りたり。あゝ、あらゆる政府の改革も徒に人民の境遇を惡からしむるに了らんとす。人民は啻に彼等共通の利害の爲に働くの自由を有せざるのみならず、彼等自身の宅内にありてすら恥づべき束縛を受けざるべからざるまでに貧困と不幸とに沈ましめられたり。

市井無賴の徒にして初て爲すが如き收斂を行ひて而も幸に國法の罰する所と

あらざる殘忍酷薄の官吏のみが、政府の保護の下に獨り太平を謳歌しつゝあり。顧れば公共事業の爲に碎身せる正義の士の如何に驚くべき運命に沈淪しつゝあるよ。陛下よ、陛下自身も亦必ずや窘逐され、流放せらるゝ者、獨り社會黨のみに非ざるを了知せん。

此の如き組織狀態を有しつゝある政府、之をしも纂奪者の一隊と云はずして將た何物を指してか云はん。

これ實に露國政府の人民に對して何等道德的感化のなき所以、かくまでも多數の革命黨を生ぜしむるに至れる所以、又皇帝弑害の如き大事變が人民大多數の間に同情を博するに至りたる所以なり。

此の如き位地より脫却するの途二あり。即死を以て威嚇せらるゝも尙は避くべからず又妨げらるべからざる革命によるか、將た政府の事業を助けんが爲め人民に割くに大なる權力を以てするか何れか一つなり。

國家の利益を考て智能精力の冗費を省き、又恐るべき革命の慘毒を避けんが爲には、實行委員は敢て陛下に上奏して第二の途によらんヿを勸告す。速に無上の主權に制限をおき、人民の良心と意志とが撰べる者をのみ實行するヿを確決せよ。然らば陛下は陛下の政府を凌辱し、陛下の近衞兵を打ち破り、又陛下の絞臺を燒く所の我等の陰謀を発るゝヿを得ん。

果して然らば我等實行委員は速に其活動を停止し、其組織せる勢力を解放し、以て向後の一生を文明や、敎化や、民福等の有益なる事業の爲に委ねんなり。

吾人の寧ろ陛下の諸臣よりも厭ふ所にして只必要已むを得ずして其手段によれる暴行は永く去て平和なる言論の爭とならん。

吾人は今、年來繼襲し來れる偏見と過誤とを去りて陛下に告ぐ。永く吾人を欺き、かくまでの迷惑を吾人に與へたる其權力の代表者なるヿを忘れて陛下に告ぐ。吾人は又恰も正直なる一市民に物語る如く陛下に告ぐ。

吾人は一身の悔恨が陛下に於て毫も義務の感情又は眞理に耳を傾くるの高懷を阻むなからんヿを望む。

吾人も亦悔恨し得べし。陛下は最愛の父を喪ひ玉へり。吾人も亦吾人の父のみならず、同胞、妻子及び良友を喪へり。然れども若し露國の福祉にして求めら

るべくむば、吾人は喜で此執念を擲つに吝ならざるなり。陛下も亦願くは怨みを忘れよ。

陛下よ、吾人の提案に付て怒り玉ふこと勿れ。革命運動の平和なる開展に向て必要なる條件は、吾人の作る所に非ずして寧ろ事變の作爲する所たればなり。吾人は單に此處に此等の條件を列擧す。吾人の見る所を以てすれば彼等は少くとも二つの主なる約束の上に建設せらる。

第一　すべての國事犯罪人に對する一般大赦。

何となれば彼等は只市民として彼等正當の義務を竭したる者にして、其行爲は毫も犯罪を構成せざればなり。

第二　人民の要する所、願望する所に從ひて社會及政治生活の最も善き形式の何物なるかを研究せんが爲め、人民全体より其代表者を召集する事。

但し吾人は人民を代表すべき權力は只其撰擧が全く自由に行はれたる時に於てのみ有效なることを附言するを必要なりと信ず。故に撰擧に關しては左記の條件を附すべし。

一、代議士は人民の數に順じて階級、區別の制限なく撰定せらるゝ事。

二、撰擧人及代議士の資格には何等の制限をも置かざる事。

三、撰擧及撰擧運動は全く自由たるべき事。

仍て政府は以上述ぶるが如き議會を召集するまで準備的法令として下の事を行ふべし。

一　出版の自由

二　言論の自由

三　集會の自由

四　撰擧演說の自由

以上述ぶる所は只露國が平和なる規則正しき發展の途に入らんが爲めの手段たるに過ぎず。吾人は國家の前に否全世界の前に堅く誓言す。我黨は以上の條件を基礎として召集せられたる國民議會に對しては無條件にて服從し、又其國民議會が制約し得べき政府に對しては向後何等の反抗をだもなさゞるべきことを。

ガーフィルドの遭難に關する實行委員の宣言

陛下よ、今や時來れり。之を撰ぶ一に陛下の方寸にあり。速に之を決せよ。吾人自家に關しては吾人は只陛下の良心及其判斷が全露西亞帝國の福祉、陛下自身の品位及社稷に對する陛下の義務等に付て解答すべき唯一の進路を陛下に暗示するあらんことを望むの外他なし。

實行委員

一八八一年三月十日

一八八一年三月十二日『民意』事務所に於て刊行す。

此年七月二日、北米合衆國大統領ガーフィルド害に遭ふ。是に於て實行委員は此事件に關し十月二十五日、發行の民意雜誌第六號を以て彼等の所見を述べて曰『吾人は大統領ジェームス、アブラム、ガーフィルドの遠逝に付て深厚なる同情を米人に寄すると共に我々實行委員は露國革命黨の名を以て這般のあらゆる罪惡暴行に對して抗言するの餘義なきに至れるを感ずる者なり。國民の一般に平和にして自由なる論議を許す國体にありて、民意が啻に法律を作るのみならず、又其主治者を任意撰擇し得る國体にありて、かゝる政治的暗殺を行ふが如きはこれ正に專制政治に異なるとなき虐政的傾向を示す者なりと云ふて可なり。之れを撲滅せんが爲には吾人は露國にありて遙に全力を竭すを吝まざる者なり。專制や、假令個人によりて爲さるゝとも、將た黨派によりてなさるゝとも、等しくこれ嫌忌すべき者なり。暴行は唯暴行に抵抗して行はるゝ時に於てのみ初めて其正當なることを認容せらるべし』と（ステプニヤツク『露西亞の風雲』二〇五頁）之によりて略ゝ猛烈なる彼等暗殺主義者の本意何れにあるやを知ることを得。

反動主義の勃興、其勝利、

歷山三世の初年にありて先つ決定せざるべからざる重要なる問題は先帝の遺せし議會召集案（既に云へるが如く案の内容其物の如何に就ては全く吾人の知る能はざる所なり）の處分にてありき。然るに之に就ては反動の勢勃然として大に起りたり。其領袖は實に皇弟ウラデミル大公なりき。彼は皇族中最も有爲なる人、其專制主義を以て主として革命黨に讓歩するの非なるを主張したり。二世皇帝の死後一週日、臨時内閣會議開かる。此時專制政治の敵たることを以て内相メリコフ伯を論難する者あり。伯即ち立て皇帝の位をして萬々歳ならしめんとする、改革新政によるの外なきを辯じ、議會召集案は終に投票に委せられ、而もそは五票に對する九票の多數によりて改革派の勝利となり、先帝

の遺勅は既に發布せらるべき者と決せられしが、帝が未だ之が公布を因循するの間に反動主義者は密に大に運動する所あり、之によりて敎務院は先づ帝の保護を名として出で來りぬ。ウラヂミール大公及びポビェドノスツェフ等は有名なる國粹黨(スラヴオフイル)の論客アクサコフと結びて大勢力を有する團体を作り、之によりて大に帝を動かせり(以上の記事チホミロフ『政治上及社會上ょ於ける露西亞』ょよる、之をルロア、ボーリユーよ見へたる記事と對照すれば稍反復する所あるが如く思はるゝも今は便宜の爲め玆に之を抄錄す)。スコベレフ將軍又之に加盟せんとを勸めらる。素より聽かず。帝が議會召集案の發布を遲疑するを默視するに忍びず。書をメリコフ及イグナチェフの二伯に與へて曰、宜しく速に帝をして議會召集の詔勅に調印せしめよ。若し帝にして之を否まば、彼を監禁して之を强制すべしと。當時獨帝維廉一世又頻に歷山帝に忠告するに斷行の得策なるを以てし、又メリコフ伯所藏の遺翰によれば當時帝は確に之を許すの意ありしと云ふ(此段クラポトキンの懷往事談による)。然るに漸次改革派の境遇は變移して國粹派の勢力之を壓倒し、四月二十九日、彼等は改革派の諸大臣と一應の協議だも經ずして恣に一の告示を發し以て保守的政治に反るの意を發表するに及び、メリコフ伯等之が橫暴を憤ると雖、亦如何ともすべきなく、幾くもなくして非專制主義の各大臣

メリコフ。ザブロフ。ミリウチン。ゴルチャコフ及アバザ等續々として盡く職を引て去るに至り、先帝の遺案はこゝに全く敗亡して、國粹派の大勝利に歸せり。

此反動主義の勃興は從て言論の箝制を喚起し、內相イグナチェフは盛に御用紙を發行して自由主義を壓倒せんとせり。之が爲め帝即位の日より其戴冠の時に至る僅々二ヶ年の間に罰に處せられたる新聞紙の數は二十八種、頻繁なる發賣禁止、發行停止等の爲めに自由主義を主張する新聞紙の如きは一年中其半ばは發行することを得ざるの有樣となり、爲に其十三種は廢刊せざるを得ざるに至り、嘗て『警察新聞』の一記者は歷山二世の紀念碑と記すべきと三世の紀念碑と誤植したるの過失により七日間拘留所に留置せられたるが如き事あり。內務省は又時々刻々紙上の掲載を許さゞる條項題目を各新聞雜誌に達示したり。例へば一八八一年にありては皇帝弑害者の公判に關する官報以外の記事(三月二十五日)諸大臣一身上の變故に關する記事(五月一日)帝及皇族行幸の場所の預報(七月十六日)將軍チェレキンの遭難に關する記事(十一月十三日)等を禁じ、翌八二年にありてはストレルニコフ暗殺者の公判に付官報以外の告示(三月二十一日)猶太人問題に付ての記事(四月

二十日)、カザン大學の騷擾に關する事(十一月一日)、及暗殺主義者に反抗する秘密結社に關する記事(十一月廿五日)等を停止したるが如し。

因に記す、一八八四年政府は百二十五種の書籍を繙閲することを禁令したり。此中よは數多の露國文人の著書冊子あり。外人の書にてはルイ、ブラン。プルードン。ラッサル。マルクス。アガシッヅ。ケテレー。スペンサー。アダム、スミス等あり。。此外シユードルの共産主義、エリゼー、レクルスの地理學等あり。但しスミスの著は其後此禁を解かれたり。

猶太人窘逐せらる

イグナチェフは其就職の初年よりして大に非セミット的政略を採り、國粹主義を其極端にまでも推及して盛に猶太人を窘逐し、バルタに於ては地の農夫等故なくして九七六戸の猶太人の家屋を破り、其二一九人を死傷せしめ、同時に新敎徒も亦迫害せられたり。すべて八一年四月より十一月に至るの間に於て猶太人にして放火、掠奪及殺害の手段により其家を失ひたる者十萬、市町村の荒廢せられたる者一六〇に及び、損害高千六百萬磅に上りたり。然れども此暴政虐壓にも拘はらず、

民意黨の諸謀殺

民意黨の兇行は依然として尙ほ其勢力を逞うし、此年探偵にして害せられたる者首都にてプライム(六月二十九日)あり。ワルシャウにてノイマンあり。十一月十三日にありては憲兵隊長官チエレキン將軍暴行を加へられ(但しこは實行委員の命令によりたるに非ず)翌八二年に至りては一時ハルコフ大學の騷擾あり、三月十八日、撿事長ストレルニコフ。オデスサに於てハルッリン及シエルワコフの銃殺する所となりぬ。なれ彼が虚無黨員を以て獨り國家の公敵と認めしのみならず、尙ほ自身の仇敵を以て目して容赦なく告發嚴罰したるが故なり。此外西比利亞の知事イリアシェキッチはチタに於て(九月十六日)流刑女囚クチトンスカヤの加害する所となり、八三年十二月十六日に於ては首都にて警官スドヴスキー及憲兵隊長大尉ゲオルグ、ズデーキン共に殺さる。又クロンスタットに於ては爆發物の製造に用ゐし一大家屋發見せられて海軍士官にして嫌疑を被りて捕はれたる者あり。

皇帝に對する謀殺

旣に帝卽位の後三ケ月、首都カメンチー橋下に隧道を穿ち、地雷によりて帝を弑せんことを企てし者あり(この陰謀は六月六日發見せられたり)。八三年二月五日、彼得堡大學內の窖に一の怪しげなる火事なり。秘密探偵は其混雜の間に於て二人の虛無黨員を捕へたり。彼等は種々なる秘密書類及暗號字もて認められたる手紙を携帶しければ之によりてハルコフに於て捕はれたる女員フィリッポワ、フィグチルに關する事、及戴冠式の日に於ける皇帝殺害の計

革命黨を嚴制す

書等に付き知悉することを得たり。續て多くの人々縛に就きぬ。又首都の或る帽子製造所が密に爆發物を造りつゝあると發露して其陰謀の本營と共に沒收せられ、本營にありし八人の虛無黨員は憲兵警官と戰鬪したる後捕縛せられたり。此處には八磅のダイナマイトが秘藏せられありしと云ふ。此の如く皇帝に對する謀殺は頻々として企てられて身邊寸毫の間隙をも許さゞりしを以て帝は登祚匆々、ガチナの密殿に逃れ、密に此地に潜伏して其所在地を隱蔽し、又容易に臣下を引見せざりき。蓋し此地は首都ワルシャウ、莫斯科及クロンスタットに至る四條の鐵道の交叉點にして、往年曾てパウル一世の隱れし所なり（歷山三世の未だ皇太子たりしや、虛無黨の暴行を畏るゝこと甚しく其御所たるアニチホフ宮殿の周圍地下に又廊下を造りて其墜道を穿たんとするよ備へたりしと云ふ）。一八八二年三月十二日、皇帝嚴令を下して虛無黨を壓抑す。曰、國事犯を以て問はれて追放の刑に處せられし者は學校に入ることは元より、手工の如きをすら習得することを禁ず。すべて革命黨は會議し、學術會に入り、劇場に入り、圖書館に入り、活版所に入り、石版師又は寫眞師の店に入るを禁ず。旅勞働者となることを禁ず。醫士となり、化學士となり、産婆となることを禁ず。すべて新聞雜誌に投書することを禁ずと。然るに翌八三年に至りて民意黨は『黨の準備

『黨の準備的事業』

的事業』なる一の布告文を印行しぬ。之は是より先一八八〇年同黨の實行委員が自ら革命の方法に關して起草したる原案を各地方團に回送し、之が批評訂正を受けたる者にして、一の緒言と六項の條件とより成れり。其所謂六項とは一、黨の中央機關。二、特殊及地方機關。三、都市の勞働者。四、軍隊。五、新智識及青年。六、西歐即是なり。其緒言の要に曰、吾人は今や吾人の大目的を遂げんが爲に益々勢力を擴張せざるべからず。其目的とは何ぞや。曰、民意を以て國法唯一の基礎となし、之に由て以て國家的及社會的存在を形成するの一事即是あり。而して之を遂行せんとする、須く先づ今日の政府を打ち倒さゞるべからず。常に現政府の虛隙を窺ひて之を打擊し、破壞せんことを必せざるべからず。而して吾人は之が爲に六つの準備的事業を要すと。かくて一々此六項を細說せり。

一、黨の中央機關。公然たる黨派運動は我國々法の禁止する所、故に吾人は須く秘密結社の手段によらざるべからず。而して武裝せざるべからず。殊に中央機關を整理し、地方との交通を機敏にして號令俊速ならしむるを以て切要とす。

二、特殊及地方機關。地方支團にありては左の諸項に注意すべし。一、行政官廳及軍隊に入りて其地歩を占むること。二、農民の上に勢力を握ること。三、地方の自由主義者及立憲主義者と可成親密なる關係を結ぶべきこと。四革命運動に關する諸用具を準備すべきこと。五、各地の革命黨員は各其居住地の事情に通ずべきこと是なり。

三、都市の勞働者。勞働者の志を得る時は運動の際之が助力によりて大に勢焰を加ふることを得べし。

四、軍隊。軍隊の勢力や寔に畏るべき者あり。彼等にして吾人藥籠中の者たらんか、政府を打擊する極めて易々たるの業のみ。故に先づ士官を收攬するを以て智慮あるの策となす。

五、新智識及青年。廣く學問技藝を習得し以て青年學生の間に勢力を張らんことを期すべし。

六、西歐。露國の革命事業をして西歐列國の間に同情を博せしめよ。而して彼等をして直接間接に我等の運動に助力する所あらしめよ。

分黑黨の綱領

歷山三世の初年に於ける民意黨の事業に付ては他に記載するに足る可事あるなし。故に吾人は之より暫く土地自由黨の他の一分派たる分黑黨(チエルナ、ペレドユエル)の行動に付て一言を費さんとす。分黑黨の主義とする所は寧ろ經濟上に於ける革命主義にあり。彼等は民意黨が理想の國家を建設せんとするに當りて獨り民權の尊重すべきをのみ主張して經濟上の要求に及ばざるは誤れりとなし、以爲、吾人は素より政治上に於ける自由及憲法の請求を非とする者に非ず。然れども經濟上の革命なき限り、政治上の活動は何等の效果をも齎す者に非ざるを信ずる者なりと。即彼等の第一に重きをおく所の者は經濟上社會上の關係にあり。彼等は政治上、法律上、倫理上の事情は畢竟經濟上の事情に從ふものなりと信ぜり。故に其目的は寧ろ無政府的社會主義にあり。曰、農夫よ、土地を取れ。工夫よ、工場を取れと。即白土に對する黑土(農夫の地)を配布せんことを其主義となせるなり。此處にヤコブ、ステフアノキッチなる者あり。彼非常なる組織的の才能あり。常に露國の革命的運動が其著大なるに比して密度、根底及範圍に於て遙に西歐社會黨の後に落つることを嘆じ、分黑黨の支離滅裂なるを匡正し、中央地方の關係を密にして專ら集中主義と

なし、自ら之を統率せり。

彼は小露西亞の一小村なる牧師の子なり。一八七三年キェフ大學に入り、革命運動に關係したるの故を以て放校に處せられ、夫れより諸方を遊說し、七五年チギリン農民の不平を奇貨として彼等を煽動せんと圖り（遊說煽動の時期參照）七七年事洩れて同志ドイッチ及ボハノヴスキー等と共に捕はれ、キェフの獄に繫がれしが、翌年五月獄を破りて脫走し、之れより西歐に留るものしばし、其間露國の亡命客と交を結び、ジェネヴァにて雜誌『分黑』の第二號を發刊したり。彼當時既に以爲、我黨は運動費に乏しく微々として勢振はず。故に實際の活動に際しては却て民意黨の後へに瞠若たるの觀あるを免れずと。如かず、斷然彼等と合同し、以て大に成すあるを期せんにはと。由て民意黨の有志より費用を受けて一八八一年九月、莫斯科に歸り、民意の首領株ボグダノヰッチ、グラチェヴスキー、チホミロフ及女員バランニコワ等と會して合同の事を協議し、之れより首都に赴きて舊友に其旨を告げ、之が爲め翌年春に至りては分黑黨は就んど遂に消滅したり。八一年十一月三日の雜誌『自由の語』に分黑黨の主張する所のもの列擧せられたり。曰、一、經濟上の事情、二、政治上の暗殺

三、秘密煽動、四、あらゆる社會への遊說、五、同志の團結、六、軍隊及官吏との結合と、即皇帝弑害を以て唯一の目的となすものにはあらずと雖、其大に民意黨に近邇し來りたるや見るべきなり。八二年二月、ステファノヰッチ、莫斯科に捕へられ、翌春終身懲役に處せられぬ。彼、父に事へて至孝、其如何なる境遇にあるも父を慰問することを忘れざりしと云ふ。ステプニャック彼を記して云ふ、余は未だ曾て斯かる醜男子を見たることなし。彼は黑奴の如く、又韃靼人の如く、頰骨秀で、口大に、鼻扁平に、中脊にして瘦せ、肩は狹くして一見病身の如し。然れども其容貌に於て克巳果斷、超然物に動せざるの相隱約の間に顯はる。彼は談話に際して毫も身振りを用ゐざりきと云々と。

斯くて分黑黨は名義上に於ては既に全く消へ失せたり。されど實質上に於ける分黑黨は依然として存續し、終には却て民意黨の勢力を壓倒するには至りたり。プレハノフ、アクセルロード及ラウロフ等は其最も著名なる者なり（西歐に於ける虛無黨亡命客の運動の部參照）。此外『勞働脫縛社會革命黨』あり。『青年同盟』あり。『學生黨』あり。又『露國立憲黨團』あり。就中立憲主義、自由主義を懷抱する者中々に勢力あり。彼等曰、露國には

言論の自由なく、集會結社の自由なく、皇帝獨り無上の權力を占めて民事國事總べて盡く有司の爲す所に委せらる。故に國に裁判所の設けありて民に無罪の宣告をなすも、行政命令によりて彼は忽にして其自由を褫がるゝことあり。一般人民の生存洵に危しと云はざる可らず。然れども歴史は突飛なる進歩を許さず。故に須く先づ憲法の發布を請ひ、漸を追ふて自由をもち來さんことを力むべきなり。夫れ憲法の制定は果して社會主義の結果として得らるべき者たるか。西歐の歴史は證す、國政を改善するの第一着歩は實に憲法の判定にあることを。然る後出版言論の自由あるべく、社會主義の理論的發展亦之あるべし。思ふに我國國民の大多數は未だ無教育なり、曖昧なり。彼等何んぞ國利民福の明晰なる觀念を有せんや。故に吾人は西歐諸國の經驗に倣ひて先づ憲法を設け、國會を建立し、之に由て國民を訓練するを今日の急務となすと。即彼等の敵は地主にも工場主にも非ずして實に政府及官吏其物にてあるなり。此説初め極めて微々たりしも露土戰爭の末より漸くにして勢力を得來り、一八七八年其結果として新聞『初め』の發行を見るに至りたり。此説今日にありて又有力なる部分を占むと云ふ。

歴山三世の戴冠式及其大赦令

歴山三世の戴冠式は虚無黨の暴行の爲に妨げられて延引し、一八八三年五月二十七日(明治十六年六月八日)を以て漸くにして擧行せられぬ。各國の使臣代表者之に列する者就んど其數を知らず。眞に一代の盛典たり。此日皇帝大赦令を發して大に囚人を寛待し玉ふ。今其國事犯に關係する條項をのみ此處に拔摘し以て此章を了へんとす。

第五條　凡十五ヶ年前に行はれたりし國事犯にして戴冠式の當日に至るまでに發覺せざりし者は其罪を赦し、其陰謀者に對して審問をなさず。

第七條　一八六三年、波蘭及西部諸州の暴動に與したるを以て罪に處せられたる者及族籍職業の何たるを問はず、一八六八年、一八七一年、及一八七四年の布令を以て現に首都、波蘭及西部諸洲に居住することを禁じ、又總べて政府の官吏、若くは公撰吏員たるを許さゞる者に對し、自今全く其禁制を釋く。此等犯罪人及暴動を助けんが爲に殺人及放火の罪を犯したる者には此恩典を施さず。一八六三年の暴動の罪により西比利亞其他に謫遷せられ、其地に於て更に新罪を犯したる者は、此法令中常事犯に適用すべき輕減例に照して處分すべし。

第八條　總べて前條に記載したる犯罪にして未だ皇帝の勅命により其舊時の權利回復を許されざる者は、自今其以後に出生したる子女と共に其舊時の繼續權を復す。但し族籍、勳賞、位記及功勞によりて得たる權利、又は所有權は之を復するとを得ず。

第九條　波蘭人及西部諸州の人にして罪を追れて西比利亞其他歐露の僻地に脫走したる者は再び其舊族籍に附帶したる權利を附與すべし。若し其鄕里に歸住するとを欲する時は其町村の人籍證を乞ふべし。

第十條　他國政府の保護を仰ぎたると否とを論ぜず、脫國人にして歸國したる者は、一八六三年の暴動に與したるの故ありとも審問を受くるとなかるべし。然れ共二年間若くは本屬縣廳及內務大臣の見込によりて數年間監視に附すべし。但し殺人放火の罪を犯したる者は此恩典を施すの限りに非ず。

露國國事犯事件表　自一八七一年至一八八二年

年代	事件數	被告數	刑の宣告 死刑、	懲役、	流刑、	禁獄、	拘留、	其他の罰及不定者	無罪放免
一八七一	二	八八	〇	四	三	二七	〇	〇	五四
一八七二	一	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇
一八七四	一	一三	〇	五	〇	〇	三	〇	五
一八七五	二	七	〇	五	〇	〇	〇	二	〇
一八七六	五	一二	〇	六	一	二	三	〇	〇
一八七七	一一	三〇三	〇	二九	六七	二〇	七一	一二	一〇四
一八七八	八	三〇	一	五	七	二	四	一	一〇
一八七九	二三	一六六	一六	六六	一九	六	四	二八	二七
一八八〇	二一	一三〇	五	四八	二〇	一一	四	二九	一三
一八八一	一一	三四	六	一〇	一〇	〇	六	一	一

一八八二	一〇	三七	三	三〇	一	〇	〇	二	一

波蘭の國事犯但し一八七八年より八二年までの總計

自一八七八 至一八八二	七	一二八	〇	〇	六二	六六	〇	〇	不明

以上十二項の總計

	一〇一	九四九	三一	二〇九	一九〇	一三四	九五	七五	二一五

第四章　虛無黨の諸機關

其一　秘密活版所

秘密活版所の必要。ドルゲシンの活版所。ポーポフ等の運動。ステファノヰッチの活版機。ワシリー、オストロフ街の秘密活版所。民意黨の活版所。分黒黨の活版所。

其二　爆發物製造所

爆發物の必要なりし所以。虛無黨の化學士ニコライ、キバルチッチ。テレシユナヤ街の爆發物貯藏所。ワシリエフ スキー、オストローの大爆發物製造所。陰謀者の大捕縛。實行委員グラチエヴスキー。

其三　通劵局

莫斯科に於ける通劵局の沒收。カリツシユニー及スミルニツカヤ。

『附』虚無黨員の通信。僞造通劵、僞名、數字。陰謀者の服裝、其交通。

其四　民意赤十字

赤十字部の必要。ピートル、テラロフ。西歐の各支部。赤十字部の獨立。國事犯囚の救出。

其五　隱匿者

隱匿者の二種類。第一種の隱匿者。第二種の隱匿者。タカラノフ。ポーリス、セロツフ。オツチリヤ、ホルン夫人。

『附』虚無黨の運動費

欺瞞。窃盜。醵金。ドミトリ、リソゲブ。

虚無黨は渾然たる一個の大團体に非ず。其中種々雜多なる見解を有する小分派の自ら之あるあり。故に其機關と稱すと雖、是はもとより整然一系をなすものに非ざるは勿論なり。左に列擧する所は只彼等が秘密運動に於て要する三四の用具たるに止まる。

其一　秘密活版所

アレキサンドル二世に於ける革命運動の初期にありては、露國に於て發行せらるゝ革命主義の機關紙二つあり。即『現代人』及『露語』是なり。而して此等の新聞雜誌は當時政府監督の下に公然進歩主義を標榜して發行することを得たりしが、一八六六年四月カラコーゾフの皇帝を害せんとするありしや、時の文相トルストイ伯は痛く言論の自由を箝制し、且つ大に二雜誌を抑壓したり。是に於てか虚無黨は最早公然の手段によりて其必要文書を刊行するの出來得ざるに至りければ、一八六九年ネッチャエフの陰謀を企つるに及びて殊に此機關を設立し、之を手初めとして(是より先カラコゾフ倶樂部も活版機械を備へたりしも其存在すると纔に數ヶ月に過ぎざりき)翌年の初に至りドルグシンなる者友人二三と共に莫斯科附近のサレユエヲ村に秘密活版所を設けゝるが發露し、由て此事にあづかりし者捕へられ、一八七四年五月の公判によりて其五人は五年より十年までの懲役に處せられたり。此外速記者メシュキンあり、又莫斯科に活版所を設立し、諸種の書類の茲に刊行せられたる者尠からず。ラッサルの譯本の如き亦出されたりき。

一八七三年、虚無黨員ポーポフ及クラウチンスキーの二人ツウェル州ノヲトルシヨックなるヤルツェフと云へる資産家の家に住み込み、其畠地に使役せられしが、彼等は馬鈴薯の窖に土を穿ちて秘密の活版機を此處に据へつけ窃に運動し、而して幾くもなくしてオボドウスカなる女員又首都より遊説し來り、終にヤルツェフを勸誘してチャイコウツエ團に加はらしめたり。首都にても同團は亦活版所を設くるの計畫ありて活字や印刷機を用意したりしかどもこは五年の間空しく人家の隅に放棄隱匿せられたるのみにて成立せざりき。

一八七五年、ヤコブ、ステファノヰッチ其友ドイッチユ及ボハノヴスキーと共にキエフに於て一家を借り受け、其最下の層に印刷機を備へたり。これ實にキエフに於ける最初の秘密活版所なりき。然るにボハノヴスキー先づ捕へられ、而して其獄中より新放免の四人に托してステファノヰッチ等に送りたりし密書は、途次警官の握る所となりければ、二人安ずる能はずして直ちに脱出し、先づ秘密室に備へたる器具を運搬し出さんものと考へ、彼等が同志の一男一女をして此事に當らしめたり。二人即ステファノヰッチの妹及妹婿なりと稱して其宅に到り、主人に面會して宿泊を乞ひ、言に僞りなきを證せんとて密室の鍵を示しければ、主人毫も怪しむとなくして彼等を其室に通じたり。二人泊すると一兩日にして去りぬ。後市の探偵來りて之を檢査せし時には印刷されし二三の紙片の散亂しあるのみにして何等の痕跡だも止めざりき。一八七七年、ステファノヰッチ終に捕はれたりと雖、彼の印刷機は幸に沒收を免れてオデッサに遷されぬ。

こゝにキルナの猶太人の子にてアーロン、ズンデリッチなるものあり。從來秘密活版所の一として成功したりし者なきを嘆じ、首都に於て是非に之を設置せんものをと思念し、土地自由黨より四百ルーブルの資金を抽出し、外國より機械を求め來り、四人の人々に活字の組立方を教授し、一八七七年初めて首都ワシリー、オストロフ街に露國自由活版所なる者を設けたり。此者存續四ケ年に及び、革命運動に資すること尠からざりき。活版所に二男二女あり。マリヤ、クリロワ女主人たり。年四十餘、曾てカラコゾフ倶樂部の陰謀に加はり、捕はれて北方に放はれ、逃れて此處に至りし者なり。彼女身体病弱に、且殆んと盲目に近き近視眼なりしと雖、能く其業に從事せり。下女と稱せられたるは十八九才の美女なり。此外内外の交通

を司る者として二十六七才の一青年あり。もと貴族にして、バジル、ブッフと云ひ、父は將軍にして叔父は元老なり。殘る一男はプチッァ(鳥の義)と綽名して前者よりも若く、肺を病む。沈鬱にして足決して門を出でず。常に門衛の目に觸れざらんことをのみ力めたり。當時黨の巨魁たりしアレキサンドル、ミハイロフ運動費を蒐集して此活版所に至り、毎夜九時編輯に着手し、其共働者と共に茶を喫し、又淡泊なる酒肴を用ゐて葡萄酒を飲みつゝ彼が獨得の文体もて原稿を草するを常としたりき。此活版所は七九年、土地自由黨の分裂してより分黑黨の所有に歸せしが、一八八〇年一月二十九日發見沒收さるゝに及びて彼等は極力奮闘して兵士を防ぎ、其間に印刷物を燒棄するの餘裕を得たりき。されどプチッァは捕縛を脱せんが爲に自殺したり。

一八八三年に至るまで整然たる組織の下に設立せられたりし秘密出版所の數六つあり。其一たるアウエルキュエフの活版所は一八七七年首都にて沒收せられ、アウエルキュエフ及其同志の三人は西比利亞に放逐せられ、其翌年に於ては露國自由活版所又彼得堡に於て破壞せられたり。此處にて刊行せられしは『トレーポフに對する誅殺』、『露西亞の社會に告ぐ』、『間諜ニコノフの殺害』、『コトレアレヴスキーに對する誅殺』及『すべての工場及製造場の勞働者に告ぐ』等あり。同年三月新聞『ナチャロ』(初め)の活版所首都に備へられたりしが五月に至て警官の毀つ所となりぬ。以上三つの外土地自由黨の所屬として彼得堡自由活版所あり。之は一八七八年十一月一日より翌七九年四月に至るまで機關『土地及自由』の五號を、又三月十二日より七九年七月八日までに之が附錄の五部を發行せり。此外『高等學校の學生に告ぐ』、『學生の暴動に關して社會に告ぐ』、『露國の勞働者に告ぐ』及『クラポトキンの誅戮』等の布告文出づ。

民意黨の活版所

土地自由黨の分裂してより民意黨は又數多の活版所を有したり。サベルネー、ベロイロック街に設けられし者を最初とし、第二は飛行活版所と稱せられ、第三はテレシュナヤ街にあり、エスセ、ヘルフマンの管理する所たりしが、三月一日の大兇變の後幾くもなくして沒收せられぬ。此外勞働者新聞活版所あり。民意莫斯科活版所あり。總數五ヶ所に及ぶ。此等の出版所より發行せられたる者極めて多く、『民意』は七九年十月一日より出されて既に十四號に達し、『民意新聞』は八三年七月二

十日までに出ると四回『勞働者新聞』は八〇年十二月十五日より八一年の末までに六號に及び其他革命的小冊子諸種の綱領布告文等無數に刊行せらる。而して布告文中にありては『莫斯科に於ける爆發に付て』『冬御殿の爆發に付て』『ハルトマンの捕縛に付て佛國人民に與ふ』『三月一日に付て』『歐洲の社會に與ふ』『名譽ある哥薩克軍隊に告ぐ』『露國陸軍の士官に與ふ』『歷山三世に與ふ』(暗殺恐怖の時期の項參照)『シェリャボフ及其徒の刑に就て』等を著しき者ありとすべく、皆實行委員の名に於て發行せられたり。

土地自由黨の一分派たる分黑黨は總て三つの活版所を有したりき。其中ワシリエフスキー、オストロフなるクリロワ夫人の出版所は一八八〇年一月を以て沒收に遇ひ(前段參照)、飛行活版所は翌年中頃に於て發見せられ、第二飛行活版所獨り殘存して首都にあり。八〇年一月より八二年までに『分黑』雜誌の四號を出版し、外にセルノ新聞『種粒』新聞)を八〇年六月より發行し續刊六號に至れり。八一年十一月三日、黨の首領ステファノキッチ『自由の語』を發行し、翌年六月キテブスクに於て新に秘密活版所を設けたりしがオデッサのは其冬露顯し、破毀せられたり。

之を要するに『土地自由』黨及其分派は一八七九年より八三年に至るまで總數十二ヶ所の秘密活版所を有し、而して此中毀たれたるは彼得堡に於て八ヶ所、莫斯科に於て二ヶ所にして殘存する者兩都各一ヶ所づゝに過ぎざりしなり。

其二　爆發物製造所

虛無黨が暗殺主義に移りてより專ら政府の打擊に用ゐたりしは實に劍と銃砲とにてありき。例へばハイキング男、メーゼンツェフ將軍及アルハンゲルの警察署長ピエトロヴスキーの如きは皆劍の斬殺する所となれり。就中拳銃の狙擊によりて斃れたる者ハルコフ知事クラポトキンを初め最も之を多しとす。然れども所謂恐怖主義者(テロリスト)が更に進で皇帝弑害を企つるに及でや、彼等はカラコゾフ、ベレツォヴスキー及ソロウユェフ等從來の皇帝謀殺が一として成功したりしとなきの轍に鑑みて、爆發物の手段によらんとを決したり。抑〻ダイナマイトは瑞典の化學博士ノベルが一八六六年(即カラコゾフ陰謀の年)英國に至りて初めて製造する所にして、もと其力極めて微々たりしも、漸次改善を加へられ、終に猛烈なる爆發力を有するに至りたるものなり。初めて劇藥を輸入せんとを試みたりし者は實に虛無黨の密

虚無黨の化學士ニコライ、キバルチッチ

商にして活版機械の買ひ入れに努力せしアーロン、ズンデリッチなり。　然れども彼が伊太利に於て爆裂彈を購求し、瑞西及獨逸を通じて之を露國に持ち來さんとの企ては成就せざりしかば、虚無黨は最早一の工場を有し、黨員中化學上の智識あるものをして之が製造に從事せしめざるを得ざるに至りたりき。　然るに元來之に要するナイトログリセリンは非常なる惡臭を放つ者なるを以て、人の怪しむ所たらざらしめんには、可成家の最上層に工場を設備せざるべからず、殊に之が爲には少くとも三四の室なかるべからず、又水道の便もなかるべからず。　かるが故に大家屋に非ざれば之が目的を充すには足らざりき。　斯ゝにニコライ、キバルツィッチなる發明的の人あり。　能く此武器の製造に當れり。　彼は一八五三年を以てチェルニゴフに生れぬ。　村の一小牧師の子なり。　一八七一年工業學校に入り、七三年轉じて首都の醫藥學校に入り、又密に自修俱樂部に屬しぬ。　彼殊に一家の革命意見を有するに非ず。　然れども其運動に加はりたるが爲め、一九三人事件に連累し、一八七四年より七七年まで禁錮の刑に處せられぬ。　彼獄中にありと雖、常に書を繙きて勉强し、又殊に社會主義を說きて四人を勸誘せんとを力め、其成績頗る良

テレシュナヤ街の爆發物貯藏所

好なりき。　一八七九年、終に土地自由黨に加はり、これより推されて技藝部の主任となり、黨員イスサユェフ、ジレユェフ及グラチェヴスキー等を統率し、萬難を排して盛に爆發物の製造に從事しぬ。　アルハンゲルの人レオ、ハルトマン又化學上の智識あるを以て莫斯科に召喚せられ、キバルチッチを助けて電池を用意せり。　すべて歷山二世の謀殺に用ゐられたりし武器にして彼の手に成らざるはなかりき。

彼容貌茫々として喜怒毫も其色に現れず、言語擧動すべて遲緩なりければ、人往々にして彼を以て無神經となしたりき。　然れども極めて同情に篤く、殊に常に樂天的に、多能にして文筆の業にも長じ、語學に於ては獨習によりて英佛獨の三國語に通じ、又藥學化學に精しく、藥品の調合、爆發物の製造に付て自ら發明する所少からざりき。　婦人に關しては自ら謂て曰、婦人を愛し、之に媚を呈して其甘心を得んとする、滔々たる世人皆然らざるなし。　されど余は就んと之を解する能はず。　且つかゝる無益の事に費すの時を有せざるなりと。　其人と爲りや以て見るべきなり。

三月二日即大兇變の翌日、首都テレシュナヤ街なるヘルフマンの爆發物貯藏所發見せられ、之より虚無黨の領首にして縛に就きしもの比々として相次ぎ、黨の勢一時

ヷシリエフスキー、オストローの大爆發物製造所 陰謀者の大捕縛

地を攘て去りたるの觀ありしと雖、キバルチッチによりて創設せられたりし爆發物製造の事業は、彼刑につきたるの後なほ其弟子によりて益〻繼紹擴張せられぬ。續て三月四日、首都なるマラヤ、サドワヤ街に於て又一の陰謀所發見せらる。こは農夫コボセフなる者の乾酪店にして隧道を穿ちて正に街路の直下に到りし者なりき。警官の入りて檢せし時には既に人影なく、只桶や樽の牛乳及牛酪ならで新に掘り上げられし土塊を以て滿たされたると、電線のあちこちに散亂しつゝあるのみなりき。コボセフは實にボグダノキッチ其人なりき。

一八八二年六月五日の夜、首都ワスシリエウスキー、オストロー街なる青年獸醫アレキサンドル、ワシリェキッ、チプリビレフの宅にて、夫婦及び下女三人を捕縛し、同夜又大に虛無黨の陰謀者を各自の宅に捕縛しぬ。ミハイル、グラチエヴスキー、ミハイルクリメンコー、海軍士官ブツェキッチを初め女員アンナ、コルバ゜ハッスヤ、グリンベルク等皆是なり。蓋し彼等は每夜プリビレフの宅に密會して爆發物及電池等の製造に從事しつゝありしを以てなり。此家は頗る大なる構へを有し、四間の外に玄關に一室、蔚房及浴場等あり。四間の中の三つは寢室にて、其一は危險物の

実行委員グラチェヴスキー

製造場として用ゐられ、浴場と云へるはナィトログリセリンを溶解する所にして蔚房にては金屬を溶解し、二つの寢室には出來上りし爆發物を蓄へ、玄關の一室には諸種の藥品及火藥を藏したり。此等の外、警官は茲にて無機化學及爆發物製造に關する諸書、多くの革命的新聞、檄文及二箱に滿たされし諸種の書類を發見したり。工兵士官の檢する所によれば此處にて製造されし爆裂彈は其內部の構造全く歷山二世を弑せし者と同じく、皆長圓体の亞鉛器の中に包まれて、亞鉛筒の外にも亦他の被ひあり、之を上衣の中に隱して人の注意を牽かざる樣巧に製造せられありしとぞ。蓋しプリビレフの此工場は一八八二年の初め彼がキバルチッチの從弟にして當時に於ける民意黨の一實行委員たるグラチェヴスキーにより實行委員の名に於て二ヶ月間內に之を設備すべき依賴を受け、必要なる金額と材料との供給を仰ぎ、五月七日に於て初めて借家したる所にして、彼は妻ライッサ、グロースマン及下女と僞りたる虛無黨の一女員エシュコワ(エシコワは牧師の一女なりき)と共に其業に從事し、グロースマンの如きは己自らナィトログリセリンを容るべき槽や綿、グリセリン、其他工事用の器具を購入したり。グラチェヴスキーは實行

委員中の技藝部を擔任せる者なり。自ら黨中に一の工藝學校を設けんとを試み、即プリビレフ夫妻に謀るに此事を以てし、日夜同志を會して綿火藥、ダイナマイト等の製法より、墜道地雷の裝置法に至るまでを敎授し、又互に訓練し、クリメンコーも日々此工場に至り、主としてナイトログリセリンを製造し、且つ諸種の材料を齎せり。一市民の妻たるアンナ、コルバ、商家の娘グリンベルグ及海軍士官ブツェキッチ並び其黨なりき。此捕縛と共に一々嚴密なる家宅搜索を行ふに及びて警官は種々なる物品を發見したり。即グラチェヴスキーの宅にては數多の革命的刊行物、墜道及製圖に關する書籍、諸官署及官吏の僞造印三十六個、印紙、僞造旅行券及僞造官文書、銃一挺、劔一振等を沒收し、ブツェキッチの宅にては雜誌『民意』『分黑』『土地及自由』『進め』『警鐘』の外、實行委員の綱領、宣言書等革命黨の定期不定期の刊行物、四百通及銃三挺を得、此外簡便印刷機の一部分、國事犯囚人の寫眞五十七葉及數多の文書をコルバの宅に、革命黨の刊行物五百通をグリンベルグの宅に發見したり。以上虛無黨員に關する公判は一八八三年三月廿八日より四月五日に至るの間、首都の元老院に於て開かれ、之によりてグラチェヴスキー、クリメンコー及ブツエキッチの三名は絞罪に、アンナ、コルバは二十年、プリビレフ夫妻、グリンベルグ及マリヤ、エシュコワの四名は十五年の懲役にそれ〳〵宣告せられしが、歷山三世殊に其刑を輕減せられて三人の極刑囚を終身懲役に、ライッサ、グロースマンを四年の懲役に、グリンベルグ及エシュコワを無期西比利亞流刑に處し玉へり。陰謀者は實に此の如き酷刑を以て臨まれたりしと雖、爆發物の製造は此後實行委員の下に益〻擴張せられ、一八八四年に於ては大小三十以上の製造所あるに至りたり。

莫斯科における通券局の沒收

其三　通券局

莫斯科府プロゴンニー、ペロイロック街にヲルコワ夫人なる者あり。其宅に虛無黨員カリウシュニー、女員スミルニツカヤと共に僞名を名のり、夫婦なりと詐りて住しぬ。是れ實に陰謀者の密會所にてありき。一八八二年三月二十三日、警官俄に之を襲ひ、椽の下より低窓に通ずる階段にてカリウシュニーを捕へしが、スミルニツカヤは此物音に驚き、其必や警官の闖入する所あらんを察し、急ぎ椽下の密室に入り、之を閉鎖して所藏の文書を引き裂き、之を燒き棄てつゝありけるが、此間に於て

警官は戸を破りて入り來り、彼女を縛し、又殘れる文書十種ばかりを沒收せり。ろは實に左の如き者にてありき。

一 諸官署及官吏の僞印九十六個、此等は各一枚づゝの紙に包まれ、封皮には其何物たるかをしるしき。

二 印を捺す爲めの色にてしめせし墨定巾。

三 蠟引紙二三葉。

四 諸種の證劵、通行劵、在籍證等の用紙にして既に捺印せられたるもの二七〇葉。

五 諸官署、諸官吏用の白紙一一六葉。

六 既に出來上りし通行劵三十一枚。

七 印紙の五包。

八 無數の革命的刊行物『民意』、『分黑』勞働新聞『セルノ』、宣言書、實行委員の綱領一一部、露國勞働民への檄文一七二部、其他。

九 種々の文書(此中には皇帝の弑害を以て現在の國家を改善する所以の良法あることを激論せる者あり。

十 蒟蒻板もて印行されたる紙類數多。

即彼等は『民意』黨に屬し、其給金によりて衣食し、以て黨の通劵を製作する者たりしなり。前項に見へたるグラチェヴスキーの如き亦此種の事務にも衝れり。彼は多くの僞印を有し、通劵を造りて之を同志に頒ちたりき。カリウシュニーは年二十四、妻なし。一小市民の子なり。ハルコフ州のレベディンに生れ、スミーの古典中學校を卒業し、然る後ハルコフ大學に入り、一八八〇年に於ける同大學生の示威運動に與して退學を命ぜられ、タムボフ州のヲログダに放逐せられたりしが、同年莫斯科に遁げ歸り、虛無黨の女員スミルニッカヤを知り、八一年九月二十七日より彼女と共棲して通劵僞造の任に當れり。スミルニッカヤは年三十、獨身の婦人あり。キェフ州の牧師の子あり。一八七八年より其地の革命黨に入り、黨員イキッチエキッチ(彼は翌七九年二月十一日虛無黨員大捕縛の際憲兵と鬪ひ之が彈丸の爲に倒されたり)の愛婦たりき。彼女ゴルデンベルグのクラポトキンを謀殺せる事件に連累し、捉はれてソルエチェゴズクに追はれたりしが、莫斯科に歸り來りて其通劵局に入れり。

虛無黨員の通信

彼等は爆裂彈製造所のプリビレフ等と共に八三年春の公判にて共に十五年の西比利亞鑛山懲役を命せられたり。されど此種の通劵局は此後益〻各地に設置せられき。

虛無黨の信書は非常なる注意の下に發送せられたり。彼等は成るべく暗號字を用ゐ、又電信用の記號を用ゐることあり、インキの如きも化學上の色なること多く、大底比喩を以て記せり。例へばダイナマイトの幾何と云ふに葡萄酒幾瓶と云ふが如し。左にステプニャックの記する所を掲載すべし。『一八七八年の夏余(ステプニャック)首都にあり。一夕黨員にして畫人たるエッキス夫人を訪ふ。時に夫人あらず。待つことしばし、同志にして又夫人の親友たるアール夫人來りて余と相語る。暫くにして惶忙しく戶外の鈴を鳴す者あり。出でゝ見れば電報の來れるあり。夫人之を披見しつゝ入り來り拍手して大に喜ぶ。余訝りて又之を閱するに「喜べ兒は生れたり」とあり。即卿はしかく赤兒を好むかと質せるに夫人云へらく、否、母と小兒等とが獄を脫して出で來れるを云へるなりと。右は實にステファノキッチ。ドイッチ及ポハノヴスキーの三人がキエフを破獄したる報知にてありき』。

僞造通劵
僞名
數字使用

すべての革命黨員は皆其眞名を名のらずして僞名を用ゐ、通行劵の如き皆適法の者にはあらで僞名を以てし、捕縛に遭ふと雖、百方其名を白狀するを避くるが故に彼等は往々にして僞名の下に刑せらるゝことあり。首都に於ける大膽なる冬御殿の爆發者ハルツリン等二三子の如きは絞殺せられて後寫眞によりて初めて其眞名を明にするを得たり。又キエフにて姓名不明の一男子がアントノフと名づけられて極刑に處せられしことあり。彼等は又姓名の代りに數字を用ゐしことあり。ネッチャエフの一八六九年ジェネヴァに於てバクーニン及オガレフを訪ふや、バクーニンは彼をヘルツェンに紹介して之に運動費を與へしめ、又自ら數字二七七一號を附して彼の名の代用となさしめたりき。

陰謀者の服裝
其交通

一八六〇年代及七〇年代にありては虛無黨員の服裝は稍一定して粗羅紗の衣を着け、長靴を穿ち、青眼鏡を用ゆるを例としたりしが、其漸く警吏の注目を牽くに及びて之を改め、且次第に奢侈となり、暗殺主義の頃となりては此風最も甚しくなれり。路を往く、彼等は身邊を警戒して探偵の追尾に遇はざらんとし、常に人の奇しむ所とならざらんことを力め、其同志を訪ふに際すと雖、多數者一時に於てせず、又あ

まりに頻々たらず、其來る、往く、總て規則正しくして恰も一定の職業を以て會するの風を裝ひ、對談するの時甚だ永からず。然れどもかく革命黨の用意の周到なるに至れると共に政府の警察制度も亦驚くべきまでに機敏となれり。蓋し政府は最早警吏憲兵の探偵を以て滿足せずして八方に間牒を分置し、殊に各家々の門衛をまで收攬して、一々出入者の行動に注目せしめたればなり。されば虛無黨員はなほも之を防禦せんが爲め各本營の窓、若くは戶壁に何等か危險若くは安然を表示する暗號を揭げ、而してなは極めて容易に何れかに變換せられ得べく、危險の急事に際して安然の暗號を揭ぐるが如きとなからしめたり。各團体は皆一定の本營を有し、而して此處は極めて秘密を要するが故に壁厚く、窓戶密閉して苟くも音響の戶外に洩れざらん所を撰べり。各員は萬一を慮りて必ず各一二の武器を携帶し、會の散ずる、一時に群をなして歸るが如きとなく、時としては偵吏の追跡を避けんが爲め馬車を驅りて何處ともなしに市中を走ることあり。又屢々其居所を轉ずるを要とせり。

其四 『民意』赤十字

赤十字部の必要

ピートル、テラロフ

西歐各支部

虛無黨の活動漸く其劇甚なるを加ふると共に、其黨員も亦從て增加し、而して當時政府の國事犯罪人を遇する酷烈を極め、殊に西比利亞に送られたる者は、衣食の欠乏の爲に病に罹らざるはなき有樣にてありければ、彼等は之を救濟するの必要を感じ、即多くの黨員を割きて其方面に關する事業を分擔せしめたり。なは實に義捐金を蒐集して多くの國事犯囚を救出するを其目的とせる者にして、ボグダノキッチ殊に之が成立に努力し、一八八一年夏、終に首都に於て之を組織せり(後莫斯科にも成立せり)。稱して民意赤十字部と云ふ。事は同年十二月二十三日の民意雜誌第七號に於て公にせられぬ。ピートル、テラロフ其部長たり(彼は二十七歲の一青年、後ボグダノキッチと共に捕へられ、八三年三月の公判に附せられたるものなり)。ヤコブ、ステファノキッチ又殊に之に盡力して支部を西歐の各要所に設け、ジェネヴァにてはウィエラ、ザッスリッチを、巴里にてはピートル、ラウロフを、倫敦にてはニコライ、チャイコウスキーを各其主任者とし、義捐金を募集し、又出版事業によりて資金を收得せしめたり。西比利亞にては男員ヨナ、ユフエロフ代表者としてトムスクにありき。

赤十字部の獨立

國事犯囚の救出

赤十字部は民意黨の一機關たりしが、其部員にして革命的運動に關係する者多かりしが爲、從て種々弊竇多く、且煩雜を來したりしかば、一八八三年四月の公判の際、ボグダノキッチは、赤十字の憲法によりて今後其部員は全く革命的陰謀より獨立し、再び之と關係せざるべく、又同部員にして曾て政治上の事に關係したりしとありし者は自今之と去りて他部員の事業に累を及ぼすことなかるべしと陳述したり。赤十字部が發したりし宣告書、檄文は其數頗る多く、彼等は之に由て義捐金の募集を世上に廣告して曰、我等に義捐せよ、露國に於て思想及信仰の自由の爲に竄逐せられたる人々に與ふるに精神上及物質上の輔助を以てし、縲絏の辱めに苦む彼等を獄窓の中より救出し、又他の慈善事業を行はしめんが爲めに喜捨せよと。此事業又能く行はれて獄を脫すること得たりし者尠からず。例へばボグダノキッチが三月一日の事ありて後西比利亞に赴き、檢事ストレルニコフの殺害者として苦役しつゝありしクリメンコーを獄中より救ひ出したるが如き其一なり。

其五　隱匿者（ウクリバテリ）

虛無黨の現員に非ざる者にして直接間接に彼等を庇護する者あり。之を隱匿者と云ふ。其中二種類を區別するを得べし。一は官吏にして彼等の陰謀を承知し乍ら之を訴ふるの復讐的危害を身に及ぼすことあらんを懼れ、之を默過する者にして、一は主義目的に於て同情を彼等に寄せ、己が家を以て其隱匿所となすの徒なり。後者にも官吏あり、軍人あり、富豪あり、正業に從事しつゝ竊に革命黨を輔助す。故に是等は寧ろ其一種と見做すを得べき者なり。

隱匿者の二種類

第一種の隱匿者

第一者の例として一二を擧げん。一八八一年二月、實行委員たるボグダノキッチが女員ヤキモワと共に首都マラヤ、サドワャ街に於て乾酪店を開き、密に街下に地雷を裝置しつゝありしや、府の警吏は見て以て怪しむべしとなし、之を技術官たるムロキンスキー將軍に報じて彼の撿閱を請へり。由て彼は一應の取り調べに着手したる上其何等の變異をも認めざる旨を報告したり。是に於てか陰謀者は幸にして虎口を免るゝを得たりき。續て三月一日の變あり。四日乾酪店の陰謀發露せらる。政府は此等の事情を精查して事全く當局官吏の不忠實なるに原因すとなし、先づムロキンスキーを捉へて此年十一月二十六日、盡く彼の官職勳位を褫ぎ、且之を追放の刑に處し、其外前探偵長フルスソフ及テグレフをそれ〳〵罪に處分しぬ。

第二種の隱匿者其例

こは實に著しき例なりと雖、腐敗官吏にして虚無黨の暴行を怕れ、情を知て彼等の陰謀を默視せし者必や多かるべきを疑はず。蓋し政府の探偵間者にして復讎に斃れたる者多々之あればなり。甚しきに至ては一人を惡むのあまり其家族を害するが如きの酷しきに至りしとあり。一八八二年サマラ市に於て市の司教長は虚無黨を反擊する説教をなし、歷山二世の悲慘なる横死を述べて大に公衆の同情を喚起し、彼等を惡むの念を激せしめたりしに、虚無黨員は之が仇を報ゐんが爲め彼を殺さんとして成らず。却て彼が十九才の一女を殺害するに至れり。クプツァンゴーは『歷山二世の適法並に非適法弑害者』と題する一章を設けて高級官吏たる此種の隱匿者を詳述せり(暗殺恐怖の時期末段『ペロウスカヤを懷ふ』の一篇參照)。

第二種の隱匿者亦其數尠からず。ペンザの豪商エンドアロフと云へるは虚無黨知名の遊説者たるヲイナラルスキーに金錢を與へ、且之を其自宅に隱匿せり。キヤトカの知事コロテフは却て陰謀者を保護せり。文人にして醫師たるボルッガロフ亦然りき。ヤロスラウなる高等學校の一教授は革命的運動員として著名なるコワレックを隱せしのみならず、尙は彼を導きて己が學生間に遊説せしめたりき。

タカラノフ

ボーリス、セロッフ

此種の人物は殊に皇室政府と親密なる關係を有する貴族官吏中にあり。俊敏なるアレキセー、ミハイロフは巧に此等の人々と交を結び、啻に之を以て官府の内狀を探るの方便となすのみならず、尙は安然なる避難所として屢黨員を危に救ひたりき。彼は又之に加ふるに間諜探偵を熟知しければ此点に於て非常なる便宜を有したり。メーゼンツェフの暗殺者たるレオ、ハルトマンの如きは彼に導かれて一時難を内務省の一官吏タカラノフと云へる者の宅に避けたりき。蓋しタカラノフはチェルネシェヴスキーの愛讀者にして居常志を虚無黨に傾けつゝありし者なりき。又ボーリス、セロッフとて陸軍々醫を奉職し、一八六一年のカザンの騷擾に加はりたりし者あり。其後首都に逃れ來りて革命黨の隱匿者となり、新聞に、雜誌に、書籍に、運動費に彼等に寄贈助力する所尠からず。ウイエラ、ザッスリッチの如き放免の後彼の宅に匿れしとあり。ペロフスカヤ最も彼と交り良く、常にセロッフが戶外に標せし暗號の安然なるを見て其宅に入れば、尙は皇帝の宮城に入るよりも安しと云ひけるとぞ。

ステプニヤックは此外一人の女隱匿者を記載せり。ゐは丁抹の婦人にてオッティリヤ、

オツチリヤ、ホルン夫人

ホルン夫人と云ひ、初婚の夫死するに及ひ、露人を第二の夫に迎へ、彼得堡に移住して夫は警官となり、極めて平和なる生活を送りつゝありし者なりけるが、丁抹王の一女ダクマー(今の露國皇太后)が露の皇太子妃に冊立せらるゝや、彼女は己丁抹人たるの縁故を以て彼女の夫を薦めて露國宮廷の一官吏たらしめんとの周旋を丁抹公使に切願したるに、彼應せざりしかば、彼女は大に其冷淡を憤慨して之に報ゐんものと決心し、之れより虚無黨の隱匿者となり、之に書籍を與へ、又其通信の用務を辨ずるなど陰に陽に助力尠からざりし者なりき。

運動費

以上は虚無黨機關の大要を示せるに過ぎず。而して之を活動せしむる所以の運動費は果して何處より生じ來るか、之れ正に次に知らざるべからざるの事實たるべし。

欺騙

虚無黨の運動費は種々なる方面よりして蒐集せられたり。詐僞の如き其一なり。キエフに於ける虚無黨男員の三名は女員イダリヤ、ボルハイムと云へるに勸めて一の富める老人の妾となり、然る後之を毒殺して其財を纂奪せしめんことを提言したりしことあり。此の如く女員にして財を得るの目的を以て佯て富人に嫁したり者多し。又一八七五年七月二十五日、黨員ガムクレリゼなる者同志ツィツィアノフ公の媒介により、莫斯科に於てツマノワと云へる一女子と結婚せり。こは、其女子の母より千百ルーブルを得んが爲なりき。此日公又オデッサにて同一の目的を以て自らホルシェウスカなる婦人と結婚するの約ありしが、莫斯科に於ける用意の爲め之に列すること能はざりしかば、同志キコゼなる者を遣りて己に代らしめたりしと云ふ。

竊盜

竊盜によりて資金を得たりし例又擧げて數ふべからず。蓋し彼等の要するところ中々に莫大なるものにして、彼等はメーゼンツェフ及クラポトキンの謀殺に一万二千ルーブルを、又一八七九年の秋に於ける三陰謀に殆んど十万フランを費したりしと云へり。斯の如きの巨額は元より尋常手段の收得せらるべきところに非ざるなり。されば彼等は富豪ヤコーレフ。ココレフ又はエリスサィエフ等より金錢を強借し、終には官金をも竊盜するに至れり。嘗て一八七九年六月、ヘルソンの銀行にて百七十万ルーブルの巨額が盜難に罹れることあり。後其中百六十万ルーブルは發見せられたるが、之は實にニキチンと云へる者が虚無黨の依頼に應じて盜み

しなりき。實行委員遂に令を發して曰、官金は之を盜む、其額の大小を論ずることとなし。只私人の財産及慈善事業を營む者の財に至ては決して之を盜むべからずと。然るにかゝる規約あるにも換らず、曾て莫斯科育兒院にて三十万ルーブルの巨額が盜難に罹りたることあり。而して其額は虛無黨員よりジェネヴァの同志の手に引き渡されたり。一八八〇年十二月、フロレンコーなる者女員レベデワ及リッソウスカヤと共にキシェフの旅舍に泊し、之れより墜道を穿ちて地の收稅署の下に至りたりしが、翌春事洩れて竊盜の目的を果さゞりき。八一年十二月に於ては彼等は此手段によりて地下を穿ちてセバストポール收稅署より四万七千ルーブルを奪ひ去りぬ。

されど最も大なるは黨員の醵金にてありき。之れ蓋し革命論の廣く天下に遊說せらるゝに從ひ、虛無黨に同情し、彼等に喜捨せる富人の漸次其數を增したるに由る。チッチャエフは總額千磅の運動費をバッハメトユェフなる者より受取りき。平和判官長ヲイナラルスキーは其四万ルーブルの資產を擧げて盡く之を遊說費となしたり。ドミッリ、リゾグブは十五萬ルーブルを有し、之を以て土地自由黨を養へ

り。ステプニャック彼を激稱して虛無黨の聖人なりと云ふ。

彼はもとチェルニゴフの素封家にして大なる山林、田野、家屋を有したりき。然れども其一旦身を革命運動に投ずるや、余が命永からず、財寶何かあらんとて、一切を之に棒献して吝まず、由て土地自由黨を養育すると二ヶ年の久しきに及びたりき。されば彼自身も極めて質素なる生活に滿足して毫も衣食を念とすることなく、一見市井の貧窮兒なるが如くなりしと雖、其溫乎たる應接、其心の淸廉にして同情に富める、其信ずる所に向て一切を捧ぐるの熱誠は實に人の及び得べからざるの美点なりき。一八七八年、彼の友たるドリゴーが欸を政府に通じ、リゾグブ當時の資產たる四千ルーブルを賞金として受けんことを約して彼を訴ふるに及び、彼は其秋オデッサに於て遂に捕縛せられ、地の知事たるセバストポール及プレヴナの猛將トートレーベンの爲に死刑を宣告せられ、翌年秋甘んじて刑に就きたり。人皆之を悼む。

第五章　西歐に於ける虛無黨亡命客の運動

ヘルツエン及オガレフの運動。露國の青年學生瑞西國に集まる。恐怖時代に於ける外國亡命客の數。其事業。彼等の發行よかゝれる新聞雜誌。亡命客の二派。バクーニン派。ピートル、ラウロフ。『進め』。ラウロフの革命意見。ピートル、ツカッチエフの極端論。彼とラウロフとの爭論。『警鐘』。政治的自由主義の極點。『進め』の廢刊。『團体』の發刊。爾後のラウロフ。ピートル、クラポトキン公。ゲオルグ、プレハノフ。レオ、チ、ホミロフ。

ヘルツエン及オガリオフ

初めて外國に赴きて革命的の言論をなしたる露國亡命客をヘルツエン及ニコライ、オガレフ(一八一三一一八七七)(オガレフは一八六一年十二月露國政府より全く其權利を褫奪せられ且永久追放に處分されたり、これより永く倫敦に居住してヘルツエンと共に操觚事業に從事し其著はす所の詩文少からず、皆露國青年の愛吟する所となれり『滑稽』『夜禱』『獨語』『冬の日』等皆バイロン流の厭世調を帶ぶと云ふ)の二人とす。彼等は一八五三年を以て倫敦に最初の露國活版所を設け、自由露西亞活版所と稱して新聞雜誌及彼等自身の著書を出版したり。一八六〇年より七〇年に至る間に此活版所より發刊せられたりし書中にはファディエエフ將軍の『露國社會及露國陸軍斷片』、カヴェリンの『貴族社會及農奴解放』、ユェラグインの『露西亞の僧侶』、コヘレフの『如何にして露國は現在の境遇を脫却し得べきか』、及サマリンの『バルチック諸州』等あり。此外ガガリン及コミアコフの神學書及歷史、傳記書類等極めて多し。六十年代となりてより露人は本國に於ける言論の束縛と共に漸次外國に赴きて運動するの傾きを呈し、一八六二年にはブリュムチルなる者伯林にありて雜誌『自由の語』を發刊し、ドルゴルキー公はブリスセルに雜誌を出し、六五年に於ては本國の大學より放逐せられし革命主義の學生はハイデルベルグに集りて『一切を唾棄す』と題する新聞を發行し、皆共に革命思想を鼓吹したり。カラコゾフ事件起るや、一八六六年五月二十三日、露國政府は令を發して大に虛無黨員の竄逐を行ふに及び、其難を西歐に避くる者從て多く、而して殊に露國との國際關係に於て比較的疎遠なる瑞西に來集したりき。

露國の青年學生瑞西に集まる

一八七〇年頃に至りてはマルクスやバクーニンの社會的運動は漸くにして露國青年間に影響し、獨逸、佛蘭西に於ける社會主義者の著述は多く露譯して輸入せられ、之に加ふるに多少自由思想を抱ける青年學生は本國大學の束縛を厭ひ、笈を負て、相携へて此自由の小美國に至りければ、ベルン、チューリヒ及びジエネヴ

ア湖畔は之が爲めに露國の青年男女を以て滿たさるゝには至りぬ。今其數を計算せし者を見るに、一八七二年より三年にかけての冬に於てチューリヒ大學にありし者は一三八人にして、七三年の夏には增して一四五人となれりとあり。之を學生の種類に分てば即左の如し。

	男	女
法學生	一	一
醫學生	三六	七七
哲學生	八	二二
總計	四五	一〇〇

これ皆露人なり。又此地の諸藝學校にありては七二年の冬に於て九四人の露人あり。其内二五人は土木建築科、二四人は機械製造科及化學科、一八人は豫科なり。七三年の冬には同校に九一人の露人あり。但しこれ等の中には獨逸殖民人及波蘭人等をも含めり。一八七三年、露政府令を發して露西亞學生のチゥリヒ大學に入るを禁ずるに及び、此等の學生は巴里、維也納又はベルン等の各大學に轉ぜざる

恐怖時代に於ける外國亡命客の數

を得ざるに至れり。此年、チウリヒに二ケ所の露西亞活版所あり。ジェネヴァ、倫敦又皆之を有せり。一八七八年の頃ひには本國に於ける革命黨の大迫害を被りたると共に、其外國に逃るゝ者俄に增加し、八一、二年にありては其數ベルン。チウリヒ。ジェネヴァに於て五〇人許り、巴里に七〇人、倫敦に十有餘人、總計二百人に垂んとせり。此等の亡命客の中には一八六三年前の革命運動者たるシユーコウスキーあり。書肆の業に從事せるエルピディンあり。オガレフ。ラウロフ及ツカツチェフあり。チャイコウスキー及クラポトキン公あり。アクセルロード及プレハノフあり。其他アリソフの如き、チェルケソフの如き、ロパティンの如き、ミハイル、ドラゴマノフ敎授の如き知名の文人記者尠からず。ヤコブ、ステフアノキッチも一時西歐にありて運動しつゝありしも、其本國に歸るに及びて捕縛せられたり。

亡命客の事業

此等の亡命客は素より恒產を有する者に非ざるを以て、多くは露語若くは外國語の新聞雜誌に執筆し、或は家庭敎師として音樂、科學又は露西亞語の敎授に從事し、又或は嘗て其民間に遊說せるの際殊に習得したる技藝を以て靴工、鍛工其他の手工業者として各地に營業する者もありき。彼等は皆粗衣粗食、其得る所の利益を貯へて

彼等の發行にかゝれる新聞雜誌

以て其運動費に備へ、大都會にありてはそれ〳〵彼等の團体ありて事務所を設く。即此種の者としてはジェネヴァに『ナボット黨』あり。『露國社會的革命黨文庫』あり。活版所『ラボトニック』あり。チウリヒには『社會改革黨』あり。巴里に『露國無政府主義者革命的團体』、倫敦に『スラーヴ協會』あり。而して此等の團体より出版されし定期、不定期の刋行物には一八六八年四月より九月まで『現代』あり。七〇年に於て『鐘』あり。八二―八三年に於て『古郷』あり。七五年一月より七六年三月までジェテヴァに『勞働者新聞』あり。書籍としてはカザンより逃れ來れるミハイル、エルピディンの一八六六年を以てゼネヴァに『暗語』ある二小冊子を發刋せるあり。其一冊にはカラコゾフの謀殺と政府の政略とを論じ、一冊には六二―三年のカザンの騷擾を序述せり。彼又六八年より七九年までにチェルネシェヴスキーの全集を出したり。其他此地に於て『滿腹者及饑者』なる一書バクーニン派によりて出版されたり。革命黨の傳記としては、クラポトキンの『革命黨の自傳』及『アレキサンドル、ミハイロフを懷ふ』等あり。

亡命客の二派

總べて西歐に於ける虛無黨の亡命客に二つの種類を區別するとを得べし。其一はバクーニン派にして極端なる無政府主義を唱導し、一はラウロフ派にして經濟事情を基礎とせる社會改革を主張す。此外なほ革命主義者として二者以外に立つ者あきに非ずと雖、就中最も勢力を得しは此等に過ぎずとす。左に逐次彼等の何物たるかを示さん。

バクーニン派

一八六八年九月より七〇年九月までバクーニン及びエルピディンの二人、雜誌『民事』をジェネヴァに發刋し、無政府主義を標榜して唯物論、無神論を唱へ、遺產傳襲の廢止、男女同權、兒童の自由敎育、土地の分與、勞働者に對する勞働用具の貸附等を主張して曰、將來に於ける社會組織は農民及工民の自由なる集合より成るべく、無用の政府は須く之を廢すべしと（虛無主義の皷吹者の章參照）。此バクーニンの大勢力に反對して別に西歐に一旗幟を樹てたる亡命客をピートル、ラウロフとす。

ピートル、ラウロフ

ラウロフの家はもと貴族あり。彼一八二三年六月十四日を以て生る。少時軍人の敎育を受け、年二十一の時已に砲兵學校の高等數學敎授となり、後砲兵大佐として首都士官學校の敎授となりしが夙にチェルチシェヴスキー。ミハイロフ等と交り、屢々革命主義の新聞に投書し、且つ六〇年にありては公然講演を試みて其社會

主義を採る旨を述べたり。之を以て六六年カラコゾフの皇帝謀殺起るや、彼は危險の徒と見做されて四月二十五日、ヲログダ縣の一小村に追放せられ、六八年、配所に於て有名なる『歷史斷片』を著し、其中に於て、有識人士の義務はあらゆる手段により文明の進歩に貢獻し、勞働民の苦痛を輕減し、彼等の生活をして自由に開展することを得せしむるにある旨を述べたり。六九年、彼大膽なる革命黨員ロパチンの救出する所となりて逃亡し、翌年三月巴里に至り、地の共產主義者の反亂に加はりて暴動し、之れより轉じてチウリヒに至れり。彼哲學上の著述あり。論客文人として之を見る、バクーニンは到底彼の比に非ずと雖、彼素と溫和の意見を懷抱するを以て極端に走らんとする虛無黨の青年は之を喜ばずして却てバクーニンを戴きたり。これ彼の學力のバクーニンに優れるにも拘らず、其勢力の稍之に一歩を讓るに至りし所以なり。一八七三年彼亡命者より虛無黨の綱領を草案するとの依賴を受けしが、其作る所の餘りに寬に失すとて彼等の滿足を買ふ事能はず。屢〻稿を更へたる後、此年チウリヒに創刊せられたる雜誌『進め』の第一號に載せられたり。此雜誌は亡命客の革命運動に於て最も著大なる勢力を有したりし者にして

ラウロフ主筆の下に七七年に至るまで每年一回づゝ五卷を出版したり。

ラウロフの革命意見によれば、民事を改革せんとする、先づ社會上經濟上の平等を求めて政治上の自由の如きは之を第二段におくべしと云ひて、憲法は全く社會上經濟上の權力關係に從屬すべき者たることを主張し、即ち公民權、收入の平等、勞働者の參政權、集會の自由、地方分權等を得んことを望めり。彼以爲、政治上に於ける憲法は全く社會上經濟上の權力關係にかゝわるが故に、國家をして憲法を制定せしめんと欲せば必ず革命によらざる可らず。若し然る時は中央集權の國家は滅亡して自治的地方聯合の傾向之に代りて生じ來るにすぎざるべく、經濟上の事情は尙は依然として除去せらるべくもあらず。凡て中央集權的の主義組織は皆都民帝國を打破して都民共和國を建てんと欲する者なり。然れども果して此の如くむば國民的政治問題は解決せられ得るとするも、社會上の問題は到底解明し得らる可からざるあり。故に吾人は須く餘りに抽象的に走らざるを要す。我露國民の將來に於て着目すべき所は農民共有財產の上にあり。之を基礎として發展し、共働し、所產を分配し、すべて此の共有地を以て政治的組織の根本となすはこれ實

に方今の急務なり。然れども之を實行するの手段としては先づジャコビン流義を棄てざるべからず。革命黨員たる者、須く諸種の訓練を躬行し、經驗を重ねて充分なる一身の實力を養成し、又深く民情を探りて其生活欠乏を研め、社會上經濟上に關して適當なる意見を作り、然る後己が利害を捧げて民間に遊說し、之に施すに精神的感化を以てし、之に教示するに其地位、職分及權利の如何を以てし、又之を獲得するの方法を以てすべし。各員の一身上に關しては身を農民に變ずる可なり。工民となるも可なり。記者となる可なり。官吏となる亦之を妨げず。要は其職と位地の何たるに論なく、只我主義の擴張に努力するあるべきのみと。見るべし、彼が或度までは國家の勢力を認むる者にして、此点に付てはバクーニン流の無政府主義と稍〻其見を異にする者なることを。而して此思想は一八七六年に於て出されたる彼の著『將來の社會に於ける國家的分子』に於て最も見らるべし。之を要するにバクーニンは煽動により、暴起によりて革命を起さんとする者にして、ラウロフに至ては之を遂ぐるの手段として平和的遊說を撰ぶ者たるなり。

バクーニン已に衰へて又奔走活動するに堪へず。是に於てか彼の派の青年に向

ピートル、ツカツチエフの極端論

ては彼に代るべき人物を求むるの必要ありき。此處にピートル、ツカッチェフなる者あり。初め一八六九年のネッチャエフ事件に連累して追放せられ、七三年の末チャイコウツェ團の二三員に救ひ出されてチウリヒに逃れ來り、記者として雜誌『進め』に執筆せんとしたりしが、其到底ラウロフと相容れざりければ、彼は怒て七四年四月、公然書をラウロフに送りて其主義綱領に非難を加へ、彼が革命を欲せずして平和的改革を望み、所謂ラッサル流を採る者なるを笑ひ、かくの如き血を流さゞる革命ならば第三局と雖、決して之を齒牙にかけざるべしと云ひ、且曰、足下は人民及青年を思ふの情薄し。腕力的の革命を避けて青年をして徒に退嬰主義を採らしむる者なり。吾人は即然らず。極力不平と反抗とをあらゆる團体に皷吹し、政治上の陰謀民間の遊說、及直接の煽動により、彼等をして叛亂を起さしめずむば止まざるなり、問題の解決は唯一に革命を行ふの一事にあるのみ。革命黨は活動者たるべし。吾人は最後の血滴を注がんまでも政府に反抗し、現在の秩序に逆ひて戰を挑まざるべからずと。

彼とラウロフとの爭論

ラウロフは之に付て一の冊子を草して大にツカッチエフの謬見を匡し、且曰、ツカッチエフはジャコビン主義者なり。現在の政府に代ゆるに他の

者を以てせんと欲する者なり。果して此の如くならば國民は唯野心ある權謀家の籠絡する所となるのみに非ずやと。蓋しッカッチエフはネッチャエフの議論を採用しつゝある者、政治上の革命論者なり。中央集權主義者なり。ジャコビン黨なり。ブランキー黨（ブランキーは佛國の有名なる政治的陰謀者なり謀叛人なり）なればなり。

『警鐘』

一八七五年十一月、才能あり批評の力に富めるッカッチエフの下に月刊雜誌『警鐘』（一八七八年まで續刊）現る。彼はバクーニンを初めラウロフに至るまで總べての革命黨と其意見を異にし、彼等を目するに詭辯的夢想家又は妄想的ユトピストを以てし、自ら『思想上の混沌』（彼の著書として此外『勞働者』及『團体』等あり）を著して大に彼等の説を駁し、政治的革命を以て第一着歩とし、遊説や煽動の如き緩漫なる手段を止めて須く暗殺を實行し、間諜者壓制者は總べて其人の如何なる位地にあると問はず、盡く之を謀殺すべきことを唱へ、苟くも決死の士にしてある、假令少數者と雖、尙は能く政府を震駭するを得んと云ひ放てり。

政治的自由主義の極點

此議論はバクーニンの説に一歩を進めたる者にして、虛無黨の政治的自由に關する見解は正に茲に至て其極に達したり。是に於て彼の見を賛する者は彼を頂きてツルスキー團（又はアマリー團とも稱す）なるブランキー主義者の一團体を組織したりしが、知命の亡命客にして之に反對する者多く、雜誌『團体』の如きは一八七八年十月、五名士の連名にかゝる駁論を載せて『警鐘』を排斥し、ドラゴマノフ教授も亦之を否認する一篇を同誌上に掲げたり。然れども此反擊にも拘らず、露西亞本國の革命黨が暗殺主義を採るに至りてよりッカッチエフ等は一時勢力を得て之と結び、大に其主張を祖國に擴張せんとて富豪友人ツルスキーの輔助により、一八八〇年秋、活版所をジエネヴアより彼得堡に遷したりしが、幾くもなくして沒收せられて空しく失敗に了りたりき。

『進め』の廢刊『團体』の發刊

一八七六年の末、ラウロフ雜誌『進め』の主筆を辭し、此時袂別の詞を述べて虛無黨亡命客間に於ける黨同伐異の弊風を指抉し、痛く之を戒めたり。七七年、『進め』の最後の巻（第五巻）スミルノフの下に現れぬ。同年九月以來『公共の事』ジエネヴアに發刊せらる。此新聞は實に政治的立憲主義者の機關紙なり。ハリストフオロフ主筆にてアリスソフザイッエフ（一八八二年に死す。もと雜誌『露語』にてピスサレフと共働者なりし人なり）之を助く。こは永き間續刊せられたりしも、革命運動に與へたる感化としては多く見るべき者なかりき。『進め』の廢刊せられたる後、ジエネヴアの虛無黨員は更に一八七八年一月より此地に

雜誌『團体』を出版して此年十二月に至り其九卷を公にせり。『警鐘』の激論に反對する者あり。執筆する所名士多し。敎授ドラゴマノフ。ステフアノキッチ。アクセルロード等是あり。此雜誌の本國に影響せる者尠からず。最後の卷に於てドラゴマノフとステフアノキッチとの間意見の衝突を來し、前者は政治上の改革を主張し、後者は寧ろ社會上の革命を重じたり。

外國亡命者の新誌は革命運動がある學理的にして社會的ありし間こそ之が感化力もありしかど、運動の次第に激烈となるに從ひて次第に薄くなり、暗殺主義の一世に流行する頃ひとなりてよりは、專ら必要ある書籍の再版、飜刻等に從事し、ラウロフの如きは社會革命的の文書を出版するの任を受けたり。シエッフレの『社會主義撮要』はラウロフ及タルノヴスキーの批評的註釋を加へられて出で、マルクスの『共産主義的條目』は飜譯せられ、ラウロフの巴里自治制に關する一の著又出版せられぬ。一八八〇年の初めラウロフ巴里にあり。二つの小室に充滿せる載籍の間に埋りつゝ、兀々として自家の哲學に關する見を纂述せんとを勉めぬ。八二年二月十日、時のガムベッタ内閣が好意を露國に表せんが爲にフレシネーをして彼を佛國外に放逐せしめ、彼は由て倫敦に赴きたりしが幾くならずして此年許されて又巴里に歸れり。八三年『民意帶信者』の發刊せらるゝに及び、之が主筆となる。

彼は實に戰闘者に非ずして眞面目なる哲學者なり、理論家なり、考察の人なり。煽動者に非す、又過激黨に非ざるなり。

因に記す、ラウロフは『民意帶信者』に一八八七年まで執筆し、翌年より其大著述『近代思潮史研究』を出せり。一八八九年、巴里に於てマルクス派露西亞亡命客の大會ありし時、彼は之が首領を以て推され、演説して曰、舊經濟制度は頹れたり。農民は漸次都民の器具として彼等の勢力の下に包含せられんとし、貧民は都市及大工業地に漂泊し、大工場は正にさきに全盛を極めたりし戸内工業を打ち滅しつゝあり、而して政府は國庫の欠亡の爲めに寧ろ此資本的生産を助長せんとするの風あり。之れ實に畏るべし。從來に於ける露國革命的運動の失敗は、主として其根底の固からざりしに座す。故に吾人は正に勞働者を引卒し、其運動によりて成功せんとを計るを以て今日の急務とすと。彼はこれより永く巴里に住めり。

ラウロフ及ツカッチェフ以外に立ちて亡命客中錚々たる者をクラポトキン公とす。彼はルリックの舊家系を承くる露西亞の名門にして父は廣大なる地所を有し、貧産裕富なりき。されば彼の徒は彼を以て獨逸人たる歷山二世よりも寧ろツァー

ルの位を践むべき正當の權利ある者ありと云へりと云ふ。彼幼時華族學校に入り、一八六一年優等を以て卒業し、黑龍江哥薩克の士官として西比利亞に赴き又支那に旅して其風土地理を精究し、頗る得る所あり。六七年、首都に還り、其大學に入りて地質學及地理學を研究すること四年、終に其地理學協會の會員に推され、後又書記となる。其作る所の文章尠からず。また芬蘭の氷河に關する大著述を撰べり。後人々の勸めに從て宮內省に入り、皇后宮大夫に任ぜられ、位記勳章を賜はり、九重の御覺へいと目出度かりけるが、一八七二年、其一度西歐に遊びて白耳義、佛蘭西、瑞西等を歷遊するに及びて、彼は國際黨の感化を受けて終に一身の方向を轉じ首都に歸りて終にチャイコウッエに加はり、其綱領を草するの任を委ねられ、又『革命は果して必要あるか』と題する一小冊子を作りたり。此冬、彼ボロディンと僞名してアレキサンドル、ネヴスキー街に勞働者を集め、密に國際黨の歷史を講じ、彼が辯舌の流暢にして其所論の明晰なりけるより、忽まして大喝采を博し、二ヶ月にして全く其講を了へて去りしが、事警官の耳に觸れて偵求極めて嚴しく、翌年彼が畵工と僞て遊說しつゝありける時、彼を見知れる一勞働者の密訴する所となりて捕へられ、終に其眞名を白狀せり。されより彼首都なる彼得及保羅城に幽閉せらるゝ事三年、一八七六年の初め其健康を損したるの故を以て醫師の勸めによりて聖ニコライ病院に遷され、病既に數月を以て癒へたるが、彼は尙は僞りて滯留し、院外の同志と通じて密に脫走せんことを計り、七六年六月末終に番卒の隙を覗ひて逃走しジュネーヴに至りぬ。彼が其後に於ける運動に付ては吾人は便宜上之を後篇に讓る。

クラポトキンは天性の煽動家なり。秘密の謀を旋して事を圖るが如きは彼の最も不得意となす所、其實地運動に際するや、機に臨み、變に應じて智謀湧くが如きと能はず。然れども其卒直にして僞らざる、大に人をして心服せしむるに足る者ありき。加之彼の辯舌は爽快にして活氣に富み、且歷史に精しきが故に比喩引例常に溢るゝが如く、其論理は整然として紊れず、而して又文筆の技に長けたり。彼は實に好乎の煽動家たりしなり。去れば有名なる地理學者にして社會主義者たるエリゼー、レクルスの如きも彼の能力の偉なるには驚嘆したりしとなん。

マルクス黨ゲオルル

ヘルツエン。バクーニンを初めラウロフ、ツカッチエフ及びクラポトキン等以外亡

ゲ、プレハノフ

レオ、チホミロフ

命客として名ある者をゲオルグ、プレハノフ及びレオ、チホミロフの二人とす（有名なる一八七八年の謀殺者ヴエラ、ザッスリッチは後西歐に至り殊に瑞西に居を占めて大に運動したり又亡命者中の首魁也）。プレハノフはマルクス學徒なり。『我等の爭論』を著述して露國の社會主義は到底集産の制により得べき者たらずして須く資本論を以て其出發点となさゞるべからざる所以を論じ、アクセルロード、ザッスリッチ等と共に露國社會民主黨同盟なるものを設置し、勞働者文庫を建てゝ圖書を蒐集し、一八八八年九月、ジエネヴアに機關紙『社會民主黨』を發刊しぬ。以爲、須らく先づ民間に入りて科學的社會主義を遊説し、工民の間に一の團体を組織し、彼等をして大に活動せしめざるべからずと。八九年、巴里に於て露國亡命客中マルクス派の大會開かるゝや、彼はラウロフと共に專ら其牛耳を握れり。彼今や瑞西に在て盛に其社會民主々義を鼓吹しつゝあり。其著『無政府主義及社會主義』は科學的哲學的の管見によりて書かれたる者、バクーニンやクラポトキンの言論に於けると同一視すべからざる者あり。蓋し尊重すべき一書に屬す。『政治上及社會上に於ける露西亞』を繙きたらん者は又必やレオ、チホミロフの名を記せざるはあらざるべし。彼は醫師の子なり。一八七一年、革命的遊説員となり七三年、捕へられて獄裡に呻吟すると五年、其獄を出づるや、七九年に於けるリペックの會議に列し、實行委員の主導者として八〇年代の初年に至る迄大に運動せり。八四年、彼ジエネヴアにあり、ラウロフ等と共に『民意帶信者』に執筆す。彼の名著『政治上及社會上に於ける露西亞』は初め佛語を以て出されたる者（八六年二月刊行）、露西亞研究者最重の資料たり。彼は一身の所在を晦隱するに巧に、露政府の嚴偵も遂に彼を捕ふると能はず。故にシェリヤボフは彼の探出しがたきを評して彼は恰も大海の底に落ちたる針の如しと言ひたりしと云ふ。

第六章　虚無黨の女傑

女性の多きは虚無黨の特色。女子の遊説員。女富豪。虚無黨の熱血女ソフィア、バルデナ。法廷に於ける彼女の辯論。虚無黨女員の聖き寳物。女員の習俗。彼等の品行。

(一) ウイエラ、ザッスリッチ
(二) ソフィア、ペロウスカヤ
(三) ユエスヒ、ヘルフマン

虚無黨の革命運動に於て殊に人目を牽くは實に其女員の勢力を有することにあり。佛國の大革命に際する、纎々たる女性にして其間に顯れし者甚だ尠からず。而も到底之を虚無黨の女傑に比すべくもあらざるなり。彼等の中には年老たるあり、若きあり、醜きあり。而して又二三の非常なる美人あり。其家を以てすれば貴族あり、高官あり、富豪あり、町民あり、多くは妙齡の女學生なり。ナタリー、アルムフェルド。バルバラ、バドユシュコワ。ソフィア、ペロウスカヤ及びソフィア、リューシエルン、フオン、ヘルツフェルドの如きは皆上流社會に出でたる者、女富豪としてはスブボチナ姉妹及コレッスニコワ等あり。此外カタリナ、ブレシュコウスカヤ。アレキ

サンドラ、オホレメンコー。マリヤ、ニコレウスカヤ。ソフィア、バルディナ。ウイエラ、フイリッポワ、フイグネル及リウバトキッチ姉妹等皆之を知名の女員なりとす。此等の中バルディナ。フイグネル。三スブボチナ姉妹。二リユーバトキッチ姉妹及び其他トポルコワ。アレキサンドロウナ等の女學生は一八七〇年代の初めに當りて瑞西なるチウリヒ大學に遊學しつゝありしものなるが、一八七三年露國政府が嚴命を發して其青年男女のチウリヒ大學に入ることを禁ずるに及び、彼等は已むを得ず本國に歸り、多くは莫斯科に駐在して日曜毎に勞働者を集めて密に遊説しき。然るに一八七五年幾くもなくして又もや大捕縛あり。是に於てか彼等は盡く逃れて多く地方に赴き、フイグネルとアレキサンドロウナとは棉の産地たるイワノヲ村に入り、オルガ、リユーバトキッチはオデッサ及ツラに、ツイツイアノワ公爵夫人はキエフに、ウエラ、リユーバトキッチは莫斯科にて各工場に入り、又農夫と交りて盛に革命論を皷吹し、此外アレキサンドラ、オホレメンコーはカメンユエッツ、ポドルスクにあり、カタリナ、ブレシユコウスカヤはコウノにありて運動しき。カタリナはチエルニゴフ縣なる平和判官の妻なり。七〇年代の初め夫と共に首都に赴き

虚無黨の熱血女ソフィア、バルディナ

てチャイコウツェに入り、就んと三ヶ月の間身を勞働者に伍して小露西亞の三縣を遊説し、其辯舌の爽快なるを以て農民を感動せしめたりき。女富豪にして遊説員の煽動に助力したるは又實に著しきの事實あり。例へはクルスクにありてはスブボチナ運動の牛耳を握り、ポルタワにはコレスニコワありて運動費をキエフ、ハルコフ等の革命黨に供給したりしが如し。

一八七五年、莫斯科なるラザレフと云へる者の商店に二人の若き婦人來りて店員として雇使せられんことを請へるに、主人其風釆を見て常人に非ずして必や教育ある婦人ならんことを思ふも、其望みに應じ、鄭重なる取扱ひを以て彼等を使役しけるが、二人は漸くにして人々の信用を受くに及び、密に其共働者に鼓吹するに革命主義を以てしたり。然るに幾くもなくして此年四月十五日、其中の一女捕へられたり。彼は實にソフィア、バルディナとて莫斯科有名の革命黨員なりき。彼は女員中の血性兒、一八七七年二月、有名なる五十人事件に連累して捕へられ、法廷に引かれて同志の多數と共に裁判を受けしが、彼女は撿事の論告了るを待て質素なる衣服を着けたるまゝベンチの上に立ち上り、滔々たる辯舌を以て一々之を論破して曰、『前

バルディナの法廷に於ける辯論

略）余は財産を保護せんことを欲する者なり。何となれば余は誰人も彼が自家の勞働によりて得たる財産を所有するの權利ありと信ずればなり。余に語れ、財産を破壞したるは果して我等革命主義者なるか、己れ多額の收入を貪りながら、勞働者に與ふるには極めて僅少なる給料を以てせる工場主にてあるか、將た多數の家族を亡ぼしつゝ、己れ坐ながらにして一攫千金を得んとするの投機師なるかを。余は他の遊説者の如く强て共產主義を實行せんことを主張する者に非す。只勞働の結果たる生產に對する勞働者正當の權利を要求して足れりとする者なり。

家族に付て云はんか、家族を破散せしめたるは果して誰ぞ。女子をして貧窮の余、僅少の勞銀を以て彼等と其子弟とを墮落せしめぬべき腐敗せる今日の工場に入らしめ、終には之をして媚を販ぐの余義なきにまで迫らしめたるは社會なるか、將た此等の宿弊を矯正せんとする我々なるか。

宗教に付て云はん、余は宗教の精神、及高祖基督によりて說かれし根本の敎理に向ては從來極めて忠實に服從し來りしものなり。

余は反亂の煽動者なりとて訴へられたり。されど余は決してかゝることを人民に

勸めたるとなし。虐殺は只虐殺なるが故に余は之を厭ふ。然りと雖、或條件の下に腕力的革命を行ふとの必然已むを得ざる者たるは余の又信ずる所なり。政府は云ふ、我等は無政府の時代を現出せんとを欲する者なりと。されど無政府なる語は今日世上一般が用ゐ、又余自身が理解する所にては決して反亂や暴政をば意味せぬなり。そは暴政にはあらぬなり。何となればそは各人の自由が他人の自由の始ると共に終ると云ふとを認めて、只社會の自由なる發展を妨ぐる有害なる權力を否定せんとするものたるに過ぎざればなり』と。是に於てか裁判長は彼の激論を中止せしめ、之が退去を命じ、憲兵をして強て之を法廷外に拉し去らしめたり。彼は之によりて終に過重なる九ヶ年の懲役を命ぜられて之に服しつゝありけるが、一八八〇年十二月、西比利亞なるイシムの獄を脱して瑞西に至り、八三年春ゼネヴァに客寓中、銃を採て自殺したり。

すべて此等の女子は假令高位高官者の愛嬢として深室に養育せられたるものと雖、其一旦革命運動に加はるや、遊説の爲め卑賤なる勞働者と伍し、身に襤褸を纏ひ、親しく彼等と寢食を共にして其革命論を皷吹し、之を煽動したり。一八七五年の中頃までに裁判に附せられたりし國事犯の被告七七〇人中、男子は六一二人にして女子は一五八人、即女子は總數の二割を占めたりしと云ふ。斯の如き多數の婦人は其愛嬌や恍惚性によりて巧に人の同情を牽き得て、遊説の際頗る功績あり、其黨中に於ける勢力や實に慢るべからざる者ありき。さればバクーニンの如きは女員を稱して貴き寶物なりと云へり。彼等は又ヘルッエンを讀み、チエルネシエヴスキーを繙き、又西歐の社會主義を研究して己が位地の必や高められざるべからざるを主張し、自ら女と云はずして女の人と呼べり。就中ソフィア、ペロウスカヤの如きは男子は女子よりも劣等なりと公言して憚らざりき。

彼等の服裝は又常人と異りき。垢に泥みたる黑く短き衣服を着けて袴を穿たず、必や柔皮の帶を用ゐ、塵つきたる帽子を頂き、又青眼鏡を掛けたり。蓋し其容貌風態を變へんが爲なり。殊に彼等の理想論を躬行せんとする過激の婦人に至ては男女全く區別あるべき者に非ずとして往々にして斬髮して圓頂となり、卷煙草を喫し、一切男子の行ふ所に倣ひて以て得意となすに至りき。之に付て一話あり。そは最早斬髮、短衣、汚れたるカフス等の流行の婦人界に廢れたる時にてありける

貴き寶物

女員の習俗

彼等の品行

が、一日一の男裝したる此種の若き婦人の怪しげなるガリバルヂー帽子を頭上に頂きたるが首都の街上にて皇帝歷山二世と遭ひき。彼女は何氣なく恭しく皇帝に敬禮して行き過ぎけるが、翌日警察署よりの呼び出し狀に接せり。彼女は毫も其何故たるやを解する能はずして出頭せるに、署長はしばし唇を開くことをためらう者の如くなりけるが、漸くにして云て曰、昨日陛下には卿を街上にて見玉ひ、痛く卿の裝ひを不快に思し召され、今後斷して斷髮すまじき約定書に捺印せんことを命じ玉へりと。蓋しかゝる常識以外の行動は最もアレキサンドル皇帝の嫌忌し玉ひし所なりければなり。之を要するに衣服身体の裝飾に介心せず、弊衣弊帽にして平然たるは彼等女員の特色にてありき。何となれば彼等には直に胸中の理想國を實現せんことを欲するの外何等の望みだもなかりければなり。彼等は此の如くにして其男員と事業を共にし、常に食卓住居を共にしたるにも拘はらず、男女間の關係に至ては決して之を亂すが如きことなかりき。これ實に虛無黨をして彼の如き兇行暴亂を敢てせしめながら而も其個人的道德に於て極めて潔白淸廉なるを致さしめたる所以にてありき。

虛無黨女員の聖徒

虛無黨の人名簿にはウィエラ、ザッスリッチ。ユエスセ、ヘルフマン。ソフィヤ、ペロウスカヤ。ナタリヤ、アルムフェルド。ソフィア、リユーシェルン、フオン、ヘルツフェルド及ウィエラ、フィリツポワ、フィグネルの六人を以て同黨女員中の聖徒と稱し、殊に朱字を以て其名を印刷せり。就中ペロウスカヤ及フィリツポワ、フィグネルの二人才貌の兼備あるを以て鳴る。後者は一八八四年に於ける十四人事件に於て目ざましき働きをなしたる人にして、當時彼得堡に於ける彼女の家は虛無黨武器の貯藏所となり、爆裂彈の山をなしたりしとぞ。彼女は今や捕へられてシュリュスセルブルクの獄窓に呻吟しつゝあり。又ヘルツフェルドは既に是より先一八七九年一月二十六日、キエフにてオッシンスキーと同時に捕縛せられ刑の宣告を受けたり。

左に以上六聖徒中の初三につきて其略傳を作る。

ウィエラ、ザッスリッチ

（一） ウィエラ、ザッスリッチ

ウィエラ、ザッスリッチは年十七の時巳に家を脫して有名なるネッチャエフと交り、その運動に加はりたりき。蓋しネッチャエフの莫斯科大學にあるや、彼はザッ

スリッチの兄弟の一人を學窓に知ることを得て從てウィエラと交を結ぶゝ至りたりしなり。彼女の政治上社會上の事に付て興味を有するに至りたりしは實に此交りによれり。一八六九年のネッチャエフ事件起るや、彼女莫斯科に捉へられてリトヴスキーに繫がるゝこと一年、翌年、彼得及保羅城に遷され、これよりクレスツェー。ツウェル。ソゴリッチ及ハルコフ等に轉送せられぬ。此時彼女は知名の虛無黨員が各地の獄中に於て虐待を被りつゝあるの狀を目擊して憤慨の情に堪へざりしと云ふ。既にして二年の後放免せられて彼得堡に歸り、府知事トレーポフ將軍が虛無黨の囚人に對する冷酷を惡みて遂に彼を射擊しぬ。これ實に一八七八年一月二十四日に於ける出來事にして、而も反政府黨の遊說煽動をして一轉して暗殺恐怖の時期に入らしむる所以の相圖にてありき。四月一日、彼の公判あり。終に無罪の宣告を受けしが、一八八〇年來瑞西に趣き、ロシュフォルと云へる者と共に銀行事業を營み、西歐に於ける露國革命黨の一巨魁として大に運動せり。ウィエラの本國にありしや純然たる虛無黨員にして頭髮を斬りて短くし、又柔皮の帶をしめたり。彼女の姉妹も亦追放せられたりし一虛無黨員の妻となりしと

ソフィア、ペロウスカヤ

云ふ。彼女稍ゝ文才あり、其セルペホフにありし時には記者たりき。彼美ならずと雖、目涼しくして風姿瀟洒たり。居常沈鬱なれども談若し熟する時は高聲四座を驚かす。其諸方に運動遊說する、時に活版所の活字組立人となり、田舍茶屋の女主人となり、甚しきに至ては下婢とさへなりし事あり。されば素樸にして甚だ修飾せず。躬自ら極端なる理想主義を實行したりき。トレーポフを傷けし後、虛無黨熱誠の一女傑として其名漸く同黨中に高まり來りしも絕へて之を自負するの色なく、多く多數黨員の面前に出でず、熱心其仕事(虛無黨員は彼等のすべての革命運動を稱して仕事と呼べり)に從ひたり。ツルゲネフの小說『處女地』中の人物マリアン、ニケンチェヴナは實に彼女自身を活寫したる者なりと云ふ。

（二）　ソフィア、ペロウスカヤ

ペロウスカヤの家ペロウスキーは彼得大帝より出でたりし貴族にして、彼女の祖父はニコライ一世の內相たりし事あり、父は首都の知事にして、父の同胞なるペロウスキー伯はニコライ一世の時中央亞細亞の大部分を征略したる著名の將軍なり。ソフィア一八五四年を以て生る。父は極めて嚴峻壓制なりしかども、母は溫

良にして慈愛に富みたりき。彼八才讀書を學び、後母に伴はれてクリミヤなる別莊に赴きたりしが、一八六九年首都に歸りて其女子中學に入り、キルベルグ。コルミロワ及ソフィア、リユーシェルン、フォン、ヘルツフエルド等の諸學友と親交しぬ。此等の人々は皆其後に至り虛無黨に加はりて名を著せし者なり。然るに父は彼女をして深く學ばしむるを好まず、且此等の友と交ることを禁じたりしかば、ソフィアは一八七〇年、年十七の時終に家を脫して友人の宅に匿れ、母が密送する所の學費によりて出精勉强し、先づチエルネシエヴスキー及ドブロルユボフを讀みて大に其感化する所となり、後チャイコウスキーと共に所謂チャイコウツエの革命團を組織し、其意思の堅きと智能の俊邁なることを以て年少既に團中の有髯男子を凌駕せり。一八七一年より翌年にかけて行はれたりし遊說は彼女の發意計畫に屬する者多く、彼女は躬親ら田舍の小學敎師となり、七二年に於てはウラル山中のカマにあり、其饑渴に迫りたりしこと屢〻、具さに辛酸を嘗め、これより轉じてツウエル州のユエデムノヲに至り、又敎師として遊說し、正直と熱心とを以て至る所勞働者の同情を引けり。七三年十一月、アレキサンドル、ヂヴスキー街に運動を試みつゝありし時捕へられしが證據不充分なる爲め拘留一ヶ年にして放たれてクリミヤの別莊に赴き、其地警官監視の下に居ること三年、七七年一九三人事件あり、チャイコウツエの團員盡く捕縛せらるゝに及び、彼又其中に數へられて獄に繫がれ、翌年憲兵の護衞を以てオロネッツに配流せらるゝことゝなりしが、彼女はチユードヲの停車塲に至るに及びて憲兵の目を掠めて逃亡し、再び首都に至り、身を新に組織せられたる土地自由黨に投じ、此年首都、莫斯科及ハルコフを通じて武裝せる一隊を組織し。自ら其長となり、衆と共に士官憲兵を僞裝し、ハルコフより中央監獄に赴く途上に於て國事犯罪人ロガチェフ。コワレック。ヲイナラルスキー及ムラヴスキー等を奪ひ去らんことを謀りたりしが其事成らざりき。續て八月、首都に於てハルトマンのメーゼンツェフ將軍を謀殺するや、彼女は恰も陰謀本營の女主人として此事件に關係し、若し一旦警吏の襲ふ所とならば己自らナイトログリセリンの沈澱物を爆發せしめて人家共に盡く之を空中に卷き上げん計畫なりき。一八七九年莫斯科に於て鐵道線下に地雷を裝置し、以て皇帝の弑害を謀りたりし時に於ては彼は龍車の其地點に到りたりしを相圖して發火の暗號を與ふるの番人に選ばれたりき。

是より先、此年彼土地自由黨のヲロネッシュ會議に列し、後其一分派たる民意黨の實行委員に擧げられて各員を統率し、凡ろ從來の大謀殺にして彼女の關係する所たらざりしは殆んとなかりき。一八八一年三月一日の大運動に際しては彼女は實に其指揮者となり、當日鉛筆もて暗殺を行ふべき地方の圖を明細に同志に指示し、又己がハンケチを打ち振りてカタリナ溝渠に沿うて各所に配置せられし共謀者の各に其何處に行くべきか、何處に立つべきかを相圖し、且つ皇帝の一行の近づき來れることを示し、先づリスサコフをして第一彈を投ぜしめ、其成就せざるを見るに及で更にグリネキッキーをして第二の彈丸を擲たしめたりき。彼女實行委員たるシェリヤボフを愛し、シェリヤボフ亦頗る彼女を愛して二人の交情頗る厚かりき。大謀殺に先つ一兩日、シェリヤボフは既に政府の捕獲する所となりけるが、弑害の後彼女は友人の爲め外國に逃亡するの得策なることを勸められたりしも聽かず、終に十日、馬車にて市中通行の際捕はれたり。

ソフィヤ性至孝、其如何なる境遇にあるも母ワルワラ、セルゲユェウナを忘るゝ能はず。警吏の嚴偵を顧みず身を賭して母を見んことを試みたりし者屢なりき。其捕はれて獄にあるや、公判の前數日即三月二十二日一書を裁して之をクリミヤなる母に送りて曰、兒が此度の運命は元より初より期せし所、自ら信ずる所を貫きて斯の如きに至るは敢て怨む所悲む所にあらず。兒は到底此信念を枉げて爲すに忍びざる者なればなり。只願くはかゝる運命によりて母上を哀絶せしめたる兒が罪を赦させ玉へ。望むらくは一度面會の時を得せしめよ。兒の衣は痛く汚れたり。カフスと襟とを齎し玉はずや。公判の時に臨で改めん。さらば、再會の時にと。母は之を披き閲して驚天し、惶惶彼得堡に至りたりしが、僅に宣告の日に於て路傍より愛兒の馬車にて運ばるゝを見るを得たりしのみ、獄吏は遂に彼女の面會を許さず。既にして四月三日、途上又ソフィヤの引卒せらるゝを瞥見したりしが、今は最早刑場に赴かんとする所にてありき。此日早朝ペロウスカヤはセメノウスクの刑場に引かれ、極めて眞面目にして自然なる態度を以て靜に刑の執行を受けたり。時に年僅に二十有八。其公判の開かるゝや彼女は肅然として判官の前に進み出で、身女性なりと雖、其故を以て酌量を加へらるゝなく、必ず他の共謀者と共に同一の刑に處せられんことを申請したりしと云ふ。

彼女は虛無黨女員中の美人、瘦身にして容顏頗る愛嬌に富み、笑ふ時恰も小兒の如く、されば年二十五、六に及ぶと雖、風姿擧動尙は妙齡の少女の如くに見へたりしと云ふ。又多く修飾せず。衣服の如き其身に適するや否やは毫も之を顧みざりき。然れども性極めて不潔を嫌ひ、最も小兒を好めり。好乎の女敎師なりき。病者の看護に於ては彼女又頗る親切にして巧に、友の病に罹るに際すれば、直ちに走せて其宅に至り、之が枕頭に侍するを常としけるとぞ。

クラポトキンの『懷往事談』(一昨々年の刊行に係る)に彼がペロウスカヤ等と共にチャイコウツエの團体を結び、密に運動せし時の記事あり。頗る當時の有樣を追懷せしむる者あるが故に此處に之を錄す。『我等の團体の密會は度々あり。余(クラポトキン)は一回だも欠きし事なし。其集會所は彼得堡の郭外なる一小屋にて、そこにはソフィヤペロウスカヤが農民の妻てふ僞造通劵もて住めるなり。彼女は貴族の出なり、父は暫く首都の軍務知事たりし人なり。彼女早く母の許しを得て家を去り、高等の學校に入り、富める工業家の女たるコルニロフ姉妹三人と共に自修倶樂部を創立せり。これ實に我等の團体(チャイコウツエ)の前身たりし者なり。ペロウスカヤ既に農夫の妻なりと僞りて棉衣を着け男子の用ゆる長靴を穿ち、頭に棉帽子を被り、日夕ネヴア河より兩肩に桶を荷ひて水を運びける故、誰ありて彼女を上流社會の令孃なるべしと思ふものはなかりき。彼女はすべての人々に愛せられ、こゝに入り來る者は皆彼が溢るゝ許りの愛嬌もて迎へられたりき。彼女殊に潔癖あり、宅中は日々清められて一点の塵を止めず、若し我等にして汚れたる靴のまゝ入り來るあらんか、忽ちにして彼女の叱言に遇へり。彼女擧止すべて無邪氣にして少女の如く、其顏小にして智慮あるを示し、頗る同志の愛慕を引けり。道德上に於ては彼女は實に嚴正一点の汚れを止めざりき。若し何人かの行動に付て憤るとあれば、彼女は忽ち其目もて烈しく其人を瞥睨したり。されど人々は此擧に於て却て彼女の快活にして且つ寬容なる美質の存するあるを認めき。彼女曾て何人かの事に付て談ずる時云て曰、女子中の男子よなど。而して彼女が當時に於ける此言語の風態は今なほ余が記憶にあり〳〵と浮ぶなり』。

序ながらクラポトキンが他の婦人に付て記したる同書中の一節をこゝに載す。『我團体(チャイコウツエ)には尙此外に婦人あり。次の物語りにて之を示さん。一夜クプレ

ヤノフと余とは俄に告ぐべき用事のありてワルワラ、ベー（ワルワラ、バトユシユコワを指すものなるべしと思はる）を訪へり。此時夜既に深更なりしも、彼女の窓はなほ燈火を以て輝されけるより、我等は二階に昇れり。彼女は小き室に机に倚りかゝりて我國体の綱領を認めつゝありき。余は其樣子の氣高きを見て彼に云て曰、ヴアルワラよ、我等は今卿を伴はんが爲に來れり。我等は大膽無謀の策を決し、獄中の朋友を救出せんが爲にこよひ正に行かんとす。彼女之をきゝ何等の問をも發することなく、筆を擱きて椅子より立ち上りて曰、いざ行かんと。其語は寔に飾りなく、單純なりき。されば余は余がなせし僞りの如何にも罪深かりしを思ひ、まことを彼女に打ち明せしに彼女は椅子にもたれかゝり、目に涙を浮べて失望したらん如き聲もて云て曰、さらば戯れにてありしよな、何とてかゝる戯をばさ。余は實に余が行ひたりし無慈悲を後悔しき』。

（三）ユエスセ、ヘルフマン

ユエスセはミンスク州の人、一八五五年を以てモゼルに生れぬ。父は猶太の富人にして、且頑固なる猶太教徒なりき。母は繼母にして彼女を酷待し、彼女十六才の時好ましからぬ結婚を强ゐたりしかば、ユエスセは之を厭ひて脫出し、キエフに至りて女栽縫師となり、傍ら己に欠亡せる初等教育を補ひ、漸くにして讀書に不足なき身となることを得たり。此時に當りて虛無黨の革命的遊說己に天下に普し。一八七四年、彼女產婆を研究し、又革命黨の團体たる自脩俱樂部に入り、其得意なる家政經濟の才能を以て俱樂部に益せしこと少からず。又遊說の爲め日雇人としてキエフ近在に勞働せしことあり。一八七五年、同志の一人より彼女に來りし書狀の爲めに警官に補はれ、拘留せらるゝこと二年、幾くもなくして又莫斯科に於ける五十人事件に連累して二年の懲役を命ぜられ、リトヴスキーの獄に投せられぬ。此時同房に淫賣婦あり。頻に彼女を誘惑して己の徒たらしめんとせしかども、彼女堅く探て應せざりき。七九年三月、スタラヤ、ルスサに送られ、此地警官監視の下に每月六ルーブルづゝの生活費を給せられて留りしが十一月遂に首部に至り、民意黨に入りぬ。

彼女の黨にありて運動するや、多くは陰謀本營の主人となり、或時は勞働者の住家に、或時は爆裂彈製造所に、又或時は『勞働者新聞』秘密出版所に常に一家の監理者となるを例としき。其永き幽囚にあるや、痛く健康を毀ひて爲に神經過敏となりしが、獄を脫し來るに及びても、尙ほ黨の爲に或は信書の配達者となり、番人となり、撒文の散布者となり、非常なる困苦に堪へつゝ、首都を驅走し、深更疲勞して歸り來り

而して又翌朝卒先して寢室を出で活潑に勞働して毫も倦色を顯はさざりき。一八一年三月大運動に先つこと零時彼女警吏の耳目を蔽はんが爲に、故らに秘密活版所を去りて、デ、レシュナヤ街ょ轉じ、黨員サブリンと共に居住せり。これ實に皇帝弑害に關する虛無黨の陰謀所にしてシェリヤボフが爆裂彈の投擲者を撰擇したりしところにてありき。當時此外第一第二の二本營の設けありしかども、これ等は早く既に發見され、ヘルフマンの屯營は三月一日の事ありてより一週日にして警吏の侵入する所となり、サブリンは身の免るべからざるを思ひて卽座に自殺し、ヘルフマンは捕縛せられて爾餘の謀殺者と共に公判に附せられ、恰も妊娠四ヶ月なりし爲め殊に刑を延期せられたりしが獄中に於ける虐待の爲に早產し、生子の死に次ぎて彼女自身も亦八二年二月一日を以て逝去したり。彼女夫あり、ニコライ、コロトケキッチと云ひ、虛無黨中の有力者なり。八一年捕へられ、翌年四月ヘルフマンの逝きて後死刑の宣告を受けたりし人なり。

第七章　國事犯罪人の禁獄及亞比利亞追放

彼得堡の監獄署。ノヴオブエルゴロッドの獄。獄卒の殘忍。キエフ監獄內の暗室。斷食同盟。西比利亞被追放人の數。海上輸送。陸上護送の慘狀。西比利亞カラの獄、追放人の懲役。破獄。自由追放人の悲境。

彼得堡の監獄署

西歐各國の獄制は漸く近世に至りて其改善の氣運に向ひし者あり。故に一般文化に於て遙に後れたる露國の監獄の當時列國に比して又頗る不完全なりしは敢て言を俟たざるの事なり。今彼得堡の監獄に付て國事犯囚が記したる者を見るに、此處にては獄房はさながら窖の如く、窓は隱蔽せられ、空氣の流通惡くして其壁床は盡く濕潤し且寒冷に、光線は一日僅に二時間だけ許さるゝのみ、食物は晝は甘藍の汁と穀物を煮たるものにて、朝夕には只麵麭の一片づゝを與へられ、暖爐の温めらるゝは露國酷寒の時に於てすら僅に三日位にて、甚しきに至ては之よりも尙は少きとすらあり、戶外に出でゝ散步するとは隔日十五分づゝのみとあり。

ノヴオブエルゴロドの獄

又ハルコフ市附近のノヴオブエルゴロッドの中央集治監は廣漠たる畠の中央にあり。

獄卒の殘忍

其中國事犯囚の獄房は窓の牢は蔽はれたるが爲め陰暗にして寒濕に、空氣不潔にて健康者を眩暈せしめぬべし。板床は薄き毛氈もて敷かれ、囚人の寢具としては布團も枕もなく、彼等は只そこに置かれたる机と腰掛とに倚りて一睡を買ひ得べきのみ。病院はあれども、狹隘にして到底日々に增加する患者を收容するに堪へず。白痴、狂人の如きすら通常患者と同室に收められたり。之を守護するに憲兵獄卒あり。彼等は絕へ間なく獄房を巡視して囚人の一擧一動を尤め之を虐待せり。或囚人はあまりに徒然なるに麵麭もて骰子を造りたりしに、獄卒は早くも之を見出して沒收し、囚人は慰めを求むべき者に非ずと叱呼せり。常事犯囚は一房群居を許さるゝも國事犯囚殊に虛無黨員の多くは一房一囚の禁獄とせられ、ニコライ帝の時にありては西比利亞に追放せられしデカブリステン（一八二五年の謀反者）は檢閲を經たる書籍新聞は之を繙讀することを許されしに、歷山二世の世に至りては新聞は固く禁止され、書籍の撰擇は專ら之を監視する者の意志によりて取捨され、總べて獄内には一定の規律てふ者なければ、官吏の意のまに／＼禁せられ、又は許されたり。されば囚人は單獨にて自ら慰めん術もなく、嘗て或一人の虛無黨員は永き月

キエフ監獄内の暗室

日を獄窓に呻吟して共に語るの友とてなきに痛く衰弱し、此無聊を凌ぐの一端ともなさんとて己の位地より少しく身を高めて微かなる聲もて己が生平愛せる詩人の一句を吟じたりしに、獄吏は之を耳にし、忽にして飛び來りて默れと大喝し、之を鎖に繫ぎて動かしめず、如何に哀訴するも聽き入れざりき。又或る他の一虛無黨員は遙に野邊に耕せる農夫の歌を聞きて鄕村を懷ふの情に堪へ難く、又自ら歌ひて鬱結せる胸中の悲みを洩したるに、獄吏は直に至りて之に鐵拳を加へ、此處は苦むべき所にして決して慰めを求むべきの場所に非ずと云へり。殊に苦痛の中の苦痛は暗室の刑にてありき。此處は純乎たる狹き暗室にして之を地上の地獄とにても喩へぬべく、總て獄吏の意に充たずとせられし者は容赦なく此罰を附加せられ、別に一定の法によるには非ざりき。さればセレコフと云へる一囚は看守に向て敬禮をなさゞりし廉を以て此中に投せられたり。今キエフ監獄内の暗室の有樣を記せんに、此は牢獄の下の窖の如き所にして戶は密閉されて中は全く暗く、内には坐することも橫臥することも全く不可能なり、おれ床も壁も甚しく濕りつゝあるが故なり。加之非常に寒冷なるが故に其中にては到底眠ること能はず絕へ

ず立ちつゝあるか、さなくば歩行しつゝあるに非ずしては凌がんすべなきなり。然れども眞黒にして一点の光なき所なれば壁と衝突するの恐あるが故に其行歩運動するに際しては絶へず腕を前方に伸さゞるべからざりき。國事犯囚の惡遇は尚ほ之に止まらずして典獄及獸醫は垂死の病囚が藥を乞へるにも拒みて之を與へざるが如きことすらありき。是に於てか病死、狂死、然らざれば自殺、何れにしても死は就んと免るべからざる彼等の運命にてありき。

斯る虐待の結果として斷食同盟なる者囚人の間に考出せられたり。彼等は協議して五箇條の請求を典獄に提出し、此請求の容れられざる限り我等は決して食物を採らざるべしと云へり。其の五ヶ條とは一、獄房は余りに寒くして濕氣多し、故に暖爐を適當に温むる事。二、寢床は從來貴族の囚人にのみ與へられて平民は直に床の上に伏せざるを得ざるは不公平なり（追放人に向て政府が毎月與ふる金額は貴族の出の人のには八ルーブルにして常人には四ルーブルづゝなり）宜しく同等に之を許すべし。三、散歩は一人のみとせずして之を二囚共になすを許す事。四、廊下のみに限らずして各獄房内にもランプを點ずる事。五、すべて囚人の待遇を寛にし、其牛馬の如き取扱ひを廢する事即是なり。かゝる虐待の結果として虚無黨員の復讐手段にかゝり殺傷せられたる獄吏亦少からざりき。

西比利亞被追放人の數

西比利亞追放の事は十九世紀の初より既に行はれし所にして極刑囚に非ざる者は其常事犯たると國事犯たるとを問はず多くは此地に流さるゝの有樣となり、かくて其數は一八八〇年に於ては増して男女共一六六七九人の大數に上れり。翌八一年よりは樺太（此より先一八七五年樺太は已に露國の領に歸したり）にも配置することとなりて此年追放人の數一六一九九人あり、八二年にありては歐露の全七六七監獄に收容せられたる囚人九四七九四人にして、男囚は其百分の九一六を、女囚は殘余の八四を占めたり。然るに此年に於て西比利亞に流されたる者非常に増加して二三五四〇人となり、翌八三年には三万人となれり。總べて此等の流囚は先づ莫斯科。ニシニー、ノヴゴロッド。カザン及ペルム等の監獄に集められたる上、其等の地の各より陸上なれば流車にてチユーメン。トムスク等を經て東方に護送せられ、又樺太に送らるゝ者は多くオデスサより海上直に流船によりて發せられたり。

海上輸送

一八八一年五月三日流船ニシニー、ノヴゴロッド號流囚四六七人を載せて最初の樺太輸送を試む。然るに其途次四人の死する者多かりし爲め船のコルサコフスキー港（樺太のクシユンコタン港を云ふ）に着せし時に

は生存する者四百人なりしと云ふ。されどそれより甚しきは陸上ニシニー、ノヴゴロッド。カザン及ペルム等より西比利亞に送られたる囚人にてありき。彼等は多くは馬車の中に多人數押し込まれて長途の旅行に就き、之が爲にヂフテリヤ、チフス、痲疹及猩紅熱等の惡疫にかゝる者頗る多かりき。陸上西比利亞に送られたりし一國事犯囚の言によればニジニー、ノヴゴロッドよりトムスクまでは二十五日を要し、彼等の乘りし粗末なる馬車をば多數の哥薩克兵及士官之を警衛し、其士官は公然兵士に命令して云ふ。若し逃亡せんことを試みたる者あらば即座に之を射殺せよ。而して之を殺したる者には五ルーブルの賞金を與へんと。彼等が經過する所の道は非常なる惡路にして、殊に冬期春期に際しては絶へ間なき降雪ありて寒氣膚を劈かんばかり、而して之に對する防寒の具備らざるを以て虚弱なる女性の如きは苦痛に堪へずして多くは氣絶し、又はヒステリーを發し、小兒にして饑寒の爲め母の兩腕に抱かれたるまゝ死する者往々なり。既にして宿泊所に着して一日の疲勞を癒さんとすれば、或は又狹くして總べてを安臥せしむるの余地なく、僅に椅子にもたれて眠らんとすれば無數の寄生虫襲ひ來りて就んと微睡ま

んとすら能はず、加ふるに密閉せられたる室内或は暖爐赤熱せられて空氣全く乾燥し、之が爲に眼疾に罹る者多く、且多人數の呼吸や衣服の埃塵等の爲め不健康なること言はん方なし。明けて翌日となれば夙に起されて再び此苦旅に上らざるべからず。之に由て病の爲に死する者交々相繼で起れり。或る國事犯流囚たる醫師の妻は夫の追放さるゝに從はんとて殊に官許を得て之に隨行したりしがかゝる旅行の苦痛に堪へずして終に發狂したり。此苦みは一行の東に進むに從ひ食物の漸次欠亡せること及び其粗惡となれることの爲に益々酷しくなり、病者死者は益増加したり。

一八八二年の終に於ては國事犯流刑囚の數はヤクックに八〇人以上、オレクミンスクに七人、ウエルホヤンスクに九人、コリムスクに三人あり。而して此等の獄にては其待遇の惡しき事本國の比に非ざりき。懲役は歐露にてはさほどに嚴には強行せられざりしかど、イルクック附近なるカラの獄にては實に甚しかりき。此處には一八八二年の末に於て國事犯囚の數男八三人、女八人あり。彼等は悉く鑛山に懲役せられしが、其獄と云へるは洵に不完全極まれる者にて通常の百姓小屋に

過ぎず、只高き生垣の之を圍めるあるのみ。獄房には机もベンチもなく、囚人は廣き板の上に臥せざるべからず。其食物としては只麵麭の外に汁として穀類を煮たる湯を添へらるゝのみ。茶は朝夕與へらるれども之に砂糖の加へらるゝは夕の一度なり。此食物の粗惡は東部西比利亞に於ける一般の欠乏の爲め蓋し止むを得ざる所なり。此處には又病院の設けなく、獄醫なし。故に病囚も健康者と同房に起臥し、囚人中少しく醫事を解する者之を看護するに止まれり。彼等には只新聞や書籍を讀むとより外に樂みなく、一に期滿ちて鄉里に歸るを得るの日を數ふるのみ。

一八八〇年十二月二十五日より囚人の待遇は又惡くなりて單に追放せられたる自由の流囚までが獄に收容せらるゝ事となり、すべての懲役囚は勞働の時のみならで獄中に起伏しつゝある時にも鎖もて繫がるゝこととなり、又親族との文通を嚴禁せられ、其思想の傾向が政府に向て危險なるが如く思意せらるゝ囚徒は概して非常なる虐待を蒙り、又逃亡を企て或は途上捕縛に遇へる者の如きは啻に其本人のみに止まらで同房にありし者までが大に苦しめられたり。之が爲に自ら銃を

採て死せし者あり。又毒を仰で死せし者あり。逃亡して成功したりし者も亦尠からず。即一八六一年には七七人の逃亡者中十一人の成功者あり。七六年には三八、七七年に七八、七八年に二〇八、七九年に二〇八、八〇年に七八、八一年に六八、即國事犯囚の逃亡せし者總計七四人なり。

多くの點に於ては自由追放者の方懲役囚よりも却て多く苦しみたり。北方極寒の地の如きに至ては實に言語を絕する程なりき。夫れ北方西比利亞の地たる茫漠たる廣原にして高嶺峻峰の寒風を支ゆべき者あるなく、一年中十ヶ月は冬期ににあり、寒暖計は冷度以下四〇度乃至五〇度に下り、四邊の住民は未開の蠻民にして言語全く通せず、衣服として用ゆる所の者は獸皮のみ。麵麭は甚稀少にして腐りかゝりたる魚肉のみが多量に存在し、郵便の如きは一年只一回來着するに過ぎす。ヤクックにありし一自由追放人の記する所に曰、我れ等は暗中に住む、只食事の時に於てのみ一時間より二時間迄の光線を許さるゝのみ。麵麭はなし、只魚肉ありて生を支ふ。獸肉は全く之を得難しと。又一囚人の友に送れる書に曰、友よ、余は足下の新聞を惠送せられたるを謝す。されど悲むべきは余に財あるも光線

を買求して之を讀むことを得ざるにあり。余は唯死を待ちつゝあるのみと。又他の一人は云ふ、我等は朝六時より夕八時まで勞働するなり。我等は氷の如く冷くして深さ膝を沒する溝の中に働きつゝあるなり。其底は殆んど大小の砂礫のみより成れり。夜疲れて歸り來れば讀書や沈思の如き精神的の勞働は最早我等の堪へざる所なり。手紙や新聞は三週日又は四週日に一度得らるゝのみ。あゝ、我等の苦しみや誠に畏るべき者あり。我等は若し一時間にても外出せらるゝの自由を得るあらば滿足なり。慈悲も情けも我等の要求する所に非ず。あゝ、余は從來覺知せざりし程の大なる憎惡を感ずと。

以上記する所により、吾人は略ゝ國事犯囚の當時如何なる境遇にありしやを想見するを得べし。

後編　歐米列國に於ける無政府主義

第一章　近世無政府主義の祖師

其一　ピエル、ジョセフ、プルードン

ゴッドヰンの無政府論。誰をか近世無政府主義の祖師とふすべき。プルードンの少時。彼の著述。代議士としてのプルードン。彼が學說の哲學的基礎。經濟上の範疇。階級的傾向と競爭。特權。彼は又一のヰトピストなり。彼とプラトンとの差違。上よりする革命は不可能なり。革命の根本原理は自由なり。民約論。彼の集產論。經濟上に於ける十戒。晩年無政府主義を捨てゝ聯合主義に移る。プルードンに對する批評。プルードン學徒モセス、ヘッスの主張。カール、グリユンの共產的無政府論。ヰルヘルム、マルの實行

其二　マクス、スチルネル

スチルネルの事蹟。すべて概念的の者は第二次なり。觀念世界の事物すべて妄想のみ。政治上に於ける自由主義。社

ゴツドヰンの無政府論

會上に於ける自由主義。人道上に於ける自由主義。汝の我を發揮せよ。一切の義務を無視す。利已的權利。利已主義者の組合。スチルテル學徒ユリウス、フアウヘル。

其一　ピエル、ジヨセフ、プルードン

十九世紀の中葉、ライン河を隔てゝ其東西に二人の思想家あり。彼等は同じくヘーゲルの哲學より出で、而も何等の關係あるにあらずして共に無政府主義を皷吹せり。其東にあるをマクス、スチルネルとし、西にあるをピエル、プルードンとす。實に近世無政府主義の祖師、前者は個人主義的無政府主義を唱へ後者は社會主義的無政府主義を主張したり。

無政府の思想は往古もと全く之なかりしに非ず。而して近世に至りてはヰリアム、ゴッドヰンの一七九三年を以て『政治上の正義に關する研究』を公にせるあり。彼其中に於て論じて曰、すべて政府は多少必や一の專制者あり。彼等には二つの職分あり。即其一は社會の內部に於ける不正を鎭壓する事にして、一は外部よりの暴行を防禦する事なり。然れども此目的の爲めには政府なる者を建設するの必要なし。何となれば法を行ふ爲には教會制度の之に代るべきあり、其教徒の協議によりて優に事物を處理判定し得べければなり。又特殊の法律を備ふるとも不必要なり、吾人は一事一事と事ある毎に之を裁斷するを以て足るべければなりと。かくて彼は人間を以て其個性が消へ失せぬれば消へ失せぬるほど益々優等となる者なりとて結論して曰、すべて政府なる者は有害物なり、人類の罪惡を喚起するものなり、故に之を壞滅するは正に望ましき事たり。財產私有の制の如きも亦之れが他を犧牲に供して自ら爲めにする以上、政府と共に之を打ち亡ぼさゞるべからずと。即彼は玆に明に己が無政府論を表白したりと雖、彼の所論はもと其著書の各部に散在せるのみにして決して一定の体系をなしたる者と見做すを得ず。

誰か近世無政府主義の祖師となすべき

故に論者多くはプルードンを推して無政府主義の祖なりとせり。然るにラヴレーの如きはルーソーは既に彼の復始論、復自然論に於て此主義の意見を示すと謂ひ、又プレハノフはマクス、スチルネルのプルードンに先ちて其無政府論を唱道したる旨を述べて之をプルードンの先驅者なりとしたり。之を要するに祖師として之を見る、吾人はルーソーよりも寧ろプルードン及びスチルネルを推すの

プルードンの少時

穏當なるを信ずる者なり。只夫れ此二人者に付て之を選ばんか、前者は一八四〇年を以て公にせられたる『財産とは何ぞや』に於て既に初めてアナルシーなる文字を用ゐ、後八年更に『革命に關する一般思想』を以て一層精細なる其見を序述したるに、後者は一八四五年を以て彼の『個人及其財産』を公にし、而も彼等の論ずる所は等しく無政府論なりと雖、一は社會主義的無政府主義にして、一は極端なる個人主義的無政府主義なれば、其立脚の地歩頗る異る者なるが故に、吾人は敢て無益なる先後の爭を事とせずして茲に彼等を並立せしめ、以て其激論の一端を觀察せんと欲す。

プルードンは一八〇九年一月十五日を以て佛國ベサンソンに生れぬ。父は桶匠にして母は料理人なり。家貧にして學を修むる能はず。幼にして活字拾ひとなり、又印刷工として諸方を歴遊し、具に苦艱を嘗む。一八三六年友と共に郷里に於て小さき活版所を建てしが、翌年地のアカデミーが貧青年の爲に給費の制を設けたるに應じて之を得、爾來專心學事に勵精するを得たり。一八三九年彼『日曜の休日を論ず』てふ一論文を草し、日曜を道德上、衛生上及家族國家の關係上等より觀察

彼の著述

代議士としてのプルードン

して賞牌をアカデミーより獲ぬ。彼は又巴里に赴きて往時の社會主義を究め、聖書を實驗的社會學的に研究して大に從來の社會哲學者が彼等自家の體系を演繹的且つ獨斷的に建設するの風に反對したり。一八四〇年、有名なる『財産論』出づ。所謂アナルシーなる文字は此書に於て初めて用ゐられたるなり。四三年、彼友人ガウシエーを通じてリオンなる航海會社の一員となり、四六年十月を以て彼が第二の大著『經濟的矛盾』を著しヘーゲルの辯證法を以て彼が自家の經濟論の根本原理となしぬ。翌秋、彼はリオンを去て巴里に至り、二月革命に至るまで此地に滯在して學術を研め、革命後雜誌『人民の代表者』を刊行して其主筆となり、六月セーン州より選ばれて國民議會の代議士となり、七月三十一日、有名なる演説を試み、己が建議案を説明しぬ。之は實に信用組合の組織によりて勞働者を保護し、彼等の要する機械は之を各人に給與し、貨幣を廢して一切物品交換となし、勞働時間を記せし手形を流通せしめんとするの案なり。所謂國立銀行案之なり。然るに此建議案は二に對する六九一の大多數によりて忽に否決せられしかば、彼はなほも之に屈せずして獨力此事業を經營せんとし、一の銀行を設立し、五百万フランの資本を募

集せんとせしが、之に應ずるもの僅に一万七千フランに過ぎざりければ全然失敗に了り、之に加ふるに彼は其言論の過激なるより出版條例に觸れて三年の禁錮を命せられぬ。 一八五一年彼『十二月二日のクーデターによりての社會の革命』を著して好評を博し、之より暫く民間に隱伏せしが其五八年を以て『革命及教會の正義を論ず』と題する一書を公にし、時の教會を駁擊するや、又もや三年の禁錮、四千フランの罰金に處せられけるが、彼は早くも逃れて白耳義に走り、六三年赦に遇ふて初めて巴里に歸り、幾くもなくして六五年六月十九日病を以て此地に歿せり。

プルードンの學說を理解せんには必ずや彼の思想の由て來る所以の哲學的基礎を知らざるべからず。 即彼の辯證法を解せざるべからず。 一八四八年、彼其友ラングロアに與るの書中謂て曰、余をして余の胸裏に良き思想を湧起せしめたる師の名を擧げしめよ、三人あり。 一に曰、聖書、二に曰、アダム、スミス、三に曰、ヘーゲルと。 彼は當時佛國に全盛を極めつゝありしコントの實驗哲學に就かずして却て東隣のヘーゲルを慕ひ、且つ自ら彼が弟子たることを誇れり。 彼曰、すべての眞理は或時に於て一度立し、而して次の時に至れば分る。 此等の各瞬間は他の瞬間を否定し、

而も其各よりも一層高き眞理を作りて共に消失する者なり。 故に二律背反は生活及進步の方則にして、又永遠の歷程の原理なりと。 彼が一八四〇年を以て公にせし『財產とは何ぞや』に於て既に云て曰、共產主義は社會の最初の形式にして且最初の職分なり。 措定なり。 財產は共產主義の矛盾的反對なり。 反措定なり。 然らば第三のもの即綜合措定は果して何物なるか。 吾人は之を發見せざるべからず。 之にして定まる、吾人は茲に求むる所の解答を得たるなり。 此綜合措定は必ずや反措定によりて措定を改善することに依て得らるべし。 故に彼等の性質を仔細に研究し、社會に對して有害なる其中の分子を取り除くを要す。 かくて殘留せる二つの者を合すればこゝに初めて人間社會の眞正の形式を得るなれと。 彼は又斯くして分業、機械、競爭、特權、國家、自由交換、信用、財產及組合等を指して之を經濟上の範疇なりとせり。 即彼の意見に從へば、勞力は直接に富の因由たると共に又社會上の形式に附屬する相反的性質(即措定及反措定)によりて自ら貧困の原因ともなるなり。 分業は超自然の効果を齎し來ると共に又甚だ不滿足なる價を生ずるなり。 即勞力は貧困を去らんが爲めに働きつゝ却て之を獎むるに至るなり。

かく分業によりて釀されたる欠陥は機械之を塡補せざるべからず。機械は啻に生產力を高むるのみならず、分業が生じたる欠点を充し、又個々別々に散せられたる勞力をして一層高き合致綜合を得せしめざるべからず。然れどもこれ未だ以て滿足すべきに非ず。何となれば機械は雇主と日雇人と、資本主と勞働者との間に隔壁を築き、次第に後者の自由を奪ひて之を器具に近づかしむべく、果して此の如くむば資本家獨り太平を皷腹して、勞働者は非常なる不幸に沈淪するに至るべければなり。

かゝる社會の階級的傾向に背反し來るは自由なり。競爭なり。競爭は勞働者をして自由ならしめ、其富を增殖せしむる者なり。この競爭の本源は機械の改良及協力等と共に世に絕ゆることなきを以て生產力は其力に於て殆んと無限にして、終には富の生產は却て人間の蕃殖力を超越するに至るべし。然れども之と同時に競爭は又貧困の一新原因となるを忘るべからず。何となれば競爭によりて起さるゝ物價の下落は一方に於て勝利者を益せしめ、一方に於て勞力と彼等が活計の術とを敗者の手中より奪ひ去るに至るべければなり。

特權は競爭必然の結果なり。否寧ろ自然の方則なり。社會上に於ける所有の形式なり。これなくしては勞力も、生產も、交換も、富もすべて全く不可能なり。こは最も親密なる關係を個人主義及自由の兩者に向て有す。これなくしては社會は殆んと考へらるべからず。然れども特權も亦終に競爭の如くに非社會的となるなり。何となればこはすべて土地、勞働、勞働用具、生產品及其分配等を盡く己の專有に歸し、之を破滅するものなればなり。生產と消費との自然の平衡を打ち破る者なればなり。勞働者に對する賃銀を低廉にし、彼等の幸福に向はんとする進路を轉じて之を貧困に導く者なればなり。終には又商業上に於ける正義の觀念を破るに至るべき者なればなり。

以上は彼がヘーゲルの辨證法によりて建設せる其哲學的基礎と稱する者なり。此等矛盾の學說たるや今日を以て之を見れば寔に怪異にして頗る牽强附會の辭たるを免れざる嫌ありと雖、一度プルードンの時代を想ひ來れば又大に彼が識見の凡常に非ざるを認め得べきなり。當時社會上の問題紛々雜々、時に極端なる個人主義を採るかと思へば忽にして共產主義に移り、時に絕對的なるレッセー、フエ

彼は又一のユトピストなり

彼とブランとの差違

ールの學說と慇懃を通ずるかと思へば又忽にして權力說と握手して專制的の立脚地に轉じ、思想に統一なき、各人に確乎賴る所なき、人々殆んと其趨歸する所を知らざりき。然るにプルードンは是等の二つを明に分別して共に多少の欠陷あるを免れざるを示し、之を互に補綴調和して更に高き眞理に到達せざるべからざるを細論せり。これ實にプルードンの著『矛盾論』の功にてありき。彼が十九世紀以來の此一大問題をば經濟上及び社會上の措定、反措定の綜合によりて解決せんとせるは、即彼自身の言を用ゐて云へば、一の科學的法學的にして不朽不離なる綜合によりて解決せんとを試みたるは洵に大膽不敵の企なりしとは云ひながら、又實に之を一の美はしき哲學なりと稱美すべく、會ゝ彼のユトピストに外ならざる所以を示さしむるものなり。

プルードン以爲、勞働者は彼等の勞力によりては、之に相適する充分なる收入を得ざる可らず。而して社會上の改革にして若し勞力の體制に於て成就し得べしとせば、世の所謂貧困なる者之を排除するに於て難からざるべきなりと。此點に關しては彼はルイ、ブランと其見を一にせり。然れども只之のみに於てなり。何となれば、ブランは勞力の體制に對しては大に社會の權力を要することを主張するに、プルードンは全く之と反して人民の自由意志に基くべく、國家の干涉は全然之を廢せざるべからざるを唱ふればなり。無政府主義と國家社會主義との分るゝ所全く此處にあり。而してプルードンが無政府論の出發點も亦實に此處にあり。思ふに彼の此の如き思想を形成するに至りたりし所以の者は一八四八年に於ける佛國革命が社會上の點に於て失敗したりしが爲ならん。而して又此等の敗亡が主として下よりならで上よりする革命策によりたるが故なることを信じたりしが爲ならん。

上よりする革命は不可能なり

然らば何故に上よりする所の革命は不可能なるか。今二律背反を政治上の事に適用するに、自由及秩序を得。而して自由は革命によりて實現せらるべく、秩序は政府によりて實現せらるべし。されば政府自らが革命すと云ふ事は既に己に矛盾を含むなり。何となればろは實に政府其物なればなり。革命は獨り社會により又智識ある團体によりてのみ實行せらるべし。社會のみが其自由意志を合理的方法の上に結合し、己の天職を發展し、自ら己の信仰及哲學を變更し得べきなり。

これ實に上よりする革命の不可能なる所以なり。

彼は此の如き論鋒を追ふて進で曰、抑ゝ政府なる者は世界を秩序の狀態にあらしめん爲めに用ゐられたる神の鞭のみ。故に政府に望むに自破壞し、自由を作り、革命を行はんことを以てする者あらばそは到底能ふべからざる事と望むなり。大凡古來革命なる者は民望輿論に依て自由に行はれたる者なり。然るに政府なる者の之あるありて常に彼等の希望を妨たり。民心を壓倒したりと。即彼はフーリエープラン其他從來の社會主義者の勞働の體制を國家の權力によりて作爲せんことを望みたりしを指して一の迷妄に外ならずとし、革命は唯多數團体の發意により、即市民の一致、勞働者の經驗、進步、啓蒙等によりてのみ初めて得らるべき者たるを反復詳論せり。彼の所謂アナルシーは此前提より漸次發展し來りたる者なり。見るべし、彼と當時の國家社會主義者との間には其思想上に於て深き谿谷の存するあることを。

革命の根本原理は自由なり

社會主義者は云ふ、政治的革命は手段なり。社會的革命こそ其目的なれと。プルードンに至ては之に反して社會的革命を手段とし、政治的革命を其目的とせり。故に若し彼を目するに單に國民經濟論者を以てするあらばそは大なる誤りなり。何となれば彼は第一に社會政策家なればなり。社會主義者は其革命最終の目途として万人の福祉を標榜せるに彼は革命の根本原理として自由の二字を樹てたり。而して其自由とは、

一、一般投票により、社會機能の求心主義により、恒久不斷の憲法による政治上の自由。

二、信用及買賣相互の保證による工業上の自由。

にして、即之を換言すれば最早權力を集積して人によりて之を支配することのあらざると、及び資本の集積によりて人によりて之を掠奪することのあらざることなり。一八四八年四月三日、プルードン、ドープにて彼の選擧區民に對してなしたる演說中に述べて曰、こゝに社會問題なるものあり。諸君は決して之を免るゝ能はず。之を解決せんが爲には吾人心意中の極端なる改新主義と又極端なる保守主義とを融合するの外なかるべからず。勞働者たる人よ、汝等の雇主に向て忍べよ、雇主よ、汝等より勞銀を受くる者供の請ひを排斥するなよと。彼はかく階級間の調訂

を説明し、而して自らは此兩極端を結合し得るの人なりと信じたり。

これより彼の社會契約論を觀察せむ。彼以爲、貨物を生産する者を經濟學の範圍に結合せしむる者は交換の之なればなり。法律上より見れば交換は二つの意志間の關係なり。二つの意志間の關係は契約の語を以てなされたる者ならざるべからず。人若しかく〳〵の事物をなさゞるべからずてふ契約にて己自身を束縛することあらば、其人や決して已の自由を見棄てたる者に非ず。契約は人々の關係なり、而して又同時に其自由を調治するものなり。然れども契約の此觀念は毫も政府との契約を包含せず。『契約即相關的約定の特質は之によりて人間の自由と幸福とを增加すると云ふ事なり、又是と同時に政府の權力が減殺せらると云ふ事なり。……故に契約は必ず雙務的なり。契約を結ぶ者の上に只相互が個人的に生ずる義務を附與するに止まるものなり。何等外方の權力にも屈從することなくして只當事者相互の發意によりて實行せらるゝを得べき者なり。果して然らば社會契約抑、何物ぞ。こは各市民が之によりて社會に對して己自身の愛、智、勞力、勤務、生産、所有等を捧げて他の市民の愛情、思想、勞力、生産、勤務及所有と交換するを保證する高尙なる行爲に非ずや。故に人々相互の他人に對する權利は常に彼等自身の貢獻の範圍によりて測定せらるゝ者なり。……すべて社會契約は自由に行はれ、個人的に一致せられ、承認せられざるべからず。若し此自由及一致にして一度妨害せらるゝことありとせんか、社會契約は徒に最愚最弱、最大多數の個人の自由幸福を破壊する者とならん。故に吾人は斯の如き障害に遇ひては之に抵抗するあらゆる手段を用ゆるも毫も之を妨げず。否そは寧ろ吾人の權利たり義務たるを得べきなり。……社會契約は相互契約の眞髓なり。そは當事者に彼が所有の全部を附與するに止まらずして却て其産を增殖せしむる者なり』と。彼が個人の絶對的自由より出發して無政府論に其論步を進むるを見るべし。

彼の集合財産論

彼は又生産は勞働者の團体を組織する各個人の協力の結果なるを認め、夫故に之を集合團体の財産と見做すべく、各勞働者は之に對して同一の權利を有する者なりとせり。彼は一八五八年を以て『革命及敎會に於ける正義を論ず』と云へる一書

を著して述て曰、余は一八四〇年來財産に關して種々の説明を試み來れり。されどこは決して財産の廢滅を唱ふるの意に非す。若し非財産論を唱道すとせばそはプラトン・ルーソー・ルイ、ブラン其他の非財産論者と共に共産主義に陷る者なり。これ余の全力を注ぎて反對する所なり。余が勸むる所の財産とは即一の賃銀を云ふに外ならずと。彼は共産主義を捨てゝ集合財産の制を採り、之を團体の所有に歸せしむべき所以を切論し、經濟上に於ける十戒を立せり。

一、私有は社會生活の根本條件なり、五千年に渡れる財産の歴史は之を證明す。所有は權利なり。財産は社會の自殺なり、すべての權利に反對する者なり。それ故に財産を壓倒して所有と高めよ。然らば汝等は唯一變動によりて政府、經濟、國制等一切に向て大變化を加ふるを得べきなり。地上のあらゆる害惡を去るを得べきなり。

二、所有權がすべての人に向て同一なる時は、各人の所有は所有者の數によりて變ずべし、然らば財産は自ら何事をもなすこと能はざるべきの理なり。

三、勞力の所産が各人すべて同一となるならば、他人を掠め高利を收めて成立せる財産は忽にして地を拂ふて去らん。

四、各人の仕事は必や一の協力より出づるものなり。故にすべて財産は之と同じく集合的に且つ不可分的なり。換言すれば勞力は財産を打ち亡ぼす者なり。

五、大凡事業となすの能力、並に各勞働用具及資本は盡くこれ集合財産なり。故に能力の不平等を喚起しぬべき所爲及貨物の不平等はこれ不正なり。盜賊なり。

六、交換は其必然の預想として契約者の自由及交換されたる物の同等を意味す。然れども物の價は之に要せられたる時及入費の總額によりて定めらるゝ者にして、各人の自由は神聖侵すべからざる者なるが故に、勞働者は必や其勞銀及權利義務に於て盡く同等ならざるべからず。

七、生産物は只生産物によりてのみ交換せられ得べし。然れども凡そ交換の預想する所は生産物の同等と云ふ事にあるを以て利潤てふことは不可能なり。不正なり。世間若し一度此最上にして且つ最初歩なる經濟的原理を尊敬す

るを知らば、貧困も、奢侈も、奴隷制も、罪も、惡も將た饑も忽にして其跡を絶たん。

八、人間は元來生産の物理的數學的方則によりて一致し集合したる者なり。故に外形の生活事情を平等にするは社會上に於ける權利の當に然るべき所を求むる所以なり。

九、自由の團体又は生産手段の平等及交換物の均一を表す所の自由なる者は、實に社會の唯一可能の、唯一正當の、唯一眞實の形式なり。

十、政治學は自由に關する學問なり。人を超越して多數人が統治の權を握るは之れ取りもなほさず奴隷制なり。社會第一の完美てふ事は秩序を整一にし、無政府を齎し來るとに於て存す。

プルードンの見は頗る矛盾に充つと雖、其要は實に此十戒之を示す。而して彼が一生の誤謬は其第七戒を基として出發したるによる。彼は價格の要素は一に勞働に要せし時間に依る者なりてふ命題を前提として遂に所謂相互主義(ミューチュワリズム)なる者を唱へたり。一八五二年彼『聯合原理論』を著して聯合論を主張して曰、政治上の秩序は權力及自由の二原理の上に立せらる。此各より二つづゝの政体の形式を生ず。

晩年無政府主義を棄て、聯合主義に移る

即權力よりは君主政及共産主義にして、自由よりは民主政及無政府なり。されども此等の四つは一の理想に止まりて到底實現すべからざる者なるを以て、吾人は須く契約を基となせる聯合主義を立せざるべからず。數多の團体を聯合契約によりて結合せざるべからず。これ實に將來に於ける國家唯一の形式なりと。由て以て晩年に於ける彼が立脚地の變更を見るべし。

プルードンに對する批評

プルードンは從來種々の批評を以て迎へられたり。ルイ、ブランは彼を闘爭者なりと云ひ、ラヴレーは彼は之を急激迂濶なる夢想家とより外に許すべきの語なしと云ひ、マルクスの如きに至てはプルードンは精神も識見も之なき人なりとて之を貶斥し、要するに彼を以てジエスイット流の僞善者なりとするに於ては多數者之に一致せり。然るに彼の弟子は彼を以て十九世紀の一大人物なるが如く讃美し、ルードキッヒ、ブフアウに至ては彼をデカルト以來の最も鋭敏なる佛國思想家なりと云へり。蓋し彼を排する者は等しく彼の説の矛盾に充滿したる所以を以てすと雖、これ等は大底能くプルードンを知らざる者の言なり。一言にして彼の説を盡さんか、彼は實に理想的社會論(ユートピズム)に反對し、宗教的獨斷論を排斥し、

プルードン學徒モセス、ヘッスの主張

カール、グリュンの共產的無政府論

財產の獨斷及政治上の權力を斥け、社會主義をして嚴正なる科學的實在的の軌道によらしめて、あらゆる獨斷的宗教的の分子を除去せんことを努めたる者なり。彼が體系の根本は一に人類は先天的に自由なる者なりてふ一の獨斷にあるなり。

此プルードンの學說は獨逸に入り來るや忽ち其靑年哲學者の歡迎する所となり、モセス、ヘッス（一八一〇—一八七二）先づ出でゝ之に歸せり。彼初め商人たり。後一身を學問に委ね、殊にヘーゲルの哲學を究め、一八四三年、プルードンの所謂無政府主義を採用し、書を著して大に激論し、四五年より雜誌『社會の鏡』（後『文明世界の社會事情』と改名す）を出版し、專ら操觚者としてライン河畔に過激なる社會主義を唱へたり。其所論は無政府を目的とする點に於てはプルードンの見と一致すと雖、彼は之が實現の手段としては温和の方法を採りて教育制度の改良、一般投票の實行、國民工場の設置等を主張したり。

ヘッスと時を同じうしてカール、グリュン（一八一三—一八八七）あり。彼もとボン及伯林に學び、或は學校教師となり、或は又新聞記者となりしが、其議論の激烈なりしが爲め各地を放逐せられ、一八四四年より四五年に渡る冬に於ては巴里に趣きて直接にプルードンと交り、之に就きてヘーゲル哲學を學び、又書を著してプルードンの說を本國に紹介せり。著書尠からず。其主張する所もとプルードンに出づと雖、共產的無政府主義を唱て師の集產主義、勞銀論に反對せり。以爲、今日の社會は都民をして益〻富ましめ、勞働者をして益〻貧困ならしむる者なり、若今後勢此の如くにして止まずむば社會的革命は必然免るべからざるの數に屬す。須く共產主義による革命を行ひて社會を一轉化せしむべきなりと。彼の說は頗クラポトキンの共產的無政府論と相酷似せり。かくプルードンの說は一方に於て猛烈なる理論として發展したるが、之と同時に又他の一方に於ては直に少數熱狂者によりて之が實行に着手せられたり。

ヰルヘルム、マルの實行

ヰルヘルム、マル之が首魁たり。彼はマグデブルグの人、初め商人生活を學びたりしが、一八四一年、瑞西に至るに及びて政論家となり、初ワイトリングの共產主義に心醉し、後フォイエルバッハの學說に心を傾け、終にプルードンの無政府主義に移りて同志と共に之を瑞西の手工業者間に皷吹せんとし、自家の綱領を公にして曰、宗教、國家及社會、すべて是等の統治的觀念を破壞せんとする、是實に我黨が追求する所の目的なりと。一八四四年十二月、マ

マクス、スチルネルの事蹟

ル等ラウザンヌに『社會生活に關する時事新聞』なる者を發刊し、現存の國家敎會を抗擊し、公然無神論を說き、結婚廢止を主張したりしが、瑞西政府は翌年七月遂に之を鎭壓し、マルを放逐せり。後年マルハムブルグに至りて地の青年間に己が無政府論を唱說したりしかども四八年及九年の反動の爲めに打擊せられて一時屏息せざるを得ざるに至りたりき。

吾人はこれよりプルードンと全く反對せる見地に立ちて同じく無政府主義を唱道したるマクス、スチルネルの學說を觀察せんとす。

其二　マクス、スチルネル

マクス、スチルネル本名をカスパー、シユミットと云ふ。一八〇六年十月二十五日を以てバイロイトに生れぬ。彼の事蹟は極めて簡短なり。少時神學及哲學を研究し、業を了ふるや或る中學の敎師となり、又伯林なる某女學校に敎鞭を採れり。一八四四年有名なる『個人及其財產』を著す。此書一時時の思想界を騷がせしも忽にして又消へて其跡を沒しぬ。一八四八年『反動之歷史』出づ。此後スチルネルはセーや、アダム、スミス等諸の經濟學者の飜譯に從事したりしが、一八五六年六月二十六日を以て其困苦の一生を終へたり。

すべて概念的の者は第二次なり

觀念世界の事物すべて妄想のみ

彼はフィヒテ及ヘーゲルの唯心論より出で丶其所謂エゴーを就んと笑ふべきまでに極論せり。彼の言ふ所に從へばすべて概念的の者一般的の者は第二次の者なり、各個人の所作なり、客觀視せられたる主觀なり、創造者によりて唯一の實在として、最高の目的物として聖視せられ、尊敬せらる丶一事物に過ぎざるなり。彼によればアウグスチヌスとフォイエルバッハとの間の差違は全く表面的にして決して根本的の者に非ず。何となれば後者の所謂人間は前者の所謂神と同じくスチルネルの之が了解に苦む所なればなり。

觀念世界は假令これが宗敎にても道德にても彼に向ては僧侶界の如き者に過ぎず。慈善主義は天國的たり、將た靈的たるも畢竟する所僧侶的愛のみ。人間と云ひ、正義と云ふ、觀念のみ。妄想のみ。人間と云ふ事は決してペルゾーンに非ずして一の觀念なり。幻なり。されば一般の進步と云ひ又人間精靈の自由と云ふも無益なる骨折なり。基督敎の如きは啻に人間を古代の幻より脫却せしめざるのみならず、却て之を强めしめたる者なり。將た又宗敎改革の如きも、中代の弱き宗

門政治に代ゆるに却て强大なる新宗門政治を以てしたる者なり。彼等は多くの惡より脱したり。されどなほ一の惡は彼等の上に留まれり。

スチルネルは近世の脱縛運動に於て三つの種類を分てり。曰政治的、社會的及人道的自由主義即是なり。彼、以爲政治上に於ける自由主義は已に『國家は眞の人間なり。而して各個人の人權はそが國民たるとよ於て存す』と云ふ思想を得るまでに達したり。政治上の自由は封建時代に於ける權利の不平等を打ち破り、奴隷制の如き束縛を棄て特利、特權のあらゆる者を廢絶せしめたり。されどゐは只各人を他より獨立に且自由ならしめたるのみにて未だ毫も眞の自由を享受せしむるには至らざるなり。否寧ろすべての人を以て國家の奴隷に化せしめたるなり。今やすべての權利權力は一國家の上に集合し、各人は只其國民として國家が彼等に與ふるだけの權利を保持するに過ぎず。政治上の自由主義は一の自由なる國民を作りたり。されど自由なる個人をば作らざるなり。君主專制の名は纔に改められて、もと王と稱せし者が此度は國民國家となりしに過ぎざるなりと。

社會的自由主義に付ては彼は謂ふ、政治上の自由とは個人個人的支配及君主等の自由なり。各他の個人に對して各自を守保するとこれ即個人の自由なり。何ものゝ之を命令するあるなく、唯法の之を束縛するのみ。故に各個人にして若し同等たらば彼等に財產の之あるべき理なきは勿論なり。然れども貧人の要する所は富人の富にして、富人の要する所は貧人の勞力なり。彼等は個人としては毫も他の人を要するに非ずして、已に己が要する或物を與ふる所有者として之を要す。然るに所有に於ては人々盡く不平等なり。故に社會上の自由主義は結論して曰、政治上の自由主義は誰人にも命令を許さゞりき。之と同じく社會上に於ては誰人も所有すべからず。國家のみが命令の權利者たると同じく社會のみが一切所有の權利者たるべしと。即スチルネルの意によるに社會があらゆる所有の主人となり、個人は只社會が已に附與せし者を有するのみに止るべしと云ふなり。彼又更に步を進めて曰、最高の命令者、唯一の統治者の前には吾人はすべて平等なりき。同一個人なりき。即無に等しかりき。之と同じく最高の所有主の前には吾人は盡く同一の賤人のみ。故に共產的社會にありては吾人は其社會の全体を單に賤民隊と呼び做すを得んと。

人道上に於ける自由主義

汝の我を發揮せよ

人道的自由主義に關しては彼は云ふ、凡そ人類社會にありては特殊と云ひ、私と云ひ、個性と云ひ、差別的性質を帶ぶる者は悉く其價を有せざる者なりと。かくて彼は政治的自由主義に於ては權利と權力との關係を正しうし、社會上の自由主義に於ては財產及勞力の關係を明にし、又人道的自由主義に於ては近世社會に於ける倫理上の原理を確立したり。

スチルネル又以爲、理想は人間の聖視する所となるに從ひて之に對する尊敬次第に增加し來ると雖、之に反して彼等自家に向ては其自由は益、狹めらるゝなり。元來理想と云ふが如きこれ等の觀念は吾人精神作用の創造物に過ぎず。非實在の大なる者たるに過ぎざるなり。故に自由主義が招きし進歩なるものも詮ずる所迷ひの增加のみ。眞の進歩は吾人の足下にあり。唯一に己の我性を發揮して全然かゝる觀念世界の支配より我を飄脫せしむるにあり。何となれば我性はすべての造物主なればなり。自由は吾人に敎へて云ふ、汝自身を自由にせよと。而かも其所謂汝自身なる者の何者たるやを示さゞるなり。我性は吾人に叫で云ふ、汝自身に蘇れよと。これ吾人が多くの惡を脫却したるにも拘らず、又更に一の惡の

來りて吾人に粘着したればなり。ダス、アイゲネ(我)はすべて先天的に自由なる者なり。然るに此先天的に自由なる者が自ら求めて妄想し、執迷するは實に撞着の至りなり。自由は之に達し得べき力に依て初めて達せらる。而して此力や實に各個人に存するなり。余の權力は余の財產なり。余の權力は余に與ふるに財產を以てす。余の權力は我自身なり。而して權力によりて初めて余の財產となると。以爲、權利は權力なり。すべて現存する權利は皆外より來れる者なり。余の權利は何人も之を余に附與する能はざる所、神も、理性も、自然も、國家も皆其能ふ所に非ざるなり。余が權利を有するや否やに付ては唯一の裁判者あり。そは我なり。他の人々は只彼等が余の權利を賛するか、又彼等に向てもそれが權利として成立し得らるゝ者なるかを批判し、決定し得るに止まる。法律は社會に於ける權力意志なり。すべて國家は之を支配する權力が其一なると多數なると將た全体なるとに論なく一の專制なり。國家なる者は、余が余の意志を實際全國民の總意と全く一致すべしと公言したりし時に於ても亦一の專制なり。此集合意志にして若し法律とならんか、余は忽にして明日は之が束縛を受くるに至るべく、假令余

一切の義務を無視す

自身の奴隷なりとは云へ同じくこれ奴隷なり。然らば如何にしてか此有様を變ずるを得べき。曰、何等の義務をも認めざれ。即余を束縛せず、又束縛せしめざれ。余にして何等の義務をも認むることあらざりしならんには又何等の法をも認むることなかるべし。故に何等の繋縛もなき我は國家に對しては罪人を以て目せらるべく、我を否認し、自我否定を實行し得る人のみが國家の歡迎する所とならん。然れども正には不正伴ひ、法には不法伴ふなり。善の消失すると共に惡亦其跡を絶つに至るべきは理の當に然るべき所に非ずやと。

利己的權利

之よりスチルネルの財産論を觀察せむ。共産主義者は地球を以て之を創造せる者に歸し、其生産は又之を生ぜる者に屬せしむべき旨を唱へたり。然るにスチルネルは之に反對して地を占有し得べき者に其地は當然屬すべき者なりとして即利己的權利を主張せり。此點に於て彼とプルードンの間に大なる差違あるを認むべし。プルードンは財産が正義と並立せざる者なりとて之を否認せり。然るにスチルネルは更に進で其正義を否認し、財産は權力によりて得らるゝ者なりとせり。即前者は財産を盜品なりと公言せるに、後者は之を各人の權力に依て存する者に外ならずとし、財産は唯一に權力によりて收得せらるべき者なりと説明せり。彼又曰、奴隷は其主人に向て尊敬の情を感ぜざるに至れる其瞬間より最早自由民なり。之と同じく人若し財産に對して尊敬を失ふに至らばこは其瞬間より彼の所有に歸すべしと。團体が財産の所有主となるべき者なりと云へるは共産主義者なり。然るに彼は之に反して我は財産の所有者なりと云ひ、財産は全く神聖なる者に非ずとせり。

利己主義者の組合

プルードンは又己が理想せる天國の制として一の權衡調和の必要なるを思意し、經濟生活に於て生存競爭を認るを躊躇せり。然るにスチルネルは自然淘汰を以て社會に於ける最高唯一の支配者なりとして盛に生存競爭を唱へ、又前者が勞働が一の協力の結果なりと説きて結合一致の必要欠く可らざる者なることを示したるに對して最も有効なる勞力は個人の仕事にありとし、而して個人の仕事は唯利己的の立脚地によりてのみ定めらるべき者なりと云へり。要するに彼は社會を解散して組合を組織せんことを主張せり。されど其所謂組合なる者は個人の自由を束縛することなくしては成立し得らるべからざる者たることも彼又之を認めたり。

スチルネル學徒ユリウス、ファウヘル

彼以爲、絕對的の自由は一の理想に止まる。幻のみ。組合の目的は自由を求むるとにはあらで我性を立せんが爲めなり。組合は自我の用具のみ。自我其屈する所となるに非ず。之を屈從せしめて己の用に供するありと。即利己主義者の組合なる者此處に初めて成立するなり。

スチルネルの奇矯なる此新說は恰も燦爛たる花火の一時に發して倏忽の間に其跡を失ひたらんが如く其影響する所甚だ著しからず、從て又一の學派をなすには至らざりき。

然れども之にユリウス、ファウヘル(一八二〇—一八七八)なる者ありてスチルネルの流を亞ぎ、一八五〇年、伯林に新聞『每夕報知』を發行し、其個人主義的無政府主義を發表して一時獨逸人を驚かしたり。然れども幾くもなくして其發行を禁止せられて大陸を去り英國に渡れり。之より六〇年代に至るまで此種の激論暫く潛伏して形はれざりき。

第二章　國際黨の史的發展

國際黨の發芽。同盟の成立。第一大會、其綱領。第二大會。第三大會。ミハイル、バクーニン。彼の無政府論。一切の破壞を主張す。社會民主黨國際同盟の組織。彼の革命論のマルクスのと異る點。バクーニンの非共產主義。バクーニン派及マルクス派の角逐。羅馬聯合の分裂。第五大會。バクーニン派ユラ聯合を組織す。サン、イミユーの會合及其徒の活動。新聞『先鋒』及『反逆』。フライブルグの無政府黨會合。集產黨全く無政府黨と絕つ。倫敦大會及其宣言書。ジユ子ーヴの會合及其宣言書。エミール、ガウシエーの宣言文

無政府主義の發展は頗る勞働者國際同盟の歷史と密接なる關係を有せり、故に吾人はこれより少しく所謂國際黨(インタルナチヨナーレ)なる者の起源及發達を研究せんとす。

初めて勞働者の國際團体を組織せんとを試みたりしは實に獨逸の勞働者なり。彼等は一八三九年、其巴里に在て地の暴動に與みするや、追放せられて英國に渡り、翌四〇年二月を以て『獨逸勞働者自修團』なる者を組織し、英佛獨及瑞典等の各國語

國際黨の發芽

を以て認められたる其綱領を發布したり。其中、一、精神健全にして罪を犯したることなき丁年以上の人の一般投票を採用すること、二、毎年國會を召集すること等選擧に關する規定六項あり。之と見を同うする者又瑞西及佛國等の各地にも勃興せり（ルドルフ、マイエル博士。『第四級民の脱縛鬪爭』）。續て一八四七年十一月、カール、マルクス（一八一八―一八八三）及フリードリヒ、エンゲルス（一八二〇―一八九五）の二人獨逸共産黨の會合を倫敦に催し、英國に於ける勞働者の境遇を記せる册子を公にし、又一の綱領を發布せり。其中私有財産の制を廢する事、國民銀行を設けて之に從來國家の掌裡にありし信用を委ぬる事、科學的の方法によりて大仕かけに農業を行ふ事、國民工場を設置して一切の工業を之に司らしむる事等の條項あり。要するに實際社會の改革が改革者の空想によりて行はるゝことなくして一に勞働者全体の發意によらざるべからざるを云へるなり。其結尾に曰、世界萬國の下層民よ、來りて我等と結べよと。由て明年、ブリュッセルに於て國際勞働者大會を開かんことを約したりしが四八年の革命騷亂の爲に行はれず、彼等は只倫敦及キューールンを中心として密に運動しつゝあるに止りき（ラヴレー『現代社會主義』）。此合同の計畫は其後暫く又聞へざりしが、一八六二年に於

同盟の成立

ける倫敦の大博覽會は彼等に好機會を與へ、タン新聞やロピニオン、ナショナールル等の諸新聞、主として此時を利用すべきを説きけるより、佛國勞働者の代表者は倫敦に赴きて八月五日、英國の勞働者と共に『國際友愛』なる者を組織し、議決して曰、國際工業の問題に關し、協議を要する爲め、各國勞働者の委員を撰定せんと。國際大會は實に玆に近因せり。是に於てか居ると二年、一八六四年九月二十八日を以て各國の代表者は倫敦セント、マルチンス、ホールに會合し、號して『國際勞働者同盟』と云ひぬ。ベーズレー教授其議長たり。トラーンやマルクス等之に列する所の士五十八人に及ぶ。同盟は其綱領規約を制定せんが爲め、歐州各國の代表者より準備委員を撰定し、總務委員若干名を指名したり。オドガー委員長たり。マルクス、ユング等又之に位地を占む。

第一大會其綱領

一八六六年九月（三日―八日）勞働者國際同盟の第一大會をジュネーヴに開きぬ。來會する者六十八、會は主として前年總務委員が倫敦に於て協議起草したる綱領を是認採用せり。實にマルクスの社會政策を其根本原理となせる者なり。其要に謂て曰、我勞働者同盟は勞働社會相互の協力、進歩及其完全なる救濟等を目的と

第二大會

する各國勞働者の間に通交及協同の中心點たらんが爲に組織せられたる者なり。我同盟は眞理、正義及道德を以て其行爲の根本となし、又其旗幟として『權利なき義務なく、義務なき權利なし』てふ語を採る者なりと。　其綱領概して盡く温和中正にして過激の主張を包含せず。

一八六七年九月(二日―八日)國際同盟の第二大會をラウザンヌに開きぬ。　此時會する者意見區々に分れ、例へばクールレーの如きはユラ山に於ける國際黨の首領として專ら個人の財產を保護せんことを努め、白耳義國際黨の巨魁たるペープの如きは却て集產主義(コレクチヴィズム)を主張し、結局大會は社會上の脫縛運動が政治上の脫縛運動より離る可らざる者なること及政治上に於ける自由の建設が第一にして絕對的に必要なる方策なる事等を決議したり。　ルドルフ、マイエル之を評して曰、若しマルクスにして此席に列したりしならんには恐らくは斯かる無意味の決議をなさしめざりしならんと。　之を要するに一八六六年より六八年に至るまでは國際黨の最大なる活動をなしたりし時にして、六七年に於てはマルクスの『資本論』出で、勞働者の勢威隆々として天に沖し、六七年、巴里に青銅工の大同盟罷工あり、翌年に至ては

第三大會

ミハイル、バクーニン

ジュネーヴに建築工の大罷業あり。　勞働新聞は恰も雨後の蕈の如くに歐州の各地に生れ出で、マルクス其超世の組織的才能を以て國際黨の總務委員長となり、倫敦に列國に於ける運動を統卒しき。

一八六八年九月(五日―十一日)ブリユスセルに國際同盟の第三大會あり。　十五人の棄權、四に對する三〇票の多數を以て國家社會主義を採用することを議決しぬ。されどこは一方に於て確にマルクスに對する最初の一打擊にてありき。

茲にミハイル、バクーニンなる者あり(前編虛無主義の鼓吹者第三參照)。　此頃來りて國際黨に加盟し、忽ち一方の鬪將としてマルクスに反對し、其猛烈なる無政府主義を歐州至る所に鼓吹せり。　六七年彼ジュネーヴに開かれたる國際平和自由第一大會に出席し、雄辯を揮て國家の破壞、人民の團結を主張して曰、總べての國民、すべての州、すべての村は其大小强弱に論なく、自主自由たるべく、絕對的に己の利害利慾に從ひて生活し、自治するの權能を有す。　此權能に於て己が此原理をのみ損ひて絕へて他を害することなき限り彼等は皆團体的の者なり。　然るに今日の中央政府なる者は一般の平和に對して却て妨なり。　故に吾人は專制と壓迫とを以て上より組織せられし此

彼の無政府論

等の權力をば自由の結合より成りし村となし、村を州とし、州を國民とし、又國民をば發展して全歐州の合衆國に到らしめんが爲めに此等の中央政府を打破せんことを望むと。而して又平和と正義とを確保しぬべき唯一不二の原理として左の三つを列擧せり。

一、大小强弱を問はず、あらゆる人民の名に於て、並に國家の要求より獨立して已自ら完全なる自由を有すべき各個人の名に於て、一切國家の政治的歷史的必然てふものを廢すると。

二、個人、集合体、聯合、同盟、國民等の間に於ける恒久の契約を全廢する事。假令其契約が自由に締結せられたりしとするも之を解くべき權利を各人に允す事。

三、各個人、並に其聯合、州及國民をして其内に屬する者が外方の權力と結びて已を脫せんとするの時、毫も之が自由及獨立を脅迫するとなかるべしとの條件を約せしめ、如何なる同盟團体よりも隨意に脫し得べき權利を許さしむる事。

彼が此演說によりて慈善主義、平和主義によりたる此大會は忽にして一變して集產的無政府主義を採用するに至り、バクーニン自らはベルンを本部とせし平和自

一切の破壞を主張す

由同盟の終身議員に推されたり。翌六八年、彼又ジュネーヴの中央部會に出席して公言して曰、あらゆる事物は墮落せり。腐敗せり。人類を救濟せんとする一に其科學、文明、財產、結婚、宗敎、道德及正義を破壞するの外よるべきの道なしと。彼が此時提出したる案中に謂て云ふ(彼の文集による)。

今や人民の大多數は富なく、敎育なく、政治上並に社會上に於ける權力なく、其營々として心身を勞したるの結果、今代の燦爛たる富を生ぜしむるに至りたるにも拘はらず、彼等は尙ほ明日を凌ぐべきパンの費用をすら得ると能はざるなり。苟くも此悲酸と欠乏との彼等を奴隷の境遇に陷らしめつゝある限り、吾人は此世界に於ける自由、正義及び平和の嚴正なる實現の到底得らるべからざるを認む。

吾人はかくまでも永き世紀に渡りて畏るべきまでの窮境に沈淪しつゝありたるすべての人民に向ては、パンの問題は取りもなほさず智識、自由及人道の問題なることを認む。

社會主義によらざる自由は特權の壟斷なり。不義なり。自由なき社會主義

は奴隷制度なり。野蠻なり。

我同盟は法律的にも神學的にも將た哲學的にも非ずして只單に人道的なる最も嚴肅なる正義よ基き、又實驗的科學及び絶對的の自由の上に建設せられて、資本及地主の覊縛の中より一般の勞働者を救出するを目的とし、社會上及び經濟上に於て急激なる改革を行ふの切要なるを公言す。

吾人は又吾人の機關新聞に於て、政治上精神上の管見より及び物質上の關係より一般の大脫縛の希望の爲めに眞面目に皷吹せられたる經濟上及び社會上の問題に關する嚴格なる論議を主張すべきことを決す。

此年十二月、第二の平和大會ベルンに於て開かれ、ヰクトル、ユーゴー推されて其議長となり、バクーニンを初めエリゼー、レクルス等社會黨の名士列するもの極めて多かりけるが、バクーニンは此時又もや進で主張して曰、今日焦眉の問題とすべきは實に經濟上及社會上の平等を得んことにあり。西歐の文明は其根本とする所全く不平等にあり。無數の勞働者は愍むべし、動物の如き生活を送りつゝありて徒に少數の富者をして安逸を求めしむる所以の器具となるに過ぎす。抑ゝ此の如き不平等は精神上の勞働と肉体上の勞働とが絶對的に分れつゝあるが故に起る。故に精神的勞働者及肉体的勞働者をして共に同樣の境遇に至らしむるに非ざれば此弊斷じて之を刈除すべきに非すと。即彼は此會をして自己の極端論に同せしめんことを建議したるに、獨逸のアイゼナッハ大會の代表者は主として之に反對を試み、三十票に對する八十票の多數を以て之を否決するに至れり。是よ於てバクーニンは彼が同志の少數者レクルス兄弟、アルベル、リシャル。ジュコウスキー等と共に之を脫して別に『社會民權黨國際同盟』なる者をジュネーヴに組織するに至りたり。

彼遂よ『社會民權黨國際同盟』を組織す

此同盟は所謂愛國心及び各國個々の政治なる者を打破せんことを標榜する者まして、即革命によりて勞働者の運命を改善せんことを企つる者なれば、前者が政治上及社會上の緩慢なる改革によらんとする者とは到底相容るゝと能はざりしなり。同盟は運動上三階級に分たる。其一は國際的同胞と云ひて其數百名、一切の運動を司掌す。其二は國民的同胞と稱して各國個々に團体の勢力を擴張せんことを計る。其三は乃ち尋常黨員なり。バクーニンはジュネヴアに於て八十四人の人々と共に署名して黨の趣意書を發布して曰、

一、我同盟は無神論者なることを公言す。我黨は神の禮拜を廢し、信仰の代りに科學を用ゐ、神の正義の代りに人間の正義を用ゐ、政治上、宗教上、法律上及民制上の制度としての結婚を廢止せんことを主張す。

二、我黨は第一に全然階級を打破し、兩性の政治上、經濟上、及社會上に於ける同等を得んことを切望す。而して此目的を達せん爲め、先づ各人が其生産額と同一の報酬を獲得するを得るを目的として遺產傳襲制を廢せんことを求む。又過般(一八六八年)ブリュッセルの勞働者大會が決議せる所に從て土地、勞働用具、並びに其他の資本を全社會の集合(コレクチヴ)財產とし、之を以て只勞働者、即農民及工民社會のみの使用し得る所となさんことを欲す。

三、我黨は男女の兒童の爲め其誕生してより死に至るまで一生を通じて其發達、敎化及訓育の手段を一様ならしめて之に科學、工業、技術等を授け、初經濟的及社會的に止りし平等をして漸時個人自然の同等に到らしめ、終には社會組織の歷史的產物たる此不正なる不平等を將來全く撲滅するに至らんことを欲す。

四、我黨は凡ての壓制主義の仇敵として共和政以外の政治上の形式を認容せず、又すべての反動的の同盟を絶對的に斥けて、直接に資本に反抗し勞働者に援助せざるすべての政治上の働作を拒む。

五、我黨はすべて現在存立しつゝある政治上及獨裁上の國家を、彼等が關係する土地に於ける公務上の單純なる行政的機能にのみ限りて、農業並に工業の自由なる團体が世界的に合同するに至らんことを俟つ。

六、社會問題の一定にして眞實なる解決は一に各國勞働者の世界的國際的團結の基礎にあらざるべからざるが故に我同盟はすべて所謂愛國心及國民的競爭の上に組み立てられたる各國個々の政治を排斥す。

七、我黨は自由によりてすべての地方的團体が一般に團結し來らんことを欲す。

パクーニンの革命論のマルクスのと異る點

パクーニンは元來秘密運動を好まざるの士なりと雖、此同盟は其性質半陰半陽にして一方に於てはマルクスの國際黨のごとく公然たる所あり、又一方に於ては伊太利のカルボナリストのごとく秘密結社の風を帶ぶる所ありき。之を要するにバクーニン派のマルクス派と異る所は後者の勞銀を高め言論により、遊説により、出版により、即一言にして之を云へば公然の手段によりて社會上の改革を遂げん

とするに對して、前者が一切腕力的暴動によらんとするの點にありとす。彼等又云て曰、國際的同胞の聯合は一時に社會上、哲學上、經濟上及政治上の一般革命を望む。假令それが都民的理論主義によるも、將たジャコビン的革命主義によるも、先づ全歐州を手初めとして續て全世界に渡り、一歩は一歩と實際事物の秩序を改革風化せずむば止まざるべし。『勞働者の上に自由あれ。すべて壓せらるゝ者の上に自由あれ』と叫び『すべての主治者、すべての保護者よ、亡滅せよ』と大呼して、吾人はあらゆる國家、あらゆる教會、其制度及び其宗教、政治、法律、財政、警察、教育、經濟、及社會上の法則を打破せんことを望む。これ蓋し欺瞞せられ、行使せられ、苦められ、利用せられたる憫むべき人類の數千百万を終には彼等の命令者たり、守護者たる個人若くは集合体の羈絆の中より救出し、彼等をして完全なる自由の境に至らしめんことを欲すればなりと。見るべし、其主張する所の毫もネッチャエフの言論と異る所なきことを。

一八六九年、バクーニン平和自由同盟の一員としてベルンの大會に列席し、こゝにて又各人經濟上、及社會上の平等を唱へたるが、ショーデー等は彼を以て共産主義

バクーニンノ非共産主義

に賛するものなりとて之を非難したりしかば、彼は之を反駁して曰、余はあらゆる階級及個人の經濟上、社會上に於ける平等を主張するが故に、又ブリュスセルの勞働者大會に於て集產主義(コレクチヰズム)を賛成したるが故に共産黨なりとて抗撃を受くるなり。されど共産主義と集産主義とは果して同一なるか。プルードンの窘逐者たるショーデー君にして之を解せられずとは抑々怪むべきの至りならずや。余は共産主義が自由を否定する者なるが故に、而して自由なくしては人類の事、爲すに足るべからざるが故に共產主義を厭ふ者なり。余は斷じて共産主義者に非ず。何となれば共産主義は社會の全勢力を集中して之を國家の吸收する所たらしむればなり。何となればそは國家の掌中に財産を集中せしむるに終るべき者なればなり。それ國家や、聖權や、彼等は人類を有道にし、之を開發せしめんことを口實として、而も却て之が自由を褫奪し、之を壓倒し去りたる者なり。余は彼等を打破し、泯滅せしめんことを希望する者なり。余は或種の聖權によりて上より下に築かれたるものを望まず。自由の團体により下より上に設立せられたる國家の構成を望むなり。現國家の破壞を望むが故に、從て余は又國家なる制度に外ならず、又國家の原理の

結果に外ならざる遺産相續制を廢することを望む者なり。諸君よ、これ即余が集産黨にして共産黨に非る所以の理なりと。彼又曰、吾人は系統的にあらゆる聖權權力を否認する者に非ず。又自由の名に於て國家主上權的原理の打破を求むる者に非ず。すべて各個人の最も完全無欠なる自由の上に築かれたる政治上、社會上の機關を承認する者なり。されども余が財産集合制を贊成するは財産にして世襲相續の形として存するの間は第一着の平等、すべて經濟上、社會上に於ける平等を實現するの斷じて不可能なるを信ずればなりと。

因に記す。集産主義とは一種の政治經濟的制度にして國家が自ら土地及生産機關の所有者となり、其獨力を以て一切の富を生産し、敢て之を民間の資本主若くは組合の手裡に放委せず、而して之が分配の如きも亦極めて公平を旨とし、專ら各人の勞役に應じて之に相應の賃銀を與へ、今日の如く自由契約に基き、若くは財産及遺産の法律によりて之を定むるが如きことなき者なり。されば私人に自巳の消費すべき物品を所有することを許すのみならず、分配、聚積、遺産等に於て稍、不平等を生ずることあるも之を默過するが故に共産主義とは大に趣きを異にせり。(グラハム『新舊社會主義』)ラヴレーの『現代社會主義』に云ふ。集産主義とはつまり財産を國家の所有に歸せしむる者と云ふて可なる一種の制度にして之に種々あり。土地のみを國家に歸すれば即

英國にて所謂土地國有と云ふことなり、又固定資本を以てするあり、流動資本を以てするあり。何れにしても個人には彼が勞働の直接の所産以外には何物をも得ることの術ながらしむる者なりと。されど之にも分派あり。大略之を分て二つとなすべし。一は不變移的集産主義者にても云はるべく、舊時のジヤコビン黨人の如くあらゆる革命運動を行はんとするの輩にして、一は進化的集産主義者なり。こは又ポシビリストとも稱せられ、事物の變遷は社會の秩序に於ても徐々の進歩開展によらざれば能はずてふことを固執する者なり。即溫和派なり。バクーニンの如きは集産主義者なるも、前者の更に極端なる者にて之を遂ぐるの方便として無政府及一切の打破を撰ぶ者なり。

一八六九年六月、同盟は終に再び國際黨に合同し、九月五日(陽曆)バクーニンはリオンなる勞働者を代表してバゼル國際勞働者第四大會に出席せり。是より先、此年一月、瑞西人の別に己が會をジエネヴアに開きて『羅馬聯合』と稱せるあり。ネープル。バルセロナ。リオン等にもそれ〳〵國際黨の分派ありて個々獨立せしかば、バクーニンはバゼルの會に於て之を統一せんとしたり。此時マルクスは總務委員長たりしが、白耳義のプルードン學徒ド、ペープは一の提言をなして曰、一、社會は土地の私有權を廢するの權利あり。二、土地を集合所有となすべしと。アルベル、リシヤルの如き又これに贊成して財産の私有はあらゆる社會の不平等及國難を惹起

する者なりと謂ひ、バクーニンも亦出で丶大に之を主張したりしかば、ミューラー及トラーン等が所謂集產なる者の抽象的名辭に過ぎざる所以を辨じ、極力之に反對したりしにも拘らず採決に及びて十票の棄權を以て八に對する五十三の大多數を得ければバクーニンの集產主義は茲に大勝利を博し、これよりこは專らマルクス派に反對する武器として用ゐられたり。但バクーニン等が提出せし下の建議案のみは遂に採用せられざりき。其案に曰、相續權は私有財產より離れざる者にして社會の富を少數者の利益に供し、多數者に害を加ふる者なり。土地及社會の富を集合財產となさしむることを妨げ、其結果の大小に論なく、一の特權を形成し、不正を無視し、社會上の權利を脅迫し、尙ほ進では其所在至る所に政治上並に經濟上に於ける秩序の不公平を齎し來る者なり。こは實に個人をして其道德上及物質上に於ける發展を抑止せしむる者なり。我大會は今や既に土地集產の制を是認したり。故に苟も相續權の廢止によりて此理論を堅固にするに非ずんば、そは正に論理に背反せる者と云ふべきなり。由て我大會は此處に相續權の全然廢せられざるべからず、又此廢止の勞働を自由ならしめんが爲には避くべからざる要件の一なることを認むと。此案はバクーニンの持論なりしかども、十七の棄權、二十三に對する三十二の多數を以て否決の運命に遭ひぬ。要するにマルクス派とバクーニン派との主要なる異見は前者の國家中心主義に對して後者が地方分權を主張し、又前者が熱心に下級人民の自由を求めんが爲には一般投票を以て煽動の最良の方法なりと思意せるに、後者が一切斯の如き政治上の手段を斥けて、勞働者は撰擧權にはあらで唯一の腕力によりてのみ其自由を求め得べき者たるを唱道したるにあり。

羅馬聯合の分裂

是より先瑞西の國際黨は『羅馬聯合』なる者を組織せり。元來此國にてはユラ山の一派はジャームギョームを頂き、ジュネーヴの一派はバクーニンを頂き、これ等は共に集產主義を主張したるが、ジュネーヴに於ける國際黨の大多數はマルクス派に屬して共に此聯合に加はりたり。一八七〇年四月四日、ラシャウ、ド、フォンに羅馬聯合の年會なり。決議して曰『我黨は啻に生產用具の共有を認容するのみならず、生產物品の共同消費を採用するの点に於て集產主義をば之がすべての論理的結論と共に絕對的に贊成す』と。(ガリン『無政府黨』)されど此會はバクーニン等『社會民主黨國際同

第五大會

バクーニン派ユラ聯合を組織す

盟』ジュネーヴの一派のこれに加入せんとする申込に付て議するに及びて異論沸騰し、バクーニンの人身抗撃を試むる者さへありしが、賛二十一、否十八にて愈々其加入を許可することとなりたりしや、會は終に分裂せり。此年九月四日ナポレオン三世の帝政倒れて巴里に第三共和政の組織成るや、同盟黨（アリアンチスアン）（社會民主黨國際同盟黨の略稱）之を好機として革命を試み、己が理想を實現せんと欲し、バクーニンは二十八日、一揆を起すの目的を以てリオンに赴き、アルベル、リシャル。バステリカ及ガスパル、ブラン等の同志と共に市廳を占領して國家の廢棄を宣言し下民を煽動して暴行したりしが、幾くもなくして兵士の爲めに擊ち平げられて瑞西に走り去りぬ。

一八七一年九月、倫敦に於て國際黨の第五大會あり。總勢委員及各國の代表者來り會せしが、此會はマルクスに屈從して集產主義を非難したり。是に於て之より先ラ、シャウ、ド、フォンの會に於て分裂したりし羅馬聯合の二派は、共に和睦して此年十一月十二日、ソンキリエーに聯合の集會を催し、倫敦第五大會の決議を否認し、總務委員の越權を詰責し、新に『ユラ聯合』なる者を形成して其綱領を公にし、機關新聞『平等』をジュネーヴに發行せり。此バクーニン派及マルクス派の角逐は遂に一

サン、イミエーの會合及其徒の活動

八七二年に於けるハーグ國際黨大會に於て全く破裂し、終に互に其袂を別つに至れり。此大會に際してや、ユラ聯合は公然マルクスに反對し、聯合の名士ジャーム、ギョームの如き大に論じて曰、一部の人士は云ふ國際黨は一の老練なる傑物の作る所なり。此人や、社會上及政治上の事物に關して何等の誤まりだも有せず。故に吾人は彼に反對するの權能なしと（所謂傑物とは暗にマルクスを指せるなり）。果して論者の云ふが如くむばこれ我黨をして一人の專制に屈服せしむる者に非ずや。余は我黨が見下經濟上の關係よりして自ら發生し來りたる者なる事を信ず。故にかくの如き首領株は吾人の望まざる所なりと。然るに此會の多數はマルクスに從ひしかば、ギョーム等は少數を以て遂に敗亡したり。是に於て彼等バクーニン派は大會の了るを俟て、九月十五日、國家中心主義を否認する社會主義者の一体をサン、イミエーに集合し、ハーグの決議を否認して全くバクーニンの無政府主義により總務委員を廢して各團の交通を司る局を設置せり。西班牙、伊太利、白耳義、北米、英國等の各地方派にして之に加はるもの頗る多し。殊に當時にありては西班牙に於ける國際黨の勢實に猖獗を極め、二七〇の聯合、五三七の手工業者團、一一七の勞働者團、總計三

十万人の同志を有するに至り、爲に同國政府は之を鎭壓せん爲め各國聯合協議會を開かんヿを發議するまでに至りたりき。

一八七三年一月五日、國際黨の大會紐育に於て開かれ、總務委員はユラ聯合の決議を排して又マルクスの說を主張したり。此大會を以てマルクス派の國際黨は殆んど全く米國に渡り、歐州は專らユラ聯合各派の相爭ふ所となれり。九月初旬、ジユネーヴに聯合の第二大會開かる。此時集產主義者として新聞『先鋒』の主筆たるブルースは公言して曰、諸君須く諸官廳を破壞すべし。無政府は諸君の綱領なりと。翌年又ブリスセルに其大會あり。十五人の代表者之に列しぬ。ブルース博士等殊に無政府主義を皷吹する者なり。七六年十月(二十六日―二十九日)に於けるベルンの大會は終にマルクス派を除きて全く純然たる無政府主義者の團体たらしめたり。翌七七年十一月九日、全社會黨の大會をゲントに召集するや、熱心なる集產黨は之に先ちて五日より八日まで別にウエルキエルに集まり、聯合より分立したり。之に由て集產黨と無政府黨とは又全く分れ、ド、ペープ等は前者をバクーニン派は後者を代表するに至りぬ。

新聞『先鋒』及『反逆』

當時にありて無政府主義の傳播に與りて力ありしは實に新聞『先鋒』なりき。其主筆ブルースは殊に實行の主張を唱道して謀殺、乱暴、暗殺等を勸誘し、一八七八年五月十一日に於てはヒューデル、同六月二日に於てはノビリングが交〻獨帝維廉一世を狙擊する事あるや、彼は其紙上に於て拳銃の實行に不便なるを說きて、劔によるの得策あるを公言せしかば年の十二月忽にして瑞西政府の爲に之が發行を制止され、彼自身は捕へられて二ケ月の禁錮及十ケ年の追放に處せられたり。是に於て彼に代りて露國新來の熱狂者クラポトキン、新にジユネーヴに『反逆』新聞を發行し、或は眞名、或はレヴァショフなる匿名を用ゐてラ、シャウ、ド、フオンに、ラウザンヌに、ウエヴエーに、ジュネーヴに、勞働者の前に得意の快辯を揮ひて頻りに其暴論を皷吹しぬ。

フライブルグの無政府黨會合

七八年、フライブルグに無政府黨の會合あり。此時黨の名士エリゼー、レクルスは委員を設けて左の諸問を協定せしめんヿを建議したり。曰、

一、何故に我等は革命黨なりや。

二、何故に我等は無政府黨なりや。

集産黨全く無政府黨と絶つ

三、何故に我等は集産黨なりや。

而してレクルス自身は謂て曰、吾人は正義を要求するが故に革命黨なり。進歩は決して單純なる平和の發展によりて得らるべき者に非ず。必や急激なる革命によりて始めて期せらるべきのみ。吾人は無政府黨なり。故に何等の君主をも認むることあるなし。道徳は獨り自由に於てのみ存す。吾人は又國際的集産黨なり。何となれば吾人は社會的群集なくしては存在の不可能なるを見ればなりと。此會はレクルスの意見を容れて左の二項を議決せり。

一、社會の富を一般の所屬となす事。

二、あらゆる形式の國家を廢する事。

なは又此會は民權の主張を貫徹すること能はざるの故を以て一般投票を否認し、理論的遊説及革命的煽動を是認せり。翌年マルセーユの勞働者は無政府主義の主張を立し、十月三十一日、其宣言書を發布し、佛國の全地方を六つの主なる地方團に分ち、之が體制を整理せり。

此頃集産黨と無政府黨とは互に相對立しつゝありしが、一八八〇年巴里に開かれたる中央部會に於ては一度既に分裂し、此年十一月十四日に於けるハーヴルの大會に於て彼等は遂に全く相別れ、集産黨は其綱領として間接に相續を否認し、直接には二萬フラン以上の遺産相續を禁ぜんことを議決せり。當時無政府黨は主として佛蘭西、瑞西の間を其根據地とし、之が巨魁としてはジュネーヴにクラポトキン及びエリゼー、レクルスあり。巴里にエミール、ガウシエーあり。グルノブル及リオンにベルナルドあり。其勢力猛烈にして衝るべからざる者あり。此年十二月二十五日、クラポトキン『反逆』新聞に於て公言して曰、我黨の運動は辯舌により、筆により、劍により、銃により、爆裂彈により、又時には投票紙によりて永遠に陰謀する事にあり。……すべて不法なる者は吾人に向ては善なりと。然るに總べて此等各地方の無政府黨員は皆何等整然たる秩序の下に關連せられつゝあるに非ず、此点に於てはマルクス派の總務委員を設けて號令一途に出づる者とは殆んど同日の談に非ざりけるより、彼等は此問題を決せんが爲め一八八一年一月に於て同年七月十四日を以て一の大會を倫敦に召集すべき旨を公布し、此年三月十八日の『社會革命』新聞の如きも亦萎靡したる勞働者國際黨を復興するの切要なるを

論じたり。七月に於ける倫敦大會の決議左の如し。

一八八一年七月十四日を以て倫敦に會合したる兩半球革命的社會主義者の代表者、即換言すれば政治上經濟上の現制を全滅せんとを主張する同志の儕は、一八六六年九月三日に於てジュネーヴなる國際勞働者大會が曩に採用したりし原理の宣言を認容す。我黨は各團体に向て下の提言をなすべし。曰、勞働者國際同盟は政治上に於ける國家主義の反對者なるとを宣言す。我團体の原理を採用し、保護する人々はすべて我黨の黨員たるとを得。又各小團体は他の團体及聯合と直接交通するの權利を有す。由て殊に此交通を便ならしめんが爲に此處に國際通信局なる者を設置し、三人の黨員をして之を處理せしむべし。大會は已に屬する全團体の名に於て永遠に此等の者に關し、並に之より生ずるすべての決定に關して一切の責を負ふ。未だ運動に着手せず、又道德や適法手段に付て謬見を懷ける人民の大部分に向て革命思想及革命精神を皷吹するはこれ實に目今焦眉の急要事なり。我黨たる者須く從來人々の立ちたる法律の地礎を去りて革命唯一の道途たる不法の地盤に轉せざるべからず。……

こは何よりも必要なり。何となれば現在の制度を抗撃する鋒先は、少くとも多くの言語文章によらんよりも、遙に効力あればなり。又都市に於けるよりも地方に於ける遊説は一層肝要なる者なればなり。我黨は又防禦及抗撃の要具としては工藝化學の研究が最も必要なるが故に、之を我國際勞働者同盟に屬する團体及各員に勸告す。

此宣言の純乎たる無政府主義を其基礎とせるを見るべし。是に於て瑞西政府は彼等の激言を以て治安に妨害ありとして八月二十三日、遂にクラポトキン等に之が退去を命し、彼は由てサヴオアイヤンヘ移り住しけるが、翌八二年七月二日、ラゥザンヌに開かれしユラ聯合の地方會は三十名の代表者を集め、倫敦大會の立脚地を採り、全歐州の革命團体を召集せんとして八月十二日よりジユネーヴに會合すべき旨の通知を發するや、彼は又主として此會に臨み、大に運動したり。此大會に列せし者はリオンの代表者十二人、キアン及サン、エチエンヌ、三人、巴里二人、キル、フランシユ。ボルドー。セット。モントンー及伊太利各一人づゝにして全く無政府の見地を採り、又一の宣言書を公にせり。曰、

ジュネーヴに集會せる無政府主義者は次の原理を立するとに於て同意せり。

吾人は之を吾人の同志に通ずるの義務ありと認めたり。

吾人を命令する者はあれ吾人の敵なり。吾人無政府主義者は上に何をも戴かざるの人民なり。吾人は總べて何等かの權力を專にし、又は之を專にせんとを欲する者と鬪ふ。

土地を己の所有なりとし、已が利益の爲に農民を使役する所の地主は吾人の敵なり。勞銀の奴隷を以て己が工場を滿す所の工場主は吾人の敵なり。國家はすべて其君主的たると、寡人政治的たると、民主的たると、將た勞働者的たるとを問はず、其官吏、軍人、市役人及秘密探偵と共に盡くあれ吾人の敵なり。假令神にても、惡魔にても、苟くも僧侶が之を利用して忠實なる人民を支配したる以上敎權に關する觀念は吾人の敵なり。常に强者に黨して强者を虐げ、罪惡を適法として之を聖視する所の法律はあれ吾人の敵なり。

然れども既に地主、工場主、君主、僧侶及法律等が吾人の敵たる上には吾人は又彼等の敵なり。故に吾人は勇敢に彼等に向て抵抗せざるを得ず。

吾人は土地及工場を地主及工場主の掌裡より奪ひ去らんと欲す。吾人は彼等の常に利用して以て匿るゝ所の國家を破壞せざるべからず。吾人は僧侶及法律の之あるにも拘はらず再び吾人の自由を請求せざるを得ず。吾人はすべて法律制度を打ち破らんが爲には常に吾人の力を慮りつゝ運動し、革命的行爲によりて法律を否認するすべての人々と共に團結せんと欲す。

吾人は適法的の手段が吾人の權利を否認する者なるが故に之を厭ふ。吾人は又吾人の個人的主權を棄てゝ罪惡を犯せし人々の中に投ずるを廉しとせざるが故に、所謂一般投票なる者を希望せず。吾人無政府主義者は保守派まても、自由派まても、温和派にてもあらゆる政治的諸黨派とは深き谿谷を隔てゝ相對する者なり。吾人は吾人自身の君主たるを以て滿足す。故を以て凡そ吾人の首領となり、指導者たらんとを試むる者あらばそは實に吾人の裏切者なり。

吾人は素より總べて他の自由なる仲間との結合よらざる個人の自由の成立し得べきにあらざるとを知る。吾人は他の人の助力により、一個人として生活するを得る者なり。吾人を作りし者は社會生活なり。己自身の保護の爲に其

權利の自覺及勢力を吾人に與ふる者はこれ他人の働きなり。すべての社會的生產は之れが上に同等の權利を有する全体の人々の働なり。吾人は共產主義者なり。故に凡ろ家長的、村團的、州郡的國民的の境域を打破せずしてはすべての事業必ず爲すに足るなきは吾人の認むる所なり。公共の財產を我が物とし、之を保護し、一意政府を破壞するはこれ吾人の勤なり。

此告示のクラポトキン等の勢力の爲め共產的無政府主義を採り、集產主義の原理を棄つるに至りたるを見るべし。又此年巴里の無政府黨團が有名なる辯者エミール、ガウシエーの筆によりて公にせし告示文も參考を價す。其文に曰、

新無政府黨の特質は彼等が向後決して何等の政府をも認容せずと云ふの一點にあり。彼等はこれ故に今日の國家依賴者及此等の政体のみならず、すべて現在及將來に於ける攝政、國家、權力等に向て戰を宣す。彼等は直接に權勢の原理に對して抗立す。其目的たる一に生產、勞力、消費、敎育等すべて社會上の關係に於て自由を根本として一切の秩序を正しうせんことにあり。

社會機關の指導を一個人、一團体又は一階級の手に專占せしめて巳の意志によりて其運動を遲速變更することを得せしめ、又すべて從順なる市民の間に恣に位地、官職、勞力、罰、賞、利、害、樂及租稅等を分布するの權利權力を握らしむるが如きかゝる權威の體制をば彼等は全く之を廢して、之に代ゆるに自由意志の體制、人々利益の共同、相互の一致、同情等によりて結合する所の契約にして自由に解かれ得べき者を以てせんことを期す。

惡しき者惡むべき者は權力なり。何となればこは第一に平等と兩立すべからざればなり。權力なる者は一は命令し、一は服從する所の二つの不平等なる階級の相分るゝを示し、又一方が全く他のものゝ權力の下にあるものなるが故に自由と相並ぶこと能はざる者なればなり。

又曰、

人は强となく、弱となく、老幼、男女、人種の如何を問ふことなく、皆盡く生存の權を有す。すべて充分に彼等の能力を發展し得るの權を有す。即巳の嗜慾を滿たさんが爲め社會に於ける資本の一部を其同胞と共に享有するの權を有す。彼等は生活の食卓に坐して己の食慾、他人の嗜慾、自然の不可能より外には何等の

制限もなくして其思ふがまゝに衣食する權利を有す。富は人々協力の結果なるが故なるはすべての人に屬すべし。各人は巳の捧献したる勞力によりて得たるだけを得べし。故に彼にして已の欲するだけを生產物の全体より取得するもこは正なり。

各人須く各自の能力に從て働くべし。各自の嗜慾に從て取るべし。

此最後に見ゆる一片の意見は既にサン、シモン。プーリエー。ルイ、ブラン及びカベー等諸の共產主義者の唱破したる所、而して之を實行せんが爲には無政府主義者は暴力を用ゐて革命を起さゞるべからざるを主張したり。なれ其主として、マルクス。ジエフレ。ジョン、スチユアート、ミル。ラヴレー及ヘンリー、ジョルヂ等改革を國家の干涉によりて實現せんとするの論者と異る所以なり。

此ジネーヴ大會の運動によりて歐州に於ける無政府黨は主に共產主義者となれり。吾人はこれより更に章を改めて輓近二十年間に於ける歐米列國無政府主義の狀態を略究せんと欲す。

終に臨みて吾人はこゝに參考の爲め社會主義者各派異同の点を擧げて此章を結ぶべし。社會主義者は皆其生產の用具、土地及工業資本の私有を多少にかゝわらず變更するの必要なるを認むるの一点に於て互に見を同じうせり。生產用具の私有を許して只之に一定の制限をおかんと主張するは僞社會主義と稱せられて獨逸、佛蘭西に於ける基督敎的社會主義皆之に屬す。されども多くの社會主義者は之に反對せり。其中何程まで私有制度を許すべきかに付きて左の如き區別を生ずるを見る。

一、土地の私有を廢せんとするもの。所謂土地私有の改革。
　　フリユールシヤイム及マルロ等の說(フエデラリスムス)

二、工業資本のみを廢せんとする者、
　　パックユール。井ダル等の說、

三、土地及工業資本の多少の部分を廢せんとする者(其目的に從ひて禁ずべき種類の者を定む)、
　　コーランの合理社會主義及彼の學徒、

四、土地及工業資本全体の私有を禁ぜんとする者、
　　之を嚴密に區分せば(一)無政府主義(二)バブーフ等の共產主義、マルクス等の社會黨、(三)マロン。ド。ペープ等の集產主義の三となるべし(ステグマン『社會主義小字彙』による)

之を要するに集產主義は少くとも消費物品と生產用具との間に區別を設け、後者をのみ國有又は團体の所有とせり。されど消費物品と生產用具とは果して劃然たる差違

を其間に有するか、實際に於て精細に兩者を區別するは困難たるべく、畢竟皮相に過ぎざるべし。これ實に共產的無政府主義者の嗤笑する所たりしなり。而して共產的無政府主義者は云ふ、財產は國家の手中にも團体の有にも屬する者に非ず。こは渾然一体としてすべての人に屬す。國と國民的境域との如何に關するとなくして万民に屬すと。こは即何人にも屬せずと云ふと同じ事なり。

古き共產主義者は曰、國家は唯一の所有者なり。あらゆる權利義務を握り、勞働を分ち、其結果を蒐集し、又各人の生存を確保する者なりと。カール、マルクスの採れる立脚地は實に之なり。されば共產主義の社會にありては生產は直接に國家の誘起せる所にして、老幼、病弱に對する給養費の如き、又國家の目的及社會資本の体制等に要すべき生產物品を除きては、國家の倉庫に殘れる凡ての物は人々の慾望に從ひて之を取用するに任ずるものとす。之に反して集產的に体制せられたる社會にては個人の權力は前者よりも一層大にして、國家は只全生產機關を專有するのみにて、租稅を取り除きては各團、各人は各自のなせる勞力の大小長短に比例して生產物を分配するとを得るなり。

第三章 晩近に於ける無政府主義

其一 佛國に於ける無政府主義

社會革命新聞。クラポトキンの共產主義。南佛に於ける無政府黨の運動。巴里無政府黨。ジャン、グラーヴ。ペール、ペーナル新聞。ランヅオル新聞。九十年代初年の暴行。カルノー害に遭ふ。エリゼー、レクルス。ルイズ、ミシエル。ダニエル、サウラン。アモン。シャール、マラトー其他。

附一、西班牙に於ける無政府主義

二、伊太利に於ける無政府主義

其二 獨逸に於ける無政府主義

七十年代。アルツル、ミユーレンベルガー。獨逸無政府黨の卒先者、ハスセルマンの煽動。ヨハン、モスト。倫敦に於ける彼の運動。社會民主黨とモスト。除名せらる。彼の社會主義。暴行を勸奬す。八一年に於ける倫敦大會及其決議。九十年代。カプリヴイ內閣の無政府黨鎭壓案。デユーリング。エギデ。マツケー。フリードリヒ、ニイチエ。ヘンリツク、イ

ブセン。

附一、墺太利匈牙利に於ける無政府主義

二、白耳義に於ける無政府主義

三、瑞西に於ける無政府主義

其三　英國に於ける無政府主義

英人に實行的無政府主義者なし。無政府黨の出版物。クラポトキンの運動。アウベロン、ハーバートの理論的無政府主義。純乎たる無政府は不可能なり。彼のヲランタリズム

其四　北米に於ける無政府主義

無政府的運動は八十年代を以て初まる。ベンシヤミン、ツッカーの無政府論。すべての特權を廢せん。平和的遊説を主張す。モストの勢力、勞働者の躍起。政府の嚴壓。無政府黨現時の集窟

無政府黨の害に遭ひたる各國輓近の主權者

無政府黨員の數果して幾何

如何に彼等を處すべきか

社會革命新聞

クラポトキンの共産主義

其一　佛國に於ける無政府主義

十九世紀の第八十年代に當り激烈なる無政府思想を以て羅典人種の列國を風靡したる二人の熱狂者あり。ピートル、クラポトキン及エリゼー、レクルス即是なり。無數の團体彼等の勢力の下に成る。一八八〇年、巴里に新聞『社會革命』創刊せらる。實に佛國に於ける無政府黨最初の機關紙なり。警官アンドリウなる者の資金を仰ぎ、ムーシャル及ルイズ、ミシエル等を記者として盛に謀殺兇行を主張しつゝありしが、翌年秋アンドリウが其職を辭したるが爲め運動費の出所を失ひて廢刊し、倫敦大會の後幾くもなくして『國際革命黨同盟』なるものゝ巴里に組織せられ、其同志を得ると甚だ多からざりしかど頻りに實行を論唱したり。之よりリオンは專ら運動の中心となり、年の秋に至りては已に同志八千人を得、クラポトキンの共産的無政府主義を以て彼等の旗幟となせり。彼は實に近世に於ける極端なる共産主義の祖なり。其論ずる所はプルードンの集産的無政府論とも、將たスチルネルの個人主義的無政府論とも異る。既にバクーニンの如きも遺産相續の廢止と、個人の自由とを主張して我は共産黨に非ずして集産黨なりと公言したりしが、クラポ

トキンは之に由りて彼等の目的たる平等の得らるべからざるを見、集産主義と無政府主義とは到底相一致し得べき者に非ずとしてすべて集産的なる勞銀、勞働時間及所有等を否定して曰、吾人の所謂共産主義はファランステリアン（フーリエーの學徒）の共産主義に非ず。又獨逸理論派（マルクス學徒）の共産主義にも非ずして無政府的共産主義なり。政府なき共産主義、自由なる人民の共産主義なり。こは即人類が宿年追求しつゝありたる二つの目的、即經濟上の自由及政治上の自由を同時に享受し得べき者なりと（『麵麭の略取』第三八五頁）。彼又尙ほ精細に集産主義者を批評して曰、吾人を以て之を見るに、社會の再造に關する彼等の計畫に於て二つの誤謬あり。彼等は一方に於て資本を破壞せんヿを唱へながら此制度の根本を作る二つの重要なる組織を維持せんヿを望む事即是なり。二つの組織とは一は代議政体にして一は給料なり。所謂代議政体なる者に向ては彼等有識の士人にして之を主張するは吾人の就んと解する能はざる所なり。今や國會制度は頽敗しつゝあり、之に對する批評すら起りつゝあるに、何故に革命的社會黨とも稱せらるゝ者が最早死の宣告を受けたる此制度を辯護せんとはするや。假令此制を採用したりとて國民又は市を代表する國會の開設の中々に見られ得べからざるは彼等が首領株の夙に認むる所にてあるなり。之を要するに國會は稍君主の專制を抑止し得べきの功あらんも、之によりて人民の自由を得來らんヿ就んと望み得べからず。故に此制を求むるはこれ正に實現し得べからざる者を妄想すると異らず。國會的ユトピヤに非ずして何ぞや。給金制に付ても亦之と同じ。既に私有財産の廢止と生産機關の共有とを公言したる上には更に又給金の設備を主張するとは抑ゝ何たる矛盾の說ぞや。若しすべての住家、田畠、工場等が一切私有財産たるヿなくして組合又は國民の所有に歸するヿとならば如何にして此給金制度を辯護支持するヿを得るやと（『麵麭の略取』第二二三頁）。コントは人類世界道德的秩序の根本として愛を採り、プルードンは正義を撰びたりしが、クラポトキンは社會の心的基礎として人類の團結力を主張したり。此点に於ては彼れは全くバクーニンの見と同一轍に出でたるを見るべし（バクーニンの團結力に關する見參照）。

要するにクラポトキンの無政府的共産主義は之を下の三條に約結せらるべし。

一、總べて生産は之を資本の束縛より脫せしめ、共働の成果は其之にあづかれ

南佛に於ける無政府黨の運動

る者をして盡く任意自在に之を獲得せしむべし。

二、政府の軛縛を脱し、各團体、各組合体は漸次單純なる者より復雜なる者に向ひて開展し、其欠亡する所に從ひて自由なる組織を作るべし。

三、宗敎的道德の繫縛を脱して義務も制裁もなき自由の境涯に至り、須く社會生活を出で習慣によりて行動すべし。

彼の此激論は八十年代の初年にありては一般勞働者の運動と共に非常なる勢力を得、八二年に於てはロアン。ベジエール。モリエール及其他南佛に於ける工業市に同盟罷工あり、嘗てフールニエーと稱する一の愚勞働民が街上に其雇主を射殺して獄に投せらるゝや、無政府主義者は之が德を頌して祝宴を張るに至り、此年七月十四日、共和政府の祝日に際し又巴里に大運動あり『勞働奴隷』と題する告示文を發布して激語を列ね、秋に及ではモンソー、レ、ミヌ及リオンに爆裂彈の大騷擾あり、翌年三月巴里市中は掠奪的示威運動の爲に亂され、續て七月十四日の大祭日には又もやルーベー其他の各地に於て兵士と勞働者との間に衝突あり、ルイズ、ミシエルは遂に捕縛せられぬ。之より先昨年モンソー、レ、ミヌの騷擾によりては十四人の嫌疑者捕へられて其中九人は一年より五年に至る禁錮に處せられ、又リオン事件に關連しては此年一月十九日の公判にて六十六の被告中三人は放免され、其他の者はクラポトキン、ガウシエー。ボルダ及ベルナル等の首領株を初め、一八七二年三月十四日の法律によりて皆ろれ〳〵罰に處せられたり（クラポトキンは五年の禁錮千フランの罰金十年の監視五年の市民權褫奪に處分せられたり）。

巴里の無政府黨

之よりリオンの無政府黨大に衰へぬ。リオンの無政府黨鎭壓より以來巴里は專ら之が運動の中心となり、當時恰も一般人心の痛く萎靡しつゝ有りけるより、過激なる此主義は大に都人士の人心に反響して『無政府黨團』數多此地に勃興し、九十年代の初年に至り兇行者ウェーヤンが爆裂彈を佛國議院に投ずるの珍事あるや、所謂デカーダンスの詩人ラウラン、テーラアドの如きは同志ラ、ブリュムに向て絶叫して曰、若し之によりて個人を强むるとを得ば此等の人々の死抑ゝ何かあらむと。此外巴里に無政府黨の機關紙『反逆』及『疲れたる父』あり。

ジャン、グラーヴ

前者はクラポトキン及レクルス等の助筆を得てジャン、グラーヴ殊に之を主宰し、其發行部數六千に及べり。彼もと靴工たり。後印刷工となりし事あり。クラポトキン派の饒將なり。一八八三年、彼ジュアン、ラヴァーグルなる匿

ペール、ペーナル新聞

ランヅォル新聞

名を以て一書を著し、公然の遊説が秘密的陰謀に對して保護者となり、以て後者の爲めそが運動の手段たる同志及運動費を供給すべきことを唱へ、此主義に依て『反逆』新聞に執筆しぬ。後又『瀕死の社會及無政府』なる一新著を公にして激論するや、此書は佛國にて之が發賣を禁止され、彼自身は又一八九四年を以て二年の禁錮に處せられたり。是より先彼『革命の翌日に於ける社會』を著して精細に己が理想の天國を描出し、互に利害を同じうする個人を以て將來の社會を構成せんことを期したり。新聞『疲れたる父』（ペールペーナル）の主筆をエミール、プージェーとす。みは前者と異りて只勞働者の事及巴里日常の俗事を記するに止まれり。されど此新聞は一方に於て特別の意味を文學上に有せり。そはこれが多くポンチ繪を挿みて政治上社會上に於ける諷刺を巧にし、由て以て所謂印象派に屬する美術家の同情を博しければなり。されば此新聞は無政府主義を世俗化し、之を普及せしむるに於て頗る力あり、其發賣部數も一万に及びたりしと云ふ。此外巴里に發行せらるゝもの、週刊新聞、ランヅォルあり。一八九一年の創刊に屬し、ガランゾ、ダクサと云へる匿名を以て之を主宰し、ミルボー。ラザール及アモン等又之を助く。ガランの見に曰、吾人は戰を好むが故を以てのみ戰ふなり。決して未來に善良なる希望をおきて之を夢想するが故に戰ふには非ず。吾人何が故に未來の事を念として自ら惱まんや。又何故に子孫の事を慮りて自ら苦まんや。現在を樂む、既に此處に足る。あらゆる法律、規則、原理を外にして一に吾人感情、苦痛、怒り及本能の導くにまかするを以て足ると。曾て西班牙の一無政府黨員がクセルと云へる地に於て一の通行人が手袋をはめゐるきたりとて之を殺害したるが如き事あり。此時ランヅォルの同志は此兇徒に賛成の意を表して曰、クセルの同胞よ。善いかな、汝の爲せる事や。汝が怒りて害したる未知人は手套を用ゐたりき。汝は此徵しを目して彼を敵なりと見做し、遂に之を殺したるなり。汝は正しき事を爲したり。所謂開化人なる者は吾人を束縛し、已等が智識の高き、衣服、外貌の華奢新式なるを誇りて以て汝の目を迷はしめたるなり。かゝる詐僞的行爲を滅せよ、撲殺せよ。而して又其他を思ふ勿れ。未來の事は未來なり。汝の自由や、汝の幸福は智力上並に物質上に於て汝の上に立つ所の人々に反抗して無遠慮に鬪ふとによりて得らるべし。新世界に達するの道既に開けたり。故にすべてを伐ち、すべてを殺せよ。汝の能ふだけ殺せよ。神は必や汝の行爲を是認するに至らんと。

九〇年代初年の暴行

一八九二年頃より謀殺や、運動費の徴發運動は盛に行はれ、終に九二年に於てラヴァショル、九三年に於てウェーヤン、九四年に於てヘンリーの兇行あるに至りぬ。而して無政府黨員は當初斯の如きの蠻行を賞揚し、ラヴァショルの如きは詩文により、彫像に依て恰も聖徒の如くに尊拜せられけるが、ヴェーヤンの事あるや、政府の之を嚴罰せるに遇ひて一度頓挫し、ヘンリーの爆裂彈事件あるに及びては人々寧ろ之に向て恐怖の念を惹き起すに至り、理論的無政府主義者として目せらるべきエリゼー、レクルスの如き亦頗る温和の見を吐露して曰、無政府は人道的原理の絶頂に達せしものなり。すべて無政府主義者と自稱する者は其行動に於て善良にして且平穩なるべし。兇行を手段と見做す人々は却て吾人の敎理を汚す者なり。不幸にしてかゝる種類の人其吾人中に多くを占むるを見ると。又曰、若しかゝる蠻行を演じたる投彈者が無政府主義を廣布するの目的を以て之を爲したりとせば、そは甚しく誤れり。斯の如きの行は徒に世人をして吾人を嫌忌せしむるに過ぎざるのみと。

カルノー害に遭ふ

一八九四年六月、伊太利人たる無政府黨カゼリォなる者、佛國大統領カルノーを殺す。カルノーは自由主義を持する尊敬すべき人なりき。之を以て世の無政府黨を憎むの情勃發し、政府の之を窘逐する者嚴しかりき。之より先、一八八五年八月、クラポトキン及ガウシエー等大統領の恩命に遭ひて獄を出でけるがクラポトキンはカルノー暗殺の事起るに及び、之が主導者を以て目せられて、終に一時其身を隱晦せざるを得ざるに迫りたりき。

吾人は之より佛國無政府黨の主要なる人物に付て之が略傳を列記せむ。

エリゼー　レクルス

ジャン、ジャック、エリゼー、レクルスは一八三〇年三月十五日を以て佛國サント、フォア、ラ、グランドに生れぬ。新敎牧師の子なり。南佛のモントボーの新敎學校を卒へて後、伯林大學に遊びて地理學を研究し、時恰も一八四八年の革命時期に際せしより、彼は又喜で政治上社會上の言説を學び、五一年十二月二日のクーデターあるや佛國を去らざるを得ざるに迫り、由て英國に渡りて愛蘭土を旅行し、五二年より五七年に至るの間、北米、中米及コロムビヤ等を遊歷し、これより巴里に歸りて地理學の著述に從事せり。七〇年、巴里の獨逸軍の爲めに圍まるゝや、彼は國民兵となり、ナダルが卒ゆる氣球隊に屬して外部との交通を司りぬ。翌年三月十八日に於け

る暴動に際しては彼は國際黨の一員として其時發せられたる『民聲』にウエルサイユ廷に反對するの意見を載せ、由て四月五日、捕へられ、ブレストに拘留せられしもの七ヶ月、遂に此年十一月を以て流刑に處せられ、彼は此拘留の間悠々數學を己と共に捕はれたる人々に敎授しき。されど彼に對するこの宣告は時の學者、政治家より大なる非難を被り、殊にダーキン。ワレース。アムバーレー卿等力を盡して其減刑を佛國大統領に請ふに及びてチエルは七二年一月四日を以て流刑を追放に輕減したり。由てレクルスはルガノに至りしが幾くもなくして愛妻を喪ひ、遂に流浪して瑞西ジエネヴア湖畔に至り、幽居して專ら地理學と共產主義との攻究に從事せり。七九年又巴里に歸り、九二年ブリユスセル政科大學の地理學敎授に聘せられしが、翌年無政府黨の暴行に關係したりとの寃罪を被りて職を褫がれぬ。彼最もクラポトキンと友とし善し。蓋し此二人は共に無政府黨員にして而も有數の地理學者たり、其互に意氣の投合する者あるに由るならん。彼無政府主義に於て殊に一家言を有するに非ず。大概クラポトキンの說を奉ずと雖、而も亦往々にしてプルードンやバクーニンの集產主義に近似するの傾向あきに非ず。頗る

著名の地理學者

露國村闘(ミール)の農体民制の好模範たるを欽慕せり。彼品格高尙、友愛の情篤し。蓋し尋常一樣の地理學者に非ず。著はす所其名著『新一般地理學』及『土地及工業の生產』(一八八五)『富と貧と』『進化及革命』(第六版一八九一)及『余が同胞たる農民に告ぐ』(一八九四)等頗多し。彼一家妻子皆盡く無政府主義者あり。其同胞エリー、レクルスの如き有名なる人類學者にして又無政府黨員として名を知らる。

ルイズ、ミシエル

女性にして無政府主義者たるを以て著名なるルイズ、ミシエルは一八三六年四月二十日を以て佛國ブロンクール城に生れぬ。幼時祖父の城中に敎育を受けしが、後一八五〇年母と共に去て女敎師の試驗を受け、又自ら一村に私塾を開き、五六年、巴里の私立學校に轉じて頗る貧しき生活を送り、遂に百五十人の女生を有する一學校の所有主となることを得るに至れり。然るに彼女は七〇年九月四日の共和政府に向て反情を懷き、翌年五月、コムミユーンの暴動に加はりて奔走するに及び、捕へられて此年十二月十六日軍法會議により新カレドニヤに流さるゝの宣告を受け、居ること就んと十年、八〇年漸くにして放免せられぬ。彼女は之より歸りて無政府主義なる『社會革命』新聞に執筆したりしが、八三年三月九日に於ける巴里市中の

女記者

爆裂彈事件に關して六年の禁錮に處分せられ、獄にあること三年にして又赦されぬ。八八年一月二十二日、ルカスと稱する者彼女を害せんとして之を狙撃する者二回、爲にミシエルは其耳に微傷を負へり。彼女後、遂に倫敦に移り、『國際婦人覺醒會』なる女性團の長となり、機關新聞を發行して盛に女權擴張を主張せり。著書『新世界』(一八八八)、『懷往談』(一八八六)、『貧困』(一八八一)及び『占有せよ』等あり。彼女の理想時として頗る神秘的に傾き、能く歷史に通じたりしも經濟上の智識に乏しかりき。以爲、社會の改造は決して歷史的經濟的發展より起り來れる自然の必要なるにはあらで、正義の感情に源せる要求なり。是れ實に社會の無上大法なりと。身自らは無神論を確執したりしと雖、高雅温良にして實に獻牲熱血の情に富める女性にてありき。

ダニエル、サウランの無政府哲學

ミシエルの外に記すべきはダニエル、サウランなり。彼一八九三年を以て『無政府によれる秩序』なる一書を著して無政府主義の哲學的基礎を建設せんとせり。其人間論甚だ面白し。曰、通常人間には必や二つの要素あり。一は不變性にして時によりて變ずることなく人によりて變ることなし。一は變移性なり。前者は所謂『人間』と云ふ事にして、後者は『個人』なり。人間は個人の上に立ち、且つすべての個人を己の中に包含す。故に各個人の法は人間一般の法なり。社會の法則は必然吾人の中に存するなり。換言すれば吾人各個の主要なる事情を認識すと云ふ事は社會の主要なる形式を認識すると云ふ事なり。故に『我』の最高の自由に於て社會の最も完全なる形式は存するなり。何故に自然法なる者が笑ふべきまでに人間を制裁して己が命令を强行せんとするや。畢竟無政府は決して無秩序にはあらで是れ却て自然の秩序なり。我々個人を結合する眞の團体より共通の法律、抵抗すべからざるの道德が出で來るなり。吾人の本体其物は實に此道德と共に結合しつゝあるなりと。

アモン

アモンは社會學者として名あり。一八九三年巴里に於て『人間及無政府の學理』を著し、又『無政府黨の心理學』を編す。彼曰、無政府黨は自由ならんことを欲す。彼は法律及權力を憎惡する者なりと。彼は經濟問題よりも寧ろ政治問題に於て無政府主義を唱へたり。

シヤール、マラトー及其他

シヤール、マラトーは伊太利の舊貴族なり。巴里無政府黨中の文人なり。著書と

して『無政府の哲學』『基督教革命と社會革命』『都市勞働者對田舍勞働者』(一八八八)等あり。其一八九四年を以て巴里に刋行せられたる『共産制より無政府制に』と題する彼の黨の日記には理論家としてクラポトキン、グラーヴ等を、實行家としてはピニ、ラヴアショル、ヴエーヤン等の事を記しありと云ふ。此外エチエヴアン、ガラン(ランドオールの主筆)、セバスチアン、フオール(ペール、ペーナルの創刊者にして『機械主義及其結果』の著者)、ラザール、ミルボー、フランソア、グイ(『偏見及無政府』の著者)、エミール、ダルナウ(『將來の社會』其他の著者)及デユプラー等は皆佛國無政府黨の主なる者にして又盡くクラポトキンの主義綱領を認容する者なり。今日の佛國にありては又最早個人主義的無政府主義を唱ふる者なし。プルードンの無政府的集産主義に依るものアドルフ、バンツーあり。彼曩にリオンなる無政府主義の一新聞に主筆たりしが今は自ら無政府主義者を以て居らず。

羅典人種の諸國にありては佛國專ら其核となりて之が激論を四隣に波及せり。由て西班牙及伊太利二國を之に附しぬ。但し白耳義及瑞西は寧ろ獨逸無政府主義の勢力範圍にありと見るを適當とするを以て之を獨逸の部に附したり。

附一　西班牙に於ける無政府主義

バクーニンの勢力

此國に於ては七〇年代の初バクーニン派の勢力最も大にして、七三年までに其同志五万の多きに及び、彼等は大工業地を己が勢力の下にもち來さんとして運動せしが、政府は斷乎たる鎭壓法を施し、軍隊をして之を討滅せしめたりけるより、七四年には彼等が最後の本營となせるノイカルタゼナも遂に陷れられ、無政府黨の團体は盡く解散され、新聞は禁止され、是に於て秘密出版物多く出でゝ政府の虐壓と共に反政府黨の勢自ら屛息せり。

バルセロナ大會

八十年代に至りては此國の無政府黨は倫敦大會の決議に刺戟せられて又大に勃興し、彼等は一八八一年九月二十四日、五日の兩日を以て全國民の無政府黨大會をバルセロナに開きたり。會する者各地團体の代表者百四十八人に及び、彼等は一の綱領を定めて同盟の組織を規定し、所謂『國際勞働者同盟西班牙聯合會』なる者を形成し、集産主義を標榜して自主自由なる團体に依て成れる社會を望み、勞働者の政治上、經濟上及社會上に於ける束縛を解かんことを其目的とし、之れに達する手段としては腕力に依れる破壞を必要なりと認めたり。蓋しプルードンの精神を原理

セヴィラ大會

とせる者なり。此等勞働者の團体に工場部及地方部の二あり。前者は下は小集合より、上、村、州、國の大團体に至るまで、月會、四季會、年會等を有し、委員會之が實行機關たり。之に伴ふて後者の地方部あり。皆整然たる体制をなせり。此大會によりて撰ばれたる國民委員は此後大に活動して八三年九月二十四日より二十六日に至るまでセヰラに第二の大會を開き、會するもの二百五十四人、十の州團、二百の郡團、六三二の村團、總計五万の團員を有するに至れり。機關新聞レヴィスタ、ソシアル。マドリッドに發行せられ、一万の讀者を有す。此外數多の機關紙あり。これ等は皆公然團結せるものなるが、この外純然たる無政府黨員を以て成れる秘密結社あり。『黑手』と稱し、頗る兇暴を逞しうし、暗殺を行ひ、爲に此徒多く政府の捕縛誅戮する所となれり。但し八三年に於けるワレンシアの大會以來無政府黨の運動は稍、平和的となれり。これ一には政府の之を鎭壓せるにもよることならん。されど近時に至りて佛國の同志に倣ひ又活潑なる運動を試み、カムポス謀殺及バルセロナなるリセオ座に於ける兇行等の出來事あり、終に一八九七年八月に至りては西班牙の首相アントニオ、カノヴァス、デル、カスチロ。アンギオリロなる無政府黨員の手に射殺せらるゝに至りたり（兇行者はシカゴにて。絞罪に處せられたり）

附一　伊太利に於ける無政府主義

七〇年代に於ける無政府主義

伊太利の社會黨は七十年代の初年にありては又西班牙のと同じくバクーニンの說を採りしが、後所謂實行の主張（プロパガンダ、デル、ファート）を唱へ、一八七七年四月、無政府黨の一團體はベネヴェント近傍の二、三村を煽動して無政府を宣言したりしが、幾くもなくして軍隊の爲に鎭定せられ、カフィエロ。マラテスタ等の巨魁を初め、三十人捕へられけるが其中一人を除きては盡く放免せられたり。此後彼等又大に活動を試みたりしも政府の抑壓の爲に大事を爲すには至らざりき。

アミルカーレ、チプリアニ

アミルカーレ、チプリアニは七〇年代に於ける伊國無政府黨の錚々たる者なり。彼は一八四五年を以てリミニに生る。ガリバルヂーが一八六二年兵を率ひて羅馬に侵入するの時、又これより後クレータに於ける暴動に際し、彼は之等に加はりて共に奔走し、後巴里に至り、七一年のコムミューンの亂に與せしが、捕れられて死刑を宣告せられ、又減刑に遇ひてメメアに放逐せられ、一八七九年の赦を以て巴里に歸り、新聞『市民』の記者となり、其議論の過激なるを以て知られぬ。此の如くなり

けれぱ彼は佛國政府より一ケ月の禁錮に處せられ、又追放せられて伊太利に至り、其井ラ、フランサの和約後ガリバルヂーの運動に加盟したるが爲國家の治安を害する者なりとて罰を受け、之が爲彼の徒は怒りて暴動を起したりき。彼はされよりラヴェンナとフォルリにて並び代議士に撰ばれしが、二重の撰出は無効なりとて斥けられければ更に三度競爭して撰に中り、一八八七年四月三日、四度ラヴェンナの代議士として議院に列せり。彼は七十年代に於ては無政府主義者の主なる者にてありき。

チアスソの密會

八十年代に至りては此國の無政府黨は又稍活動して全くマルクス派の社會民主主義者と分裂し、一八八六年十二月、チアスソに於ける無政府黨の密會に於ては北部伊太利の市府を代表する十五人參列し、彼等は無政府的共産主義を唱へ、あらゆる公的秩序に反抗すべきことを決議せり。翌年、彼等は代表者としてカフイエロ及マラテスタ等を倫敦に派遣しぬ。

倫敦大會の反響

カルロ、カフィエロはバクーニンの舊友なり。自ら鉅富を散じて盡く之を無政府主義の擴張に投じぬ。彼の外メルリノ及マラテスタ又共に名を知らる。此等の諸人の倫敦會議より歸り來るや、大に温和社會黨を抗撃して實行を主張し、爲に八三年、マラテスタはフロレンツに捕へられ、其多數の同志と共に翌年二月一日を以て禁錮に處せられぬ。此時已に羅馬、フロレンツ、ネアペル等の各地に倫敦大會の綱領によれる數多の團体あり。頻に爆裂彈を準備せり。一八九四年、伊太利政府は嚴令を發してすべて無政府的煽動をなす者は其罪の輕重を問はず、之に禁錮及追放を命ずることを定めたり。然れども彼等は今日なほリヲルノを中心としてルーゴ、フォルリ、セゼナ等の各地に密會しつゝあり。晩近に於ける暗殺者の就んとすべては皆此等各地の伊太利人なり。彼等は又無政府的殖民地の實行を試み、南ブラジルに於てセシリアなる一村落を作り、こゝには自由の愛を公許し、結婚を廢し、すべて彼等の理想する所を實現せんとせり。此殖民地は成立三年よ及びたれども、勞働者の勞役せらるゝこと甚しくして而も其得る所の收入極めて尠少なりけるより、終に空しく失敗に了り、彼等の所謂理想なる者の畢竟空想に過ぎざる所以を示すに止りぬ。

英國皇太子(現王エドワード七世)の狙擊者シピドー、墺太利皇后の刺客リッケニ。カルノー大統領の暗殺者カゼリオ及ウムベルト王の謀殺者ブレッシ皆伊太利人なり

其二、獨逸に於ける無政府主義

一八七〇年代に於ては獨逸に於て多く無政府黨の運動を目擊せず。其中葉に至りてユラ聯合あり。頻に獨逸勞働者を己の境域に入れ、七六年七月來、一の獨逸文の機關紙『勞働者新聞』をベルンに發行せり、パウル、ブルース之を主宰す。（彼は一八七九年瑞西政府の爲め罰せられ、後倫敦に至りてマルクス及エンゲルス等と交り、その無政府主義をすてゝ八〇年又佛國に歸り、記者となれり。）但し其發布したる綱領には當時未だ政治的謀殺を嘉納するの辭をば包含せざりき。此國、有力なる社會民主黨あり。無政府主義の勢力を得ると能はざりしは主として其猛烈なる反對の之あるによれりとす。されば勞働者新聞の有力なる協働者たる文人ラインスドルフの如きが極力煽動を試みたるにも拘はらず、全獨逸を通じて其結果僅に二三の小團体を得たるに止まれり。事實斯の如くなるを以て新聞紙も亦自ら之を維持するの資力を得ず。一八七七年十月を以て勞働者新聞も空しく廢刊に歸し、七八年五月十一日に於てはヒューデル、續て六月二日に於てはノビリングの維廉皇帝の殺害を謀るありしかども、獨逸の輿論は却て大に此兇行に向て反情を懷くに至りたりしかば、ビスマークの對社會黨策も終には世の聲援を得るとを得て無政府主義は大に其勢力を失ひたりき。

アルツル、ミユールンベルガー

七十年代に當り、獨逸に於て熱心にプルードンを崇奉したる者あり。アルツル、ミユールンベルガル之なり。彼れは一八四七年の產、七三年醫師となり、深く、プルードンの學說を研究し、新聞雜誌によりて盛に之を鼓吹せり。彼は實に經濟上の完全なる自由を主張し、且つあらゆる政治的權力の打破を唱ふる理論的無政府主義者の一人なりき。

獨逸無政府黨の卒先者ハスセルマンの煽動

初めて獨逸無政府黨の組織に盡瘁したりしは實にハスセルマン及モストの力なり。キルヘルム、ハスセルマンは一八四四年九月二十五日を以てブレメンに生れ、地の中學を了へたる後、ハノーヴアルの諸藝學校に入り、これより化學士として工場に入り、技藝上に於て實地經驗を積み、又伯林及ゲッチンゲンに修學しぬ。後ラッサルの社會民主的言說に動かされて瑞西なる雜誌『社會民主黨』の記者に聘せられて之に趣き、續て『新社會民主黨』の記者となりぬ。七十年代に至りて彼は己の撰擧區たるエルバーフエルド、バルメンに己自身の機關『赤旗』を發行して激烈なる議論を吐き、又八〇年に於けるウエデンの大會に出席して大に煽動を試みぬ。是に於て彼は又ビスマークの社會黨鎮壓法に觸れて機關紙の沒收に遇ひ、己は陰謀を

ヨハン、モスト

倫敦に於ける彼の運動

試みて其屬する社會民主黨に反對したりとの廉を以て之が除名する所となり終に去て北米に渡航せり。

ヨハン、モストは一八四六年二月五日を以てアウグスブルグに生れぬ。一小吏の子なり。夙に製本師となりて墺太利、北伊太利及瑞西を旅行せしが其間チウリヒにて國際黨と相知りて熱心に之に歸依し、由て一八六九年夏、維也納に於て一ヶ月の拘留に處せられ、翌年又他の同志と共に五年の重禁錮に處せられけるが、居ること一二ケ月にして時の内閣の更迭により放免されて墺太利の國境外に追はれ、それより七年の間獨逸にありて盛に運動し、『ヘムニッツ自由新聞』『マインツの『南獨民聲』及『ベルリン自由新聞』等の記者となり、二度帝國議會に列せり。然るに一八七八年、無政府黨二回の皇帝謀殺ありたる爲、時のビスマークの内閣は其鎭壓策の法案をして通過せしめんが爲に之を解散するに及びて、彼は撰擧運動に失敗し、之に加ふるに政府案は終に難なく議會の協賛を經るに至りけるより、彼は今や猛然從來の政治的改革論を擲ちて革命に盡力を注がんことを主張し、爲に伯林を追はれて翌七九年春倫敦に渡り、自由新聞(フライハイト)の主筆となり、盛に武装的革命、秘密煽動及暗殺を唱道し、忽にして地の『社會民主黨勞働者倶樂部』の千人を己の旗下に歸屬せしめ、彼はなほ其徒を集めて『合衆社會黨』なる一團体を組織し、其本部を倫敦として茲に七人の中央委員をおき、之をして外國に於ける同志と氣脈を通ぜしめぬ。此公然たる結社の外彼はなほ秘密なる『遊説者倶樂部』を作り、之をして一般革命の準備にあづからしむることとせり。

社會民主黨とモスト

除名せらる

是に於て彼が社會民主黨に對する反抗は八〇年に於けるウエデンの會議に於て大に非難を被り、終に左の如く決議せらるゝに至れり。曰『ヨハン、モストは多年我黨が法則として遵奉し來れる原理に反對したり。彼は己の勢力を擴張せんことを計り、如何なる種類の者たるを問はず、獨逸社會民主黨に對抗する團体に加盟したり。最後に彼は尊敬すべきあらゆる吾人の法規に背反する行爲をなしたり。由て我大會は彼と向後何等の協同事業をも營まざるべく、彼を獨逸社會主義的勞働者團より除名すべきを公言す』と。

自由新聞(フライハイト)は今や全く無政府主義を其旗幟として掲ぐるに至り、獨逸の本國にては之を購讀する者漸くにして增加し、二百名位を以て成れる十余の小團体此國に組織せられたり。モストの論に曰、土地並に固定、流動資本はすべて全社會の所有た

彼の社會主義

暴行を勸奬す

るべし。各個人は皆自由に生産團体を爲すが故に、土地資本は皆必や各個人の爲すがまゝならざるべからず。生産されたる物はすべて之を生ぜる体制に附屬すべきものなり。すべて貨物が之が製作に要する勞働の量に從ひて價格を持つことの爲には社會は須く如何ほどの勞働の各の貨物に對して用ゐられたるかを測定すべき一の事務局を設置するを要す。此處にて評定されし價格は之を變ずることを許さず。何となれば消費者も亦購買の目的を以て生産者と同樣に自由なる團体を組織すればなり。此社會にありては婦人は男子と同等の權利を有すべし。結婚は全く各人の意のまに〳〵行はれ又解かれ得べし。兒童の教育は自由なる團体によりて扱はるべし。法律なる者なし。社會の判決が事々に之あるべきのみと。彼は此外『科學的革命戰術及び爆裂彈投彈者』なる一書を草して細密に爆發物を投ずべき場所を示して曰、教會に、宮殿に、舞踏室に及宴會室にと。此書又盛に毒を警官や、探偵や、反間者に向て用ゐるべきことを說けり。一八八一年三月、ツアール、アレキサンドル二世が虛無黨の兇手に斃れ玉ふの慘事あるや、モストは其機關に於て之に摸倣すべきことを說くに及びて忽にして捕へられて十六ヶ月の禁獄に處

八一年に於ける倫敦大會及其決議

分せられぬ。此後八二年、自由新聞は瑞西にて發刊せられしが、モストの赦されて出づるに及び彼と共に移りて紐育に趣けり。

是より先、モストは虛無産の亡命客ハルトマンと共に謀りて、國際革命黨大會を召集するの意あり。既に八一年四月、巴里に於て之が準備會あり。國會的社會黨を排し、社會に對する戰に向ては飛檄や、危險物の如きあらゆる方法を用ゐるの毫も問ふ所に非ざるを決したるが、續て七月十四日より十九日に至るまで所謂倫敦大會なる者あり。各國二三百の團体を代表する四十人の代表者來り列し、議決して曰、世界各國の全革命黨は社會革命の目的を以て國際社會革命的勞働者同盟を組織す。我黨は本部を倫敦に置き、支部委員を巴里、ジュネーヴ及び紐育におき、同志のある所、之に支團及三人の實行委員をおくべし。一國の委員は其同志を統率し、又中央委員と交通して規則正しく結合一致し、毒藥武器を求むる爲め、又地雷を仕かくる地片を求めん爲め預め金錢を貯ふべし。すべて君主、大臣、貴族、僧侶有力なる資本家及其他の掠奪者を害する爲めには如何なる方法を用ゆるも可なり。故に此目的によりて須く化學を學び、飛道具を備へんことを努むべし。倫敦中央委員

九十年代に於ける獨逸無政府黨

の外、國際的に連結する實行委員及通信局を設くべし。由て以て中央委員の決議を實行し、又其通信を絶たざらんことを計ると。此決議の勢力ありしと當時頻々として謀殺兇行の行はれたりしを見て知るべし。例へば獨逸に於て警官ルムプの害せられたるが如き又其一例なり。モスト既に北米に向て去ると雖、獨逸無政府黨は尙ほ依然として倫敦を其の根據地とし、こゝに二つの倶樂部をわけり。一はモスト派にして二百ばかりの團体あり、自由新聞を以て其機關とし、一はアウトノミーと稱して一百ばかりの同志あり、一八八六年十一月來、新聞アウトノミーを發行す。ポイケルト及リンケ其記者たり。二人は八四年より六年に至るまで倫敦のレベル新聞に執筆せし者なり。彼等は主としてクラポトキンの說を採用し、黨の遊說に付ては寧ろ地方分權を主とするの方針を採れり。

九十年代の初めに當りて、獨逸本國の無政府黨は稍其活動を試み、『獨立黨』と稱する一團体起れり。之は印刷師ウエルネル及ヰルドベルガー等の下に屬して革命的實行、個人の自主等を唱へ、次第に極端に奔り、終に全く純乎たる無政府黨となれり。其新運動を指導するはグスターフ、ランダウエルと稱する青年博言學者にして此人獨立黨の機關及伯林なる『社會黨』新聞を引卒せり。但し後ヰルドベルガーは彼と見を異にしたるが爲め去れり。『社會黨』新聞の記事は概して佛國の『反逆』新聞と相似、多くはクラポトキン及レクルスの反逆新聞に載せし文の燒き直しに過ぎざりき。其發行高三千三百部、內容は意見區々として統一せず。其記者には或はニーチエ流の個人主義を唱ふるあり、或ハパスタルドの無政府主義を皷吹するものもありき。

カプリヴイ内閣の無政府黨鎭壓案

而して此等の徒に向てはカプリヴィの內閣は寧ろ無頓着を以て居らんとせしかども、カルノー大統領の非命の死を遂ぐるに及びてや、獨逸政府は時の輿論に動かされ、殊にオイレンブルグ伯の努力により無政府黨撲滅案を草して之を帝國議會に諮詢するに至れり。然るに該法案の未だ議會に審議せられつゝありし間に、カプリヴイに續て起れるホーヘンローエ內閣の警官及撿事等は極力無政府黨を驅除するの實行に取りかゝり、忽にして『社會黨』新聞の發行を禁止し、又之に關係したりし人々を捕縛しけるより、伯林なるランダウエル、ヴィエゼ等の無政府黨は大に其勢力を減殺せられ、其運動の範圍は狹められ、只僅に生産及消費組合を組織するを以て彼等の最終目的となすに止まるが如きに至りたり。

オイゲン、デューリング

盲博士

左に擧ぐる所の諸人は獨逸に於ける無政府主義者として目せらるべき知名の士なり。

デューリング、一八三二年一月十二日を以て伯林に生る。其先は瑞典人なり。幼時キュールンの中學に入り、又放任主義にして極めてルーソーの教育論を尊崇せる父の訓育を蒙る。彼最も天文學及數學を好みしが、父の早く卒するに及びて轉じて法律學を修め、一八五三年より六年に至る迄伯林大學にあり。後司法官となりたりしが眼病の爲幾くもなくして之を辭し、六一年伯林大學の哲學博士に推されぬ。翌年ポムメルンの一女子を娶る。夫人淑德あり、能く失明せる夫を補助しぬ。デューリングの著述は皆夫人の筆記する所なり。六四年、彼伯林大學の私教授として哲學、史學及經濟學等を講じたるが、其勤續十ケ年に及ぶも大學は尚ほ彼を教授とせるの樣なかりしより心頗る平ならず、由て屢〻不滿の鋒先を教授連に投じて之を非難し、七五年に於ては『國民經濟學及社會主義の批評的歷史』を著してワグネル教授を初め諸の學者が互に朋黨を構へて相鬩ぐの風を罵倒し、又教授ヘルムホルツがエネルギー不滅則を發明したりと稱せるを捉へて、彼以前十九世紀のガリ

レオ（デューリングは自らかく云へり）たるロバート、マイエルの既に此事を論證したるあるを述べて熾に大物理學者の不德を鳴らしたりしかば、教授連は又大にデューリングと爭ひ、遂に時の內閣をして彼の職を褫奪せしむるに至りたり（七七年七月七日）。こは少しく酷なりき。されどデューリングも亦其盲目にして當時の事物に疎かりしが爲め全く誤解せるなりき。何となればヘルムホルツは後マイエルの己が先驅者なりしを發見するに及びてや、忽ちにして己が功勞を打ち棄てゝ彼を崇揚したりければなり。デューリングはこれより伯林附近の小市に住して專ら自然科學及文學、歷史を研究し、又著述に從事したるが、此事ありてより益〻人を信用するの念乏しくなり、何處にも敵あるが如く感じて自ら第一に大學教授、第二に社會民主黨、第三に猶太人は皆これ余が敵人なりと云ひたり。其自敘傳の末に書するの言に曰、要するに余の敵人なる者は善良なる人間の皆敵とする所の者に外ならずと。

デューリングの哲學は頗るコントの實理哲學に似て又之と同じく神學及純正哲學を貶斥したり。彼はフォイエルバッハの如くに唯覺論を唱へ、基督教を排し、又ツォル

べの如くに進化論を斥け、幸福の理想を以て世界の目的とし、快樂論的樂天主義を倫理の本質なりとせり。彼はコントと共に人の同情的本能の中、既に善の素質の之あるを信じ、以爲、凡ゆる感情の中、此感情ほど人文の進歩に於て著大なる發展をなせし者は恐くは之あらざるべし。但此感情、此同情的本能は決して吾人自身の個性を羈軛し、又は之を殺滅せしむる者に非ず。否、人の倫理的發展てふものは寧ろ其個人化及社會化に於て存するなり。此二つの者は一見背反するが如く見ゆと雖、必や相離るべからざる者なり。何となれば各個性の完全なる發展は之よりも一層進歩したる社會の中にありて初めて爲し遂げらるべき者たればなり。故に苟くも社會上の關係にして極めて不完全なりしとせんか、吾人の自由なる殊別の發展は之が爲めに妨げらるゝに至るを免れず。今日の國家實に然り。これ其本質に於て排自由及束縛强制を以て成立せるによるなり。其吾人の理想する所と相去る甚遠きを見るべし。夫れ自由なる社會は自由なる結合によりて成れる體制ありて初めて生ず。個性と團結との共に欲くべからざる所以、之によりて明なるに非ずやと。彼の説の世の所謂社會主義と異る所は其社會の發展を悲觀せざるの点にあり。彼は決してカール、マルクスの云ふが如くに將來の社會を以て惡を増し來るものなりとはせで、却て善が徐々に積み重るものなりと信じたり。彼は實に樂天家にてありしなり。社會問題に關しては彼は一八六五年『資本及勞力』を著し又マルクス及ラッサル等の社會民主黨に反對し、すべて社會的運動の根本は勞働者の聯合によらざるべからざるを主張し、第一の目的として勞銀を高め、勞働時間を減じ、其秩序を確正し、一切の勞働事情を改善せんことを唱へたり。彼の説は當時ヨハン、モスト等過激なる社會黨の歡迎する所となり、由て其著書も頗る彼等の間に研究せられければ、社會民主黨のエンゲルスはデューリングの此勢力に反抗せんとて其黨勞働者の一機關新聞に己が論文を載せ、以て彼の學説を駁撃したり（デューリングの此項ヒユフデング近世哲學史第二卷による。）

モーリツ、フォン、エギデ

モーリツ、フォン、エギデは一八四七年八月二十日を以てマインツに生れぬ。初め普魯西の陸軍に入りて大尉に昇りしが、後專ら學術の研鑽に一生を委ね、終に宣教師となりぬ。彼獨斷を有せざる一新宗教を建設せんことを案じて『唯一の基督教』なる一書を著し、其哲學的基礎として道德及智識の自覺なる者をおけり。彼は純然

たる理論的無政府主義者なり。自ら云て曰、無政府主義の最大なる誤りは之が敵に向て用ゆるその名稱にありと。由て無政府黨の中に鐵血無政府黨及高貴無政府黨の二つを區別して前者を非難し、後者をのみ推せり。曰、君主政てふ觀念其物は決して個人の獨立及自主の意識と矛盾する者に非ず。元來君主は人民の元首に位すと雖、もと人民に屬し、出來る丈け人民と直接の交通をなす者なり。彼等は專制的の君主にも、立憲的の攝政にもあらずして只一の人格のみ。己のみ。其己の意志を發表し得るの權利に至ては、毫も他の人々と異る所あるなし。君主と人民との間、曖昧裡に强ゆられたるが如き職責の毫も存するなきなり。王位や、王冠や之れ實に概念のみ。王冠を戴ける實在の之あるにあらず。王も諸侯も決して實在せるにあらず。彼等は人民の責任ある首領たるに止まる。今の君主即王冠の奴隷は人民の委任によりて之を戴けるに止まる云々。エギデの著書『唯一の基督敎』は一八九三年を以て伯林に出版せられたり。

獨逸に於ける個人主義的無政府主義を代表する者としてジョン、ヘンリー、マッケーあり。彼一八九一年『無政府黨、十九世紀の末造に於ける文化の描寫』なる一書を

著しぬ。頗るベルツカの『自由卿』と類似する者あり。別に新機軸を出したる者に非ずと雖、其個人主義的無政府主義を共產主義的無政府主義より分別する所注目するに足る者あり。

マッケーは富豪の子、一八六四年二月六日を以てスコットランドのグリーノックに生れぬ。少時早く獨逸に移住し、キール。ライプチッヒ。伯林等の諸大學に遊びて哲學、美術史及文學史を究め、八九年倫敦に趣き、これより葡萄牙、佛蘭西等の各國を歷遊して社會主義の運動を學知し、此年『嵐』と題する一書をものして彼が詩文を載せぬ。同年又『無政府黨』の稿を起し、九一年其羅馬に滯在せし時漸く稿を脫して之を公にしぬ。彼は此書に於て無政府主義と共產主義の世界觀の全然融和せらるべからざる者なると、暴力的實行の無謀にして有害なると及び國家によりて社會問題を解決せんとするの不可能なることを證明せりと云ふ。

共產主義及國家の權力によりて、社會問題を解釋せんとするもの丶妄を笑ふの點に於てはマッケーと等しく、又其道德を排し、純然たる利己主義を立して我性を主張するの點に於てはマクス、スチルネルと等しく、輓近の思想界に於て一種特異の

光彩を放ちつゝある者をニイチエの哲學とす。吾人は之より少しく彼の主張に付て觀察する所あらんと欲す。

ニイチエの學説は決してそが社會改革の動機より出でたる者に非ずして純然たる理論上より立せられたる者なり。此點に於ては個人主義者たるマクス、スチルネルと全く其立脚地を一にす。スチルネルにありては個体的人間は哲學の出發點及歸着點にして又實に人生の問題に向て最終最眞の解答を與ふる者なりと云ひ、所謂幸福なる者は一に各個人が己を以てすべて己の思意及行爲の中心及終極點となすによりて初めて生ずる者なりとせり。彼は即我性(アイゲンハイト)によりて人の絶對的自由を立せり。然れども若し弱き個性が強きものによりて壓せられ、即暴力が主我の念に打ち勝ちたる場合に於ては如何にせんと欲するか、彼の學説は此處に至りて最早其以上を説明すること能はざるなり。ニイチエは更に此結論を推しひろめたり。彼は强者によりて弱者を壓せんと欲す。强者の寡人的支配を欲す。即權力意志を高めて之を世界の根本原理たらしめんと欲するなり。彼の主張の本く所はショーペンハウエルにあり、されど彼はダンチヒの哲學者とは異りて敢

て其所謂生活意志を否認せんとはせず、否寧ろ却て之を以て世界に於ける唯一の重要物なりと見做し、ショーペンハウエルの意志説とダーキンの進化論とを調味して一の世界進化論を構成し、權力意志を以て創造的の原理とし、おれが所謂適者生存、優勝劣敗の作用によりて常に弱き者、卑しき者を壓服し、漸次秀越せる强き個人を得るに至るべき所以を説きたり。是に於てか個人主義は自然主義と合致して自然主義的個人主義なる者を生ぜり。彼は又民主政及社會主義を斥け、自我のみを主として一切基督教を否認し、眞の文化の意味は天才を作り、創作的の人と作るにありとせり。されば彼が倫理説の預想とする所は即ダーキンの進化論にあり。彼は動物的本能よりして道德的の動機を導き出さんとはしたるなり。ニイチエは屢〻自家哲學の立脚地を變じたりと云ふと雖、要するに其主旨とする所は以上言ふが如きに過ぎず。

ニイチエ其所謂權力意志に付て云て曰、生活のある所にのみ意志存す。されどそは生活意志にはあらで權力意志なり。生者が生活それ自らよりも重ざる所の者多しと雖、先づ主として指を權力意志に屈せざるべからざるなり。………善にても、

惡にても、創造者たるべき者は第一に破壞者となりて價ある者を破碎せざるべからず。故に最高の惡も亦最高の善に屬する也。而して此最高の善は實に創造的の者なりと（ツアラツストラ）又曰、『人間は獸類と超人とを連結する一の綱なり。地獄の上に張れる綱なり。あゝ、危險なる綱渡り、危險なる路上、危險なる後ろ見、危險なる佇立よ。人間の偉大なる所は彼が一の橋にして決して目的たるに非ざることに存す。其愛せらるべき所は彼が昇上にして又降下なりてふことに於て存す』『人間は恰も樹木の如し。高く聳ゆるに至らんとすればする程根を地下に深く、闇の中に、則惡の中に張らざるべからず』『汝等善事とは戰爭すらも正しとするものを指すと云ふか。我汝等に告げん、善き戰爭は何事をも正しとする者なり。戰爭と勇氣とは博愛よりも却て大事をなせり。今日まで不幸なる者を救ひたるは汝等の同情ならで却て勇敢なり。汝等何をか善と云ふと問ふか、勇敢なるこそ是れ即善なれ。善とは美はしくして且つ人を感動せしむべきものなりと云ふが如きは畢竟是れ乙女子の言なり』（以上皆ツアラツストラ）心と身とに於てあらゆる弱点を修正し、以て少數非凡の超人間を作るに至らんとするは是れ實にニイチエが人生に對するの希望なり。

同情を排す

されば彼はショーペンハウエルと反對に博愛や、同情の却て人をして虛弱ならしむる所以を固執して極力之か排斥に努め、以爲、世に同情者よりも大なる愚物之あらんや。又同情者の愚昧よりも世の苦痛を釀せし者之あらんや。同情の範圍を超越せざる仁人は憫むべき輩なり。大なる愛は總べて同情を超絕する者なり。何となれば吾人の活精神は同情の中には全く沈惑すべく、之が膨脹するにつれて徒に其愚さ加減を增すのみに過ぎざるものなればなり。余は博愛をば勸めず、寧ろ近者より遠ざかり、最も遠き者を愛せんことを勸む。遠者及未來者に對するの愛は近者に對するの愛よりも遙ゝ高し。事と幻とを愛するは人を愛するよりも高しと（ツアラツストラ）。ニイチエが社會主義を貶するは實に此根本思想を有するが故に出づ。曰『勞働問題なる者あり。是れ實に本能の脫種を之が生命となすもの、あらゆる今日の愚の源なり』と（ギユッツエンデムメルング）。

彼の社會主義論

彼が社會主義と題して全集の第十一卷に載する所に曰、

（二）實際に於て個人の文化の增長と共に苦痛と欲乏とが增し來るなり。而して其下層にあるものは最も鈍愚なる者なり。彼等の境遇を改善すると云ふこと

は只彼等をして其苦みに堪ゆべからしむるに至るべしと云ふに外ならず。

(二)人若し各自の幸福ならで、人類一般の目的を追求しつゝある者なりとせば、社會主義が求むる如き秩序の事情に於て果して從來に於て不秩序の中に大結果の得られたりしと同樣なる大なる成果の得らるゝに至るべきやは疑はしき事なり。思ふに偉人及偉業は自由なる荒野の中に於て初めて生長す。而して人類の生ぜんとする目的は一に此偉人及偉業に在て存するなり。

(三)畧

(四)公平及正義の意の如何にして起りたる者なりやを考へ來らば、吾人は必や正義を以て其根本原理となせる社會主義者と自ら反對せざるを得ざるに至るべきを發見せむ。自然の有樣にては或一人に向て正なると又他の者に向ても正なりてふヿなし。之を決定するは一に權力にあり。社會主義者は全然社會を崩壞せんとするの限りに於て權力に訴ふ。將來の秩序の代表者と舊き秩序の代表者とが爭鬪したるの時、而して此二つの權力が相等しきか、又は同じ位の强さを有する時には、此處に初めて契約なる者を生ず。正義は實に此契約てふ原理の上に生せしものなり。人權なるものもと之あるに非ざるなり。

(五)一の賤しき勞働者の富める工場主に向て、貴下は貴下の幸福を負ふべき理なしと云ふならばそは正し。只之に付て何物かを彼に請求せんとするは誤れり。勞働者の幸福に向ても、將た不幸ょ向ても誰人も之が責を負ふべき者に非ず。

(六)地上の福祉は現在の諸制度を變更するヿによりて增さるべき者に非ずして只夫れ陰暗なる、虛弱なる不肝要の素質を亡ぼすヿによりて得らるべし。社會主義者にして苟くも多くの惡しき素質を有しつゝある限り、彼等は如何にしたりとて常に却て地上の幸福を殺減しつゝあるを免れざるなり。

(七)世の快樂てふものは、傳習や、一定の風俗や、すべて制限束縛のあるに於てのみ却て存するなり。然るに社會主義者は此慣習風俗の制限を破る所のあらゆる權力と結べり。而も組織的の新しき能力は未だ之を彼等に於て見るべからざるなり。

無政府主義及民主主義を斥く

(八)社會主義の一能事は之が廣く及ぼす所の其激勵鼓舞にあり。ゐれ其最卑の階級にまでも、實際的哲學的の知見を鼓吹するが故による。此點に於て社會主義は確に一精神力の源泉なり。

ニイチェ以爲、眞の文化の意味は人間の不平等によりて初めて之を得べきものなり。故に平等の原理を以て何事にも適用んせとするは大なる誤あり。人をして小ならしむるものなり。之を墮落に導く者ありと。由て平等の觀念を以て其根本基礎とせる一切の自由主義、基督教、社會黨及無政府黨に反對せり。其民主政に付て語る所に云ふ。民主政は思想の獨立、生活の法及事業の獨立等すべて出來る丈け多くの獨立を作り、且つ之を與へざるべからず。之が爲には無資産者及び富者には政治上の投票權を許さゞることを要す。即此二の階級をば絕滅せしめんやう絕へず力を致し、且つ同時に政治團体の組織を目的とするが如きあらゆる事を妨げざるべからず。何となれば獨立の三大敵は、即此無産者、富者及政黨の三つの者にあればなり。余は將來の民主政に付て斯く云ふ。若し夫れ、今日の民主政の何物たるかを觀察せんか、其舊來の政治の形式と異る所は、只新しき馬を用ゐて歩むと云ふの一事に過ぎず。道路は同じくもとの道路にして、車輪も亦毫も其以前と異る所あるなし。民福の此乘り物によりて實際上の危險果して滅ずることを得べきか、これ見ものなりと。又曰、近世の民主政は國家墮落の歷史的形式のみと。彼によれば萬物に於て價値あるものは純乎たる個人主義のみ。國民、國家、大學、工業、貿易等のこと、皆悉く唾棄せられざるなし。

文化と國家とは反比例す

彼は文化と國家とは、互に相反對するものなりとして云て曰、政治の病にかゝる時は國民は却て若らぎ來り、曾て權力を求め、又之を主張するの際に於て喪ひたりし彼の精神を恢復すべし。文化の最高潮に達したる時、これ乃政治的に病弱したるの時代ありと。(メンシユリッヘス、アルツーメンシユリッヘス) 又曰、何人と雖、己れが有するよりも多くを拂ふこと能はず。各個人に於て然り。全國民に於て又然り。人々若し權力の爲、大なる政治の爲、經濟、交通、國會、軍事の爲に其身を委ぬるとせば、即己が有する理解力、熱心、意志、克己の凡てを此方面の事に捧ぐとせば、必や他の方面に於て缺陷の生ずるに至るを免れざるは物の數なり。文化と國家と、彼等は實に相反對する者なり。文化國と云ふが如き抑ゝ近世の一空想のみ。二者の一は必や他の一を亡ぼすに依

無政府を主張す

て生存し、繁榮す。凡て文化の大なる時代は是政治的墮落の時、大文化は不政治的なり。否寧ろ排政治的なりと。ギユツツエンデムメルングすべて吾人の政治上の學説は獨逸帝國てふことはもとより其國家の觀念とゝもに盡く墮落より起り來る必然の歸決なり。デカーダンスは今や知らず〳〵の間に各科學にまでも其影響を及ぼして之を動かせり。吾人の所謂社會主義者なるものは即墮落の徒のみ。ハーバート、スペンサー亦其一人なり。されば彼が博愛主義の勝利に於て幾分の希望をおくが故によるとはされ又彼の公言する所なり。彼既に文化の意味と以て少數の超人を産出するにありとし、爾餘の儕輩は只一に之を到達するの器具として存在しつゝあるに過ぎずとし、終に文化と國家との相矛盾するを説くには至りたり。其終に無政府を論証するに至るべきは論理自然の歸結なりと云ふべし。請ふ、尙は暫く彼の言辭に就て之を觀む。

彼大政治及其損失と題する項に於て述べて曰、一國民が其政治上の飛躍に於て費す所の個人の精力及勞力の額は實に驚くべき者にして、之が爲め徒に精神上の貧乏、困憊に陷り、大なる熱中專心を要すべき事業の成功力を殺減するに至るのみ。此全体の繁榮光輝は會〻以て諸外國をして之が前に畏怖せしめ、通商貿易に於て自ら頗る収利する所之あるに至るべきも、若し爲に從來地上に茂りつゝありし高貴優秀なる勢よき植物を之が犧牲に供するに至るとせば、何の償ふ所か之あらんやと。即國家は出來るだけ少かれと云ひ、今日の時代は正に浪費の時なり。精神てふ最貴の者を空しく費しつゝあればなりと斷言せり。又曰、完全なる國家の中に生存すべきは、獨り虛弱なる人々にあり。故に賢人は決してかゝる國家の創造に必要なるべき者に非ず。抑〻最高の智慧と最溫の人情とは之を一個の人格の中に結合すると不可能なり。賢人は寧ろ善を超絕す。天才と理想國との全く相矛盾する所以なりと。國家は個人を保護せんが爲めの巧なる一制度なり。されど之を改正するに過ぎなば爲めに終には個人を弱め、却て之を解弛するに至らん。故に國家本來の目的は根本的に虛望なりと云ふべし。國家止みて始めて人間初まる。國家止みて始めて虹霓と超人の橋との見るべきに非ずや。希臘人は古代に於ける國馬鹿なりき。不幸にして此種のもの今日の國民に於て多く之を見るとは又彼の叫ぶ所なり。彼は無政府黨を排斥して措かざりしと雖、自家の歸着す

る所は又等しく無政府主義なり。極端なる個人主義なり。非社會主義なり。即多數實行的無政府黨が絕對的の平等を標榜し、即社會主義により、博愛同情によりて以て其理想の實現を期したるに、彼は全く個人主義により、非平等により、利己主義により、排道德の動機によりて一切の國家組織を否認し、以て鍛煉淘汰の間に二三の超人間を作るに至らんことを其持論とはなせるなり。されば無政府主義には社會主義的及個人主義的の二種類なり。プルードン。バクーニン及びモスト等の集產主義及クラポトキン等の共產主義は共に前者に屬し、而してマクス、スチルネル。ニイチエ。マッケー輩の無政府論は實に後者に屬す。

ニイチエの哲學は實に彼自身なり。彼の性格を知るに於て其言ふ所又頗る之を解し易し。彼は一八四四年十月十五日を以リユッツエンに生れぬ。リユッツエンはグスターフ、アドルフの古戰場なり。彼其先は波蘭の貴族なり。幼時父を喪ひ、母の撫育に依てボン大學に入り、後ライプチヒに轉じ、二十二歳の時新聞記者となりしが、後二年即一八六九年聘せられてバゼル大學の敎授となり、又ドクトルの學位をライプチヒ大學より受けぬ。バーゼルに赴きてより、彼はリヒャード、ワグネルと友とし善し。七六年頃より彼は痛く其健康を損し、爾來苦悶の間に著述に從事し、且つ地を各方に轉じて療養しぬ。著す所尠からず。八九年遂に狂を發し、一昨年八月二十五日を以て逝去せり。彼をして病的ならしめたる所以に就き彼の姉妹の親しく記する所なりと云ふによれば、第一に其境遇の劇變とすべきは實に彼が五歳の時に於て父を喪ひたりし事にあり。當時之が彼の幼な心に與へたりし惱みは念々彼を刺戟し、爾來一身の行動は專ら自己の意想によりて定めらるゝととなりて、彼は己が責任の輕からざるを思ふものから、其學窓にあるや非常なる勉强をなしたり。之れ確に彼の健康を害したりき。第二には彼がバーゼル大學に敎鞭を採るに至りたりしは未だ大學定規の試驗を脩了せざりし彼二十四歳の一少年に向ひては素より異數の光榮たりしを疑はずと雖、これ彼の身体にとりては決して幸福なる者なりとは云ふを得ざりき。何となれば彼は此過重なる職責を果さんが爲めに、日夕其精神を勞するなと一方ならざりければなり。一八七一年、普佛戰爭の起るに及び、彼は看護夫として從軍しけるが、幾何もなくして眼病に罹り、續て腦病を釀し、彼の父も亦腦病の爲に死したり 七六年遂に大學の講座を辭せざるを得ざるに

ヘンリック、イブセン

至り、これより毎年夏には、オーバー、エンガデンにあり、冬にはリヴィエラに轉地して其病を療養せり。されど苦痛は次第に增加して、彼が強き意志も耐忍も之に堪へ難きまでとなり、加ふるに其兩眼又就んと盲したり。彼が等身の著述は實にかゝる煩悶の間に於て筆せらるゝ所なり。

其文を讀で之が筆者の人と爲りを懷ふ、往々にして當らざるとあり。ニイチェの如き其一人なり。彼極めて靜に物語り、容貌又頗る平和に、毫も其風采の常人と異るものなるを見ず。其人と應接するの丁寧にして穩順、婦女子の如くなる、到底人をして之が熱火の如きの思想家たるを想はしめざりしと云ふ。

因に記す、スタムラルの『無政府主義の學說』には那威の文豪ヘンリック、イブセンを以て理論的無政府主義者の中に列せりと云ふ。こは彼が曾て丁抹の文人ゲオルグ、ブランデスに與へたる書中に左の如き言をなしたるによる。曰、國家は個人の咀ふ所なり。之を沒却せざる可からず。余は革命を事とせん。人々須く國家の觀念を葬り去れよ。自思、自意之ぞ實に自由に到るの始なりと。イブセン深くコペンハーゲンの哲學者キエルケガールドの極端なる個人主義に感化せらる。其劇詩ブランドの如き會ゝ以て其一端をトするに足る。蓋しブランドは猛烈なる主我的の一人物也（北歐の文學哲學、就中キエルケガールド。イブセン及トルストイの諸家に就ては研究すべき者甚多し。されど今は其閑を得ず。他日の好機を待たんのみ。）

附一　墺太利、匈牙利に於ける無政府主義

ポイケルトの勢力感化

墺太利に於ては其社會黨の進退動靜全く獨逸に於ける運動と相伴へり。されば七〇年代の末年、モストが勢力を振ひつゝありし頃に有ては『自由』新聞盛に輸入せられて無政府主義の秘密團体又數多組織せられたり。其運動の首導者をヨゼフ、ポイケルトとす。此人絕倫の材幹とエネルギーとなり。實行の主張を遊說して其周圍に偉大なる感化を及ぼし、由てペストの『社會黨』新聞の如きは兇行主義、暴力鐵血による革命を唱へ、本能の絕對的自由を叫び、又其地のラヂカル新聞も己が綱領として寂滅を揭げたり。此外維也納に無政府黨の新聞『將來』『デル ニッケ、リステ』あり。ライヘンベルグに『過激黨』あり。プラーグに『社會黨』及『共產黨』あり。レムベルグに『プラカ』、クラカウに『ロボトニック』あり。外國よりは瑞西より『プルツェドスヰット』、英國よりモストの『自由』新聞入り來り、八十年代となりてはペストを中

社會民主黨の運動及無政府黨の反動

心として維也納、プラーグの各地、ポイケルト。ステルマッヘル及カムマラー等遊說の下に全く無政府主義に傾き、警官を殺し、運動費を掠むるの甚しきに至りぬ。是に於てポケルト等同志拘引せられて一八八二年三月之か公判を開かるゝに至れり。かゝる暴徒の一方に猖獗を逞しうしつゝありしに當り、一方に於ては社會民主黨の運動も亦盛にして、八二年十月十五、十六兩日を以てブリュンに會合したる勞働者の一隊は無政府黨の行動に反對するの決議をなしたり。されども無政府黨は益〻之に反動して秘密出版物を發行し、警官の殺害を敎唆し、翌八三年七月二十六日及二十七日彼等はラング、エンツェルスドルフに密會して綱領を草定し、大活動を期し、之か結果として年の十二月十五日フロリヅドルフに警官ルーベックを殺害し、爲に黨員ロウゲットなる者翌年六月二十三日を以て刑に處せられければ、其同志は更に之が復讎として警吏ブリユッフを害するに至りたり。

無政府黨の大鎭壓

是に於て政府は大迫害を行ひてステルマッヘル及カムメラルを罰し、ポイケルトは英國に亡命し、其徒の捕へられて罰せらるゝ者多く、團体は解散され、新聞は發行禁止を命せられ、之により て墺太利の無政府的運動は就んと全く鎭壓せられたり。匈牙利にては無政府黨の勢力極めて弱小にして墺太利の輔助によりて僅に其命脈を繫ぎつゝあるに過ぎざりき。故に又從て後者の衰頽と共に全く陵夷し了りたり。之より後、墺太利、匈牙利に有ては社會的運動としては社會民主黨の獨り跋扈しつゝあるのみ。

テオドルヘルツカの理想的社會

理論的無政府主義者として墺太利にテオドル、ヘルツカあり。彼一八四五年七月十三日を以てブダペストに生れぬ。此地と維也納とに於て法律を學び、七二年ノイエ、フライエ、プレスセの記者となり、八〇年『維也納一般新聞』の主筆となりぬ。此年彼の著『商業政策の法則』ライプチッヒに刊行せられ、後六年『社會進化の法』出づ。八九年來、彼又『國家及國民經濟雜誌』の出版者となり、土地を社會の集合財產となすべく、而して之が爲には從來の土地所有者は其損害を賠償せらるべき旨を唱へたり。

小說『自由鄉』

此年彼の小說『自由鄉(フライランド)、向後の社會觀』公にせられて讀書界を驚かしぬ。これは生產手段を盡く人々の共同財產となすてふ彼の持論に基きて作する所、即無政府的共產主義を主張する者なり。彼が理想する社會の特質は左の如し。

一、各團体に加はるとは各人の隨意なり。其他の團体の一員たると否とを問はず、各人は又其團体を去るとも隨意なり。

二、各人は團体の純收入に於て己の勞役に相應ずるだけのわけ前を求むるの權利あり。

三、勞役は各人の之に費したる時間の長短によりて計算せらるべし。

四、監督者の勞役は又每日なされたる勞働時間と同じかるべし。

此外なほ數項あれどもこゝには之を略す。要するに此小說の一度世に出づるや、其感化力實に畏るべき者あり、彼の理想を追求せんとする熱狂者は『自由鄕協會』なる者を組織して其機關『自由鄕(フライランド)』を發行すに至りたり。ヘルッカの著此外『社會民主政及社會自由主義』(ドレスデン一八九一)ありと云ふ。

附二　白耳義に於ける無政府主義

一八七〇年代の初に於ては白耳義の社會黨は概してプルードンの說を奉せしが漸時之に遠かり來り、七六年頃よりは社會民主黨の立脚地を採れり。然れども七〇年代の末年に至ては一度消失せし無政府主義は又再び萠芽してブリュスセルに『獨逸讀書協會』なる一の團体組織せられ、其中モストの極端說を喜べる一派は『自由(フライハイト)』聞を購讀し此方向次第に國中の社會主義者に賛成せられて終に一八八〇年に

於けるブリュスセルの大會とはなれり。されど之と同時にモスト、パスセルマンの方向とベーベル、リイブクネヒトの方向とが互に相爭ひつゝありければ、其反目は白耳義の勞働者にも及びて彼等は互に相爭ひ、其一方無政府主義を採用せる輩は『革命合同』を組織し、ウェルヰエルに於て其機關『堅忍』を發行し、倫敦大會の決議を是認し、之より尙ほ進で社會民主黨の『撰擧改革黨同盟』に對して『共和社會黨同盟』を形成するに至りたり。されど其主張甚だ世に傳播せず。爲に八二年に於ける年會は之を開くと能はずして已みき。當時此國に於て爆裂彈の騷擾頻々として之ありしにも拘はらず、獨逸社會民主黨の盛を加ふると共に無政府黨は漸次衰ふるに過ぎざりしなり。

附三　瑞西に於ける無政府主義

瑞西に於ては無政府黨は地盤を此處に得ると能はず、間々其團体を見ざるに非ざりしと雖、そは皆獨、墺各國の亡命者に止りき。而して其之あるは實に八〇年代の初年よりなり。此頃獨乙有名の無政府黨ヨハン、モスト初めて瑞西に入り來りて勞働者の間に其勢力を扶植し、新聞『自由(フライハイト)』を以て之が運動の機關となし、殊に倫敦大

九四年に於ける瑞西の無政府黨處分法

會ありて後、此國の東北部並に佛國に接近する部分を動かせり。一八八三年、自由新聞の發行局が倫敦より瑞西に遷さるゝに及び、ステルマッヘルの指導の下に刋行せられ、以てモストと共に紐育に渡るの時に及べり。八三年、無政府黨員、チウリヒに密會してモストの体制論を採用し、又秘密活版所の設備に着手し、其機關紙を主として獨乙及墺太利に送致しぬ。ユラ聯合又南佛の同志と相通じて與に大に活動せり。されど八四年、瑞西政府が大に國內の無政府黨を鎭壓するに及びてこれ又一時衰頽せり。

一八九四年七月二十五日、瑞西政府又外國無政府黨員の此地に遊說し來るを抑制するの令を發し、而して此法令は啻に謀殺を企つる兇暴の徒を罰するのみならず、なほ公安を危うし、人身又は事物の安寧を害する罪惡を慫慂し、且指導する者を六ヶ月以上の禁獄、又は禁錮に處し、又此等の煽動が出版物により、若くは其他之に類する手段に依て行はれたる時には之を行へる者、之を發意せる者、補助せる者も亦罪を免れざるべしと規定せり。此嚴肅なる法律に依て外國亡命客と雖、亦妄に入り來るを得ざるに至り、之が爲自ら無政府黨員の足跡を絕さるの有樣とはなれり。

其三　英國に於ける無政府主義

英人よ實行的無政府主義者なし

英國は古來革命黨の避難所たり。クラポトキン、バクーニン、レクルス、モスト、ポイケルト、ルイズ、ミシエル、カフイエロ、マラテスタ等の無政府黨員皆一度難を此處に避けざるはあらず。然れ共此國に於ては實行的無政府黨なる者全く之なくして僅に少數の理論的哲學的無政府主義者を有するに止まれり。これ蓋しアングロ、サクソンの國民性と其歷史傳習の自ら之をして然らしむるに依るとならん。英國の探偵長の語る所によれば此國內に凡そ十八位の無政府黨員あるのみに止まらんと云へり。倫敦は各國無政府黨亡命客の麕集する所、クラポトキンの如きは一八八六年、同黨の機關たる『自由』新聞の創立に盡力し、倫敦附近のハーローに住してハックスレーの後を繼ぎて雜誌『十九世紀』の記者となり、外に規則正しく地理學雜誌に執筆し、又時々『隔週評論』にも投書しつゝあり。（クラポトキンの著書下の如し麵麭の略取（一八九二）某謀反者の話（一八八五）「革命政府」「謀叛の一世紀」（一八九三）大革命（一八九三）新時代（一八九四）靑年（一八九三）法及權力（一八九二）牢獄（一八九〇）社會進步中の無政府（一八九二）謀反の精神（一八九二）給料論（一八九二）無政府黨の道德（一八九〇）無政府黨の團結及其基礎原理（一八八七）以上書名ツエンカルによる）此地伊太利及佛蘭西無政府黨の小團体あれども最も主要なるは獨逸人に屬する者なり。されど一八九三年頃に至りては謀殺叛逆を聖視するが如き激

烈の徒は只一團体あるに過ぎず。『共産黨』『革命黨』『闖入者』等彼等の機關とする所なり。例へば此中最後の一新聞の如きは劈頭第一唱破して曰、リナルドーリナルヂニ、の如き、シンデルハンノーの如き、井クトル、ピニの如き、將たカルロ、モールの如きを摸範とせよ。常に進みて開錠器、破裂彈、クロロフォルム等を用ゐよ。資本家を掠奪せよ。復讎を歌へよと。一八九四年、カルノー大統領横死して各國政府は盛に無政府黨を壓伏し、英國に於ても亦上院に於て其驅除法案を提出する者ありしが、英人は之を以て古來の傳習に反すとなして否決し、當時の首相ローズベリー、議院に出でゝ辯じて曰、我英國は普通正義及現存司法機關の二つを以て無政府黨を處理するに於て充分なりと認むと。

一八九八年一月二十四日、クラポトキン公、倫敦ファーリングドム街なるメモリアル、ホールに於て商業同盟に關する一塲の講演を試み、倫敦商業會議所長たるジエームス、マクドナルド之を司會し、無政府主義共産立義の機關新聞『自由』及『無政府の道德』と題する小冊子を以て普く會衆に販布しぬ。此冊子は道德腐敗の原因が一に資本主義、宗敎、正義及政府にありと云ひ、之れ等の者を打ち滅すはこれ實に自由を愛する人々の義務なる旨を論じたる者なり。其中に云て曰、

法律、宗敎、及權威を打ち斥けて人類たる者須く己等が奪はれたる道德上の原理を恢復するを努めよ。…………

若し或人例せば神學者の如き者が善惡の間に區別をおくとせば、彼をして此考に到らしめしは即神其物なり。其有益なるも、有害なるも、そは毫も彼の問ふ所には非ず、彼は唯一に此造物主の命令に服從せざるべからざるなり。吾人はなほ歩を進めて之を說明せん。これ實に無學の結果野蠻人の恐怖に過ぎずと。…

人間は動物のみ。彼の行爲は單に自然の必要に應じて行はるゝのみ。これ豈に彼等の間に善行も惡行もなき所以を證する者に非ずや。あらゆる吾人の行爲は善もなく、惡もなし。

人間のすべての行爲は其善たると、惡たると、有益なると、有害なるとを問はず、盡く快樂を切望すてふ單純なる本能より惹き起さるゝのみ。

社會現存の動物も亦人間と同じく善惡の區別をなすとを得。彼等と雖、善惡に對する觀念は其性質全く人間と異るとなし。各種族中最もよく發達せる代表

アウベロン、ハーバートの哲理的無政府主義

者例せば魚、昆虫、鳥、及哺乳類等の如き皆然り。
宗教上の恐怖より脱却したる腦髓は自ら問ふならん、何故に余は此僞善的道德の原理に從はざるべからざるの理ありや、何故に道德てふ者は强制的たるべきやと。
余は不德ならんことを欲す。何故にこれが不可なりや。聖書の之を禁制するが爲か。されど聖書はホメーロスの詩、バスクの詩又は蒙古の口碑の然るが如くにバビロン及ヘブリウの口碑を蒐輯せる者に過ぎざるには非ずや。果して然らば余は正に東方半開國人の心意狀態に復らざるべからざる者なり。
道德なる者を放擲せよ。不道德の行爲をなすこそこれ人間の義務なれ。
と。（昨年十月發行フォートナイトリー、レヴィウ中『暗殺は社會主義の結果なり』てふ一片の論文による）斯の如き極端説の一方に於て論唱せられつゝあるに、英國の社會の毫も之に動かさるゝの狀なきは實に國人常識の圓滿普遍の發達を遂げて其最も健全なるが故によるならんや。
一部の人士往々にしてハーバート、スペンサーの著『個人對國家』を目してこれ實に理論上に於て無政府主義を主張するものなりとなすあり。然れどもこれ思ふに大に翁を誣ゆる者、彼が眞意の決して此處にあらざるべきは吾人の確信する所なり。英國に於ける哲理的無政府主義の代表者は彼に非ずして實にアウベロン、ハーバートなり。
ハーバートはもと貴族の出なり。頗る文才あり。七十年代に於ては代議士たりしが、近時彼新聞『自由生活』を發刊して個人主義的無政府主義、即彼自身の命名によれるヲランタリズムを鼓吹せり。彼は決して現存せる社會其物を打ち破らんとは論唱せず。以爲、自由國家の今日の專制國家と異る所は前者か絶對的に各人の其國を隨意出入するを許すの一点にありと。又曰、余は個人が彼自身の主人ならんことを望む。個人其物は彼自身の事物を保護し、他の暴力に對しては暴力を以て守ることを得、而して此保護の權を有する上には彼は其權利を一の團体又は人々に手渡すを得べし。此團体又は諸人は即彼の代りに權利の實際上の適用を注意し、監視する者にして吾人は之を便宜上國家と呼び做すなり。國家なる者は個人にして若し之に已自身の防衛權を引渡すとの撰擇權を有し、而して如何なる個人も之に付て他より干渉せらるゝことなき限りは正當なる物なり。或目的に達する爲

純平たる無政府は不可能なり

めには各の力は活動せられざるべからす。故に國家權力の範圍も亦自ら秩序せられざるべからざるの要あること明かなり。然れどもすべての人には彼が果して國家に結合して之を保持すべきや否やを決する自然の權利の必や之あるなり。若し國家が外方の抗擊に對して己の支配を維持するが正しからんには、かゝる組織を作り、而して此權力をば各個人に屬せで自ら掌握するはこれ確に理由あることなり。余は自衛の權が吾人に存することを許し、而してこれが國家に渡されたるなりとするなり。但し此權利の讓渡に付ては個人を道德的に壓するはもとよりこれ越權なり。………

或團体の內又は外に屬する人々に對して腕力の制裁を用ゐざる可からざるを要とするの時に在ては、此等の團体間に一の新組織を形成すべき必要あり。これ蓋し權力を使用し得べき事情を確定せんが爲なり。故ゐ余は純平たる無政府は不可能なりと信ず。蓋し思ふに無政府論は全く誤解に本づけり。全く異れる二つの事物を混乱するによれり。無政府は個人が己自身に對する支配なり。されども己を保護せんとする各人の行爲は、如何にそれが正しからんとも、決して單に自

彼の隨意論

己一身のみの支配に基きたる者に非ずして混合的の性質を有する者なり。即彼自身の支配と他の者の支配とを結合したる者なり。無政府の對象は自己支配と云ふ事なり。されども我等にして若し己の權利を貫行せん爲に少しく行動せんか、我等は正に自己支配の範圍より脫するに至るべし。純平たる無政府主義者の誤謬は彼等が自己支配、即自由の觀念を權力の上に適用するが故に起る。自由を用ゆることと權力を用ゆることの間には一の恒久の區分線あり。されど隨意と云ふことを保持するに於ては吾人はすべての權力の外に立つことを得、即無政府主義者となることを得。何となれば人を束縛し、又は其束縛さるる所となることは吾人自身に向ても亦他人に向ても必要あらざるが故なり。我等はすべて我等の欲せざる團体をば去るべし。我等は只個人として立つを得べし。嚴密に我等の性質の法則にのみ從ふことを得べし。されど若し吾人保護の方法にして他人を束縛し、其自己支配を侵すことゝなるならば事情は全く一變すべし。人が權力を用ゐんとする時にはこは公然これが行はれ得べき事情と一致せざるべからず。權力と個人の無條件的自由、即無政府とは到底合一すべからざるの觀念なり。故に余はヲランタ

北米に於ける無政府的運動は八〇年代を以て初まれり

リストなり。無政府主義者には非ざるなり。

以上はハーバートが所論の大要なり。されど其言ふ所之が根本を探り來れば所詮言語上の戯のみ。何となれば彼の云へるが如き自由國は嚴格に之を云へばプルードンの所謂團体の聯合、スチルネルの所謂利己主義者の團体を一層廣めし者に過ぎざればなり。彼はプルードンの如くに勞力の体制等に付ては精説する所なかりしも、スチルネルの如くマンチエスター派の絶對的放任主義を保持したればなり。之を要するに彼の所謂隨意主義は毫も其無政府主義と異なれる所あるを見ず。唯彼は己の説を學理的に立論したるに止まれり。彼は寧ろ社會學的立脚地によれるなり。

其四　北米に於ける無政府主義

（此項ツエンカルによる）

一八八三年以前に於ては全亞米利加に於て無政府黨の團体、墨西哥に只一個あるにすぎざりき。而も彼等が合衆國に於ける勞働者の運動に加はるとなかりしは蓋し思ふに國語の同一ならざりしによらんか。此種の運動は一八八〇年に至りて初めてボストンに行はれ、巴里『社會革命』新聞の協働者たる一商人ナタン、ガンツ主として遊説し、無政府主義の一新聞『無政府黨』を發行せしが、彼が事を以て政府の罰する處となるに及び、此新聞も僅に二號にして廢刊せり。之より先ジヨセフ、デジヤックなる者あり。一八五八年より六年に至る間、紐育に於て佛文新聞『自由黨』を發行し、プルードンの集産的無政府主義を唱へたりしが（後クラポトキンの共産的無政府主義に移れり）當時此流の思想漸く傳播し來り、例へばジヨシア、ワルレン。スチヴン、パール、アンドリウス、及リサンダー、スプーネル等の如き皆個人の絶對的主權を唱道せり。就中其錚々たる者をベンジヤミン、ツッカーとす。

ベンジヤミンツツカーの無政府論

彼八一年七月來英語及獨語の週刊新聞『自由』（目下は紐育に於て發行されつゝあり）を刊行して其主義を鼓吹しつゝあり、其論頗るハーバートの所謂隨意主義と相近し。彼は殊にマルクスの國家的社會主義を非難してゐは壓制主義なり、凡て個人の意志を壓抑するに至る者なり須く國家を廢し、個人の隨意によりて組織せられたる團体を以て之に代ゆべしと。即マンチエスター流の放任主義を無條件に實行せんとするが彼の趣旨なりき。

すべての特權を廢せん

故を以て彼は最も力を竭して一、金錢、二、土地、三、保護税、四、專賣特許等に對するあらゆる特權に反對するなり。曰貨幣の特權を打ち破りて紙幣發行

の權をすべての人に許すべしと。又曰、土地所有者より彼等の日常最も必要とし、而も毫も己自ら耕すことなき其大地に關する保護を取り除けよ。然らば土地の特權は消へ失せなん。若し着々順序を蹈むことなくして一時に功を收めんと欲せば勞働者は却て苦境に沈淪するに至るを免れ難し。專賣特許は近時法律の定むる所なり。然れども吾人にして若し人々の勞力によりて得る價よりも遙に大なる税額を收歛するならば、なれ又自ら期せずして失せぬべきなりと。

ツッカーは自ら無神論者を以て標榜し、信仰は絕對的に自由なるものなりとせり。これ蓋し多くの無政府主義虛無主義必然の論理的結果なり。彼は他のものを妨げざる限り己の欲することをなし得るなりと信じたればなり。されば彼によれば男女間の關係も亦全く自由なり。彼又以爲、完全なる無政府主義はろが平和的の遊說を用ゐて、人々に說くに、彼等の決して人後に卑下すべき者に非ざることを以てするによりてのみ到達せらるべし。自由は目的なり。而して此目的は又自由によりて初めて達し得らるべき者にて權力によりて得らるべき者に非ずと。此點に關して彼の考の大に他の無政府黨と異る者あるを注意すべし。

ツッカーの平和的遊說主義は未だ勢力をボストン以外に及ぼすこと能はざりき。北米に於ける無政府黨が大に活動し、團結するに至りしは實にヨハンモストが倫敦より渡來するに至りてよりの事なり。彼は偉大なる辯才と組織的の材能あり。紐育に『自由』新聞を發行して米國に於ける獨逸勞働者を收攬し、これによりて無政府黨の團体各地に成れり。一八八三年十月十四日、ピッツブルグに於て其大會あり。二十六市を代表する社會民主黨及無政府黨の徒之に參集して『國際勞働民同盟』を組織し、之が本部として『通信局』なる者をシカゴに設置せり。彼等は綱領に於て全くモストの思想を採用し、現在の諸制度を打破せん爲には腕力を手段とする、毫も妨ぐる所なき旨を認め、即無政府的共產主義を採る事を公示せり。自由新聞は此綱領に註解を加へて當時歐州に行はれたる暗殺を歡迎し、之を摸範として運動す可を慫慂し、モスト自身は又『革命戰術』なる題目の下にナイトログリセリン、爆裂彈、毒藥等をすゝめ、絕へず暴動を說敎し、奴婢に勸むるに彼等が主人に供する者に毒を投じ、又主人の用ゆる者に毒を仕かくべきを以てし、且つ大に社會民主黨を抗擊したり。これ蓋し彼等が單に撰擧權を得んことを固執するのみにて、毫も

勞働者大に躍起す

革命的手段によるをなきを嘲れるなり。此暴言乱語は忽にして米國に於ける獨逸、殊にボヘミヤの勞働者間に勢力を得、遂にシカゴに發行されし社會民主黨の三勞働者新聞をして無政府主義に轉ずるに至らしめたり。但此遊説は英語を話す人民の間にはさほど用ゐられず、爲に英字の無政府新聞『アラーム』の如きは微々として振はず、獨逸人の助により辛うじて維持せられつゝあるに止りき。一八八六年の初め頃にはシカゴに『勞働者新聞』『禁止物』『松明』(以上獨字新聞)及『アラーム』(英字)あり。紐育に『自由』及『亞米利加勞働者新聞』(共に獨字)、セントルイスに『暗號(パロール)』(英字)、デトロイトに『貧魔』(獨字)、ボストンに『自由』(英字)あり。皆無政府主義を採れり。

此の革命黨の運動に刺戟せられて合衆國の勞働者亦漸くにして活動しきたり、終に一の宣言書を發して一八八六年五月一日より斷然勞働時間を一日八時間に減ずべく、然らざれば同盟罷工を試むべき旨を公言せり。是れに於てか無政府黨も亦之に乘じて彼等を煽動し、之に勢煽を加へ、由て五月三日、シカゴに於て警官と勞働者との間に衝突あり、爲に後者に若干の死傷者を生ずるに至りぬ。是に於て其

政府の嚴壓

翌日、勞働者新聞は勞働者に向て一の告示を公布し、其日夕刻を以て一の集會を催し、前日の仇を報ゆんが爲め警官に向て爆裂彈を投ずべき旨を慫慂せり。之により又再び激烈なる闘爭あり、勞働者は危險物を投じて六十余名の警官を死傷せしめけるより、暴徒の指導者は盡く捕縛せられ、其中イリノイスの獨逸勞働者の首領たるアラーム新聞のパアソン等四人並び死刑に處せられ、モストも亦之に連累して一ヶ年の禁錮を命ぜられ、之か爲め無政府黨の勢力は頓に衰頽し、其團体の解散する者多く、シカゴの三勞働新聞は又社會民主黨の主義に復し、ボヘミヤ勞働者の機關なりし『亞米利加勞働者新聞』外にアラーム及『自由』も皆廢刊せざるを得ざるに至りたり。

モストは今日に於てもなは北米無政府黨の巨魁なり。彼此地にありて禁錮せらるゝと既に數回、死刑に處せられんとせし事すらなきに非ず。されど彼の言論は其後頗る温和となれり。なは殊に一八九二年以來に於て見る所なり。此年四月十三日の『自由新聞』に於て彼自ら云て曰、すべて効力あるべき行爲は博く民心を得べき者ならざるべからず。農民及勞働者の多數によりて歡迎せらるべき者な

らざるべからず。若し吾人の行爲こゝに出でずして却て人民の一般をして不快を喚起せしむるに至らば、其到底所期の結果を得るに至らんと望み得べからず。否寧ろ我が無政府黨は世の憎惡する所となるに至る可なり。實行によりて主張を廣布せんとする者須く重き責任の己に存するを忘るべからずと。彼は之を以て其同志に説くに勞働者の間に彼等の主義を播布するの得策なるを以てせり。

現時合衆國に於ける無政府の本營はスプリング、ヴレー及びイリノイス等にして、彼等はこゝに新聞『ラウロラ』を發刊しつゝあり、此の外紐育にはリユッケニの名を有する團体、オハイオ及ブルークリンにはブレスシの名を有する團体あり。スプリンク、ヴレーにあるをイルズ、ミシエル團と呼ぶ。なほパターソン、バッフアロー、アレガニー、クリヴランド、シカゴ、及びセントルイス等にも彼等の倶樂部あり。昨年四月二十七日發行の『アウロラ』新聞に左の如き彼等の綱領ありと云ふ（隔週評論昨年十月發行の者による）

一、仕事の自由。

二、自由に事物を使用し得ること。

三、すべて富の手段の共有、即生産機械、道路、土地、鑛山、水路等萬般を共有とする事。

四、すべて私有財産の制を廢する事。

五、階級、軍人、裁判官、貴族、有司並に政府を廢する事。

兇徒ツォルゴスは實に這般の徒黨より出でし者なりしなり。これより先、一八九一年に於てはシカゴの大會、其翌年に於ては倫敦なる無政府黨の大會に於て伊太利の亡命者メルリノ及マラテスタの二人、ぞれ〳〵一の建議案を提出し、粗漫なる同志の團結を鞏固ならしめん爲め一の中央部を設立し、全團体を組織整制して敏活なる運動をなさんとを發議せしに、會はなほ汝の欲する所に從ひてすべてを爲せてふ無政府的原理と撞着するものなればとて却下したり。されば其後に於ける兇行は團体の陰謀によれるにはあらで主として個人の發意によれる者なり。

晩近二十年間に於て無政府黨員の兇手に斃れたる各國の主權者宰相左の如し。

時日	被害者	兇行者
一八八一年三月十三日	ツアール、アレキサンドル二世	虚無黨員

無政府黨の數果して幾何

一八八一年七月二日　合衆國大統領、ガーフイルド、チヤールス、ジユリウス、ギトー

一八九四年六月廿四日　佛國大統領、カルノー　カゼリオ

一八九七年八月　西班牙首相、カノヴアス、デル、カスチロ　アンギオリロ

一八九八年九月十日　墺國皇后　リユツケニ

一九〇〇年七月廿九日　伊太利王、ウムベルト一世　アンゲロ、ブレスシ

一九〇一年九月六日　大統領、マツキンレー　ツオルゴス

無政府黨は果して幾何の同志を有するや。クラポトキンは一八八二年に於て云て曰、佛國にては無政府黨の數リオンに三千人、ローン地方に五千人、南佛蘭西に二、三千人ありと。然るに此時リオンに捕へられたりし六十六被告中の一人は云て曰、我等の同志は盡く捕はれたりと。フイガロ新聞の記する所ありと云ふよれば佛國には就んど二千の無政府黨員あり。其中五百人は佛人にて、千五百人は外國人なり。此等外國人の多數は伊太利人にて百分の四十五を占、瑞西人二割五分獨逸人及露西亞人各二割づゝ、白耳義人、墺太利人各五分づゝ、西班牙人及ブルガリア人各二分づゝ、其殘餘は此外の小國に屬する者なりと云ふ。而してこは元より

佛國在留者のみを概計したる者なり。然るに巴里無政府黨の首領たるエミール、ガウシエーは叫で云ふ、我黨は今や全世界に於て黨員數千人を有す。否數百萬を有すと。此言誇大信ずべからず。之を要するに無政府黨は其行爲の惨鼻を極むるだけ彼等の名亦從て多く世界に喧傳すと雖、實際に於て眞に之に歸依し、之に献身せんとする者の尠少なるは疑ふべからず。然れども彼等は露國虛無主義の全く露國的にして自國の境域外に逸せざると異りて、其運動廣く世界に及ばんことを期しつゝある者なり。彼等は啻に歐州列國の政府を惱ましめたるに止まらで尙は進で大西洋の彼岸に渡航し、こゝに彼等が運動の本營を据ゑつゝあるなり。畏るべきは實に彼等なり。彼等は恰も一種宗敎的迷信者の如し。弑害兇乱を以て己の義務ありと固執し、絕へて事の前後得失を打算することなきなり。墺國皇后の刺殺者たるリユツケニの捕へらるゝや、彼自ら云て曰、若し凡ての無政府黨員にして余の如くに彼等の義務を果したりしならば、市民的社會は忽にして滅び去らんにと。ツオルゴスの如きも亦謂ふ、エムマ、ゴールドマン女史の講演は余が滿身の熱血をして實に沸騰せしめたり。余は遂に大統領の謀殺を余が畢生の義務な

如何に彼等を處すべきか

りと確信したりきと。而して死の瞬間に至るまで彼は極めて平然として更に悔悛の狀あるを見ざりき。實行的無政府黨の病的なる夫れ此の如し。而も理論的無政府主義者に至ては必しも實行を鼓吹すとは限らず、否寧ろ兇行の却て彼等が持說の普及を妨ぐる所以を痛論して之を否認する多く夫れ然らざるはなし。實行手段は決して多數首領株の贊同する所に非ざるなり。

一八九四年佛國大統領カルノー、無政府黨の毒手に斃る。カルノーは賢明の君主なり。是に於て各國の暴徒を惡むや又甚しく、大に之を迫害し、殊に伊太利政府は之が犯人の自國人なるが故に各國に提議して無政府黨鎭壓に關する列國會議を開かんとせしが、ローズベリーの英國政府は之に加はるの要なしとして獨り加入せず、由て事に冷淡なるを以て頗る列國の非難する所となりたり。然るに續て九八年墺國皇后の遭難あるに及び、伊國外相カチヴァロは再び列國に向て鎭壓會議を開かんとを提言せり。外相が各國駐剳の自國代表者にあてゝ發したる公信の一部に曰、……各國政府の此提議に對する態度は國王陛下の政府が大体に於て列國と所見を一にするとを證明し、而して此目的を達する爲め最も適當なる方法は速に國際會議を開き、各國政府より獨り外交代表官のみならず、又此事に關係ある司法及內務行政の各專門派遣員をも派出するにありとする者の如し。……之を以て列國の利益を保護する爲め、適當にして永久なる協諾を作すの目的に出づる會議を開き、無政府黨及其黨員の間に於ける聯絡を有効に防遏するを以て其事業となす云々。該提議は列國の同意を得て、年の末各國の代表者羅馬に協議會を開くに至りたり。然れども一切嚴重なる秘密を守りて何事をも公にせざるが故に其協諾する所之を知るに由なし。要するに會議は主として無政府主義出版物の禁抑、無政府黨員の放逐及其裁判等に關して國際間の規約をなさんとする者の如くなりき。然るに列國の此の如く彼等の鎭壓に苦心しつゝあるにも拘はらず、實行黨の暴行は依然として至る所に迸發し、獨帝のパレスチンに幸せんとするに際して之をアレキサンドリヤ港に要擊せんと謀りし十有餘名の兇徒あり。英國皇太子(現王)を狙擊せしシピードーあり。一昨年に於ては巴里大博覽會に巡遊せる波斯王ムザッファー、エッヂンを殺さんとせしサルソンあり。終に伊太利王を弑し、續てマッキンレー大統領を害するの慘事を演ずるには至りたり。あゝ、實行的無政府

黨、彼等は果して濟度すべからざるの兇漢あるが、治すべからざるの精神病者あるか。近時各國の新聞雜誌にして對無政府黨策を說く者甚尠からず。例へば昨年十一月の刊行にかゝる『北米評論』の一記者の如きは米國が無政府黨を取締るのあまりに寬に失するを鳴らして之を處する尙は一層の嚴重を加へざるべからざる所以を唱へ、又合衆國政府が其領土の一部分、例へばフィリピンの一島を割きて之を無政府黨に與へ、彼等をして專ら己が理想する自由の國を此地に建設せしめ、由て以て直接實際の經驗を嘗めしむるも亦可ならずやと云へり。然るに同月のセンチユリー雜誌は無政府黨犯罪者の國際的殖民地なる者、畢竟するに一の妄想に止まり、到底實行し得べからざる者なることを切論せり。然り、此の如きの空言に過ぎざるべきは多言を要せずして明あり。之を要するに無政府黨に對する、アドレルガリン及ツエンカル諸の論者の等しく認むるが如く、斷じて之を壓服するの方法によるべからずして、寧ろ之を防止するの手段によるを以て明策なりとす。故に苟も理論的無政府主義者をして決して暴行を敎唆するが如きことなからしめよ。之を犯行する者をして直に嚴罰を受けしめよ。これ實に一時の急に應ずるの道なり。若し夫れ其病患の根治法に至ては淵源遠く人性の弱點に兆し、社會の不健康なるに基す、宜しく徐に之が缺陷を修繕し、絕へず改補して且つ進むの一事によるの外斷じて之あるべからざるなり。

論じ來り論じ去りて吾人は此處に一の緊要なる問題に接觸す。そは無政府主義は何故に或一二の國にのみ蔓延して爾余の諸國に於ては全く無勢力ありやと云ふこと是なり。何故に伊太利、西班牙及露西亞にのみ猖獗にして獨、墺、白、和、瑞西及英國の列國にありてハ振はざるやと云ふこと即是なり。彼の露國に於ける極端なる專制や、伊、西兩國に於ける內政の糜爛と人心の委靡とが不平の徒をして其間に勃發せしむる所以の有力なる動機たりしと讀者の夙に了せらるゝ所、故に吾人はこれより無政府黨をして之が勢力を張るに所なからしめたる數國に就て聊か觀察する所あらんと欲す。

第一に獨逸にありて無政府黨の勢力を振ふ能はざる所以の者は全く社會民主黨の之を排斥するが故によれり。一八七八年ビスマークは社會黨鎭壓案を議會に提出して之を撲滅せんことを試みたりしも、こは僅にモスト等の過激分子を驅除し

たるに止まり、ベーベルや、リーブクネヒトによりて引卒せられたる社會黨は却て益〻其勢力を擴張し、終には帝國議會に於ける議席の六分の一を占むる迄には至りたり。これ一に彼等が自家の主張を普及するに於て妨げありとして極力無政府黨の兇行を抗擊し、又政府の之に對する、獨り暴動をのみ嚴制して彼等の出版言論をば之を自由にし、毫も其公然の運動を抑壓する所なきが故によるなからんや。墺太利、匈牙利、白和、及瑞西の諸國又皆獨逸社會民主黨の系統に屬する者、無政府黨は到底彼等が鞏固なる地盤を奪ひ去ると能はざるなり。

第二に英國に就ては其學ぶべき所のもの最多し。此國各國無政府黨革命黨の難を避くる所にして、倫敦の如きは久しく露人、獨人、伊人、佛人等が自國の文字を以て各其機關新聞を刊行播布するの地となれり。然れども英人にして實行的無政府黨に屬する者殆んと之あるを見ざるは、蓋しアングロ、サクソン民族古來の歷史傳習の自ら之をして然らしむるによらん。彼等は獨逸人の如くに學理に精ならず、又佛人の如くに高妙なる理想に執着せず、其事に接し物に對するすべて實際的なり。故に例へばジオン、バーンスの如き、ロバート、ブラッチフオードの如き將たケーア、パーデーの如き社會主義者なきに非ずと雖、其作さんとする所、亦盡く實務的に非ざるはなし。殊に此國に於て美事とすべきは其あらゆる階級を通じて能く相和親し、融合するの一事にあり。されば實に其貴族社會の多く高雅にして慈善友愛の情に富むが故に出づ。無政府黨の如き不平の徒の到底志を得る能はざる所以なり。

近世無政府主義 終